# ポケモン不思議のダンジョン時の探検隊 闇の探検隊 誓い

ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン時の探検隊　闇の探検隊　誓い

【Ｎコード】
Ｎ４８８８Ｊ

【作者名】
ユウキ

【あらすじ】
争いのない、平和な世界…ある二匹が出会ったことで世界に眠っていた闇が動き出す…これは二匹が世界を救う物語

# プロローグ（前書き）

皆さんはじめまして、ユウキと申します。初めて小説を書きはじめました。皆さんに楽しんで頂ければ幸いです。
ではどうぞ！

# プロローグ

その夜は大嵐だった。突風が吹き、雷鳴が鳴り響いている。その中に一人の男がいた。

「大丈夫か！　しっかりするんだ！」

嵐の中、その男が言う。声のトーンから、かなり焦っているようだ。

「まずいな……このままでは……」

その男がそう言った刹那、この日で一番大きい雷鳴が鳴り響いいた。

「くっしまっ……うわぁぁぁぁ！！」

雷鳴の音にその者の声は、掻き消されてしまった。その声を最後に、男の声は聞こえなり、残ったのは、激しい雷雨のみだった。

翌朝は雲一つ無い青空だった。昨日の嵐はどこに行ってしまった

のだという感じだった。

「うーん……」

その日の夕方、とあるポケモンが、ある建物の前で悩んでいた。体は今の夕日と同じような色、首にはフサフサの毛があり、ヒヨコを連想させるような体型だった。

「ダメ。今日こそ行くって決めたんだから」

そのポケモンが建物の入口の前にある、穴に掛かっている金網の上に乗った。

「ポケモン発見！　ポケモン発見！」

「誰の足形？　誰の足形？」

「足形はアチャモ！　足形はアチャモ！」

「きゃぁ！」

そのポケモン、アチャモはその声に驚いて金網の上から移動してしまった。

「ハァ……今日もダメ……勇気が出ないよ……このお宝を持っていれば行けると思ったのに……私ってホントに臆病よね……」

アチャモはトボトボと、建物の前から立ち去った。この時、アチャモのお宝を狙っていた者がいたとは、アチャモは知るよしもなか

った。

ギルドから立ち去った後、アチャモは近くの海岸に来ていた。

「うわぁー綺麗ー！」

アチャモはクラブ達の吹く泡に見とれていた。この海岸は夕方になるとクラブ達が泡を吹く。それが夕日と重なり美しい景色に変わる。このあたりでは有名なスポットだ。

「私、この景色が好きだけど…やっぱりこの景色見ると元気がでるな」

この時、アチャモは、誰かが倒れていたのが目に入った。この出会いが後の大冒険の幕開けだった。

# プロローグ（後書き）

皆さんよろしくお願いします

# 第一話　出会い（前書き）

一話完成しました！

アチャモ
「まだ先は長いけどね」

あ、今回でアチャモの名前と倒れていたポケモンの名前が明らかになります

アチャモ
「私に名前あるんだ！」

ええ作りましたよ！

では第一話どうぞ！

# 第一話　出会い

海岸にポケモンが倒れている。誰でも分かるその異常事態に反応し、アチャモは一目散に倒れているポケモンのもとに駆け寄った。近寄ってもまだ意識戻っていないようだ。

「ちょっと！　大丈夫！？」

「……うっ……ここは？」

そのポケモンはアチャモの声に反応し、目を覚ました。そのポケモンはあたりを少し見回すと、直ぐにアチャモに存在に気づいた。

「良かった～ここは海岸よ。あなたここで倒れていたのよ」

優しく声をかけるアチャモ。だが目の前のポケモンは、この世の物じゃない物を見ているかのようだった。

「……馬鹿な、ポケモンが……喋ってる……？」

へっ？　と首を傾げながらアチャモは驚いたと同時に、不信感を抱いた。ポケモンしかいないこの世界でポケモンが喋るのは、この世界では当たり前なのだ。

「何言ってるの？　あなたはピカチュウでしょ？」

少し警戒しながらアチャモは言う。アチャモの言うことを、半信半疑だったが、とりあえずその者は自分の体を調べた。黄色い手足、長い耳、ギザギザな尻尾、確かにピカチュウである。

「……あなた怪しいね。もしかして私を騙そうとしてない？」

「……いや、別に騙すつもりは無い」

「じゃああなたの名前と来た場所は？」

アチャモの質問はもっともだ。その物は、自分の記憶を探る。何処から来た……思い出せない。そのポケモンは、何故か思い出すことが出来なかった。だが、自分の名前は覚えていた。

「……俺はユウキ。何処から来たかは……わからない」

「わからない？　なんで？」

どこから来たかわからない。そんな当たり前に不信感を抱くような発言をされたらアチャモも警戒するに決まっている。案の定更に不信感を抱きながら、問い掛けた。

「さあな。記憶喪失ってやつかもな」

アチャモはまだそのピカチュウ……ユウキのことを不信がっていたが、あまりこの男からは悪意を感じなかったので、とりあえず信用することにした。

「そう……あっ私はアチャモのリサ！　さっきは疑ってごめんね。最近悪いポケモンが増えていて、世の中物騒になってるのよ」

リサは、自己紹介をしていると、リサにぶつかったポケモンが二匹いた。紫色の球体みたいなポケモン、ドガースと、コウモリみた

いなポケモン、ズバットだ。

さっきギルドの前にいたリサを見ていたのも、この二匹だ。

「おっとゴメンよ！」

「ちょっと！　いきなりなにするのよ！」

いきなりの事に戸惑いながらも、ドガースに文句を言うリサだったが、ユウキは表情から、少し不安感を感じた。

「ケッお前に用があるからちょっかいだしてるんだよ！　そのお宝、お前のだろ？」

リサはドガースにぶつかった衝撃で、持っていた石を落としていた。

「あっ！　それは！」

「へへっもらっていくぜ！」

スバットがその石を拾い、二匹は、悠々と海岸の近くにある洞窟に入っていった。

「ああ……どうしよう……あれ、大切な物なのに……」

リサは、目に涙を溜めながら言う。それほどあの石は大切なものなのだ。

「大切なら、取り返しに行けば良いじゃないか」

「そうよね……ねえ、ユウキも一緒に行ってくれない？」

半泣きの状態で頼むリサ。正直、ユウキは面倒だった。我ながら面倒な事を言ってしまったと。しかし、リサを見ていると断れなかった。

「まあかまわないが……」

「本当に！？　ありがとう！　早速追いかけよう」

すぐに笑顔を取り戻すと、二匹はドガースとズバットにから取り返すため、二匹が入って行った洞窟に入っていった。

## 第一話　出会い（後書き）

というわけで主人公のピカチュウ、ユウキの登場です！

ユウキ
「……よろしく」

リサ
「私の名前、リサなんだ」

まあ、こんな感じに進めていくつもりです

ユウキ
「……次回はどうなるんだ？」

ドガースとズバットとのバトルです。うまく書けるか心配です…（汗）

リサ
「ちゃんと書いてね」

がんばります！

## 第二話　海岸の洞窟（前書き）

第二話完成！

リサ
「お疲れ様～！」

いやぁ疲れましたよ（汗）

リサ
「私のお宝、返ってくるかなぁ…」

それは本文見ると分かるよ。

では第二話をどうぞ！

# 第二話　海岸の洞窟

リサのお宝を奪った二匹の入った洞窟は、海岸のすぐ側にあり、海から入った海水が所々にあった。水が多いためか、少しジメジメしている。

今、ユウキとリサは、盗まれたお宝を取り戻すために、この洞窟を進んでいる。

ユウキは、なぜ一緒に来てほしかったのかわからないでいた。別にこの洞窟は暗くもなく、危険も少なそうに見えたからだ。

「なあ、なんで俺に来て欲しかったんだ？　そんなにあいつらが怖かったか？」

「それもあるけど……ここは不思議のダンジョンなの」

「なんだそれは？」

ただ単にわからなかっただけのユウキだったが、リサに少し呆れられてしまった。実は、今この世界では不思議のダンジョンが増えて問題になっているのだ。

「不思議のダンジョンを知らないの？　不思議のダンジョンっていうのは……」

リサが説明しようとした時、二匹の前にアノプス、リリーラ、カラナクシ二匹の計四匹現れ、襲い掛かってきた。ユウキには、目の前のポケモンが少し怒っているように見えた。

「なんだこいつら!?」

「ここに住んでるポケモン達よ！　戦わなきゃ！」

しかし、戦うといっても、ユウキはポケモンになったばかりなので戦い方をしらない。どうすれば良いか、ユウキは戸惑ってしまった。

（一体どうすれば……ん？　頬の辺りに何か感じる……）

ユウキがそんなことを考えてるうちにアノプスとリリーラがユウキに向かってきた。

「ちっ！」

ユウキが頬に感じた物を、敵に放つようにイメージすると、体から電撃がでて二匹を倒した。電気ショックだ。

「これがポケモンの技か……」

初めての技に、ユウキは少し興奮した。人間の時には使えない能力を使えるのだから無理もない。だが、ユウキが興奮している間にリサはピンチになっていた。炎タイプを持つリサの方が、相性的に不利なのだ。

「ハァ……ハァ……マズイ……」

息が絶え絶えのリサに、カラナクシ達は更に攻撃しようとしたが、ユウキが電気ショックを放ち、残りの二匹を倒してしまった。

「リサ、大丈夫か？」

リサのもとに駆け寄り、怪我がないか心配するユウキ。少々息は上がっていたが、ユウキの体には怪我はほとんどなかった。

「なんとか……でもユウキ凄いね！　いきなり技を使うなんて！」

「何故か出来たんだ……とりあえず少し休んだら出発するぞ」

ユウキの提案をリサは承諾し、その場から少し離れた場所で休憩してから奥に向かった。

少し休憩したあと、二匹の後を追いかけるように進むと、最深部で立ち止まっているドガースと、ズバットに追いつくことができた。どうやら行き止まりで立ち往生しているようだ。

「ち……ちょっと！」

「ん？　おや、さっきの弱虫君じゃないか」

勇気を振り絞り、ドガースに声をかけたリサだったが、まだ恐怖があるのか、声が震えていた。

それがわかっていたドガースは、軽くリサを軽蔑した。

「う……私のお宝返してよ！　あれは私の大切なものなのよ！」

リサの言葉を聞いて、やはりなと、ドガースとズバットは怪しい笑みを浮かべた。

「ケッ大切な物か……余計返せなくなったぜ！」

ドガースの発言を聞き、ユウキは電気ショックを放った。話しが駄目なら無理矢理取り返した方がいいと思ったからだ。だが、咄嗟の事にも関わらず、ドガースは電気ショックを回避した。

「何しやがる！」

「返してくれないなら無理矢理取り返す」

「ケッ！　やってみな！　スモッグ！」

ドガースは、体に複数ある穴からスモッグを発生させ、視界を悪くすることで自分達を見えなくした。

「あいつらが見えないよ……でもこれだとあいつらからも分からな

いはず……キャア！」

突然の攻撃を受け、リサは悲鳴を上げた。どうやら、ズバットが翼で打つでリサに攻撃してきたようだ。

「どうして！？　見えないはずなのに！？」

お互いに姿が見えない状態でのズバットの攻撃に、リサはパニックになっていた。

一方、ユウキは、どうやってズバットが攻撃してきたか、頭を巡らせていた。

（何か種があるはずだ……そうじゃなければ当てられないはずだ……）

ユウキがズバットがどうやって攻撃したか考えている間にも、ズバットは翼で打つで攻撃し、ユウキの右腕に命中した。右腕に受けた傷の痛みが、ユウキを襲う。

（くっ！　なぜ分かる……そういえば、超音波で相手の位置が分かると聞いたことがある……なるほど、感知しなければならないから、連続で攻撃してこなのか）

「リサ！　こっちに来い！」

ユウキはリサを自分の所に呼んだ。超音波で感知した後、勢いをつけるために上昇しなければならない。その音を聞いて攻撃を仕掛けるつもりだ。

「へへっこれで終わりだ！　翼で打つ！」

ユウキは目を閉じ、音に集中した。すると、ユウキの目の前から、何か風を切るような音が聞こえはじめた。

「……今だ！電気ショック！」

音のした方に向けて、ユウキは電気ショックを放つ。それはズバットに命中し、一発でノックアウトした。

ドガースには、スバットのように感知する手段がないので、スモッグを中断せざるおえなくなった。

「くっズバット！」

「チェックメイトだ！　電気ショック！」

「うわぁぁぁ！」

ユウキは、動揺しているドガースに電気ショックで攻撃した。電気ショックはドガースに命中し、ノックアウトした。

戦いはユウキ達の勝利だ。

「ううっ……」

「さあ、盗んだものを返して！」

「ケッ！こんなもの返してやるぜ！」

「覚えてろよ！」

ドガースとズバットはいかにも悪役らしい捨て台詞を言いながら、一目散に逃げていった。先程二匹がいた場所には、リサから奪った石が落ちていた。

「遺跡のかけらだ……良かった……」

喜んでいるリサの姿をみていて、最初は面倒だったユウキだったが、自分までなんだか嬉しくなった。

「良かったな」

「うん！　ユウキのおかげで取り返せたよ！　本当にありがとう！」

「気にするな。とりあえずここから出るぞ」

二匹は目的を達成し、意気揚々と、海岸の洞窟を後にした。

## 第二話　海岸の洞窟（後書き）

リサ
「遺跡のかけら返ってきたよ！」

ユウキ
「結構疲れた」

二人ともお疲れ様！

リサ
「それにしても、ユウキいきなり技が使えるなんてビックリしたよ！」

確かに

ユウキ
「所で作者、あいつらの戦い方、ありえるのか？」

多分あると思います（汗）

ユウキ
「そんなんでこの先大丈夫か？」

……努力します（泣）

## 第三話　チーム結成！（前書き）

第三話完成しました！

ユウキ
「結構時間かかったな」

うっ…それ言わないで…

では第三話どうぞ！

# 第三話　チーム結成！

ユウキとリサは、遺跡のかけらを取り戻した後、先程いた海岸に戻っていた。

「本当にありがとうね！」

「……気にするな」

ユウキは内心では助けて良かったのかと思っていたが、リサの笑顔を見ると、助けて良かったと思った。

「これがさっきのお宝よ。これは遺跡のかけら。一見見るとガラクタに見えるけど……よく見ると不思議な模様があるの」

リサは、ユウキに見えやすいように、遺跡のかけらを置いた。

ユウキは遺跡のかけらをよく見てみると、言葉では表現しにくい模様があった。記憶が無いので自信は無かったが、自分が思う限り、見たことが無いような模様だった。

「確かに不思議だな……」

「でしょ。私これが何か秘密があると思うの。だってそう思わない？　未開の地や新大陸や闇の魔境……そこにはお宝がザックザク！　きっとそこにはロマンがある！　私そんな話しを聞くとワクワクするの！」

目をキラキラさせながら熱弁するリサだったが、ユウキはリサの話しにあまり興味が持てなかった。お宝なんてそんなにゴロゴロあ

るわけないと思ったからだ。

「だから探検隊になりたくてギルドに行ったんだけど……私、意気地無しでさ……ユウキはこれからどうするの？」

先程の熱弁から打って変わって、リサは暗くなってしまった。いきなり聞かれてユウキは困ってしまった。記憶が無い以上、何をしたらいいのか分からないし、どこに行けばいいのかも分からないのだ。

「……どうすればいいんだろな？」

途方に暮れていると、リサがある一つの提案を持ち出した。

「……なら私と探検隊やらない？　ユウキの実力なら探検隊になれると思うの！　お願い！」

予想もしていなかったリサからの頼みに、ユウキは戸惑ってしまった。いきなり探検隊やろうなんて正直無茶な話しだ。

（探検隊か……いきなり言われてもな……具体的にはなにやるか分からないし……でも今は行く所がない、リサと一緒に探検隊やった方がいいな）

右も左もわからないユウキにとって、誰かと行動することか、なによりも心強い。そう判断したユウキは、

「……別に構わない」

とリサの誘いを快く引き受けた。暗い表情だったリサの顔が、一

気に明るくなった。

「ほっ本当に!?　ありがとう！　私達、きっと良いチームになれるよ！　早速プクリンのギルドに行こう。そこで探検隊になれるんだ」

プクリンのギルドについては良くわからないユウキだったが、リサに連れられて、そのギルドへと向かって行った。

「ここがプクリンのギルドよ」

目の前には、ピンク色をしたポケモンがモチーフの建物が立っていた。ユウキはギルドを見た瞬間、悪趣味だなと素直に思ってしまった

「ここか……なんだか怪しい感じがするが……」

「やっぱりそう思う？　私、いつもここで怖じけついちゃうの……でもユウキもいるんだ……まず私から見張り穴に乗るね」

リサが目の前にある穴、見張り穴に乗った刹那、穴の中から声が

聞こえてきた

「ポケモン発見！　ポケモン発見！」

「誰の足形？　誰の足形？」

「足形はアチャモ！　足形はアチャモ！」

見張り穴に乗ると、やはり二匹のポケモンの声が聞こえた。初めてのこの声を聞くユウキよりも、リサの方が驚いていたのはここだけの話。

「キャア！……いや、今は我慢よ……」

リサは、穴からの声がリサの名前を言い当てたことに驚いたが、穴の上からはどかなかった。

「よし……もう一匹いるな。乗れ」

ユウキは声の主の言う通り、リサが乗っていた見張り穴に乗った。

「ポケモン発見！　ポケモン発見！」

「誰の足形？　誰の足形？」

「足形は……え～と、足形は……」

「……どうした？　おい！　見張り番！　見張り番のディグダ！　応答しろ！」

「え～と……足形は……多分ピカチュウ！　多分ピカチュウ！」

「多分ってなんだ！！」

「だって～この辺で見かけない足形なんだもん……」

話しの内容からして、どうやらユウキの足型がわからず、揉めているようだ。当の本人は、見張り穴から退くことが出来ず、途方にくれていた。

「確かにピカチュウは見かけないが……良いだろう！　入れ！」

その声がそう言った刹那、目の前の門が開いた。

「キャア！　……緊張しているせいかいちいちビックリだよ……とりあえず入ろう」

中に入ると地下に下りる梯子があった。二匹は梯子を下りるとそこにはなかなか広い広間に、何匹かポケモンがいた。

「うわぁ凄いな！　みんな探検隊なのかな？」

リサが探検隊らしきポケモンを見て興奮していると、一匹のポケモンが来た。見た目はカラフルな鳥みたいで、頭には音符がある。

「さっき入ってきたのはお前達か？」

「はっはい！　そうです！」

リサは興奮しているせいか、声が少し裏返ってしまっていた。

「私はペラップ♪　ギルドの一番弟子であり、一番の情報通だ♪勧誘やアンケートならお断りだよ。帰った帰った」

そのポケモン、ペラップからの思わぬ発言で、リサだけではなく、ユウキまで驚いてしまった。ギルドにはそういう類のものがよく来るのだろうか。

「ちっ違うよ！　私達、探検隊になりたくて来たんだよ！」

とっさに弁解するリサ。それにペラップは驚いてしまった。最近、探検隊志望が少ないからだ。

「探検隊になりたいなんて珍しい……修業が辛くて逃げ出すポケモンが増えているのに……」

「……おい、探検隊になるのって大変なのか？」

「そっそんなことないよ！　探検隊なるのはとーっても楽チン！そうか、探検隊になりたいなら早く言いたまえ♪」

「……急に態度が変わった」

「早くこっちに来なさい♪」

ユウキとリサは、ペラップに着いて行き、さらに地下に降りていった。

「へぇ……地下なのに外が見えるのか」

「いちいちはしゃぐんじゃないよ！　ここは崖に建ってるから地下でも外が見えるんだよ！」

この時ユウキは、いちいち五月蝿い鳥だな……と内心思っていた。

「ここが親方様の部屋だ……くれぐれも粗相のないようにな！」

余程親方は怖いのか、ペラップが忠告をしてから、三匹は親方の部屋に入っていった。

「親方様、探検隊志望の者を連れて来ました……親方様？」

プクリンは、ユウキ達に背を向けたまま、何の反応も無かった。三匹はどうしたのだろうと思っていると急にプクリンはこっちを向いた。

「やあ！　ボクはプクリン！　このギルドの親方だよ？　君達、探検隊になりたいんだよね？　ならまずはチーム名を教えて？」

えっ？　とユウキとリサは困ってしまった。チーム名など考えていなかったのだ。

「……ユウキ何か案ある？」

とっさにユウキに助け船を流すリサ。ユウキは少し悩んだが、一つの案が浮かんだ。

「……ライトニング」

「ライトニング……カッコイイね！　気に入ったよ！プクリン、チ

ームライトニングでお願い！」

「チームライトニングだね！　わかったよ！　登録登録……たぁーーー！！！」

プクリンは急にハイパーボイスを使った。突然のことに、ユウキとリサは驚いてしまった。ペラップも慣れていないようで、耳を塞いでいる。

「登録完了♪　君達にはこれをあげるよ♪」

二匹はあれで登録したのかと内心思いつつ、差し出された箱を開けた。中には地図とバッジ、バッグが入っていた。

「いろいろ入ってる！」

「まずは探検隊バック。色んな物が入るよ！　次に探検隊バッチ。探検隊の証だよ！　最後に不思議な地図。その名の通り不思議な地図なんだ！　バッグを開けてみて」

プクリンに言われた通りバッグを開けるとバンダナや薬が入っていた。

「いろいろ入っているな」

「薬は説明要らないね！　そのバンダナは特殊なんだ！　着ければわかるよ♪」

「ありがとなプクリン！」

「修業頑張ってね！」

こうしてユウキとリサの探検隊の修業が始まった。

## 第三話　チーム結成！（後書き）

ユウキ
「探検隊になっちまったよ」

だってそうゆう話しだもん

リサ
「頑張って修業しなくちゃ！」

僕も頑張らなくちゃ！」

## 第四話　初めての依頼（前書き）

第四話完成！

リサ
「良いペースで更新してるね」

これが続けば良いんだけど…
では第四話を

リサ
「どうぞ！」

僕の台詞が…（泣）

## 第四話　初めての依頼

二匹はプクリンの部屋から出た後、ペラップに弟子達が寝泊まりする部屋に連れてこられた。

「今日からここがお前達の部屋だ」

部屋の中央には、草でできたポケモン専用のベッドが二つおいてあった。

「わーい！　ベッドだぁ！」

草のベッドを前にし、リサがはしゃいでいると、案の定ペラップの声が飛んできた。

「あんまりはしゃぐんじゃないよ。明日は朝が早いから早く寝るんだよ」

そう行ってペラップは部屋から出ていった。残された二匹は、疲れからかすぐにベッドに横になった。

「朝早いのか……もう寝ておくか」

「そうだね。お休み、ユウキ」

「ああ、お休み」

それからしばらくたった頃、リサはすぐに眠りについたが、ユウキはなかなか眠れずにいた。

（……なんか結局、探検隊になっちまったな……まあそれは別にいい。リサと探検隊をやるのは悪くない……だが……俺は一体何者なんだ……？　どうしてあの海岸にいたんだ？　……駄目だ、思い出せない……仕方ない、今はリサと探検隊をしているとしよう……そうすればいつか真実が見えてくる……いつか、きっと……）

そんなことを考えてる内に、ユウキは睡魔に襲われ、眠りについた。

「起きろぉぉぉ！！！　朝だぞぉぉぉ！！！」

ユウキとリサが探検隊になった次の日の朝、一匹のポケモンが二匹を起こしに来た。それは別に普通のことだが、問題は声の大きさだ。百メートル離れていてもまだ五月蝿いぐらいといっても過言で

はない。

（ぐはぁぁ！　なんて声のでかさだ！　耳がぁぁ……）

あまりにも大きい声だったため、一発でユウキとリサは、夢の世界から、現実の世界に引き戻された。

「寝ぼけてんじゃねえ！　俺はドゴーム。弟子の一匹だ。おまえら早く起きろ！　親方様の怒りを買っちまうぞ！　俺は巻き込まれたくねえから、先にいくぞ！」

ドゴームは二匹に耳の痛みを残して部屋から出ていった。

部屋に取り残された二匹は、耳の痛さで、その場にうずくまっていた。

「耳がヤバい……リサ、起きたか？」

「あれだけ大きいとさすがに起きるよ……そういえば、早く起きろって……」

「……マズイ！　急ぐぞ！」

二匹はギルドに弟子入りしたことを思い出した。それと同時に、寝坊したんじゃないかという焦りを感じ、急いで部屋から出ていった。

部屋から出てすぐにある広場に出ると、既に弟子がそろっていた。昨日見たペラップや先ほどのドゴーム他にもいろんなポケモンがいる。

「すいません！　遅れました！」

「遅いぞ！　新入り！」

「おだまり！　お前は相変わらず五月蝿い！」

「すっすまん……」

ユウキは、ペラップとドゴームのやり取りを半ば呆れたような感じで眺めていた。

「全員そろったな……では朝会を始める！　親方様！　どうぞ」

ペラップがそう言うと、部屋からプクリンが出てきた。

「では親方様、一言お願いします」

「……ぐうぐう。ぐーうぐう……」

（おい……あれは寝ているんじゃないか……？　どんだけ器用なんだ……？）

プクリンの予想外の行動に、ユウキは言葉には出さなかったが、驚きを隠せなかった。

「……はい、ためになるお言葉、ありがとうございます！」

どうやらいつもの事らしく、ペラップは普通に接している。こんなのんきなギルドで大丈夫なのかユウキは少し疑問だった。

「みんな！　親方様の忠告をしっかり肝に命じるんだよ！　では、朝の誓いの言葉、始め！」

『ひとーつ！　仕事は絶対サボらない！』

『ふたーつ！　脱走したらお仕置きだ！』

『みっつー！　みんな笑顔で明るいギルド！』

ユウキとリサは、ただ黙って朝の誓いの言葉を聞いていた。

（サボらないは普通だが……脱走したら仕置き……当然か？　それに笑顔で明るいって……子供かよ）

ユウキがそんなことをぼんやり思っていると、

「では仕事始め！」

『おーー！』

と弟子達に号令をかけるペラップ。号令が終わると、弟子達は仕事に向かって行ったが、ユウキとリサは何をすればいいか分からないので、その場に佇んでいた。

「私達、何をすればいいのかな……」

「さあな……」

なにをしたらいいかわからない二匹は、ただその場に呆然と立ち尽くしていると、ペラップが声をかけてきた。

「おーい！　お前ら！　こっちに来なさい」

ペラップは二匹を連れて地下一階にある掲示板に連れて来た。そこには足型文字というポケモンの文字が書かれている紙がたくさん貼られていた。

「これは？」

「これは掲示板。ここにギルドに来た依頼が貼ってあるんだよ。お前達にはこれをやってもらおう♪」

そう言って一枚の紙をユウキに手渡した。それによると、湿った岩場という所に真珠を落としたから取ってきて欲しいというものだった。依頼主はバネブーだ。

もっと凄い依頼なのかと、密かに期待していたユウキとリサだったが、一気に体の力が抜けてしまった。

「……ただの落とし物を拾いに行くだけ……子供の使いか？」

「おだまり！　そこは不思議のダンジョンなんだよ！」

「……不思議のダンジョン？」

最近どこかで聞いたワードだったが、ユウキは思い出せず、首を傾げていた。

「最近増えてきているの。そこは入る度に地形が変わるし、倒されると持ち物やお金が無くなるとか……とにかく不思議なの。でも入る度に発見があるから、探検にはもってこいなのよ！」

前に探検のことを語った時のように、目をキラキラさせながら説明をするリサ。それを聞き、ペラップはうんっと首を振った。

「よく知っているじゃないか♪　なら話しは速い♪　ほら、行っといで！」

そう言ってペラップは去って行った。ユウキは仕方なく、リサはワクワクしながら湿った岩場に向かった。

「電気ショック！」

「火の粉！」

湿った岩場に入って早々、ユウキとリサは、襲い掛かってきたリーシャン二匹を追い払っていた。

「よし！　終わったね♪」

「ああ……結構敵が多いな」

ユウキとリサは襲い掛かる敵を追い払いながら、先に進んで行く。
時々ここに住むポケモンに襲われたが、何とか追い返しながら進むと、行き止まりにきてしまった。

「……どうやらここが一番奥みたいだな」

「そうだね。あっ！　あれがバネブーの真珠じゃない？」

リサが言った通り、二匹の前には、バネブーの真珠らしき紫色の真珠が落ちていた。

「よし、さっさと持って帰るとするか」

ユウキが真珠を取ろうとした時、どこからかリーシャン二匹と、ユレイドルが現れた。

「貴様達！　俺達の縄張りに何の用だ！」

「……？　そこにある真珠を拾いに来ただけだ」

「俺達の縄張りに入る事は許さん！　いくぞ！」

ユレイドルがそう言うと、リーシャン二匹が襲い掛かってきた。
ユウキとリサはそれをなんとか避けることが出来た。

「きゃあ！　……ユウキ！　やるしかないみたい！」

「やれやれ……やるか」

こうしてユウキ達対ユレイドル達のバトルの幕が切って落とされた。

## 第四話　初めての依頼（後書き）

ユウキ
「落とし物って…自分で行きやがれっての」

そう言わないの（汗）

リサ
「私達、ユレイドル達に勝てるのかな？」

それは次回分かるよ

## 第五話　決着（前書き）

第五話完成しました！

ユウキ
「なんだこのタイトル？」

書いてある通りだよ（笑）

ユウキ
「では第五話を…」

どうぞ！

ユウキ
「言わせろよ（怒）」

# 第五話　決着

「いくぞ！　エナジーボール！」

ユレイドルはユウキに向かって、緑色のエネルギー弾、エナジーボールを放った。

「フッ遅いぜ！　電光石火！」

ユウキはここに来るまでに覚えた電光石火を使ってエナジーボールを避けた。

「なかなかのスピードだな……」

「感心してる場合か？　電光石火！」

ユウキはもう一度電光石火を使ってユレイドルの頭部目掛けて体当たりした。

「くっ！」

「止めだ！　電気ショック！」

ユウキはユレイドルに電気ショックを放った……が、ユレイドルには効いていないらしく、平気な顔をしている。しかも電光石火で与えた傷が消えていたのだ。

「なに！？　回復しているだと！？」

「隙あり！　メガドレイン！」

「ぐあぁぁ！」

ユレイドルがそう言うと、ユウキの体の周りに、淡い緑色の光が発生した。それと同時に、ユウキの体から力が抜けていったような感触に襲われた。ユウキは既にふらついている。

（何故回復した……しかも電気ショックが全く効かなかった……何かタネがあるな）

ユウキは、勝つための作戦を必死に考える。

ユウキがピンチに陥っているとき、リサも少しピンチになっていた。

「いくぞ～体当たり！」

「キャア！　……やったわね！　火の粉！」

リーシャンに向けて火の粉を放ったが、攻撃を受けてすぐに攻撃したため、狙いが定まらず、簡単に避けられてしまった。

「また避けられたよ……」

「今だ相棒！」

「任せな！巻き付く！」

「しまっ…」

リサは目の前のリーシャンに気を取られて、もう一匹のリーシャンを見落としていた。リーシャンはリサに巻き付き、動きを封じてしまった。

「くっ……放してよ！」

「いくぞ～体当たり！」

リサは巻き付くの効果で動けないので、体当たりをまともに喰らってしまった。

（どうしよう……このままじゃあやられちゃう……仕方ない、一か八かよ！）

「止めだよ～体当たり」

「…今だ！　火の粉！」

リサはリーシャンの体当たりが決まる瞬間に火の粉を放った。幸いリサの口までは封じられていなかったのだ。リーシャンは火の粉を避けられず、そのまま倒れた。

「相棒！」

「貴方もよ！　火の粉！」

「ぐはぁぁ！！」

リサは巻き付くをしていたリーシャンは、相棒が倒されたことに

戸惑っていた。その間に、リサは火の粉を放つ。それはリーシャンに直撃し、リーシャンは耐えられず、その場に倒れた。

「なんとか倒せたよ……ユウキは？」

ふとユウキのバトルはどうなったかと確認すると、既にボロボロになったユウキの姿があった。ユレイドルはダメージを受けてもすぐに回復してしまうので、ユウキに攻め手がなかったのだ。

「ユウキ！？　今行くよ！」

どう見ても危険と判断したリサは、急いでユウキの元に向かって行った。

「ハァ……ハァ……」

「フン……そろそろ終わりにしてやろう！　エナジー――」

もう駄目か……そう思ったその時、リサが火の粉でユレイドルに攻撃した。突然の攻撃に、ユレイドルは攻撃の手を休めた。

「くっ！　貴様！」

「ユウキ！　大丈夫！？」

「嗚呼……なんとかな」

「あいつらを倒したか……まあいい、俺が倒してやろう！」

そう言いながら、攻撃を再開するユレイドル。どうにか反撃のチャンスがないかと、ユウキは頭をフル回転させていた。

（くそ……あいつの回復を止めるか、速攻で倒すしかない……だがどうすれば……）

速攻で倒すと言っても、ユレイドルの防御能力は高い。むやみやたらに突撃しても、回復されるのが関の山。ユウキは、なかなかこの状況を乗り切る手が浮かばなかった。

ユウキが作戦を練ってる間に、ユレイドルがエナジーボールを放ってきた。ユウキとリサはギリギリ避ける。

（……そういえば、あいつバトルが始まってから全く動いてない……そうか！）

「ユウキ！　何かわかったの！？」

「嗚呼！　あいつは根を張るで回復していたんだ！」

根を張る……大地から養分を吸い取って回復する技。だが使ってい

る間は移動することが出来無くなるのだ。

「リサ！　耳貸せ」

「えっ……うん！　わかったよ！」

「なにをゴチャゴチャと！　エナジーボール！」

耳打ちで、リサに作戦を知らせるユウキ。痺れを切らしてユレイドルが攻撃してきたが、それはユウキの予想範囲だった。

「電光石火！」

ユウキは電光石火でエナジーボールを避け、そのスピードを保ったままユレイドルの周りを回りはじめた。

「ちっ……ちょこまかと！」

「リサ！　今だ！」

「うん！　火の粉！」

「しま……ぐはぁ！」

ユレイドルが動けないことを利用し、ユウキに気を取られている間にリサが攻撃を仕掛ける……安易だったが、今のユレイドルには効果的だとユウキは考えたのだ。

「くっ……貴様らぁ！」

「止めだ！　電光石火！」

ユウキはユレイドルに電光石火を決めた。ユレイドルは耐えられず、その場に倒れた。

「……終わったな」

「最後はなんで電気ショックで決めなかったの？」

リサの疑問ももっともだ。本来ピカチュウという種族は、打撃攻撃はあまり得意じゃない。それに相性も、電気ショックも電光石火も、結果的には変わらないのだ。

「根っこを使って電気を地面に流していたんだ……だから電気ショックは使えなかったんだ……さあ、真珠を持って帰ろうぜ」

電気ショックを使えなかった理由を話ながら、ユウキとリサはギルドに戻って行った。

ギルドに帰ってくると、既に依頼人のバネブーがやって来ていた。

「私の真珠を取ってきてくれてありがとうございます！　頭に真珠がないと落ち着かなくて……そこらじゅう跳ねまくってしまいました……おかげでアザだらけです……でもこれからは心配ないです！　これはお礼です！」

そういってバネブーはタウリンなどの栄養ドリンクと２０００ポケくれた。

ポケはこの世界のお金で、リサから見れば、２０００ポケは凄い大金なのだ。

「え！？　２０００ポケもいいの？」

「どうぞどうぞ。真珠に比べたら安いものです。では私はこれで」

そういってバネブーはニコニコしながら、ギルドを去っていった。

「ユウキ！　私達いきなり大金持ちだよ！」

「よくやったな♪　……だがお金は預かっておこう」

依頼を成功させ、ニコニコしていたリサから、ペラップは２００ポケを預かった。突然のことに、リサは唖然としている。

「おい……何するんだよ」

ユウキの文句も聞かず、ペラップはなにかぶつぶつと独り言を言っている。

「ほとんどは親方様の取り分♪　えーと、お前達は……このぐらいかな」

そう言ってペラップは、リサからぶんどった２０００ポケから、ユウキ達に２００ポケ渡した。

「おいおい……十分の一になっちまったじゃねえか！」

さすがのユウキも、声を荒げたが、逆にペラップも声を荒げた。

「おだまり！　これがギルドのしたきりなんだよ！我慢しな」

「マジかよ……」

そう言いながら、ペラップはほくほく顔で、ユウキ達の前から去って行った。　ユウキ達ががっかりしていると、どこからか鈴の音色が聞こえた。

「皆さーん晩御飯ですよー！」

『やったー！！』

晩御飯の知らせに、弟子達は跳びはねて喜んでいたが、ユウキは飯ぐらいで喜ぶか……？　と思っていた。

『いただきまーす！！』

号令がかかると同時に、弟子達は物凄い勢いで林檎などを食べていった。だがユウキだけは自分のペースで食べていた。もともと人間のユウキには、ポケモンと同じスピードで食べることは、困難を極めた。

『ごちそうさまー！！』

弟子達が食べ終わる頃、ユウキはまだ半分ぐらいしか終わってなかった。ユウキはポケモンの食欲は凄いなと思っていた。

自分達の部屋に戻ってきたユウキ達は、既に寝る準備をしていた。初めての依頼で、疲労が溜まっているようだ。

「さて……そろそろ寝るか？」

「そうだね。お休み、ユウキ」

お休みと言ってから、あまり時間がたっていなかったが、リサは、寝ながらユウキに声をかけた。

「ユウキ……まだ起きてる？」

「嗚呼……」

「今日は楽しかったね。バネブーも凄い喜んでいたしね」

「金が持ってかれたのはムカついたけどな……」

ハハッと苦笑しながらも、リサは言葉を続ける。

「確かにそうね……でも私、バネブーが喜んでるのが、凄い嬉しかったんだ……」

「そうだな……」

そんな話をしていると、リサは、一つあくびをした。

「なんだか眠くなってきちゃった……お休み、ユウキ……また明日も頑張ろうね……」

今日の初めての依頼に、いろんなことを胸に抱きながら、ユウキ

とリサは眠りに着いた。

## 第五話　決着（後書き）

リサ
「疲れたよ…」

お疲れ

ユウキ
「なんか…バトル酷くないか？」

…精進します（汗）

# 第六話　時空の叫び（前書き）

第六話完成！

ユウキ
「最近ペース落ちてないか？」

これからさらに落ちる可能性が…

リサ
「頑張ってよ（汗）」

努力します…
では第六話を…

ユウキ・リサ
「どうぞ！」

二人して僕の台詞取るな！

# 第六話　時空の叫び

「起きろぉぉぉ！！　朝だぞぉぉぉ！」

毎朝恒例のドゴームの大声でユウキとリサは目を覚ました。二回目とはいえ、やはり馴れるものではないようだ。

「ううっ……おはよう……ユウキ……」

「嗚呼……しかし相変わらず凄い声だぜ……」

「とにかく朝礼行こう……」

フラフラしながらも、二匹は朝礼に向かって行った。

『みっつー！　皆笑顔で明るいギルド！』

「では仕事にかかるよ！」

『おー！！』

昨日と同じ流れの朝礼を終え、弟子達は仕事に向かって行ったが、

ユウキとリサは、昨日と同様、その場に残っていた。

「今日はどうすんだ……？」

「さあ……？」

「お前達、またそんな所にいないで、今日はこっちだよ♪」

そういってペラップは、ユウキとリサを掲示板に連れていった。

だが、昨日とは別の掲示板だ。

「あれ？　昨日とは違う掲示板だね」

「そうだ♪　今日はこっちをやってもらうよ♪」

「何が違うんだ？」

前の掲示板には、依頼人からの手紙だけだったが、この掲示板には、貼紙一枚一枚にポケモンの写真が載せてあった。

二匹は、このポケモン達が誰なのかわからなかったため、二匹は首を傾げていた。

「これは全員お尋ね者なんだよ。お前達にはこの中から誰か懲らしめてやってくれ♪」

予想もしていなかったペラップの発言に、臆病なリサは、案の定怖がっていた。

「悪いポケモン…そんなの無理よ！」

「ハハハ♪　大丈夫♪　悪者といっても世紀の大悪人や、こそ泥程度もいるから♪　この中から弱そうな奴を選んで懲らしめてやれ♪」

あっさりと、なおかつ笑いながら言うペラップ。そう言われても流石に悪人相手は危険であろう。リサはまだ怖がっていた。

「私……怖いよ……」

「大丈夫だろ。俺達は探検隊なんだぜ？」

「ユウキ……うん！」

ユウキに励まされ、リサは少し元気が出た。

「よし♪　……だが少し不安が残るな……誰かにギルドを案内させるか。おーい！　ビッパ！　ビッパ！？」

「はいー！！」

ペラップは弟子の一匹名前を呼んだ。すると、地下から、ビーバーに似たポケモン、ビッパがやって来た。息が絶え絶えの所を見ると、走ってきたようだ。

「ハァ……ハァ……なんでしょうか！」

「こいつらにギルドの中や、トレジャータウンを案内してやってくれ♪」

そうビッパに言ってペラップは去って行った。

「うう……嬉しいでゲス……」

残された三匹は、その場に佇んでいると、急にビッパは泣き始めてしまった。ユウキとリサは、ビッパの急な心境の変化に、戸惑ってしまった。

「どっどうしたの？」

「後輩が出来て嬉しいんでゲス……」

またしても予想していなかった発言に、二匹は呆然としていた。今日はそういう日なのか？　とユウキは内心思っていた。

「そっそうか……じゃあビッパ先輩、よろしくな」

「ビッパでいいでゲスよ。じゃあ行こうでゲス」

二匹はビッパに連れられ、ギルドの中の案内をされた後、トレジャータウンへと向かって行った。

「ここがトレジャータウンでゲスよ」

「ここがそうなのか…」

「私、ここの近くに住んでいたから知っているよ。まず手前にあるのがヨマワル銀行。次がエレキブル連結店なんだけど……エレキブルがいないみたい。次がカクレオン商店。買い物ができるよ！　その奥がガルーラの倉庫。道具が預けられるよ。他にもネイティオの店とかあるけど……皆いないみたいね……こんなものかな！」

おおざっぱにトレジャータウンについて説明するリサ。どうやらここについては詳しいようだ。

「よく知ってるでゲスね！　これなら安心でゲス。じゃあ、ギルドに戻ったら一緒にお尋ね者を選んであげるでゲス」

「ありがとう！　ビッパって優しいね」

「そ……そんな……照れるでゲス……じゃあ先に戻ってるでゲス」

頬を赤らめながら、ビッパはギルドへと戻って行った。

「さて……どうするか……」

「うーん……とりあえずカクレオン商店に行ってみようよ」

「そうするか」

そういって二匹はカクレオン商店に向かって行った。

「ここがそうよ」

カクレオン商店につくと、そこにはカクレオンが二匹いた。どうやら兄弟らしく、片方は色が紫色、いわゆる色違いだ。

「いらっしゃ～い♪　あっリサさん！　お久しぶりです～♪」

どうやらリサとカクレオン兄弟は知り合いのようだ。

「こんにちは！　林檎二個とオレンの実をください！」

「あいよ～！」

そう言って店の奥から、林檎二個と、体力の回復する木の実、オレンの実を持ってきた。

「はい！　どうぞ！」

「ありがとう！」

ユウキとリサがギルドに戻ろうとすると、二匹のポケモンがカクレオン商店に来た。一匹はマリル、もう一匹はルリリ。二匹は兄弟だ。

「あっマリルちゃんにルリリちゃん♪　いらっしゃ～い♪」

「カクレオンさん、林檎ください！」

「あいよ！」

そう言うと、カクレオンは林檎をマリルに渡した。マリルは笑顔でそれを受けとった。だが、一つおかしい所があった。自分達が頼んだ林檎は一個。だがカクレオンから受けとった林檎は、二個だった。

「あれ？　一個多いです！」

「それはサービスだよ。二人で仲良くお食べ」

「ありがとうございます！　カクレオンさん！　ルリリ、行くよ」

「待ってよお兄ちゃん！」

ニコニコしながら、二匹は自分達の家に帰ろうとすると、ルリリは急いでいたのだろうか、転んで林檎を落としてしまった。ユウキはその林檎を拾ってあげた。

「ほらよ、林檎」

「ありがとう！　お兄ちゃん！」

林檎を渡し終えたその時、ユウキは急な目眩に襲われた。

（……な？　……なんだこれは……目眩……か……？）

少しすると目眩は収まり、その変わりに、誰かの声が聞こえてきた。

「た、助けて！」

明らかに誰かが、救助を求めている声。それを最後に、その声は聞こえなくなった。

「な……なんだ今のは……」

「……？　どうしたんですか？」

突然の自分の異常に、ユウキは、右手で頭を抱えていた。それをルリリは怪訝（けげん）そうな目で見ていた。

「おーい！　ルリリ！　行くよ！」

「うん！」

少し遠くからマリルの声が聞こえる。ルリリは返事をし、ぺこりとユウキ達に頭を下げると、自分達の家へと帰って行った。

「何だったんだ……」

「ユウキ、どうしたの？」

ユウキの様子が変だったので、思わずリサは、ユウキに声をかけた。

「……今、助けてって聞こえなかったか？」

「ううん……聞こえなかったよ。カクレオン達は聞こえた？」

リサの問い掛けに、カクレオン兄弟は、互いの顔を見合い、

「いや……聞こえませんでしたよ？」

「私も…」

と言った。どうやらユウキ以外には、聞こえていないようだ。

「そっか。ユウキの勘違いじゃない？」

「そうか……」

どうにも釈然としないユウキだったが、とりあえずビッパの待つギルドに戻ることにした。その途中で、さっきのマリル達が、一匹のポケモンと話しをしていた。

「よう。何してんだ？」

「あっさっきの……実は僕達、前に大切な物を落としてしまったん

ですが……それをこのスリープさんが見たことがあるって言うんで一緒に行く所なんです！」

興奮しながらマリルが説明する。その隣には、黄色いバクみたいなポケモン、スリープが立っていた。

「そうか。よかったな！」

「うん！」

「では、行きましょうか」

スリープがそう言うと、三匹は、落とし物が落ちていた場所に向かって行った。だが、出発するときに、スリープとユウキがぶつかった。

「おっと。失礼」

「嗚呼、悪い」

軽く謝罪をし、三匹が行くのを見送っていると、ユウキは先程の目眩に襲われた。

（くっ……またさっきの……目眩か……）

目眩が収まると、一つの光景が浮かんできた。場所はどこかの山の頂上のような場所で、ある二匹のポケモンが対峙していた。

「言う事を聞かないと痛いめにあわせるぞ！」

「た…助けて！」

そこでその光景は終わった。光景から察するに、ルリリはスリープに襲われるようなイメージを、ユウキは持った。

（何なんだ今のは……スリープがルリリを襲っているように見えたが……今のが正しいなら、スリープは悪者なのか……？）

「落とし物、早く見つかると良いね！　……ユウキ、どうしたの？」

「リサ、ちょっと話があるんだ」

「えっ？　何？」

最初は軽い気持ちで返事したリサだったが、ユウキの真面目な顔を見て、自分も真面目な顔に自然となった。

ユウキはさっき見えた光景をリサに話した。

「……というわけだ」

「じゃあ早くしないとルリリが危ないってこと？」

「嗚呼……」

ユウキのことは、大切な仲間として信用しているリサだったが、このことばかりは、はいそうですかと信じられなかった。

「……ユウキの事、信用してない訳じゃないけど、やっぱり信じられないよ。だってあんなに仲が良さそうだったんだよ。ユウキ疲れてるんじゃないかな？」

「……そうなのか？」

「それに私達、修業中の身だから、勝手なことは出来ないよ。とりあえずビッパの所に行こうよ」

ユウキは納得いかなかったが、仕事をするためにギルドに戻っていった。

ギルドに戻って来ると、お尋ね者の掲示板の前には、ビッパが待っていた。

「あっ、来たでゲスね」

「待たせたな、ビッパ」

「じゃあ選ぶでゲスよ」

ビッパがお尋ね者を選ぼうと思案していると、突然サイレンが鳴り響き、どこからか誰かの声が聞こえてきた。

『掲示板を更新します。危ないので下がってください』

声が聞こえた後、掲示板は裏返しになってしまった。突然のこと

に、リサはびっくりして、跳び上がってしまった。

「キャア！　……ビッパ、何なのこれ？」

「掲示板の更新をしているでゲス。ずっと同じ貼紙を貼っておくわけにはいかないでゲスからね。ダグトリオがやっているんでゲス」

「へぇ～」

『掲示板の更新終了。危ないので下がってください』

掲示板の更新について、ビッパから説明を受けていると、ダグトリオの声が聞こえた。すると、掲示板が元の向きになった。貼紙に描かれていたポケモンの絵が変わっていた。

「さあ、掲示板が更新されたでゲス。また選び直すでゲス」

ビッパが選ぼうとしていた時、依頼書を見ていたリサが、急に震え出した。

「ん？　リサどうした？」

「ユウキ……あれ見て……」

リサの目線の先を見ると、そこにはスリープの絵があった。そう、先程マリルとルリリと一緒にいたポケモンだ。

「あいつ！　お尋ね者だったのか！」

「ユウキの言った通りだったんだ！」

「行くぞ！　ルリリが危ない！」

「え？　え？　どうしたんでゲス！？」

二匹は血相変えて、ギルドを飛び出した。突然のことに、ビッパは、その場に取り残されてしまった。

二匹はギルドを急いで出ると、そこにはオロオロしているマリルがいた。

「おいマリル！　ルリリはどうした！」

「そっそれが……ちょっと目を離したらスリープさんとどこかに行ってしまって……」

「見失った所はどこなの？」

「こっちです！」

三匹はルリリを見失った場所……トゲトゲ山に向かって走り出した。

## 第六話　時空の叫び（後書き）

リサ
「ルリリ大丈夫かな…」

君達次第だよ

ユウキ
「そうゆう事だな…ん？作者、何食ってんだ？」

あそこにあったオレンの実。結構おいしいね♪

ユウキ
「……俺のなんだが…（怒）」

……やばい（滝汗）

ユウキ
「……電気ショック！」

ちょっ！やめ！…ブルァァァァ！！！

リサ
「…作者さんが何処がで聞いた事がある悲鳴をあげてる……」

ユウキ
「分かる奴いるのか？」

リサ

「さあ…とりあえず次回も楽しみにしていてくださいね！」

# 第七話　ルリリを救え！ＶＳスリープ！（前書き）

第七話完成！

ユウキ
「更新遅い！」

すいません……（泣）

ユウキ
「では第七話をどうぞ」

# 第七話　ルリリを救え！ＶＳスリープ！

ユウキとリサは、スリープの魔の手から、ルリリを助けるために、トゲトゲ山を登っていた。
マリルはバトルが得意じゃないので、トゲトゲ山のふもとに待機している。

「ルリリとスリープ、どこまで行ったのかな……」

「さあな。とにかく追いつく事だけを考えていこう」

ルリリの安否を心配しながら走っていると、ムックル三匹と、イシツブテ二匹が襲い掛かってきた。

「ちっ！　また出て来やがった！」

ユウキがそう言うと、ムックルが電光石火で攻撃してきた。ユウキはそれを、難無く避けることができた。

「いくぞ！　電気ショック！」

電気ショックはムックル達に直撃した。相性が良いからか、ムックル達は、一撃で倒れた。
一方、リサの方も、イシツブテ達を倒せたようだが、苦戦したのか少し怪我をしていた。

「大丈夫か？」

「うん、なんとか。早くルリリを助けに行かなくちゃ！」

ユウキは、リサの怪我が心配だったが、二匹はルリリ達を追って走り出した。

一方そのころ、スリープとルリリは、トゲトゲ山の山頂にいた。

「あれ？　何もない……スリープさん、落とし物は何処にあるの？」

ルリリはスリープの方を向くと、ルリリは、スリープが今までの優しい顔から悪人みたいな恐ろしい顔に変わっていた。

「悪いがここには落とし物は無い。俺はお前を騙していたんだ」

「え……嘘……」

今まで信じていたスリープの口から、ルリリには全く信じられない事を口にした。

「それより後ろを見てみろ」

ルリリはスリープの言う通り、恐る恐る後ろを見ると、そこには、

ルリリがギリギリ入れそうなくらいの、小さな穴があった。

「そこに小さな穴があるだろ？　その奥には、ある盗賊団が隠した財宝があるって噂があってな。だが、俺は体がでかくて通ることができねえ。だから、小さいお前に、財宝を取ってきてもらいたいんだ。大丈夫。取ってきたら無事に兄ちゃんの所に帰してやるよ」

訳がわからなくなってしまったルリリは、パニック状態になってしまっていたので、スリープの説明を理解できなかった。

「さあ……穴に入って……財宝を取ってこい！！」

「こ……怖いよ……お兄ちゃーん！！」

ルリリはスリープから逃げようとしたが、それをスリープは拒んだ。

「おい！　……全く、取ってきたら帰してやるって言っただろ！言うことを聞かないと痛いめにあわせるぞ！」

「た……助けて！」

その光景は、まさにユウキが見た光景そのままだった。

「ま……まて！お尋ね者スリープ！」

その時、スリープ達に声をかけるポケモンがいた。ライトニングの二匹だ。

「な、何だ貴様達は！」

「俺達はライトニング。探検隊だ。スリープ、お前の身柄を拘束する」

「探検隊だと！　くそっ俺を捕まえに……ん？」

スリープはあることに気付いた。堂々としたユウキに対して、リサは小刻みに震えていた。

「なんだお前？　震えているじゃないか。そうか、お前達は探検隊といってもまだ新米なんだな」

「うう……」

スリープに言い当てられ、リサはたじろいでしまった。

「確かに俺達は新米だ。だがそれ以前に、俺達は探検隊だ。必ずお前を捕まる！」

「フン……威勢だけは良いが、お前達に俺を捕まえられるか？」

「やってやるさ！　電光石火！」

ユウキは電光石火でスリープに攻撃したが、最小限の動作で、あっさりとかわされてしまった。

「ちっ！　なら電気ショック！」

ユウキは電気ショックを放ったが、またしてもあっさりスリープにかわされてしまった。

「どうしてあたらないの!?」

「……俺の特性は予知夢。お前達の攻撃はすでにわかっていたのさ」

驚いているリサを尻目に、スリープは淡々と説明する。

(予知夢……ふざけた特性だな……攻撃がわかるなんてな……だが、どう見ても動きは速くない。なら、一気に攻撃すればかわされないはず……)

ユウキは、スリープの身体能力を分析し、一つの作戦を思い付いた。

「リサ！　こっちこい！」

「何？　……うん。わかった！」

「相談は終わったか？こっちから行くぞ！頭突き！」

「火の粉！」

突進してくるスリープに、リサは火の粉を放ったが、またしてもスリープにかわされてしまった。

「そんなものあたらん！」

「それはどうかな？電気ショック！」

ユウキはスリープの後ろに電光石火で回り込んで、電気ショックを放った。

「無駄だ！　念力！」

スリープは念力で電気ショックを止め、ユウキに跳ね返した。だがユウキはそれをわかっていたのか、右にステップして、簡単に避けた。

「おっと！　……リサ！　今だ！」

「うん！火の粉！」

今まで全く当たらなかった自分達の攻撃だったのに、今回のリサの火の粉は、何故かスリープに命中した。この時ユウキは、推測から、確信に変わった。

（やはりそうか！　いくら予知夢でわかるとはいえ、体がついて来なければ、避けることはできない！）

そう、ユウキの作戦は速いテンポで攻撃して、スリープがかわしきれないようにすることだった。

「終わりだ！　電気ショック！」

「くそ！　念力……」

「遅いぜ！リサ！」

「うん！火の粉！」

ユウキの電気ショックに気を取られている隙に、リサの火の粉を放った。それはスリープに命中し、そのままスリープは倒れた。ユウキの電気ショックは囮だったのだ。

「ふう……終わったね！」

「嗚呼……ルリリ、大丈夫か？」

「はい……大丈夫です」

ユウキとリサは、ルリリの心配をした。ルリリは目尻に涙を溜めていた。

「そうか。下でマリルが待ってる。行こう」

「はい！」

ユウキ達三匹は、マリルのいるトゲトゲ山のふもとに戻っていった。

トゲトゲ山のふもとに戻ると、この一帯の治安を守っている、ジバコイル保安官と、その部下のコイルが来ていた。

「ビビ！　ワタシハジバコイルホアンカン！　コノタビハ、スリープノホカク、アリガトウゴサイマシタ！　ショウキンハ、ギルドニオクリマシタ！　……サア、クルンダ！」

「とほほ…」

ジバコイル達はスリープを連れていった。

「ルリリ！　大丈夫か！？」

「うわーん！　怖かったよー！」

やっと不安から解放されたルリリは、大声で泣き出してしまった。

「無事で良かった……ライトニングさん！　ありがとうございました！」

「良かった……無事に助けられて……」

安心したのか、リサは安堵の息を漏らした。

「そうだな。よし、とりあえずギルドに戻ろう」

ユウキ達は、意気揚々とギルドに戻っていった。

ギルドに帰ってくると。ニコニコしているペラップに迎えられた。

「お前達、良くやったな♪　ジバコイル保安官から賞金の３０００ポケ貰ったぞ♪」

「うわー！　凄い！」

「……リサ、あまり喜ばない方がいいぜ」

ユウキの思った通り、ユウキ達はたったの３００ポケしか貰えなかった。リサは唖然としている。

「……これだけ？」

「何を言ってる。しっかり評価してるから安心しな」

「……ハァ」

リサは物凄いがっかりしていた。ちなみに、ユウキは想像通りだったので、ため息一つですんだ。
がっかりしていると、リサのお腹が鳴った。

「……アハハ、お腹空いちゃった。ルリリを助けるのに必死だったからね」

リサがそう言うと、ユウキのお腹も鳴った。

「俺も腹減ったな……食堂行くか！」

ユウキがそう言うと、空腹感を抱きながら、二匹は食堂に走っていった。

『ごちそうさまー！』

「ふう…結構食ったな」

今日の夕食は、ユウキも周りのポケモンと、同じスピードで食べることができた。相当お腹が空かなくちゃできない芸当だな……とユウキは思った。

「そうだね。私もうお腹いっぱい……」

「部屋に戻るか」

二匹は自分達の部屋に戻っていった。

その日の夜は、ものすごい嵐だった。リサはそれを、興味半分、恐怖半分で、窓から見ていた。

「凄い嵐だね」

「そうだな」

「私がユウキに会う前の日も嵐だったんだ。どう？　なにか思い出せない？」

前の日は嵐、自分は次の日に海岸で倒れていた……考えても、なにも浮かばなかった。

「嵐……うーん……駄目だな」

「そっか……とりあえず寝ようよ」

「そうだな。おやすみ」

ベッドに横になってすぐに、リサはユウキに声をかけてきた。

「ユウキ……まだ起きてる？」

「嗚呼」

「今日はルリリを助けられて良かったね」

「そうだな」

「それにしても、ユウキが見た夢が現実になるなんてね……信じられないよ」

そう、今回の事件は、ユウキがあの光景を見なかったら、防ぐことは出来なかった。だが、今だに何故あんな光景が見えたのか、ユウキ本人にもわからなかった。

（確かに……あの目眩がなければルリリの危機を知ることはできなかった……あれは何だったんだ？）

「あれがあれば探検隊の活動も楽になるかもね」

「確かにな……だが自由に見れるわけじゃないからな」

あの光景は、ユウキの意志に関係なく、オートで発生していたのだ。自由に使えれば、これほど役に立つものはないと、ユウキは考えていた。

「そっか……何か私眠くなってきた……おやすみ、ユウキ」

こうして、モヤモヤした感じが残ったが、疲れていたからか、そのまま二匹は眠りについた。

## 第七話　ルリリを救え！ＶＳスリープ！（後書き）

ユウキ
「ルリリが無事でほっとしたな」

お疲れ

ユウキ
「所であの目眩は何なんだ」

いずれわかるよ

ユウキ
「……そうか」

## 第八話　助っ人（前書き）

第八話完成！

ユウキ
「なんか文章酷くないか？」

うっ……（汗）
では第八話を……

作者・ユウキ
『どうぞ！』

# 第八話　助っ人

『みっつー！皆笑顔で明るいギルド！』

「では仕事にかかるよ！」

『おーー！！』

ユウキ達がスリープを捕まえた次の日、ユウキ達は恒例の朝の朝礼をしていた。この日も、耳の痛みを抱えたままだった。

「さて……今日は何をすれば良いんだ？」

「う～ん……」

二匹が悩んでいると、ペラップが声をかけた。

「おい、お前達は今日は掲示板の仕事をしてくれ。いいか、絶対にサボるんじゃないぞ！」

「……だとよ。んじゃ掲示板の所に行くか」

ユウキ達は掲示板に向かって行った。

「どれにしようか」

「そうだな……」

依頼の内容は林檎を取ってきて欲しいや、救助依頼などだった。場所は海岸の洞窟や、湿った岩場など、ユウキ達が行ったことのあるダンジョンばかりだったが、一個だけ、行ったことのないダンジョンがあった。

「おっ、これ行ったことないダンジョンだな」

「え？　行ったことのある方がいいんじゃない？」

「確かにそうだが……探検隊なんだから行ったことない所に行きたいだろ？」

「まあね……で、内容は？」

ユウキは掲示板からその依頼書を取り、読み始めた。

「なになに……神秘の湖で遭難しました。探検隊の皆さん、助けてください……依頼者はタツベイだな」

「神秘の湖ってどこかな？」

ユウキとリサは、神秘の湖の場所を知らなかったので、ペラップに聞くことにした。

「なあペラップ、神秘の湖ってどこにあるんだ？」

「おっ仕事しているな♪　感心感心♪　神秘の湖はこの近くで最近発見された湖でな、結構強いポケモンが出るらしいぞ」

「そうなんだ……詳しい場所を教えて」

ペラップは地図で場所を示した。トゲトゲ山の近くらしい。

「さっきも言ったが、敵が結構強いから、気をつけるんだよ」

「うん！　じゃあ行ってきます！」

二匹は元気良く、神秘の泉を目指してギルドを飛び出した。

神秘の湖は、小さいながらも、水が清んでいて、とても景色の良い所だった。

「綺麗な所だね♪」

「そうだな。とりあえずタツベイを探すか」

二匹はタツベイを探し始めた。しかしタツベイは中々見つからなかった。

「いないね……」

「もっと奥を探してみるか」

二匹はさらに奥に行くと、湖の最深部にタツベイがいた。

「おい、大丈夫か？」

タツベイは少し怪我をし、かなり怯えていた。

「あ……あなた達は……？」

「私達はライトニング。探検隊よ。あなたを助けに来たの」

「ほっ本当ですか！？　ありがとうございます！」

ユウキは探検隊バッジを使ってタツベイを外に出した。探検隊バッジを使うと、依頼人や、他のポケモンを外に脱出させられるから不思議だ。

その刹那（せつな）、湖の中から、ニョロゾ二匹とニョロボンが現れた。

「なんだこいつら！？」

ユウキ達が驚いていると、ニョロゾがユウキに襲い掛かってきた。

「うお！　電気ショック！」

ユウキはとっさに電気ショックを放ったが、ニョロゾに避けられてしまい、そのまま体当たりを喰らってしまった。

「大丈夫!?」

「嗚呼……なんとかな」

（くそ……ん?手に電気を感じる……）

ユウキは立ち上がろうと、体に力を入れた。その時、なぜか右手に感じたことのない感覚があった。

ユウキが自分の体の変化に気づいている間にも、ニョロゾはユウキに攻撃を仕掛けてきた。

「このやろう!」

ユウキは電気を帯びた手でニョロゾを殴った。かなりの威力だったのか、ニョロゾは耐えられず、倒れた。

「なんだ今の威力は……」

「ユウキ凄い！　雷パンチが出来るようになったんだ!」

雷パンチ、自分の手に電気をためて相手に攻撃する技だ。ユウキはこれまでの経験から、雷パンチを使えるようになったのだ。

「よし！　電光石火から雷パンチ！」

ユウキは電光石火でニョロゾに近づくと、雷パンチで、ニョロゾの腹部に攻撃した。ニョロゾはそのまま倒れた。

「よし！　あとはでかい奴だけだな」

ユウキがニョロボン向かって行こうとした時、後ろからニョロゾが水鉄砲で攻撃しようとしていた。雷パンチをなんとか耐えていたようだ。

「ユウキ危ない！火の粉！」

リサはとっさにニョロゾに火の粉を命中させた。さすがに耐えられなかったようで、目を回している。

「リサ！　すまない！」

「うん！　あとはあいつだけだよ！」

ユウキとリサはニョロボンを見ると、かなり怒っている様子だった。仲間を倒されたなら、まあ当然の反応だろう。

「怒ってるな……」

ユウキがそう言った刹那、ニョロボンの姿が消えた。

「え！？　どこにいったの！？」

困惑しながら、ユウキ達が探していると、後ろから水の波動で攻撃してきた。どうやらかなりのスピードだ。後ろからの不意打ちだったので、かなりのダメージを受けてしまった。

「ぐはっ！　……大丈夫か？」

「……あんまり……大丈夫じゃない……」

構えてない状態で攻撃を受けたせいか、被害は甚大。リサは相性も悪いせいか、ユウキよりダメージが大きい。

ニョロボンは決めようと、水の波動を放とうとしている。

（ここまでか……）

そう諦めかけたその時、一匹のポケモンが、ニョロボンを攻撃した。体格はユウキ達とそんなに変わらず、長い耳と青い体――リオルだ。

「君達大丈夫！？」

「あ……嗚呼」

「ふう……間に合ったみたいですね」

（間に合った……？　どうゆう事だ？　他に探検隊はいなかったはず……）

ユウキが、リオルの言葉に疑問を抱いている間に、ニョロボンは爆裂パンチで攻撃してきた。

「やばっ！　チサ！　お願いします！」

「りょーかい！　ピヨピヨパンチ！」

チサと呼ばれたそのポケモンは、ニョロボンにピヨピヨパンチを決めた。

チサはウサギみたいで、体が茶色――ミミロルだった。

「これを食べて元気だしてください！」

リオルはユウキ達にオボンの実を渡した。オボンの実は、オレンの実と同じ効果で、なおかつオレンの実より、体力の回復が大きいのだ。

「君達はここで休んでて」

「私達がニョロボンを倒すから♪」

「……いや、俺達も戦う」

「私も！」

ユウキ達の目を見て、リオルは頷いた。

「……うん！　わかったよ！　あっ僕はリオルのジン！　よろしく！　そして彼女がチサだよ」

「私はリサよ！」

「ユウキだ。ジン、チサ！よろしくな！」

こうして、ニョロボンＶＳユウキ達のバトルが始まった。

## 第八話　助っ人（後書き）

というわけで新キャラのジンとチサです！

ジン
「よろしくお願いします！」

チサ
「よろしく～♪」

次回はこの二匹を含めたバトルです！

チサ
「ちゃんと書いてよね～」

うん……（汗）

ジン
「どうしたんですか？」

いやぁ……バトルのネタが……次回は更新遅れるかもしれません（泣）

チサ
「ちょっと～（汗）」

# 第九話　ＶＳニョロボン！（前書き）

第九話完成！

チサ
「ペース早いね♪」

まあね！

ジン
「でも作者さん、今授業中じゃぁ……」

何の事かな？（笑）

ジン
「……ハァ」

では第九話を……

ジン・チサ
『どうぞ！』

僕の台詞がぁ！！

# 第九話　ＶＳニョロボン！

「さて、行きますよ！　電光石火！」

ジンはニョロボンに電光石火で攻撃しようとしたが、ニョロボンの方が速く、避けられてしまった。

「うそ！？」

「私がやる！　冷凍ビーム！」

チサは凍てつく冷気の光線、冷凍ビームで攻撃したが、これも避けられてしまった。

（……かなりのスピードだな……奴のスピードを封じる事ができれば……）

ユウキが勝利のために、作戦を練っていると、ニョロボンは水の波動で攻撃してきた。

「ユウキ危ない！　火の粉！」

リサは水の波動に火の粉をぶつけたが、相性的に不利だったため、火の粉が押され始めてしまった。

「だめ……このままじゃ……」

「二人共!?　チサ!」

「まかせて!　冷凍ビーム!」

状況を判断したジンは、チサに援護をするように促す。
チサは水の波動に冷凍ビームをぶつけて、凍らした。ユウキは火の粉と水の波動がぶつかった所に、水の波動が火の粉の熱気で蒸発し、水蒸気ができている事に気づいた。

(……奴のスピードを止める方法……動きを封じる……そうか!)

「よし!　これならいける!」

「ユウキ!何かわかったの!?」

「嗚呼!皆聞いてくれ!」

思い付いた作戦の説明をするユウキ。三匹はユウキの作戦を聞き、実行することにした。

「まず私からね!　冷凍ビーム!」

チサは冷凍ビームをニョロボンに向けて発射……せずに、ニョロボンの足の周りを凍らせ始めた。ニョロボンは冷凍ビームを避けようとしたが、凍った所に行ってしまい、滑って転んでしまった。

「よし!次いってくれ!」

「うん!火の粉!」

リサはニョロボンに火の粉で攻撃した。ニョロボンは滑って立つことが出来ず、避けることが出来なかったので、水の波動で攻撃してきた。

（よし……思った通り水の波動で攻撃してきた……あとはリサにかかっているな……）

リサの火の粉とニョロボンの水の波動がぶつかり合い、先程と同じように、水蒸気が発生し始めた。

「よし！　リサ、もういいぞ！」

リサは火の粉を中断し、水の波動はチサが守るで防いだ。

「さて……仕上げだな。ジン、行くぞ！」

「任せてください！」

ユウキとジンは、水蒸気の中を通ってニョロボンに向かっていった。

「いくぞ！　雷パンチ！」

「はっけい！」

ユウキは右腕に雷を溜め込み、ニョロボンの顔面に、ジンは掌から衝撃波を放出し、ニョロボンの腹部に攻撃した。

ニョロボンは、ユウキ達が水蒸気の中から来るとは考えていなか

ったのか、ユウキ達の攻撃をモロに受けてしまった。

「チェックメイトだ！　電気ショック！」

ユウキは、駄目押しの電気ショックをニョロボンに放った。ニョロボンは耐えられず、その場に倒れた。

「ふう……終わったね♪」

「僕達の勝ちですね！」

チサ、ジンの順で勝利を喜んだ。ユウキとリサは、疲労からか、あまり元気はないようだ。

今回のユウキの作戦。周りには、ニョロボンの水の波動で濡れていた。それを冷凍ビームで凍らす。そのあと、冷凍ビームで攻撃する。おそらくニョロボンはかわすであろう。だが、かわした場所は、凍らしたので、ニョロボンは足を取られて転倒する。そして、そこにリサの火の粉で攻撃する。ニョロボンはかわせないので、水の波動で攻撃するであろう。二つがぶつかり、火の粉が水の波動を少しでも蒸発させれば、相手の目くらましになる。そこからユウキとジンが攻撃する……これが今回のユウキの作戦だったのだ。

「リサ、大丈夫か？」

「……ちょっと疲れたよ……」

今回一番頑張ったリサは、その場に座り込んでいた。その表情から、かなり疲労していることが見て取れた。

「うまくいってよかったね♪」

「とりあえずギルドに戻りましょう」

ジンとチサに促され、ユウキ達はギルドに戻って行った。

「助けてくれてありがとうございました！　これはお礼です！」

ユウキ達はタツベイから２０００ポケ貰った。

「またペラップに取られちゃうのかな……ハァ……」

リサはまた、ギルドにお金が取られると思っていた。そう考えると、ユウキも気が滅入ってしまった。

「お前達、無事だったか！」

慌てながら、ペラップが声をかけてきた。ユウキ達は、ペラップから思わぬ言葉が飛んできたので、少し驚いてしまった。

「……どうゆう事だ？」

「お前達が出発した後、神秘の湖で凶暴なポケモンが現れたって聞いてな、チームマシンガンに助っ人をお願いしたんだよ♪」

「チームマシンガン？」

「あっ！　言い忘れてました！　僕達は探検隊、チームマシンガンです！　ペラップさんに頼まれて、ユウキさん達を助けに行ったんですよ」

（なるほど……だから間に合ったとか言っていたのか……）

ユウキの中で、今まで疑問だったことが、ジンの説明で、ようやく疑問が晴れた。

「私のせいで危険な目に合わせてしまったね……」

「え！？　ペラップは悪くないよ！」

「嫌、私がしっかり情報を与えなかったからな……今回の報酬を少し増やそう♪」

「マジかよ！？ありがとな！」

ユウキ達は２０００ポケから、半分の１０００ポケを貰った。いつもより多い割合だったので、ユウキとリサは嬉しかった。

「しかし……あんな凶暴なポケモンがいるとはな」

考え込むユウキ。他のポケモンは、それほど狂暴じゃなかったが、

なぜかニョロボン達だけは、かなり好戦的だったからだ。

「僕は、時が狂い始めたからって聞いた事がありますよ」

ユウキは、ジンの言っている事がよくわからなかった。時が狂う？　そんなことが……とユウキは思っていた。

「……時が狂い始めた？」

「そう。時が狂い始めた影響で、不思議のダンジョンが増えてきたらしいよ」

ユウキの質問にチサが答えた。だが、なぜ時が狂いだしたのか、なぜそれが原因で、不思議のダンジョンが増えるのか、ユウキは釈然としなかった。

「そうか……そうだ、言い忘れていたな。ジン、チサ、助けてくれてありがとな」

「気にしない気にしない♪」

「そういえば、ジン達はこれからどうするの？」

リサの質問に、ジン達は少し考えだした。どうやらあまり深く考えていなかったようだ。

「う～ん……僕達はしばらくトレジャータウンにいようかな」

「そっか！しばらくの間よろしくね！」

「うん♪　んじゃ、私達はこれで♪」

チサがそう言うと、二匹はギルドを後にした。

それからしばらくして、ユウキ達は食事を終えて、部屋で休んでいた。

「……ふぅ、今日は疲れたな」

「そうだね……」

二匹は、今日の疲労のせいか、既に横になっていた。

「あ、そうだ。リサに聞きたい事があったんだ」

「え？　何？」

「さっきチサが、時が狂い始めたって言っていただろ？　何で狂い始めたんだ？」

ユウキはチサの言っていた時が狂い始める事が、まだよくわから

ずにいた。

「う～ん……私もよく知らないんだけど、時の歯車が関係しているって聞いたことがあるよ」

「時の歯車？」

聞き慣れない単語に、おうむ返しで問い掛けるユウキ。リサはうんと言いながら、話を続けた。

「うん。時の歯車は、森の中や火山とかにあって、時を守ってるんだ。それに何かあったんじゃないかって聞いたことあるよ」

「そうか……なんだか眠くなってきたな……そろそろ寝るか」

「そうだね。おやすみ」

リサがそう言うと、二匹はすぐに眠りについた。

ユウキ達が眠りにつこうとしていた時、一匹のポケモンが、キザキの森と呼ばれる場所にある、時の歯車を狙っていた。

「始めてみるが……これがそうなのか！　……まずは、一つ！」

そのポケモンは時の歯車を取ると、キザキの森から立ち去った。

その右腕には銀のブレスレットが輝いていた。

## 第九話　ＶＳニョロボン！（後書き）

ジン
「ニョロボン討伐しました！」

チサ
「わ～い♪」

お疲れ様～！

ユウキ
「しかし素早い奴だったな」

そうだね

チサ
「次回はどうするの～？」

また基本通りかな？

ジン
「そうですか」

ユウキ
「んじゃ次回も楽しみにしていてくれよ」

## 第十話　見張り番（前書き）

第十話完成！

ジン
「なんか短くないですか？」

すいません……（泣）

ジン
「では第十話を……」

作者・ジン
『どうぞ！』

# 第十話　見張り番

『みっつー！皆笑顔で明るいギルド！』

「では仕事にかかるよ！」

『おーー！』

ユウキ達は、毎日恒例の朝の集会が終わり、今日も掲示板に行こうとしていた。

「今日も掲示板かな？」

「だろうな。行くか」

二匹が掲示板に行こうとした時、ドゴームが、いつもの大声で、ユウキ達に声をかけた。

「おい！　お前達！　こっちに来てくれ！」

ユウキは、相変わらず五月蝿い奴だなと思いながら、ドゴームの所に行った。

「何か用か？」

「今日は見張り番をしてくれ」

「見張り番？私達が？」

「何で俺達が？」

今まで見張り番は、ディグダが担当していた。なぜ自分達にやらせるのかわからないユウキに、ディグダが答えた。

「すいません。いつも見張り番は僕の仕事ですが……お父さんが掲示板の更新をサボったみたいで、僕がやらなくちゃいけなくなってしまったんです」

いつも掲示板の更新をしているダグトリオは、ディグダの父親だ。そのダグトリオが、仕事をサボっているので、ディグダが仕事をし、ユウキ達が、見張り番をやるはめになってしまったのだ。仕事をサボるなんて、あとでプクリンにばれたらどうするんだろ……とリサは思っていた。

「ではお願いします」

ディグダはそう言うと去ってしまった。

「……というわけだ。よろしくな！」

イマイチ納得出来なかったが、仕事となったら仕方ないので、ユウキ達はとりあえず承諾した。

「仕方ない……やるか」

「う……うん……」

リサは少し様子が変だったが、ユウキ達は見張り穴に続く穴に入っていった。

見張り穴への道は漆黒に包まれていた。なぜか、リサはユウキにくっついて歩いていた。正直ユウキは、歩きにくくて仕方なかった。

「暗いな……壁を探りながらいくか」

ユウキの言った事にリサは反応せず、ユウキのすぐ後ろで震えていた。

「おい……大丈夫か？」

「あ……あんまり大丈夫じゃない……」

震えながら、更に声も震えていた。実はリサは暗いところが大の苦手だったのだ。

「暗いのが苦手なのか？」

「……うん」

「そうか……大丈夫だ、心配するな」

リサは、ユウキの言葉に安心感を覚えると同時に、なぜか、ドキッとしてしまった。

「お、光が見えてきた。あれが見張り穴だな」

それを確認すると、どこからか、ドゴームの声が聞こえてきた。

「おーい!!　着いたかー!!」

ユウキ達が着くと同時に、ドゴームの声が聞こえた。

「鳴呼!　着いたぜ!」

「よーし!!　ポケモンが来たら教えてくれ」

「わかった!」

ユウキはドゴームの声に返事した。……が、ユウキは重要な事に気がついた。……ああは言ったもの、ポケモンの足形など、ユウキにはわからないのだ。

「……リサ、ポケモンの足形わかるか?」

「うん、少しならわかるよ」

「なら、ポケモンが来たら俺に誰か教えてくれ。それを俺がドゴームに知らせるから」

「うん、わかった」

二匹が足型を伝える方法を話していると、ドゴームの声が聞こえてきた。

「ポケモンが来たぞー！！」

「あれは……タネボーかな」

「足形はタネボー！　足形はタネボー！」

「……よし！正解だ！」

こんな感じで、日が暮れるまで、見張り番をしていった。

「来客終了♪　来客終了♪」

どこからかペラップの声が聞こえた。どうやら終わりのようだ。

「おーい！！　終わりだ！！　戻ってこい！！」

ドゴームに促されて、ギルドに戻ろうとする二匹。だが、正直初めての見張り番に、クタクタになっていた。

「終わりか……喉が痛え……」

「私は首が痛いよ……」

ずっと声を出していたユウキは、少し声が変だった。

二匹は上に戻っていった。この時も、リサが怖がっていたのは言うまでもない。

「おつかれ♪　今日の成績は……パーフェクト！！」

「ほう！　やるじゃないか！」

「これはご褒美だ♪」

ユウキ達はペラップから５００ポケと、栄養ドリンクや幸せの種等を貰った。

疲れているせいか、素直に喜べない二匹だった。

「疲れた……」

「そうだね……」

二匹は疲れのせいか、食事の後、すぐに眠りについた。

## 第十話　見張り番（後書き）

ユウキ
「疲れた……」

リサ
「首が痛いよ……（泣）」

お疲れ様～

ユウキ
「もう二度とやりたくないぜ……」

こらこら（汗）

## 第十一話　初めての探検（前書き）

第十一話完成！

ユウキ
「いいペースだな」

うん
では第十一話をどうぞ！

# 第十一話　初めての探検

ユウキ達は朝の朝礼が終わった後、ペラップに呼ばれていた。ちなみに、昨日の喉や首の痛みはだいぶ和らいだようだ。

「なんか用か？」

「今日はお前達に探検隊らしいことをしてもらう♪」

「本当！　やったあ！」

ペラップの言葉に、リサは凄い喜んでいた。それもそのはず、ギルドに弟子入りしてから探検隊らしい事をしていなかったのだ。

「あまりはしゃぐなよ。とりあえず不思議な地図を出してくれ」

ペラップに促され、ユウキは不思議な地図を広げた。ペラップは地図で目的の場所の説明を始めた。

「ここが我々のギルド。そしてここが目的地の滝だ。この滝には何か秘密があるんじゃないかと聞いてな。お前達に調べて貰いたいんだ♪」

「嗚呼。いいぜ」

「よし♪　頼んだぞ♪」

ペラップがそう言うと、さっきまではしゃいでいたリサが、急に震え出した。

「ちょっ！　どうしたんだい！？」

「……大丈夫。武者震いよ。私、初めて探検隊らしい事が出来るって考えると、なんか感動しちゃって……」

「そうか……」

ユウキはリサの言っている事がよくわかった。正直な話、自分自身もワクワクしていたのだ。

「ユウキ！　私、凄いワクワクしてきちゃった！　早くいこうよ！」

「そうだな」

「よし♪　気をつけて行ってくるんだよ♪」

ペラップの声を背中に受け、二匹は元気よくギルドを飛び出した。

二匹は目的地の滝にたどり着いた。そこはとても水の勢いが強く、近づいたら怪我をするかもしれない。

「ここがその滝か……」

「凄い勢いだね……キャア！」

リサは少し滝に近づいただけで吹き飛ばされてしまった。

「本当に凄いよ……ユウキも調べてみてよ」

（おいおい……凄い勢いだってわかっているのに近づくのかよ……まあ、調べなくては始まらないか……）

少し嫌だったが、ユウキは滝に近づくと、さっきのリサみたいに、吹き飛ばされてしまった。

「ねっ？　凄いでしょ」

「そうだな……」

想像以上に勢いが強い滝に四苦八苦していると、急にユウキに目眩が襲ってきた。

（なんだ……目眩……か……？）

しばらくすると目眩は治まった。目眩の後、ある一つの光景が見えた。

一匹のポケモンが、滝に突っ込んでいった。そして、その奥は洞窟になっていて、そのポケモンは洞窟に入っていった。

「今のは……？」

「どうしたの？」

急に片手を頭に当てていたユウキに、リサが心配した。

「また何か見えてな」

「ルリリの時みたいに？」

「嗚呼……この滝に突っ込むぞ」

「ええ！？」

突然の提案に、リサは驚いた。リサが驚くのも無理はない。今さっき滝の勢いを知ったばかりなのに、滝に突っ込むなんて無謀だからだ。

「この奥には洞窟があるんだ。俺を信じてくれ」

しばらく考え込むと、リサはうんっと頷いた。

「うん……わかった！　ユウキを信じるよ！」

リサは決心を固めたようだ。しかし、やはり不安は残っているのか、少し震えていた。

「……怖がっちゃダメ。中途半端にいったら大怪我しちゃう……いくなら勢いよくいかなくちゃ……」

「いくぞ……1、2、3！」

ユウキの掛け声で二匹は滝の中に突っ込んでいった。

「痛って……尻打った……」

「見て！　洞窟だ！　ユウキの言った通りだよ！」

辺りを見渡しながら、リサはピョンピョン跳ねて喜んでいた。

「みたいだな」

「早く行こうよ！」

二匹は滝の奥の洞窟、滝壺の洞窟に入って行った。

滝壺の洞窟は水タイプのポケモンが多かった。リサはタイプ的に不利なので、ユウキが襲って来るポケモンを倒していった。中は思ったより深くなく、あまり時間がかからないで最深部にたどり着いた。そこには、色とりどりの宝石があった。

「うわ～凄いよ！」

「確かに凄いな」

ユウキ達は、宝石の中で一番大きいのを見つけた。

「これ凄い大きいよ！　これをもって帰れば皆驚くね！」

「そうだな」

「ユウキ、引っ張ってみてよ」

「自分でやってみたらどうだ？」

「……だって私、手がないもん……」

そう、アチャモという種族には手が無いのだ。だからやりたくても出来ないのだ。

「確かにそれは無理だな……わかったよ」

ユウキは宝石を引っ張ってみたが、びくともしなかった。

「全く動かないな……ちょっと休むか……」

「本当に動かないんだね……」

ユウキが休んでいる間、リサが宝石を調べていた。

（しかし……全く動かないとはな……うっ！）

ユウキは、またしても目眩に襲われた。目眩の後、またしても一つの光景が見えた。一匹のポケモンが宝石を取ろうとしたが取れず、逆に宝石を押していた。だが、宝石を押すと、津波がポケモンを襲った。そこで終わってしまった。

（今のは……宝石は押してはいけないのか……）

「う～ん……そうだ、逆に押したらどうなるかな？」

「馬鹿！それは押すな！」

ユウキはリサを止めたが、遅かった。リサは既に宝石を押してしまっていた。

「なっなに！？」

「リサ！　早く逃げるぞ！」

二匹は逃げようとしたが、遅かった。津波がもう迫っていたのだ。

「うわー！　津波だぁ！」

急いで逃げようとした二匹だったが遅かった。二匹は津波に飲み込まれていった。

二匹が目を覚ますと、先程いた場所とは違かった。それは洞窟ではなく、温泉だった。

「あなた達大丈夫？」

「ここは……？」

「ここは温泉よ」

ユウキの質問に一匹のポケモンが答えた。熊みたいな姿に、額に三日月みたいな模様がある……ヒメグマだ。

「温泉？」

「そう。温泉じゃ」

リサに一匹のポケモンが声をかけた。亀みたいなポケモン……コータスだ。

「オヌシ達は何処からきたんじゃ？」

「俺達は滝壺の洞窟から流されてきたんだ」

「なんと！　それは大変じゃったのう。温泉で疲れを癒すがといい」

「そうさせてもらうか」

ユウキ達はしばらく温泉でゆっくりした後、ギルドに帰った。

「なるほど……あの滝の奥は洞窟になっていて、最深部には宝石があったと」

「嗚呼……だが、宝石は取ってこれなかったがな」

「いやいや、これは凄い発見だよ！」

「わーい！　発見かぁ！」

ユウキは、目眩の時に見た光景が気になっていたが、この雰囲気を壊したくなかったので、黙っていた。

「ユウキ、やったね♪」

「嗚呼……」

あの目眩の光景が気になっていたユウキだったが、とりあえず気にしないことにした。

二匹は食事をしたあと、すぐに眠りについた。

## 第十一話　初めての探検（後書き）

リサ
「初めての探検楽しかったよ♪」

よかったね（笑）

リサ
「また探検したいな」

探検隊なんだから出来るよ

リサ
「そうだね」

## 第十二話　怒り（前書き）

第十二話完成！

ジン
「なんですか？このタイトル」

本文を読めばわかるよ

ジン
「それに勉強はいいんですか？」

勉強している時に急にストーリーが浮かんだから書いたんだ（笑）
では第十二話を……

作者・ジン
『どうぞ！』

# 第十二話　怒り

ユウキ達が初めての探検をした次の日、朝礼の後、ペラップが衝撃的な事実を話し始めた。

「え～今日は皆に話しておくことがある。ここから北東に行った所にあるキザキの森という場所があるのだが……そこの時が……止まってしまったらしい」

「時が止まっただと……？」

さすがのユウキも驚いていた。他の弟子達も、今までにない事態に戸惑っていた。

「そうだ……時が止まったキザキの森は……風も吹かず、雲も流れないし、葉っぱに着いた雫もその場で止まっている……キザキの森は時間そのものが止まってしまったらしい」

「しかし、何故そうなったんだよ！！」

ペラップにドゴームが質問した。気のせいか、いつもより声を荒げているように、リサは感じた。

「時が止まった理由……それは、時の歯車が盗まれたからだ」

ペラップの言ったことに、弟子達は驚いていた。それもそのはず、どんな悪いポケモンも時の歯車を盗む者はいないからだ。

「しかし……まさか時の歯車を盗む者がいるなんて……信じられませんわ」

「皆静かに！　今ジバコイル保安官が調査している。時の歯車が盗まれたということは、他の時の歯車も盗まれる可能性がある。何か不審なことがあったら直ぐに知らせるんだよ。以上だ。さあ、仕事にかかるよ♪」

『おおーー！！』

時の歯車のことが気にかかったが、とりあえず弟子達は仕事に向かっていった。

「時の歯車を盗むポケモンがいるなんて……」

リサは驚きを隠せずにいた。その時、ペラップがユウキ達に声をかけた。

「おい、お前達は今日は掲示板の仕事をしてくれ。頼んだぞ♪」

「うん！　わかったよ！」

今は仕事をしなくてはならない。二匹はそう判断し、掲示板に向かった。

「さて……どれにするか」

二匹は、暗闇の洞窟で迷子になったケムッソの救助を選んだ。依頼主はアゲハントだ。

「暗闇……中は暗いのかな……」

「大丈夫だろ。行くぞ」

二匹は依頼を行うために、暗闇の洞窟に向かっていった。

暗闇の洞窟は、思ったより暗くなく、リサは少し安心した。

「ケムッソはどこにいるんだ?」

「とりあえず探してみようよ」

二匹は辺りを探したが見つからず、もう少し奥に入ることにした。

「あっ！　あれじゃない?」

リサが見ている方を見ると、ゴローンに襲われているケムッソを見つけた。

「おい！　何している!」

「ああ！？　こいつが俺の縄張りに入ってきたんだ！」

ケムッソはゴローンの縄張りに間違って入ってしまったらしい。
それでゴローンが怒って、襲ってきたようだ。

「別にわざとじゃないんだから許してやってくれないか？」

「黙れ！　貴様達も許さん！　転がる！」

ゴローンはユウキ達に転がるで攻撃してきた。ユウキ達はなんとか避けることが出来た。

「おっと！　電光石火！」

「引っかく！」

ユウキは電光石火で、リサは引っかくで攻撃した。

「ふん！　効かんわ！」

ゴローンは二匹を正面から受け止めてしまった。

「なに！？」

「そら！」

ゴローンはユウキ達を投げ飛ばした。突然のことに、二匹は受け身に失敗した。

「くそ！　リサ！　大丈夫か！」

「なんとか……」

リサはそう言うが、既にフラフラしていた。ユウキの方も、かなりダメージが溜まっていた。

（くそ……とにかくケムッソを避難させなくては……）

ユウキはケムッソに電光石火で近付き、探検隊バッジで脱出させた。

「隙あり！メガトンパンチ！」

「ぐはぁ！！」

ユウキはメガトンパンチをまともに受けてしまい、吹き飛ばされ、壁にたたき付けられた。

「ぐっ……」

「大丈夫！？」

リサが近くでユウキを心配していた。だがゴローンは二匹に止めをさしにきた。

「終わりだ！　ストーンエッジ！」

ゴローンは、体の周りに、小型で、鋭く尖った岩をいくつか作り

出し、ユウキに向けて放ってきた。

（まずい……ここまでが……）

ユウキは諦めかけ、目を閉じた。だが、いつまでたっても攻撃が来ない。ユウキが目を開けると、ストーンエッジをリサがユウキをかばって受けていたのだ。

「リ……リサ！！」

リサはユウキの言葉に答えることなく、その場に崩れ落ちた。。

「リサ！？　しっかりしろ！！」

リサはユウキの言葉に反応しない。それにかなり傷が深い。早く戻らないと生命に関わるだろう。

「リサ……貴様あぁぁぁ！！！！」

ユウキはゴローンに突撃した。しかし、ゴローンはそれを簡単に受け止めた。

「ふん……その程度か」

「うおぉぉぉ！！」

ユウキは、自分の尻尾に力を入れてゴローンをたたき付けた。しかも、その尻尾は鋼のように硬くなっていた。アイアンテールだ。

「ぐはぁ！！」

「終わりだぁ！！」

ユウキはもう一発アイアンテールをゴローンに決めた。ゴローンは耐えられず倒れた。

「終わった……リサは！？」

ユウキはリサの所に向かっていった。リサは意識を取り戻していたが、息が絶え絶えだった。

「リサ！！　しっかりしろ！！」

「ユ……ウキ……大……丈夫……？」

「俺は大丈夫だ！　それよりお前が！」

「私は……大丈……夫……だから……」

リサはそう言うと意識を失った。

「リサ！？　くそ！　早くギルドに！」

ユウキはリサをギルドまで担いでいった。

ユウキはリサを自分達の部屋まで運んだ。今はチリーンと、トレジャータウンに住んでいるラッキーに診てもらっている。

「う～ん……」

「チリーン、リサは大丈夫か？」

「……かなり傷が深いわね……このままだと……」

ユウキの質問にチリーンの代わりにラッキーが答えた。

「くそ！　……俺のせいで……」

「ユウキさん……」

「……悪い、少し一人にしてくれ」

ユウキの頼みで、チリーンとラッキーは部屋を出ていった。

「……俺が弱いせいで……リサ……すまない……」

ユウキは、意識の無いリサに、自分の弱さを嘆いていた。

一方そのころ、チリーンとラッキーは、リサの怪我を治す方法を調べていた。

「これじゃだめ……チリーンさん、何か見つけた？」

「……これならいけるかもしれません」

チリーンがラッキーに見せた物は、ある薬草の図鑑だった。

「確かにこれならいけるかもしれないけど……これがある所はかなり危険よ」

「でも……このままだとリサさんが！」

チリーンの説得に、ラッキーは頷いた。

「わかったわ。とりあえずユウキさんに見せに行きなさい」

チリーンは、弟子部屋にいるユウキに図鑑を見せにいった。

「ユウキさん！」

「……チリーン、どうした？」

部屋に入ると、今だ眠ったままのリサと、まるで覇気が感じられないユウキの姿があった。

「リサさんを治す方法がわかったんです！　この薬草があれば治ります！　……ただ」

「ただ？」

「場所が危険な所で……ユウキさん一人だと……」

ユウキはリサが治るならなんでもする覚悟。チリーンの提案に、ユウキはすぐに頷いた。

「構わない。教えてくれ」

「わかりました」

チリーンはユウキに場所を教えた。暗夜の森と呼ばれる場所らしい。

「チリーン、ありがとな」

「はい！　リサさんのことは任せてください！」

ユウキは薬草を取りにギルドを飛び出した。

ギルドを出てすぐに、チームマシンガンの二匹に会った。どうやらリサの事を知っているようだ。

「ユウキさん！　リサさんは？」

「かなり危険らしい……今から薬草を取りに行く所だ」

「そうなの？　なら私達も行くよ！」

ユウキは二匹の協力は有り難かったが、自分の不甲斐なさが招いたことだと思い、一匹で行く覚悟だった。

「いや……元々は俺のせいだ。俺だけで行く」

ユウキの覚悟を見て、チサは少し困った顔をしていたが、ジンは少し怒ったような顔をしていた。

「……ユウキさんに何かあったら、それこそリサさんが悲しみますよ……自分を責めないで他人にも少し甘えてもいいんじゃないですか？」

ジンの言うことに、ユウキはハッとした。ジンの言う通りだと思ったのだ。

「……そうだな……ジン、チサ。一緒に来てくれ」

「はい！」

「任せて♪」

こうして三匹は、リサを救うために暗夜の森に走り出した。

## 第十二話　怒り（後書き）

リサ
「私大丈夫なの！？」

それは次回わかるよ

ユウキ
「早く取りに行かなくては……」

頑張れ（笑）

## 第十三話　相棒のために（前書き）

第十三話完成！

ジン
「早く薬草を！」

気合い入ってるね……
では第十三を……

ジン
「どうぞ！」

僕の台詞……（泣）

# 第十三話　相棒のために

ユウキとジン、チサは薬草を手に入れるために、暗夜の森を突き進んでいた。

「ユウキ～薬草はどの辺にあるの～？」

チサは相変わらずの口調でユウキに質問した。

「図鑑を借りてきたから確認してみるか」

ユウキはトレジャーバッグから薬草の図鑑取り出し、チサの前で広げた。それによると、暗夜の森のかなり奥にあり、数も少ないようだ。

「かなり奥みたいですね……」

「とにかく行くしかない」

「そうだね～」

三匹は気合いを入れ直し、暗夜の森の奥地に進んでいった。

奥に進むにつれて襲い掛かって来るポケモンが増えてきた。調度今は襲ってきたラッタと戦っていた。

「くそ！　邪魔だぁぁ！」

ユウキはしっぽを鋼の如く硬質化させる技、アイアンテールでラッタを倒した。

「ハァ……ハァ……くそ……」

ユウキはここまで無茶な戦闘をしてきた。さすがに体力がなくなってきたようだ。

「ユウキさん、少し休みましょう」

「……駄目だ。今休んだらリサが……」

「焦っていくより休みながらの方が良いよ～」

「……わかった」

ユウキはチサの言葉に納得し、少し休んだ後、奥地に向かって出発した。

「ここが一番奥みたいですね……」

「みたいだな……薬草を探すぞ」

三匹は薬草を探し始めようとしたが、一匹のポケモンが襲い掛かってきた。黄緑色を基調とした体、体格はユウキ達より大きく、鋭いカマを持っているポケモン……ストライクだ。

「ちっ……こんな時に！」

「戦いましょう！」

ユウキ達が戦闘体制になると、ストライクは切り裂くでチサに攻撃してきた。

「守る～！」

チサは切り裂くを、自分の周りに攻撃を防ぐシールドを張り、切り裂くを防御した。

「僕からいきますよ！　電光石火！」

ジンはストライクに電光石火で攻撃しようとした。それに対抗して、ストライクも電光石火で、ジンに攻撃してきた。ジンとストライクはぶつかり合ったが、体格差のせいか、ジンは吹き飛ばされてしまった。

「うわぁ！」

「ジン！　大丈夫か！」

「なんとか大丈夫です……」

「今度は私だよ～！　冷凍ビーム！」

チサは凍てつく冷気で攻撃したが、電光石火でかわされてしまい、そのままのスピードを保ちながら、チサに攻撃してきた。

「やばっ！　守る～！」

チサは守るで防御したが、電光石火の威力が高いせいか少し押されてしまった。

ユウキは電光石火の威力の高さに疑問を持ちはじめた。

（おかしい……電光石火の威力が高すぎる……なにかタネがあるのか……）

冷静に分析すると、ユウキの脳裏に、一つの仮定が浮かんだ。

「ジン。なにか技の威力が上がる特性ってあるか？」

威力が上がる特性、ジンの頭には、それがあてはまる特性が一つあった。

「……もしかしたらテクニシャンかもしれません」

テクニシャン。それは、自分の威力の低い技の威力を上げる特性。ストライクはテクニシャンで電光石火の威力を上げていたのだ。

（技の威力が上がるか……攻撃をくらい続けたらさすがにヤバいな……）

ユウキが冷静に作戦を練っている間にも、ストライクは攻撃を続けた。

「くっ！　はっけい！」

ジンははっけいで攻撃したが、またしても電光石火で攻撃をかわされ、そのまま攻撃してきた。ジンはギリギリそれを避けることができた。

（……さっきから、電光石火で避けた後、必ず攻撃してきている…ならこれならいけるかもしれないな……）

「ジン、チサ。作戦だ」

ユウキは、二匹に今までのことから考えた作戦を、二匹に伝えた。

「……わかりました！」

「いいよ～！」

ユウキの作戦にジンとリサは理解し、行動し始めた。

「まずは私～！　冷凍ビーム！」

チサは冷凍ビームで攻撃した。ストライクは電光石火でかわし、そのまま攻撃してきた。

「守る！」

チサは守るでストライクの攻撃を弾いた。だがやはり攻撃の威力が高く、少し押されてしまった。

だがユウキは、ストライクが、守るの壁で攻撃が弾かれ、少しバランスが崩れた瞬間を見逃さなかった。

「今だ！　電磁波！」

ユウキは弱めの電気を、ストライクに浴びせた。ストライクは麻痺して動けなくなってしまった。

「チェックメイトだ！　雷パンチ！」

「気合いパンチ！」

「ピヨピヨパンチ！」

ユウキ達はそれぞれの威力の高い技で攻撃した。そのダメージは大きく、ストライクはそのまま倒れた。

「終わった～♪」

「疲れましたね……」

ストライクは電光石火でかわした後、必ずそのまま攻撃してきていた。それを守るで防ぎ、注意を向ける。その間に、ジンが穴を掘るを使ってストライクの後ろに回り込む。ユウキはジンが掘った穴に入る。その穴からストライクに電磁波を当てる。動けなくなった所に止めをさす……これがユウキの今回の作戦だった。

「さて、薬草を探すぞ。リサが危ない」

ユウキ達は薬草を捜索を始めた。探し始めて約一時間ぐらいで、目的の薬草を見つけることができた。

「あった！　これだよ～！」

「早くギルドに戻りましょう！」

見つけた薬草をトレジャーバッグにしまい、ユウキ達は、急いでギルドに戻っていった。

ギルドに帰ってくると、ユウキは一目散に、自分達の部屋に向かって走り出した。

「チリーン！　薬草取ってきたぞ！」

「ユウキさん！　わかりました！　リサさんに使ってみます！」

チリーンはリサに薬草を煎じてリサに飲ませた。すると、先程よ

りもリサの顔色が良くなった。

「ふぅ……もう大丈夫でしょう」

「そうか……」

ユウキは安心して、その場に座り込んでしまった。　ユウキはそれから間もなくして、疲労が溜まっていたか、そのまま眠りについた。

次の日、ユウキが目覚めると、隣でリサが目を覚ましていた。

「リサ！？　大丈夫なのか！」

「ユウキ……うん。大丈夫みたい……ごめんね、心配かけて……」

「気にするな。とにかく無事で良かった……」

ユウキ安堵の息を漏らしていると、チリーンが治療道具を持ちながら、ユウキ達の部屋に入ってきた。

「リサさん！　起きたんですね！」

「あっチリーン。チリーンが私を看病していてくれていたの？」

「はい。でも薬を取ってきたのはユウキさんですよ」

クスクス笑いながら、チリーンはリサに説明した。なぜ笑いながらなのか、ユウキにはわからなかった。

「えっ……そうなの？」

「嗚呼……そうだ」

「ありがとう……」

ユウキはリサの顔が赤くなっているのに気がつかなかった。チリーンは気づいていたようだが……。

それからしばらくして、ユウキはマシンガンの二匹と海岸にいた。

「リサが目を覚ました。もう大丈夫みたいだ」

「本当に？良かった～♪」
「これで安心ですね！」

二匹もリサの心配をしていたので、リサの回復に心から喜んでいた。

「嗚呼……それで、お前達に頼みがある」

二匹が喜ぶ姿を尻目に、ユウキは先程リサに見せていた優しい笑顔から一変、深刻そうな表情に変わった。

「なんですか？」

突然ユウキの顔が真面目そうなものに変わり、ジンの顔も自然と厳しくなった。

「俺にバトルの特訓をしてくれ」

ユウキの突然の申し出にジン達は驚いてしまった。まさかユウキがそのような事を頼み込んでくるとは、ジンは夢にも思っていなかったのだ。

「なんで～？」

「……俺は強くなりたい。正直俺一人では薬草を取ってくるどころか、奥地に着くことも出来なかった……お前達は俺より強い。だから適任だと思ったんだ。頼む……これ以上リサが傷つくのは嫌なんだ」

ユウキの切実な思いに、ジン達は納得した。

「……わかりました。良いですよ。ただ条件があります」

「条件？」

ユウキは、なにかジンに無理難題を言われるのかと身構えたが、ジンの口から出たのはそうではなかった。

「正直僕達もまだ未熟です。ユウキさんだけじゃなくて、僕達も一緒に特訓します」

「つまり私達が教えるんじゃなくて一緒に特訓して強くなろうってこと♪」

二匹の口からもっともなことを言われ、まあそうだな、とユウキは思った。

「なるほど……わかった」

こうして、大切なパートナーを守るために、ユウキ達のバトルの特訓が始まった。

## 第十三話　相棒のために（後書き）

ユウキ
「リサが助かって良かった……」

お疲れ様～

ユウキ
「俺はもっと強くなる」

頑張れ（汗）

## 第十四話　特訓開始！（前書き）

第十四話完成！

ユウキ
「結構頑張ったな」

上手く出来たか不安です……

では第十四話を

作者・ユウキ
『どうぞ！』

# 第十四話　特訓開始！

「う～ん、特訓っていっても何をするの～？」

チサの質問ももっともだが、ユウキの頭ではやることは一つしかなかった。

「バトルしかないだろ」

「確かにそれが一番手っ取り早いですね。ユウキさん、バトルです！」

「嗚呼」

ユウキはジンとバトルをすることになり、残ったチサは審判に入った。

「ではユウキ対ジンのバトル始め～！」

「こちらから行くぞ。電光石火！」

「こちらも電光石火です！」

ユウキとジンはぶつかり合う。ジンの方がパワーがあったようで、ユウキは少し後ずさりしてしまった。

（ちっ……パワーだと勝てないか……）

「作戦はたてさせません！　電光石火からはっけい！」

ジンは電光石火で接近し、はっけいで攻撃してきた。ユウキは反応できず、攻撃をまともに受けて吹き飛ばされてしまった。ダメージを受けて悶絶している隙をジンは見逃さなかった。

「フィニッシュです！気合いパンチ！」

ジンはユウキに先程と同じように電光石火で接近し、気合いパンチで攻撃してきた。ユウキは耐え切れず、倒れてしまった。

「うっ……」

「ユウキさん！　気がつきましたか」

「大丈夫～？」

「嗚呼……くそ……完敗だな」

今までに無い完敗を受け、この特訓を経てもっと強くなることを、この時決意した。

「ジン。どうすれば強くなるんだ？」

ユウキの質問に、ジンは力強く頷く。どうやら先程のバトルの中で、ジンはユウキに足りないものに気付いていたようだ。

「そうですね……ユウキさんに防御する技が無いのは少し辛いですね」

「防御技……」

「はい。チサや僕が使う守るや、穴を掘るなどがあれば少し楽になるんじゃないかと」

確かにユウキは敵の攻撃は、電光石火で避けるか相殺するかだった。攻撃は最大の防御というが、これだけだとやはり辛くなってくる。ジンはそれがユウキの弱点だと感じたのだ。

「ジン、防御技を教えてくれ」

「いいですよ」

ユウキは防御技でも代表的な、守るの特訓を始めた。

「よし、チサ頼むぞ」

「いくよ〜冷凍ビーム！」

（まだだ……もっと引き付けるんだ……今だ！）

「守る！」

チサから放たれた凍てつく冷気は、ユウキの作った壁で防がれた。
守るが成功したのだ。

「やっとできた……」

「やりましたね！」

「嗚呼……疲れた」

ユウキはその場に座り込んでしまった。ジン達の攻撃を守るで防ぐ練習をしていたが、上手く出来ずに攻撃を受けてしまっていた。
それを何度もやれば疲れるはずだ。

「結構暗くなってきたからそろそろ帰ろ～」

「そうだな……」

「ではまた明日ですね」

ジン達はそう言うと帰っていった。だがユウキはまだ海岸にいて特訓していた。帰った時には、食事の時間にギリギリだった。

ユウキは夕飯を食べて部屋に戻ってきた。部屋に入ると、リサが笑顔で出迎えてくれた。

「ふう……疲れた……」

「あっユウキ！　おかえり！」

「ケガの具合はどうだ？」

「もう大丈夫！　明日には動けるよ」

「そうか……」

言葉では明るく振舞っていたが、クタクタに疲れているユウキを見て、リサは今までユウキが何処に行っていたか気になっていた。

「ユウキ、何してたの？」

「ん？　ジン達とバトルの特訓していた」

「特訓？」

「嗚呼。俺は今より強くなる必要がある」

「……どうして？」

リサの質問に、ユウキは少し間を開けてから話した。

「……俺はお前が傷つくのは見たくない」

「えっ……」

予想外のユウキの言葉に、リサの顔は赤くなってしまった。

「ん？　大丈夫か？」

「うっうん！　私もう寝るね！」

「あっ嗚呼」

リサはそのまま眠りについた。実はユウキもさっき言った時に少し顔が赤くなっていたのはここだけの話。

次の日の朝、ユウキはペラップと話をしていた。プクリンに頼みがあったのだが、さすがにいきなり言うのは憚(はばか)れたので、ペラップに相談したのだ。

「……という訳だ。できないか？」

「う～ん……親方様に聞いてみようか」

ユウキとペラップはプクリンの部屋に入っていった。部屋に入ると、いつもと変わらずニコニコしているプクリンがいた。

「……という訳なんですけど……」

「うん♪　いいよ♪　早速準備準備♪」

「本当か？　……感謝する」

「でもユウキは優しいんだね♪」

「そうか？」

「うん♪　さあ、特訓に行ってきなよ」

プクリンが特訓のことを知っていたことを知らなかったユウキは、一瞬耳を疑った。

「知っていたのか？」

「少し見ていたからね♪」

「……そうか。ならお言葉に甘えるとするか」

プクリンに礼を言うと、部屋に戻ってから海岸に向かった。部屋

を出るとき、リサも一緒に行きたいと言っていたので、一緒にジン達が待つへ行った。

「待たせたなジン、チサ」

「ユウキさん。あれ？　リサさん大丈夫なんですか！？」

まだ回復したことを知らない二匹は、ユウキと一緒に来たリサを見て驚いていた。

「うん！　心配かけてごめんね」

「元気になって良かったよ～♪」

「ジン、バトルしてくれ！」

「いいですよ！」

到着早々バトルを申し込むユウキ。実は昨日、一匹でやっていたことあることを、このバトルで試したかったのだ。

「ではユウキ対ジンのバトル開始～」

「いきます！　電光石火からはっけい！」

ジンは昨日と同じ、電光石火を主軸とした戦術で攻めてきた。

「守る！」

ジンの戦術を分かっていたユウキは、悠々とジンの攻撃を守るで防いだ……はずだったが、ジンの攻撃はユウキにヒットした。

「なに！？」

「はっけいは防がれるのはわかっていましたからフェイントを使ったんです」

フェイント、それは守るや見切りを使った相手に攻撃を当てる技だ。どうやら守るで防ぐと分かっていたジンのほうが、ユウキより上手だったようだ。

「ならこちらからもいくぞ！　穴を掘る！」

ユウキは穴を掘るで地面に潜る。姿を確認できなくなったジンは、辺りをキョロキョロと警戒し始めた。

「どこからくるんだ……」

しかし、なかなかユウキは攻撃を仕掛けて来なかった。何かあったのかと、リサは少し不安になったきた。

「……ユウキはどうしたのかな……」

リサが心配を言葉にした刹那、ユウキは地面から出てきた。だが少しいつものユウキと違う。ユウキの体からは、バチバチと電気が漏れている。それほど電気のエネルギーが高いのだろう。

「何をしたんですか！？」

「なに……地中で充電を使ったのさ」

充電……それは電気をためて次の電気技の威力を上げる技。地面のなかでそれを使い、パワーアップしていたのだ。

「さらにためた電力で身体能力を上げたのさ……電光石火！」

ユウキは普通より早いスピードでジンに攻撃した。

「守る！」

直線的な攻撃だったため、ジンは守るで楽々防いだ。だがユウキはそれを読んでいたか、バックステップすることで壁に衝突するのを防いだ。

「おっと！」

「読まれていましたか……」

「これで終わりにする！　ハァァァ！！」

ユウキは自分の電力を右手にためた。右手からは電気が漏れてい

る。それほど電気をためているのだ。

「すごいですね……でも逃げたらいけない……真っ向から受けてたちます！　気合いパンチ！」

「ウォォォォ！　ライジング・ブレイカー！！！」

ユウキの新技のライジング・ブレイカーと、ジンの気合いパンチがぶつかり合い、爆発が起きた。

「ユウキ！　ジン！」

「どうなったの～？」

煙りが晴れるとそこにはユウキが立ち、ジンが倒れていた。

「ジン戦闘不能！　ユウキの勝ち～！」

「やったぁ！」

リサはユウキの元に駆け出した。その表情は笑顔が溢れていた。

「やったね！　凄かったよ！」

「嗚呼……疲れた……ジンは？」

「僕なら大丈夫です……」

ボロボロになっているジンは、一匹で立っていられないのか、チサに支えられて何とか立っていた。

「ユウキさん、さすがですね……普通より充電する為に穴を掘るを使ったんですね……」

「嗚呼……まあな……」

普通に充電したらジンに潰されてしまうので、ユウキは穴を掘るで地中に潜り、そこで普通より長い間充電ができたのだ。だから身体能力を上げることができたのだ。

「充電でためた電気を使い切るまで身体能力は上げていられるんだ」

「なんかカッコイイね～♪」

チサの言っていることに皆が納得した。充電したあと、ユウキの体から電気が溢れていたからだ。

「ねえ、さっきのをボルテックススタイルってことにしない？」

「……いいんじゃないか？」

「決定～♪」

「では少し休んだら始めましょうか」

ユウキ達は少し休んだ後、リサも特訓に加えて再開した。

「この辺にしておくか」

「そうですね」

夕方、ユウキ達は特訓を止めてギルドに帰った。ギルドに入るとリサとジン、チサはその光景に驚いた。

『リサ！　復活おめでとう！』

「え？　え？　なにこれ？」

「リサが元気になったから何かお祝いしようって、ユウキが企画したんですわー！」

「え……そうなの？」

「まあな」

キマワリの余計な一言に、ユウキは余計な事言ってんじゃねえと内心思っていた。

「ユウキ……ありがとう！」

「……嗚呼」

「ユウキさん良いとこありますね！」

ユウキはリサの笑顔で少し顔が赤くなってしまった。それをキマワリやチリーンはニヤニヤしながら見ていた。

「さあ皆！　今日は楽しむよー！」

『おー！』

ユウキ達は夜中まで騒いだ後、眠りについた。明日からの探検隊の活動を夢見ながら。

## 第十四話　特訓開始！（後書き）

チサ
「ユウキかっこよかったね～♪」

確かに

ユウキ
「あれはかなり疲れる。あまり使いたくない」

確かに疲れそうだね。

チサ
「では次回も楽しみにしててね～」

# 第十五話　ドクローズ（前書き）

第十五話完成……

チサ
「元気ないね～」

風邪を引いて……上手く文章が出来たかな……

チサ
「いつも酷いから関係ないよ～♪」

……グスン（泣）

チサ
「作者さんがいじけちゃったよ～では第十五をどうぞ～」

# 第十五話　ドクローズ

リサの復活祝いの次の日、リサの復帰祝いで遅くまで騒いでいたのに、いつも通りの時間に朝礼を行っていた。弟子の中には、欠伸をして目を擦っている者もいる。ユウキもその中の一匹だった。

「眠いな……」

「喋ったら怒られるよ」

ユウキとリサが話していると、ペラップが話し始めた。

「えー今日は見んなに伝えたい事がある。近日に我々ギルドは、遠征に行こうと思う♪」

「遠征でゲスか～」

「きゃー！　楽しみですわー！」

弟子達は、遠征と聞いてはしゃいでいたが、ユウキだけは、遠征だからってそんなに騒ぐことか……？と思う傍ら、遠征という言葉に、リサは目をキラキラさせていた。

「でもよ、遠征ってことはこのなかからメンバー決めるんだよな？」

ドゴームの質問にペラップが答えた。

「その通りだ♪メンバーに選ばれるために、皆頑張ってくれ♪以上だ。では仕事にかかるよー！」

『おぉー！』

いつもの号令をすると、弟子達は仕事に向かって行った。いつもの掲示板の仕事で急ぐ必要の無いユウキとリサは、その場に残って話しをしていた。

「凄い！　遠征だって！」

「……そうだな」

ユウキはあまり興味を示していないような感じだった。

「どうしたの？」

「……なんかピンと来なくてな。遠征はそんなに良いのか？」

「だって今まで行ったことの無い所に行けるんだよ！」

探検が好きなリサにとって、見知らぬ場所を探検できることは、願ってもないことのようだ。そんな対照的な二匹に、ペラップが話しかけてきた。

「お前達、今日は掲示板な。頼むぞ♪」

「嗚呼。わかった」

いつも通りの掲示板の依頼を決めに、二匹は掲示板に向かった。

掲示板に行くと、そこには見たことのある姿があった。その姿は二匹にとって、特にリサは思い出したくもないポケモンだった。

「あれ……？　あそこにいるのは……？」

「ゲッお前ら！　なんでここにいるんだ！？」

そこにいたのは、青い体でコウモリみたいな姿、ズバットと、体が丸く、紫色で、空中に浮かんでいる、ドガースだ。

「お前ら……確かリサの宝を盗んだコソドロだな……なにしてんだ？」

「ケッ探検隊が掲示板の前にいてなにが悪いんだ？」

どうやらドガース達は探検隊だったようだ。思ってもいなかったカミングアウトに、リサは少し驚いていた。

「お前達が探検隊？　寝言は寝て言え」

「へへっ事実さ。それよりお前達はなぜここにいるんだ？」

「私達は探検隊になりたくてここで修業しているのよ」

「なに!?　ちょっとこっち来い」

ドガース達はリサを強引に連れて少し離れた。

「ちょっと!　何するのよ!」

「悪いことは言わない。探検隊は諦めろ」

ドガースの思わぬ言葉に、リサは少し驚いてしまった。

「どっどうして!?」

「だってお前弱虫じゃないか」

ズバットはリサに弱虫と言った刹那、ユウキはズバットにアイアンテールをぶつけた。突然の攻撃に、アイアンテールはズバットに直撃する。

「ぐはっ!」

「貴様……人が黙ってればいい気になりやがって……調子に乗ってんじゃねえぞ……」

「へっ……やってくれるじゃないか……」

「ケッ!　アニキがいればお前達なんかイチコロだぜ!」

「アニキ?」

リサの質問にズバットがすこしヨロヨロしながら答えた。

「俺達ドクローズは全部で三匹。そのリーダーのアニキはものすごい実力なんだ」

「ケッ！　噂をすればこの臭い！　アニキだ！」

ドガースが言った通り、物凄い臭いと共に一匹のポケモンがやって来た。体は紫色で、体格はユウキ達よりも何倍もあった。

「退け！　邪魔だ！」

「……なぜお前のためにどかなくちゃならない？」

「口の減らない奴だな……ふん！」

そのポケモンは毒ガスでユウキに攻撃してきた。毒ガスといっても臭いだけだったが、その臭いはあまりにも酷く、ユウキは思わず鼻を押さえながら後ずさりしてしまった。

「くっ……なんて臭いだ……」

「ふん、素直に退けば良いものを……おい！　お前もこいつ見たいになりたいか！」

そのポケモンはリサにも毒ガスを放とうとしていた。リサは思わずどいてしまった。

「へへっ！　さすがスカタンクのアニキ！」

「ククククッそれよりなにか良い依頼はあったか？」

「ケッ！　けち臭い依頼ばかりでしたよ」

「んじゃ今日は帰るぞ！」

『へい！』

ドクローズの三匹はギルドを後にした。三匹がいなくなると、いくらかは臭いがなくなったが、それでもギルドには悪臭が残ったいた。

「ユウキ！　大丈夫？」

「あっ嗚呼」

「……やっぱり私は弱虫よね……ユウキがあんなになっていたのに何も出来なかった……」

リサはユウキが思っていたより落ち込んでいた。

「……最初は弱虫で良いんじゃないか？」

「えっ……？」

ユウキからの思わぬ言葉でリサは驚いてしまった。そんなリサに構わず、ユウキは言葉を続ける。

「問題はそこから自分をどう変えていくかじゃないのか？　現にリサは最初に会った時より強くなっている」

「ユウキ……ありがとう……」

「さあ、さっさと依頼を済ますぞ」

「うん！」

ユウキ達が掲示板で依頼を決めている時に、ピッパとキマワリがギルドを出てすぐの十字路で話しをしていた。

「だからあっしじゃないでゲス！」

「ならいったい誰が……ミステリアスですわー！」

どうやらさっきの臭いの話しをしているようだ。話からすると、先ほどの臭いは、ビッパのオナラだと、キマワリは勘違いしていたようだ。

「まあ良いでゲス……とにかく遠征メンバーに選ばれるように頑張るでゲス！」

この二匹の話しを影で聞いているポケモンがいたなんて、このときピッパ達は知るよしも無かった。

次の日、いつも通りの朝礼を終え、さあ仕事にというときに、ペラップの口からユウキ達にとって思わぬ発言があった。

「えー今日は新しい仲間を紹介しようと思う」

ペラップがそう言うと、臭いと共に三匹のポケモンがやって来た。ドクローズだ。

「クックッスカタンクだ」

「ケッドガースだ」

「へへっズバットだ。よろしくな！」

「この方達は今回の遠征に一時的に参加してもらう事になった。いきなり一緒に行動しても連携が取れないからな。二、三日一緒に生活することになった。皆よろしくな♪」

弟子達は、どうして親方とペラップはこの臭いが平気なのかわからなかった。そんな中、ユウキはドクローズ、いや、スカタンクのことを睨んでいた。

「では皆♪　仕事にかかるよ♪」

『おー……』

「あれ？皆元気ないね？」

「だってよ！　これだけ臭いんだから……」

ドゴームがそう言いかけると、プクリンが奮えだした。それに反射的なペラップは、

「いっいかん！　これはいつもの親方様の怒りが！　皆、張り切っていくよー！」

と無理やりに弟子達に元気を出すように促す。

『おー！！』

プクリンの恐ろしさを知っている弟子達はなんとか、元気を振り絞って声を出した。するとプクリンの奮えは止まり、いつもの様子になった。

「ククククッよろしくな」

「ふん……てめえに声をかけられる筋合いもないし、てめえ達と仲良しごっこをするつもりもない……」

「相変わらず口の減らない奴だ」

「用が無いなら失せろ」

スカタンク達は、ユウキを一度睨むとその場から去っていった。

「あいつら……何が目的なんだろうね……」

「さあな……どうせろくでもないことさ」

「お前達、今日も掲示板な。頼むぞ♪」

「わかった」

ユウキ達は掲示板の仕事を終えて、臭いから逃げるように部屋に戻り、眠りについた。

ユウキ達が寝た後、食料庫に三つの影があった。ペラップが確認に来た次の日には、食料庫の食べ物はほとんど食べられていた。

# 第十五話　ドクローズ（後書き）

ユウキ
「嫌な奴らだ」

そうだね……

リサ
「作者さん、顔色悪いよ？」

そう……？僕は先に帰るね……

ユウキ
「大丈夫か？」

リサ
「多分……」

## 第十六話　林檎の森（前書き）

第十六話完成～♪

チサ
「ずいぶん早いね～」

急にネタが浮かんでね

リサ
「珍しいね」

ひどい……
では第十六話を……

リサ・チサ
『どうぞ！』

# 第十六話　林檎の森

ドクローズがギルドに入った翌日、ペラップが食料庫に入ると、昨日あったはずの食料がほとんど無くなっていた。中でも、セカイイチと呼ばれる大きな林檎は全て無くなっていた。ペラップは、朝礼が終わった後、ユウキ達を呼び出した。

「今日はお前達に食料の調達を頼みたい」
「食料？食べ物のこと？」「その通りだ。昨日あったはずの食料が無くなっていたのだ。特にセカイイチに至っては全て無くなっていたのだ……」
「セカイイチ？なんだそれは？」
「とても大きく、とても美味しい林檎だ。そして親方の大好物でもある。セカイイチが無いと親方様は……」
ペラップは急に黙りこんでしまった。

「ん？セカイイチが無いとどうなるんだ？」
「親方様は……なのだ」
「え？聞き取れないよ」

リサが言うのも無理はない。ペラップは言ってないに等しいぐらいの声だったからだ。

「だから頼む。林檎の森に行ってセカイイチを取ってきてくれ」
「よくわからないけど……うん、いいよ」
「そうか♪頼むぞ♪」
「嗚呼。行くぞ」

ユウキ達はセカイイチを取りに林檎の森に向かった。それを見ていた影が三つあったが、ユウキ達はそれを知るよしもなかった。

林檎の森は、その名の通り、林檎が沢山あった。

「林檎がいっぱいあるね」「そうだな……」

ユウキはさっき拾った林檎を食べていた。

「歩き食いは危ないよ？」「そうか？……おいリサ！前！」

そこには、二匹のポケモンがいた。体は黄色く、手と尻に鋭い毒針を持つ……スピアーがいた。

「さっさと倒すか……リサ？」

ユウキが見ると、リサはユウキの後ろで震えていた。

「どうした？」

「……スピアー……怖いよ……」

（どうしたんだ……？前にも怯えることはあってもここまではいか

なかった……仕方が無いな）

「リサ、下がってろ。俺がやる」
「でっでも！」
「無理はするな」
「……うん」

ユウキはスピアーに突っ込んでいった。スピアーはダブルニードルで攻撃してきた。

「守る！」

ユウキはダブルニードルを守るで防いだ。その後、すぐにスピアーに雷パンチで攻撃した。スピアーは耐えられず、倒れた。

「あと一匹か……電光石火から雷パンチ！」

スピアーは避けようとしたが、ユウキの方がスピードがあった。スピアーは避けられず、そのまま倒れた。

「……終わった。リサ、大丈夫か？」
「うん……ゴメンね……役に立てなくて……」
「無理することはない。しかし、なんでそんなにスピアーが怖いんだ？」
「うん……前にね、森で食べ物を探している時に、スピアーの群れに襲われて……それ以来スピアーが凄く怖いの……」

ユウキは、リサの気持ちがよくわかった。そんなことになれば誰でもトラウマになるものだ。

「そうか……大丈夫だ。俺がいる」
「ユウキ……」

リサは、ユウキの大丈夫という言葉にとても安心感を覚えた。
それと同時に、自分の顔が赤くなっていることにも気付いた。

「さて、行くか」
「うん！」

二匹はセカイイチを求めて奥に入っていった。

「ここが一番奥みたいね……」
「あれがセカイイチか？」

ユウキが指差す先には、セカイイチの木があった。

「さっさと取って帰るか」「まちな！」

ユウキがセカイイチを取ろうとした時、三匹のポケモンがセカイイチの木から出てきた。ドクローズの三匹だ。

「お前ら……何してやがる……」

「ククク俺達のせいでとんだとばっちりを受けたもんだな」
「そっか、あんた達が食料を食べたのね！」
「ケッ！その通りだ！」
「へへっそれで、俺達はここでお前達をセカイイチを食べながらまってたのさ」

ズバットの言う通り、セカイイチはかなり少なくなっていた。

「ちっ！さっさとセカイイチを回収するぞ！」
「ククク！させるか！辻切り！」
「守る！」

スカタンクは辻切りで攻撃してきたが、ユウキは守るで攻撃を防いだ。

「電光石火から雷パンチ！」

ユウキは電光石火でドガースに接近し、雷パンチで攻撃した。ドガースはそのまま倒れた。ズバットにも同じ事をして倒した。
「やったね！」
「相変わらず弱いな……」「ククク……俺様だけで十分だ！辻切り！」

スカタンクはリサに攻撃してきた。

「電光石火！」

リサは電光石火で辻切りをかわした。

「ちっ！火炎放射！」

「させないよ！目覚めるパワー！」

リサは、ジン達と特訓した時に覚えた目覚めるパワーで攻撃した。目覚めるパワーは使う者によってタイプと威力が変わる。リサの場合はタイプは水で、威力もなかなかだ。

「くっ！」

「チェックメイトだ！雷パンチ！」

ユウキはスカタンクがリサに気を取られている間に後ろに回り込み、隙をうかがっていたのだ。

「ぐはっ……このままではマズイか……ドガース！いけるか！？」

「ケッ……なんとか……」

ドガースはぎりぎりユウキの攻撃に耐えていたようだ。

「くらえ！俺様とドガースのスペシャル毒ガスコンボ！」

「ヤバい！電光石火から守る！」

ユウキはリサに電光石火で近付いて守るを使い、リサを守った。

「ちっ前が見えねえ……」

毒ガスが晴れると、スカタンク達はいなくなり、セカイイチはベトベタフードになってしまっていた。

「そんな……セカイイチが……」

「余計なことを……収穫はこれだけか……」

「え？」

ユウキはバッグの中からセカイイチを二個取り出した。

「いつの間に！？」

「リサとスカタンクが戦っている時にこっそり収穫したんだが、二個しか取れなくてな」

「充分よ！さすがユウキね！」

ユウキはリサの満面の笑みに少し顔を赤くしてしまった。

「ギルドに戻るぞ」

「うん！」

ユウキ達はセカイイチを二個持ってギルドに帰った。

「おっ♪戻ったか♪で、どうだった？」

「これしか取れなかったよ……」

「そうか……とにかくご苦労さん！今日はゆっくり休みな」

そういうと、ペラップはセカイイチを持って去っていった。

「あいつら、余計なことしやがって……」

「本当だよね……でも、セカイイチは取ってこれて良かったじゃない！」
「……だな」
ユウキ達は食事を済ませ、眠りについた。

その頃、ドクローズの三匹は悔しがっていた。セカイイチの収穫を失敗させようとしたが、上手くいかなかったのだ。
「ケッ、アニキ～どうするんですか～？」
「ククククッ、あいつらは……遠征で……潰す！！」
ドクローズはこの時、ライトニングの二匹を潰す事を決意した。

## 第十六話　林檎の森（後書き）

ユウキ
「ムカつく奴らだ」

おいおい（汗）

ユウキ
「ドクローズの奴ら、今から潰しに行っていいか」

駄目だ

ユウキ
「……そうか」

## 第十七話　遠征へ（前書き）

第十七話完成！

ユウキ
「短くないか？」

繋ぎの話だからね……
あと今回新キャラがでますよ！
では第十七話を……

ユウキ
「どうぞ」

# 第十七話　遠征へ

ユウキ達が林檎の森からセカイイチを取ってきた日から数日、いよいよ遠征メンバーの発表がペラップから行われていた。

「えー今から遠征メンバーの発表を行う。えーまずは……ドゴーム♪」

「よっしゃー！！まあ俺が選ばれるのは当然だよな！ガハハハハ！」

弟子達は呆れてしまった。なぜならメンバーが選ばれるまで、ドゴームはずっとそわそわしていたからだ。

「次！チリーン♪キマワリ♪」

「私達！？」

「きゃーですわー！」

キマワリは相変わらずのテンションではしゃいでいた。

「次！おお！ライトニング♪」

「俺達か」

「やったぁ！」

ユウキ達は新入りだが遠征メンバーに選ばれたのだ。ドクローズの三匹苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「次！ビッパ♪グレッグル♪ディグダ♪ダグトリオ♪ヘイガニ♪以上って……あれ？」

ペラップは遠征メンバーに違和感を覚えた。

「親方様!?これギルドメンバー全員じゃないですか!?」
『ええ!?』
「うん。そうだよ♪」

なんとプクリンはギルドの弟子達全員を遠征メンバーに選んでいたのだ。

「そんなぁ!だったらメンバーを選ぶ必要がなかったじゃないですか!それに留守番がいなくて大丈夫なのですか!?」
「大丈夫♪ちゃんと戸締まりしていくから♪」
「しっしかし……」
「大丈夫だよ。皆!これから楽しい遠征だよ!頑張ろうね♪」
『おぉーー!』
「仕方ないですね……ではこれから遠征メンバーはって全員だが…
…準備してきてくれ。終わったらここに戻って待機だ。いいね♪」

ペラップがそう言うと弟子達はトレジャータウンに向かって行った。

「さすがプクリンだな……まさか全員とは」
「私、皆と行けるなんて凄い嬉しかったよ!」
「そうだな。俺達も準備しに行くか」
「うん!」

二匹もトレジャータウンに向かった。

トレジャータウンで準備を済ませ、ギルドに帰る途中に、チームマシンガンの二匹……いや、もう一匹増えて、三匹になっていた。

「ようジン、チサ」
「ユウキさん！リサさん！」
「やっほ～♪」
「ん？新しいメンバーが増えたな」
「あっ紹介しますね。彼は……」
「おれっちはイーブイのクロ！よろしくっす！」
「クロね。よろしくね！」「ユウキさん達は何しているんですか？」
「俺達はこれから遠征なんだ。準備を済ませてギルドに戻る途中だ」
「遠征！？凄いっすね！」「そうでしたか。頑張ってくださいね」

ジンがそう言うとチームマシンガンの三匹は去っていった。

「ユウキ、そろそろ行かないと！」
「だな」

ユウキ達は急いでギルドに戻っていった。

ギルドに戻ると、弟子達はもう揃っていた。

「全員そろったね。ではこれから説明を始める。まず、今回の我々の目的地は、霧の湖だ」

「霧の……湖？」

リサの質問にペラップは答えた。

「嗚呼。霧の湖はその名の通り霧に包まれていると言われていてな。発見されたことは無いと言われている」

「ヘイヘイ！本当にあるのかい？」

「あらヘイガニ。それを言ったらおしまいですわ」

まあ確かにキマワリの言う通りだ。最初からこれでは始まらない。

「えーそこには、とても素晴らしいお宝があると聞いている」

「それを私達が探すのね！」

「そういうことだ♪ではチームの発表する！まず、ドゴーム♪キマワリ♪ディグダ♪」

「よろしくですわー！」

「足を引っ張るんじゃないぞ！」

「次！ダグトリオ♪チリーン♪グレッグル♪ヘイガニ♪」

「いいチームだ」

「ヘイヘイ！よろしくな！」

「次！ユウキ♪リサ♪ビッパ♪」

「よろしくでゲス」
「嗚呼」

この時、ユウキはビッパは頼りにならないなと密かに思っていた。

「えー、ドクローズの方達は単独でお願いします」
「ククク了解しました」「で、私は親方様と一緒に行きますよ」
「ペラップと!?つまんなーい！」
「わがまま言わないで下さい！」
「……ケチ」
「では皆!張り切っていくよー！」
『おぉーー!!』

ギルドのメンバーは霧の湖に向かっていった。

## 第十七話　遠征へ（後書き）

というわけで新キャラのイーブイのクロです

クロ
「よろしくっす！」

ユウキ
「なぜ新キャラを出したんだ？」

そろそろ出そうかなと思ってね（笑）

クロ
「おれっち頑張るっすー！」

## 第十八話　ベースキャンプを目指して（前書き）

第十八話完成～

ジン
「少し遅いですね」

すいません……

クロ
「次は早く更新してくれっす」

約束はできないよ（汗）

ジン
「では第十八を……」

クロ
「どうぞっす！」

# 第十八話　ベースキャンプを目指して

ユウキ達は、ギルドを出発した後、あらかじめ決めていた海側のルートを進んでいた。そこは、所々崖になっていて、すぐ下は海が広がっていた。

「ここで行き止まりか……」

どうやらこの先に道は無いようだ。

「凄い！すぐ下は海だよ！」

「やっぱり遠征っていうだけあって道のりは険しいんでゲスね……」

ビッパは、この先もっと大変な道のりだと思うと、少し元気が無くなっていった。

「最初からそれでどうする。前向きにいこうぜ」

「そうでゲスね！」

ユウキの言葉でビッパは少し元気が出た。

「あれ？これ何だろう？」

リサはガルーラの形の像を見つけた。

「それはガルーラ像でゲス。倉庫の道具を出したり、預けたり出来るでゲス……まあ、あっしも始めて見たんでゲスが……なにせ始めての遠征でゲスから、わからない事が多いでゲス……」

「それは私達も同じよ。初心者同士がんばりましょ！」

ユウキはリサ達が話をしている間に、ガルーラ像のすぐそばに洞窟を発見した。

「おい、洞窟があるぞ」
「本当だ！……あれ？」

リサは洞窟が二手に分かれていることに気づいた。

「ねえ、二手に分かれてるよ」
「これは迷うでゲスね……」
「どっちがいいのかな……ユウキはどっちがいいと思う？」

ユウキは迷ってしまった。どっちに行ってもあまり変わらない気がしたからだ。なぜなら、間違っていても戻ってもう一方に入ればいいからだ。

「そうだな……こっちに行ってみるか」

ユウキは入口が大きい方がいいと思った。

「じゃあベースキャンプに向かって頑張るでゲス！」

ユウキ達は、あらかじめ霧の湖を探索するために決まっていたベースキャンプを目指して入口の大きい洞窟……沿岸の岩場に入っていった。

「雷パンチ！」
「頭突きでゲス！」

ユウキ達は沿岸の岩場に入った後、タマザラシ二匹に襲われていた。

「止めだ。１０万ボルト！」

ユウキは新しく覚えた１０万ボルトでタマザラシ達を倒した。

「やったね！」
「嗚呼」
「先に進むでゲス！」

ユウキ達はさらに奥に入っていった。

「結構奥に来たでゲスね……」
「出口はまだかな？」
「……あそこに光が見える。出口だな」

ユウキ達は出口に向かって走り出した……が、それをトドグラー二匹とキャモメ二匹、キングラー一匹が襲ってきた。

「なんだ？この洞窟のオールスターじゃあるまいし……仕方ない、リサ、キャモメは頼む。ビッパはリサの援護を頼む」
「うん！わかった！」
「了解でゲス！」

リサとビッパはキャモメ達の方に、ユウキはキングラー達の方に向かっていった。

「リサ！いくでゲスよ！」「うん！」

キャモメは翼で打つでリサに攻撃してきた。リサはそれを電光石火でかわした。

「いくよ！火の粉！」

リサはキャモメに火の粉で攻撃したが、相手は水タイプを持っているのであまりダメージは受けていなかった。

「あっしがいくでゲス！頭突き！」

ビッパは頭突きで攻撃したが、キャモメにかわされてしまった。

「どうすれば……一か八かやってみるしかない！ビッパ！キャモメ達をビッパに引き付けて！」
「わっわかったでゲス！」

ビッパはキャモメ達の周りを走って撹乱させた。

「ハアァァァ！……いけそう！ビッパ！離れていて！」

「わかったでゲス」

ビッパはリサの言う通りキャモメ達から離れた。

「いくわよ！ファイヤーレイン！！」

リサは周りの岩を踏み台にして高くジャンプした後、キャモメ達に火の粉を放った……いや、ただの火の粉ではなかった。普通の火の粉より量が多く、何より数が多い。それはまさに火の雨のようだった。キャモメ達は相性が良いとはいえ、あれだけの攻撃を受けては耐えられず、そのまま倒れた。

「リサ凄いでゲス！……大丈夫ゲスか！？」

「なんとか……やっと出来たよ……」

リサは疲労感で倒れてしまった。じつはこの技は、ジン達と特訓した時に編み出したが、今まで上手くいかなかったのだ。

「はやくユウキの所に……」

「無理しない方が良いでゲス！ユウキなら大丈夫でゲス！」

「そうよね……ユウキは強いもん……」

「そうでゲス！少し休んでユウキと合流するでゲス！」

ビッパは、ユウキ！負けるなでゲス！と心の中で思っていた。

リサ達がバトルしていた時、ユウキは作戦を立てていた。

（さて……相性が良いとはいえ、さすがに三匹を相手にするのはキツイな……）

ユウキが作戦を立てている間に、トドグラー達は水鉄砲で攻撃してきた。

「おっと！守る！」

ユウキは守るで水鉄砲を防いだ。しかし防いだ後、目の前にキングラーが迫りながら、クラブハンマーで攻撃してきた。

「ちっ！電光石火！」

ユウキは電光石火でクラブハンマーをかわした。クラブハンマーは岩に当たり、岩は粉々に砕け散った。

（あんなの喰らったら一撃でおだぶつだな……だがスピードは三匹ともないな……よし……）

ユウキはこの戦いに勝つための作戦を立てた。

「いくぞ！影分身！」

ユウキはつい先程使えるようになった影分身でキングラー達を惑わし始めた。キングラー達は本体がわからず、分身達に攻撃していた。

（よし……この間に……）

ユウキは、キングラー達が分身達に攻撃している間に充電をしていた。実はユウキの本体は穴を掘るで地中にいたのだ。

（充電終了……いけるな）

ユウキは地中から出てきた。その体からは電気が溢れていた。ボルテックススタイルになっていた。

「いくぞ。電光石火！」

ユウキは電光石火でトドグラー達に攻撃した。ボルテックススタイルになっていたため、攻撃力や素早さなどが高くなっていた。トドグラー達はそれを耐えられず、倒れた。

「後はお前だ。電光石火！」

ユウキは電光石火でキングラーに近づいた。キングラーはクラブハンマーで攻撃したが、ユウキを捕らえることは出来なかった。

「チェックメイトだ！ライジング・ブレイカー！！」

ユウキはライジング・ブレイカーでキングラーに攻撃した。キングラーは耐えることは出来ず、その場に倒れた。

「ハァ……ハァ……終わった……」

ユウキは疲れてその場に座り込んでしまった。少しした後、リサとビッパが来た。

「ユウキ！大丈夫でゲスか！？」
「なんとかな……そっちは？」
「なんとか大丈夫よ」
「そうか……とりあえずここから出るぞ」

ユウキ達は沿岸の岩場の出口に向かっていった。

「やっと出口でゲス！」

ユウキ達は沿岸の岩場を抜けることに成功した。

「今どこかな？」
「地図で確認するか……」

ユウキ達は地図で確認した。この先にあるツノ山と呼ばれる山を越えるとベースキャンプに着くようだ。

「もう少しでゲスね」

「とりあえず今日はここで休むか」

ユウキ達はここで野宿をすることにした。ユウキは多めに食料を持ってきたが、ビッパはほとんど食べてしまった。ユウキはこの日、ビッパが大食いだと、改めて認識した。

夜中、リサが目を覚ますと、ユウキがいないことに気付いた。

「あれ？ユウキ？」

リサは辺りを見回すと、ユウキは少し離れた所で座って星を眺めていた。

「ユウキ、どうしたの？」「ん？リサか。別にどうもしていない。なんか眠れないだけだ」
「そっか……隣いい？」
「嗚呼」

リサはユウキの隣に座った。リサは座ったのはよかったが、何を話したらいいかわからなかった。

「どうした？」

「うっううん！何でもないよ。あっそうだ！あの技がさっきのバトルで出来たの！」
「そうか……完成したのか？」
「完成はしてないんだ……まだ練習が必要みたい」
「でも凄いじゃないか。やったな」
「うん！」

ユウキとリサはその後、しばらくの間星を眺めていた。

「……そうだ、リサに聞きたい事があったんだ」

ユウキはリサに話しかけたが反応が無かった。

「……？リサ？」

ユウキが横を見ると、リサはユウキに寄り添って眠ってしまっていた。

「おいおい……起こすのも可愛そうだな……このままでいいか……」

ユウキは夜空を見ながら一人で考え事をしていた。

（俺はどうすればもっと強くなれる……どうすればリサを傷つけずに済むんだ……）

ユウキは一人で考えていたが、そのうち眠くなってきてしまった。

（……もう寝るか）

ユウキはその場で眠りについた。

## 第十八話　ベースキャンプを目指して（後書き）

チサ
「リサやるね～♪」

確かに

チサ
「次回でベースキャンプに着くの～？」

まだなんとも言えないよ（笑）

## 第十九話　ツノ山（前書き）

第十九話完成～

リサ
「サブタイトルが適当な気が……」

思い浮かびませんでした……（泣）

リサ
「では第十九をどうぞ！」

# 第十九話　ツノ山

ユウキ達が沿岸の岩場を抜けた翌日、ユウキ達はこれからどうするか決めていた。

「これからどうするでゲス？」

「そうだな……一番早く行けるのはそこの山を越えることだな」

リサは、ユウキが指差す方を見ると、そこにはかなり高い山があった。

「あの山？結構高いね……」

「だがそれしかない。準備が出来たら行くぞ」

ユウキ達は近くにあったガルーラ像で準備を済ませた後、目の前の高い山……ツノ山に入っていった。

ツノ山に入ると、ユウキ達は改めてその高さを痛感した。

「しかし高いでゲスね」

「そうだな……」

ユウキ達が話をしていると、アゲハントが襲い掛かってきた。

「敵か。雷パンチ！」

ユウキは雷パンチでアゲハントを倒した。

「結構敵が多いね」

「気をつけて行くでゲス」

ユウキ達は更に山を登っていった。

「あっ頂上じゃない！？」

リサの言う通り、目の前に頂上が見えてきた。

「早く行くでゲス！」

リサとビッパは頂上に向かって走り出した。ユウキだけは歩いて二匹を追いかけた。

「頂上だ～！」
「やったでゲス～！」
リサ達はユウキより先に頂上に着いた。
「やっとか……ん？」
ユウキは自分達を狙っているポケモンを見つけた。
「リサ……ビッパ……気をつけろ。敵がいる」
「え？本当？」
リサが周りを確認しようとした刹那、三匹のプテラが襲い掛かってきた。
「敵でゲス！」
「どうやら今までの奴らとは違うようだな……」
「来るよ！」
プテラ達は竜の息吹で攻撃してきた。ユウキ達はそれをなんとか避ける事が出来た。
「十万ボルト！」
「火の粉！」
ユウキとリサは、それぞれの技でプテラ達に攻撃したが、簡単にかわされてしまった。

「かなり速いでゲス！」
「こいつはてこずりそうだな……」

ユウキは作戦を考えようとしたが、プテラ達は更に攻撃してきた。

「くっ守る！」

ユウキは、プテラの翼で打つを守るで防いだ。

「これじゃどうしようもないよ！」
「どうする……ん？」

プテラの内の一匹の動きが急に鈍くなった。そしてすぐに眠ってしまった。

「え？どうして！？」
「上手くいったでゲス！」

どうやらビッパが欠伸をプテラに当てていたようだ。欠伸は決まるとしばらくしてから相手を眠らす技だ。

「これで少し楽になるな」「油断はできないよ！」

リサの言う通り、まだプテラは二匹いるのだ。

「わかってるさ」

（さて……どうする……小手先の作戦はダメだ。やるなら力で捩じ伏せるしかない……）

「これでいくか！影分身！」

ユウキは影分身で自分の分身を作った。そして自分は穴を掘るで地中に潜った。だが、プテラは地震を使ってユウキを地中からたたき出してしまった。

「ぐはっ！」
「ユウキ！大丈夫！？」
「ちっ……なんとかな……」

だがこの間にもプテラは攻撃してきた。だが、プテラの内の一匹は先程のプテラと同様、眠ってしまった。

「やったでゲス！」
「ビッパやるな！」

だが、ビッパは油断したか、最後の一匹のプテラの竜の息吹をまともに喰らってしまった。

「ビッパ！？くそっ！十万ボルト！」

ユウキは十万ボルトで攻撃したが、またしてもかわされてしまった。

「くそっ！リサはビッパを安全な所に！」
「わかった！……でもユウキは？」
「俺は大丈夫だ……早くいけ！」

リサはビッパを安全な所に避難させるためにビッパの所に向かった。だが、プテラはビッパの所に向かっていこうとしたリサに、竜の息

吹で攻撃してきた。

「えっ！？キャアァ！！」

リサは竜の息吹に気付くのが遅れてしまい、かわすことが出来なかった。しかし、いくら待っても攻撃がこない。リサは前を見ると、ユウキがリサをかばっていた。

「ユウキ！？」

「……俺は大丈夫だ……早く行くんだ……」

「でもユウキが……」

「早く行け！！」

リサはユウキの言う通りビッパの所に走り出した。

（くそっ……かなりヤバいな……どうすれば……）

ユウキは先程の竜の息吹で既にボロボロだった。だが、プテラは容赦なく翼で打つで攻撃してきた。

「くっ……守る」

ユウキはなんとか守るで防ぐ事ができた。

（どうすれば……こうなったら一か八かやってみるか……）

「影分身……」

ユウキは影分身で分身を作った。だが、ダメージがあるせいかさっきより分身の数が少ない。プテラはさっきと同じように地震で攻撃

してきた。だが分身が消えたが、ユウキの本体は出てこなかった。

「止めだ……ライジング・ブレイカー！！」

ユウキはプテラの上からライジング・ブレイカーで攻撃した。プテラは耐えられず、その場に倒れた。

「ハァ……ハァ……倒した……」

ユウキは分身を作った後、周りの岩を使ってプテラの上にジャンプしていた。おそらくプテラはユウキがまた地中にいると思うだろう。プテラが地震を使っている間に上にジャンプし、空中で充電をし、ライジング・ブレイカーを使って攻撃をする。敵の先入観を利用した作戦だった。

「ハァ……ハァ……充電が少なかったが……なんとかなったな……」

ユウキが戦いが終わって休んでいると、リサとビッパがユウキの所に来た。

「ユウキ！大丈夫でゲスか！？」

「あんまり……大丈夫じゃないな……ビッパは……大丈夫か……？」

「あっしは大丈夫でゲス！早くこれを食べるでゲス！」

そう言うと、ビッパはオボンの実をユウキに食べさせた。

「ユウキ……あんまり無茶しないでよ……ユウキに何かあったら私……」

「……済まなかった……心配かけて……」

「……でも無事で本当に良かった……」

リサは泣きながら言った。本当に心配していたようだ。

「とりあえずここから離れて休むでゲス」

ユウキ達は少し離れた所まで行き、休んだ後ベースキャンプに向かっていった。

# 第十九話　ツノ山（後書き）

ユウキ
「疲れた……」

リサ
「ユウキ無茶しないでよ……」

ユウキ
「悪かったな……そういえば作者は？」

リサ
「テストなんて嫌だーー！！って言いながらどっか行っちゃった……」

ユウキ
「何やってんだうちの作者は（汗）」

## 第二十話　新たな出会い（前書き）

第二十話完成！

ユウキ
「テストは良いのか？」

知らん

ユウキ
「逃避しやがった……」

では第二十話をどうぞ！

# 第二十話　新たな出会い

ユウキ達はツノ山の頂上で休んだ後、ベースキャンプを目指してツノ山を下山していた。

「やっぱりこの山高いでゲスね……」

「このままだとベースキャンプに着くの夜中になっちゃうね……今日はこの辺で休もうよ」

「そうだな……」

このままだと夜中になると判断し、ここで休息をとることにした。

その夜、リサはユウキを呼び出した。ユウキに話したい事があったからだ。

「ユウキ……」

「どうしたんだ？」

「……ユウキに言っておきたい事があるの」

「俺に？なんだ？」

「ユウキ……最近の戦い方無茶しすぎだよ……」

「え？」

ユウキはリサの思わぬ発言に少し驚いてしまった。

「ユウキ、いつも私を守るためにボロボロになってるんだもん……もっと私を頼ってよ……」

「リサ……」

「私だって……ユウキが傷つくのは見たくないよ……」

リサはユウキに泣きながら訴えた。いつも自分のためにユウキがボロボロになるのを見て心を痛めていたのだ。

「えっ……」

ユウキはリサを優しく抱きしめた。

「リサがそんなに傷ついていたとは気づかなかった……済まなかった……」

「ユウキ……うん」

ユウキはしばらくの間リサを抱きしめていた。この時、ユウキはもうリサを泣かせないと心の中で誓った。

翌朝、ユウキ達はツノ山を下山し、ベースキャンプにたどり着いた。他の弟子はもう全員いた。

「やっと着いたでゲス～！」

「遅いよ！もう他の皆はとっくに着いてるよ！」

ベースキャンプに着いて早々ユウキ達はペラップに怒られてしまった。

「さあ早く荷物を置いておいで。作戦会議をやるよ」「うん。ユウキ、行こう……ユウキ？」

（なんだこの感覚は……俺は……この場所を知っている……記憶を失う前の俺が来たことがあるのか……それともここで失った記憶についてわかることがあるのか……？）

「ユウキってば！」

「ん？どうしたんだ？」

「どうしたの？考え事？」「別に何でもない。とりあえず荷物を置きにいくか」

ユウキ達は、ペラップの言う通り荷物を置いて作戦会議に参加した。

「えーではこれから霧の湖の探索を始めようと思う。見ての通り、この先は霧に覆われている。この霧のせいで霧の湖は発見することが困難だと考えられる。そこで皆には霧の湖を発見の他にこの霧を取る方法も一緒に探してほしい。なにか見つけたら私と親方様み報告してくれ」

「あの～ちょっといいですか？」

ペラップが話し終わるとチリーンが話し始めた。

「ここに来るときに聞いた伝説なんですけど……霧の湖にはユクシーという珍しいポケモンがいるらしいんです。ユクシーは目を合わせた者の記憶を消してしまう能力があるらしいんです」
（記憶を……消すだと……？）

ユウキは驚いてしまった。何故か知っている場所に記憶を消す事が出来るポケモン……偶然にしては少し出来すぎている。

「こほん……こういった場所は大抵伝説があるものだ。だが我々はそういった伝説も乗り越えて来たじゃないか！」
「そうですわー！頑張って行きますわよー！」
「よし！では皆！頑張っていくよー！」
『おぉー！！』

弟子達は霧の中に入っていった。

「私達も行こうよ！……ユウキ？」
（まさか……俺は前にここに来たことがあるのか……？そしてユクシーに記憶を消された……そうは考えられないか……）
「ユウキ！どうしたの？らしくないなぁ」
「あぁ……悪い。俺達も行くか」

ユウキ達は霧の深い森……濃霧の森に入っていった。

リサは、濃霧の森の入り口付近であるものを発見した。

「ねえユウキ！ここに綺麗な石があるよ！」

ユウキはリサの言う方を見ると、確かに赤い石があった。

「みたいだな」

「うわー！この石あったかいよ！一応拾っておこうかな」

「そろそろ行くぞ」

ユウキ達は更に奥に入っていった。

「前が見えないよ……」

「気をつけろよ。何処から敵が来るかわからないからな……」

ユウキがそう言った刹那、森の何処からか悲鳴が聞こえてきた。

「……悲鳴？」

「ユウキ！？」

「嗚呼……行った方がよさそうだな」

ユウキ達は悲鳴のした方に向かって走り出した。

ユウキ達が悲鳴のした所にたどり着くと、一匹のポケモンがポポッコ三匹に襲われていた。襲われているポケモンは、体格はユウキ達とあまりかわらず、薄緑色の体で、赤い大きな瞳、頭には緑色の葉っぱがある……チコリータだった。

「リサ！助けるぞ！」

「うん！火の粉！」

リサはポポッコ達に火の粉を放った。ポポッコ達はそれに気付かず直撃した。

「来るぞ！」

ポポッコは種マシンガンで攻撃してきた。それをユウキは守るで防いだ。

「リサ！任せるぞ！」

ユウキは電光石火でポポッコを撹乱し始めた。その間にリサは力を溜めていた。

「ハアァァ！！……準備出来たよ！」

「よし……影分身！」

ユウキは影分身で分身を作り出した。リサから注意を背けるためだ。その間にリサは上にジャンプしていた。

「いくよ！ファイヤーレイン！！」

リサはポポッコ達にファイヤーレインで攻撃した。相性が良いせいか、ポポッコ達は倒れた。

「終わったな。おい、大丈夫か？」
「ええ……とりあえずありがとね」
「無事で良かったよ！」
「べっ別に助けてほしいなんて言ってないんだからね！」

ユウキはこの時、チコリータは面倒臭いやつだと認識した。

「とりあえず……どうするか」
「プクリンに報告する？」「あなた達プクリン親方を知ってるの！？」
「知ってるもなにも俺達はプクリンのギルドの弟子だからな」
「そうだったのね！プクリン親方の所に連れてってくれない？……言っとくけどあなた達と一緒にいたいわけじゃないんだからね！」
「はいはい……」

ユウキ達はプクリンのに会うためにベースキャンプに戻っていった。

「おーいプクリーン」
「あっお帰り友達～♪なにか見つけた～？」
「プクリン親方、お久しぶりです」

「あっミズキ～久しぶりだね～ドダイトスは元気～？」
「はい、おかげさまで」

どうやらミズキと呼ばれたチコリータはプクリンと知り合いだったようだ。

「ペラップ、あいつはプクリンとどういう関係なんだ？」
「ミズキさんは隣町のウッドタウンにあるドダイトスさんのギルドでお前達と同じように探検隊の修業をしているんだよ」

ユウキがミズキについて聞き終わると、プクリンがユウキに話しかけてきた。

「ねえ、君達にお願いがあるんだ。この遠征の間、ミズキを君達ライトニングのメンバーに入れてくれないかな」
「ミズキをか？」
「うん。ダメかな？」
「俺は構わないぜ」
「私もいいよ！」
「決定だね♪ミズキ頑張ってね♪」
「はい。それじゃ二人ともよろしくね」

三匹は濃霧の森に戻っていった。

「葉っぱカッター！」
「火の粉！」
「雷パンチ！」

ユウキ達は濃霧の森に入った矢先、ドーブル達に襲われていた。

「電気技が効きにくいな……何故だ？」
「天気が霧だと電気タイプの技は威力が下がるの！そんなことも知らないの！？」
「悪かったな……知らなくてよ。だったら……電光石火からアイアンテール！」

ユウキは電光石火でドーブルに接近し、アイアンテールで攻撃した。だがまだドーブルは立っていた。そのままドーブルは、さっきスケッチで覚えた雷パンチで攻撃しようとしてきた。

「ヤバい！」
「目覚めるパワー！」

ユウキに雷パンチが決まる寸前に、リサは目覚めるパワーでドーブルに攻撃した。ドーブルはそのまま倒れた。

「やったぁ！」
「助かったぜ！あとは二匹だな」

ユウキ達が見ると、既にミズキが一匹倒していて、後二匹になっていた。

「一人で倒すとはな……やるじゃないか」

「別にこれぐらい余裕なんだからね！来るわよ！」

ドーブルはスケッチで覚えた葉っぱカッターで攻撃してきた。

「私に任せて！火の粉！」

リサは火の粉で葉っぱカッターを相殺した。だがドーブルはそれを読んでいたのか、電光石火でユウキ達に接近していた。しかしユウキは更にそれを読んでいた。ユウキはドーブルにアイアンテールを決めた。ドーブルは耐え切れず倒れた。

「さすがユウキだね！」

「へぇ……なかなかやるじゃない！」

「なんとか読みが当たっただけだ……先に行くぞ」

ユウキ達は霧の湖を探すために、濃霧の森の更に奥へと入っていった。

## 第二十話　新たな出会い（後書き）

はい、新キャラのツンデレ嬢ミズキです（笑）

ミズキ
「ツンデレってなによ！」

その通りじゃないか

ミズキ
「悪かったわね！」

恐え～（汗）

## 第二十一話　グラードンの心臓（前書き）

第二十一話完成！

クロ
「テスト勉強はいいんすか？」

気にしない気にしない♪

クロ
「……（汗）」

では第二十一をどうぞ！

# 第二十一話　グラードンの心臓

ユウキ達はメンバーにミズキを加え、濃霧の森を探検していた。

「なあ、ミズキも探検隊の修業をしているんだろ？」「ええ。それがどうしたの？」

「ならチームがあるのか？」

「ええ。チームシャインっていうのよ」

「なんか私達のチーム名ににているね」

「べっ別にあんた達と似ているからって嬉しくないんだからね！」

「はいはい……ん？森が終わるな」

ユウキが言う通り、そこで森は終わっていた。森を抜けると、所々から水が落ちて滝のようになっていた。

「凄い！あちこちに滝があるよ！」

「だけど……これからどうすれば良いのかしら？進もうにも霧が深くてよくわからないし……」

その時、一匹のポケモンがユウキ達に話しかけてきた。弟子の一匹のヘイガニだった。

「へいへーい！ユウキ！リサ！」

「ん？ヘイガニじゃないか。手がかり見つけたか？」「さっぱりだぜ……ん？あんたは？」

「……ミズキよ……それと、いきなりあんたなんて呼ばれる筋合いないんだけど！」

「へいへーい！何だよいきなり！」

初対面早々、ヘイガニとミズキはケンカを始めてしまった。

「ちょっと！ケンカはダメだよ！」
「……子供か……お前達は」
「なんですってー！」
「へいへーい！そんなことより気になるものを見つけたんだよ！こっちに来てくれよ」

ユウキ達はヘイガニについていくと、そこには一体の石像があった。

「これは一体……？」
「オイラにもよくわからねえ。多分ポケモンの石像だと思うけど……」
「とりあえず調べてみようよ」

リサは石像を調べて始めた。すると石像の土台に何か書かれているのを見つけた。

「なにかな？文字みたいだけど……」
「随分古いな……土が邪魔だな……」

ユウキは文字に着いていた土を払った。

「足型文字ね。私が読むわ」

ミズキは足型文字を読みはじめた。

「えっと、グラードンの命ともしき時……空は日照り……宝の道開くなり……」「宝の道だと？……ならこいつの謎を解けば霧の湖に行けるんじゃないか？」

「でも……一体どうゆうことなのかしら……」

ユウキ達は足型文字に書いてあったことが理解できなかった。ユウキ達が考えていると、突然目眩に襲われた。

（……!?これは……またあの目眩……？何か見えるのか……？）

目眩が終わると誰かの声が聞こえてきた。

『そうか!ここにっ!!ここに……があるのか!!』

そこでこの声は終わってしまった。

（今のは？……くっ!?またくるのか……!?）

二度目の目眩が終わるとさっきと同じ声が聞こえてきた。

『なるほど……グラードンの心臓に日照り石をはめる……それで霧は晴れるのか!!さすがだな!やっぱり俺のパートナーだ!』

ここで声は終わってしまった。

（今のは？……今まで見えていたものとは少し違っていたな……いつもは映像も見えるんだが、今回は声だけだったな……それに誰の声かもわからなかった……あの声は一体誰だったんだ？……何故か凄く気になる……）

ユウキが今見えたものについて考えていると、リサが話しかけてきた。

「ユウキ？どうしたの？」「……今何か見えたんだ」「え！？本当に！？何が見えたの？」

ユウキはさっき見えたものについてまとめ始めた。

（確かに……グラードンの心臓に日照り石をはめる……それで霧が晴れる……まて……日照り石？……まさか……さっきリサが拾った石か？）

ユウキはグラードンの石像を調べはじめた。すると、グラードンの胸の部分に小さなへこみを発見した。

「なるほど……そうゆうことか」
「何かわかったの？」
「嗚呼。リサ、さっき拾った石を貸してくれ」
「え？うん、いいよ」

ユウキはリサからさっき拾った石を受け取り、胸の部分にある小さなへこみに入れた。すると、急に地響きが起こり始めた。

「危ない！皆離れろ！」

ユウキが叫んだ刹那、石像が光りはじめた。光が消えると、辺りから霧が消えていた。

「……霧が晴れたな」
「そうね……ん？ねえ！あれを見て！」

ミズキが見ていた方を見ると、皆驚いてしまった。

「え！？なにあれ！？」
「……なるほどな……霧の湖をいくら探しても見つかるわけがない……俺達はここをウロウロするしかなかったんだ……」
「へいへい！まさか！」
「フッ……そのまさかだ。霧の湖はあの上にある」

そこは浮島のようになっていて、それを支える様に地面が地上に伸びていた。
「へいへい！こうしちゃいられねえ！オイラギルドのメンバーに知らせてくるぜ！ユウキ達は先に行っていてくれ！」

そう言うとヘイガニはベースキャンプに向かって走り出した。

「さて……私達も行きましょうか」

ユウキ達は霧の湖に向けて出発しようとしたが、何故か体が動かなかった。

「あれ？体が動かないよ！」
「ククククッいい格好だな」

その言葉と共に現れたのはドクローズの三匹だった。

「貴様達……」
「ククククッドクローズ参上！」
「私達になにをしたの！？」
「ケッなに、不思議玉の縛り玉を使っただけさ」

不思議玉、それはこの世界にある、色んな力が込められた宝。その中から敵の動きを止める縛り玉を使ったようだ。

「へへっこのままお宝もいただきだぜ！」
「……やはりそれが目的か……」
「ククク当然だ。ついでにお前達も倒していくか」
スカタンク達は戦闘体制に入っていた。

「どうするのよ！」
「まずいな……」
「ククククッじゃあな！」
「あーんまってよー！」

スカタンクが攻撃しようとしたが、一匹のポケモンがセカイイチとともにやってきた。プクリンだ。

「やっと捕まえた♪僕のセカイイチ♪あれ？君達……それに友達も♪何しているの？」
「プクリン！助けて！こいつらのせいで動けないの！」
「やっぱり悪者だったんだね♪」

プクリンの発言にミズキ以外のポケモンは驚いてしまった。

「君達のことは前から知っていたんだよ。だから前から懲らしめようとしていたけど、僕から行ったらギルドの評判を下げてしまうからね、君達が遠征に参加すると聞いて遠征の中で少し懲らしめようと思ってね♪」

プクリンはユウキ達に癒しの種を食べさせながら言った。

「ククククッまさかばれていたとはな……」

「ユウキ達は先に行っていて♪こいつらは僕に任せて♪」
「嗚呼、わかった」

ユウキ達は霧の湖に向かって行った。

「さて……改心するなら見逃してあげるよ♪」
「ふざけるな！ドガース！」
「へい！」
「くらえ！毒ガススペシャルコンボ！」

スカタンクとドガースはプクリンに毒ガススペシャルコンボを放ったが、プクリンには効いていないようだった。

「なっなに！？」
「改心する気はないようだね。残念残念♪……たあぁぁ！！！」

プクリンはスカタンク達にハイパーボイスを放った。スカタンク達は一撃で倒れた。

「ふう……ユウキ達を追い掛けなくちゃ♪じゃあね、と・も・だ・ち♪」

プクリンはユウキ達の後を追い掛けて行った。

「ユウキ、リサ、ここに洞窟があるわよ」

ユウキ達はプクリンと別れた後、霧の湖に向かうために辺りを捜索し、洞窟を見つけていた。

「ここから入れそうだな」「ん？これって水蒸気？」

リサの言う通り、洞窟の壁から水蒸気が出ていた。

「もしかしてこの中は凄い暑いのかしら……」

ミズキは少し強張った顔をしながら言った。ミズキは草タイプなので暑い所が苦手なのだ。

「かもしれないな……大丈夫なのか？」

「べっ別に心配しなくても私はへっちゃらなんだからね！勘違いしないでよね！」

「その調子なら大丈夫ね！……なんか私ワクワクしてきたよ！今までだれも来たことのない洞窟に入るんだよ！」

「そうだな」

「早く入るわよ！」

ユウキ達は霧の湖に行くために水蒸気の出ている洞窟……熱水の洞窟に入って行った。

## 第二十一話　グラードンの心臓（後書き）

ミズキ
「霧の湖はまだかしら？」

もう少しだよ

ミズキ
「それよりプクリン親方がドクローズを知っていたとはね」

ゲームから少し変えてみたんだ（笑）

プクリン
「わーい♪作者とミズキだー♪」

作者・ミズキ
『いつの間に！？』

## 第二十二話　霧の湖の番人（前書き）

第二十二話完成！

ユウキ
「最近よく更新するな」

気にしない気にしない♪
では第二十二話をどうぞ！

# 第二十二話　霧の湖の番人

ユウキ達はプクリンと別れた後、霧の湖発見のため、熱水の洞窟を進んでいた。

「暑いな……」
「本当ね……」

ユウキとミズキは早くもダウンしかけていた。しかしリサだけは平気な顔をしていた。

「二人とも大丈夫？」
「ええ……リサは良いわね、炎タイプだから暑いの平気なんでしょ……？」
「うん」

ユウキとミズキは暑さでダウンしかけているので、リサが先導して進んでいった。そこにコロトックが襲い掛かってきた。

「敵かよ……」
「私に任せて！火の粉！」

リサは火の粉でコロトックに攻撃した。相性が良いせいかコロトックは一撃で倒れた。

「やったあ！」
「ふぅ……早くここから出ないと足手まといだな……」
「なら早く行きましょうよ！」

ユウキ達は更に奥に進んでいった。

奥に行くと、少し開けた所にでた。そこには敵のポケモンはいなかった。更にガルーラ像もあった。

「ここは……中間地点みたいだね」

「何故かここは涼しいわね」

ミズキの言う通り、今まで暑かったのにここだけは涼しいかった。

「なんにせよ助かった。ここで休憩するぞ」

ユウキの意見に二匹とも賛成した。

「ふぅ……少し疲れたわね……ん？」

ミズキは何かに気づいたような素振りを見せた。

「どうしたの？」

「今……何か聞こえなかったかしら？」

「……？聞こえないが？」「おかしいわね……確かに聞こえたんだけど……」

「聞き間違えだろ？」
「なによ！……あっ！今聞こえる！」

ユウキとリサは耳をすませた。確かに微かにだが何か聞こえる。

「……鳴き声か？」
「何かいるのかな？」
「とりあえず先に進むぞ」

ユウキ達は鳴き声が何か気掛かりだったが、とりあえず先に進むことにした。

中間地点を抜けると、さっきよりも強いポケモンが増えてきていた。
今ユウキ達はブーバーとバトルしていた。

「十万ボルト！」
「目覚めるパワー！」
「マジカルリーフ！」

ユウキ達はそれぞれの得意技でブーバーに攻撃した。しかしまだブーバーは倒れていなかった。ブーバーは火炎放射で攻撃してきた。

「ちっ！守る！」

ユウキは守るで火炎放射を防いだ。

「影分身！」

ユウキは影分身でブーバーの周りに分身を作った。ブーバーは分身に惑わされ、分身に攻撃していた。

「止めよ！目覚めるパワー！」

リサは目覚めるパワーで攻撃した。だがまだブーバーは耐えていた。

「しつこい奴ね！マジカルリーフ！」

ミズキが駄目押しのマジカルリーフを放った。さすがに耐えられず、ブーバーは倒れた。

「結構しつこかったな」

「先に進もうよ」

ユウキ達は更に奥に進んでいった。

「ん？出口だな」

ユウキ達はなんとか熱水の洞窟を抜けることができた。

「疲れたわね……ん？また聞こえるわよ！」

ミズキの言う通り、さっきの声が聞こえてきた。それもさっきより大きく聞こえている。

「……やっぱり鳴き声みたいだな」

「冷静に言ってる場合じゃないよ！」

リサがそう言った刹那、声とともに地響きが起こった。

「何かが近づいて来るな……」

ユウキがそう言うと、一匹のポケモンが現れた。体はユウキ達よりも何倍も大きく、赤い色だった。さらに鋭い爪を持ち、体は頑丈そうだ。

「貴様達！ここになにしに来た！！」

「……俺達は霧の湖を探しに来ただけだ」

「何！？我はグラードン！霧の湖の番人だ！霧の湖を荒らす奴は許さん！」

「グラードン……本当にいるとはね……」

「私達はここを荒らしに来たんじゃないよ！？」

「黙れ！ここを荒らす奴は許さん！」

グラードンはユウキ達の話を全く聞いてくれなかった。

「話し合いは無駄なようだな……来るぞ！」
「グオォォォ！！地震！」「ちっ！守る！」

ユウキはリサとミズキを守るで守った。

「ありがとうユウキ！」
「気を抜くな！来るぞ！」「グオォォォ！火炎放射！」

グラードンは火炎放射でユウキ達に攻撃してきた。

「十万ボルト！」

ユウキは十万ボルトで相殺しようとしたが、火炎放射の方が威力が高かったか、押し切られてしまった。

「くっまずい！」
「ソーラービーム！」

ミズキは火炎放射にソーラービームで消滅した。さらにそのままソーラービームはグラードンに直撃した。

「ほう……やるじゃないか！」
「べっ別に褒められたって嬉しくないんだからね！」「二人共！来るよ！」
「グオォォ！貴様達許さん！大文字！」

グラードンは大文字で攻撃してきた。

「まずいな！……守る！」

ユウキは守るで防いだ。だが、かなり威力が高いせいか、かなり押されてしまった。

（くそ……どうすればいい……相手は伝説のポケモン……生半可な作戦は自殺行為だ……そうか、相手の特性を利用すれば……）

「ミズキ、グラードンの特性って確か日照りだったよな」
「ええ、そうよ」
「ならいけるか……」
「作戦があるの？」
「まあな……」

ユウキは作戦をリサとミズキに話した。

「……これならいけるはずだ」
「ダメ！そんなことしたらユウキが！」
「大丈夫だ……俺はリサを信じている」
「ユウキ……」

リサはユウキの言葉で顔が少し赤くなっていた。

「決まったみたいね！」
「嗚呼……ミズキはアシスト頼むぞ！」
「任せておきなさい！」

ユウキとミズキはグラードンに突っ込んでいった。

「ユウキ……ミズキ……私が頑張らなくちゃ……頑張らなくちゃ……」

実はリサは凄い怖かった。相手は伝説のポケモン。戦ったらどうなるかわからなかった。

「でも……私頑張る！」

ユウキとミズキはグラードンに突っ込んでいた。

「いくぞ！電光石火からアイアンテール！」

ユウキは電光石火で接近し、アイアンテールをグラードンに決めた。

「そんなもの効かん！切り裂く！」

「ミズキ！」

「ええ！蔓の鞭！」

ミズキは蔓の鞭でユウキをグラードンから離した。

「行くぞ！電光石火！」

ユウキは電光石火でグラードンの後ろに回り込んだ。その後、グラードンの背中を上り、グラードンの顔の正面に行った。

「アイアン……」

「遅い！火炎放射！」

（よし！掛かった！）

グラードンはユウキに超至近距離で火炎放射で攻撃してきた。

「今よ！ソーラービーム！」

「ユウキ……私頑張るよ！ファイヤーレイン！」

リサとミズキの持っている最強の技で攻撃した。日照りのせいでソーラービームは溜める必要がいらないし、更に炎タイプのファイヤーレインの威力も上がる、ユウキはそれを狙っていたのだ。

「しまっ……グオォォォ！！」

グラードンは二匹の攻撃をまともに受けてしまった。グラードンはそのまま倒れた。

「やったわね！」

「うん……ユウキ？ユウキは！？」

リサは辺りを見てもユウキの姿を確認することが出来なかった。

「まさか……ユウキ！？」「そんなに騒ぐなよ……」

ユウキは地面からひょっこり顔をだした。

「無事だったのね！」

「だから大丈夫っていったろ？」

今回ユウキはリサとミズキの最強技ならグラードンを倒せると考えた。しかし普通にやっても当たらないか相殺されるだけだ。そこで、ユウキはまずグラードンにアイアンテールで攻撃する。グラードンは反撃してくるだろう。ユウキはあえて避けず、ミズキの蔓の鞭でかわす。次にグラードンの後ろに回り込んで背中から上に上がる。この時にユウキは身代わりを作り、本体は穴を掘るで地面に隠れていた。分身はグラードンの顔の前に行く。あそらくグラードンは攻

撃してくる。分身は攻撃を受けて消える。その瞬間に最強技で攻撃する。それが今回の作戦だった。

「正直運任せだったが……上手くいったな」
「もう……一瞬不安になっちゃったよ……」
「済まなかったな……」
「とにかく上手くいってよかったわね」
「……そうだな」

その時、目の前にいたグラードンは消えてしまった。

「えっ!?グラードンが消えた!?」
「今のは……グラードンの幻影です」

どこからかユウキ達に誰かが話しかけてきた。

「誰よ!姿を見せなさいよ!」
「……あなた達はここに何しに来たんですか?」
「俺達は霧の湖を探しに来たんだ」
「……あなた達を霧の湖に来させるわけにはいきません」
「ちょっとまってよ!私達はここを荒らしに来たんじゃないよ!そりゃ私達は探検隊だからお宝とかあったら嬉しいけど……それが君達の迷惑になるなら要らないよ!私はここに来れたことが嬉しいの!お願い、信じて!」
「……わかりました。あなた達を信じましょう」

そう言った刹那、ユウキ達の目の前に一匹のポケモンが現れた。

「あなたは?」

「私はユクシー。霧の湖の番人です」
「ユクシーだと……？」
「はい。今からあなた達を霧の湖にご案内します」
ユウキ達はユクシーについていった。

「ここが霧の湖です」
「うわー凄い！」
リサは霧の湖を見て凄い嬉しそうだった。
「私はこの湖を守ると同時にあれも守っているのです」
ユクシーの指差す方をみると、そこには淡い緑色の光があった。
（……なんだあれは？あれを見ると……何故かドキドキする……）

「ねえユクシー、あれは一体なんなのかしら？」
「あれは時の歯車です」
「ええっ！？時の歯車！？」
「はい。私は湖と時の歯車を守っているのです。そのために侵入者はグラードンの幻影で追い払い……倒された時は私がここの記憶を消してここを守っているのです」

そう言うと、ユクシーはグラードンの幻影を出した。
「きゃぁ！」
「大丈夫です。先程も言いましたがこのグラードンは幻影です」
リサは幻影とわかっていても、やっぱり少し怖かった。
「……そうだ。ユクシー、ここに人間が来たことないか？」
「……いえ、ありませんね」
「そうか……」
「ユウキ？どうしたの？」「いや……記憶を失う前の自分がここに来たことあるかと思ってな」
ミズキは言っていることがわからなかった
「何言ってるの？」
「ユウキは元人間なのよ」「人間？まさか？」
「本当よ……ユクシー、人間がポケモンになる理由わかるかな？」
「……すいませんわからないです」
「そっか……」
リサががっかりしていると、一匹のポケモンがやって来た。
「時の歯車かぁ。残念だな♪さすがに時の歯車を持って帰るのはダメだね♪」
「この方は？」
「あぁ……俺達のギルドの親方のプクリンだ」
「はじめましてトモダチトモダチー♪」
プクリンは辺りをいつもと同じような振る舞いをしながら見ていた。

「わぁー君凄いねートモダチトモダチー♪」

プクリンはグラードンの幻影に話していた。

「……不思議な方ですね……」

「プクリン親方はいつもそうなのよ」

リサは苦笑いしながら言った。ユウキ達が話しをしていると、ギルドのメンバーがやって来た。

「やっと着いたよ……ってギョエエエ！！」

「グ、グ、グラ……」

ドゴームの声は震えていた。なぜなら目の前にグラードンがいたからだ。

「あっしは美味しくないでゲス～！！」

「あっみんな♪」

「おっ親方様！早く逃げてください！」

「早く来なよ♪丁度吹き出てきたんだ♪」

『へっ？』

ギルドのメンバーはプクリンについていくと、霧の湖で噴水が出ていた。

「丁度この時間になると地下から水が吹き出てくるのです。まるで噴水みたいに。それがバルビートやイルミーゼがライトアップしてこのような景色になるのです」

ユウキ達はその景色に見とれていた。

「綺麗だね……」

「……そうだな」

「きっとお宝ってこの景色のことだったんだね……」

ユウキはリサの言葉を聞きながらあることを考えていた。

（結局……俺が何者かわからなかったな……だが何故時の歯車を見ると……あんなにドキドキしたんだ？……考えてもわからないか）

「そろそろ僕達帰るね♪」「あなた達の記憶は消しません。あなた達を信頼しているので」

「ありがとう♪ペラップ！」

「はい！みんな！ギルドに帰るよー！！」

『おぉー！！』

こうして、ユウキ達は最高のお宝を心にしまいながら帰路についた。

## 第二十二話　霧の湖の番人（後書き）

リサ
「遠征楽しかった～！」

よかったね

リサ
「作者さん勉強しないと」

……はい

## 第二十三話　動き出す闇（前書き）

第二十三話完成！

ミズキ
「なにこのタイトル？」

気にしない気にしない♪

ちなみに今回は繋ぎ話なのでかなり短いです（汗）

ミズキ
「展開も酷いわね」

……（泣）
では第二十三話を……

ミズキ
「どうぞ！」

# 第二十三話　動き出す闇

「起きろおぉぉぉ！！朝だぞぉぉぉ！！」

ユウキ達は、遠征が終わった翌日、いつものモーニングコールで目をさました。

「耳がぁ……この起こされ方……久しぶり……」

「……いきなり大声ださないでよ！ビックリするじゃない！」

ミズキはドゴームに怒鳴りつけた。このモーニングコールを知らなければ無理もない。しかもそれがミズキならなおさらだ。

「なんだと！？これがワシの仕事なんだよ！！」

「あぁーうるさい！！起こし方にもやり方があるでしょ！？」

「よそ者に指図される覚えはないわ！！」

「なんですってー！！」

ユウキ達はミズキとドゴームをおいて朝の朝礼に向かった。この後、ドゴームが朝礼に遅刻してプクリンの「たあぁぁーー！！」をくらったのは言うまでもない。

ユウキ達はペラップに掲示板の仕事をしてくれと頼まれ、依頼を決めていた。

「さて……今日はどの仕事をやるか……」

「う～ん……これにしようよ」

それによると、盗賊団の親玉グラエナを捕まえてほしいという内容だった。場所はトケトゲ山だ。

「んじゃ行くか……そうだ、ミズキにお別れ言いに行くか」

ミズキは今日隣町のウッドタウンに帰るのだ。ユウキ達はミズキのいる弟子の部屋に向かった。ミズキは帰る準備をしていた。

「ミズキ！」

「あら、どうしたの？」

「お別れを言いに来たんだよ」

「大袈裟ね。隣町なんだからいつでも会えるでしょ？」

ミズキの言う通り、隣町なら仕事がないときに遊びに行くことができる。

「まあな……とりあえず礼でも言っておこうと思ってな」

「そう……べっ別にあんた達にお礼を言われても嬉しくないんだからね！……でもアタシも助けて貰ったからね……ユウキ、リサ、ありがとね」

「うん……元気でね！」

「ええ。またね」

ミズキはそう言うとギルドを去っていった。

「……寂しくなるね」

「そうか？静かでいい」

「素直じゃないなぁ」

「……仕事に行くぞ」

「まってよ！」

二匹は依頼を済ませにトケトゲ山に向かった。

「この辺だと思うんだが……」

「う～ん……あっ！あれじゃない！？」

リサの見ている方を見ると、そこには体格はユウキ達とさほど変わらない、犬のようなポケモンが三匹と、それを大きくしたようなポケモンが一匹いた。おそらくグラエナ盗賊団の一味だろう。

「リサ！いくぞ！」

「うん！火の粉！」

リサは火の粉でグラエナ達に攻撃した。グラエナ達はいきなりの奇襲で避けることができなかった。

「ぐはっ！なにものだ！？」

「私達はライトニング！探検隊よ！あなた達を捕まえる！」

「ふん！貴様ごとき――！？」

グラエナが辺りを見回すと、子分のポチエナ達が倒されていた。

「なっ！？馬鹿な！！」

「さよならだ……雷パンチ！」

「ぐあぁぁ！！」

グラエナは雷パンチをまともに受けてしまった。グラエナは耐えられず倒れた。

「この程度か……」

「貴様……いつの間に……」

「リサが火の粉をした時にお前達の後ろに回り込んでいたのさ」

「ふん……敵ながら見事だ……よし、良いことを……教えてやろう……今この世界を支配しようとしている……ポケモンが……いる……そいつは最近になって……行動し始めた……俺達は……そいつに……雇われてここの……ポケモンをさらいに来た……お前達も気をつな……」

グラエナは敵に教えてはいけないような情報をユウキ達に話した。

「なんで私達に？」

「……何故だろうな……？話したくなったのさ……」

「とりあえずジバコイルに連絡するか」

ユウキは探検隊バッチを使ってジバコイルを呼び、グラエナ達は連れていかれた。

「どういうこと何だろうね……？」

「わからない……奴の言葉を信じるなら結構やばいことになっているようだな……」

ユウキ達はとりあえずギルドに戻ることにした。

ギルドからかなり離れた洞窟で、二匹のポケモンが話しをしていた。一匹は体は青と黒を元にした色をし、少し長い耳をしていた。ルカリオだ。もう一匹は闇に包まれていて姿がわからない。

「そうですか……グラエナ達がやられましたか……」

「いかがなさいますか？ソーマ様」

ソーマと呼ばれた謎のポケモンは怪しい笑みを浮かべながら言った。

「予定に狂いはありません……第二部隊は予定通りウッドタウンを奇襲しなさい」

「わかりました。そう伝えます」

ルカリオはそう言うと謎のポケモンの前から去っていった。

「フフフ……もう少し……もう少しで……この世界は……私のものになる！！フフフ……アーハハハハッ！！」

洞窟の中ではそのポケモンの高らかな笑いが響いていた。

## 第二十三話　動き出す闇（後書き）

ジン
「なんですかあの終わり方？」

完全オリジナル。そしてかなり長くなる（苦笑）

ジン
「しばらくはオリジナルでいくんですか？」

まあね♪
さて……テスト勉強するか

## 第二十四話　奇襲（前書き）

第二十四話完成！

ミズキ
「二日連続投稿ね」

始めてかも……
今回はミズキ視点で話が進みます。更に新キャラもでますよ！

ミズキ
「誰かしら？」

それはお楽しみ♪
では第二十四話を……

作者・ミズキ
『どうぞ！』

# 第二十四話　奇襲

ふう……ユウキ達といないと少し寂しいわね……って私何考えてるの！？いなくなってスッキリしたわ！……とにかく早くウッドタウンに帰りましょう。

この森を越えればウッドタウンに着くわね。早くいきましょ。

ふ～、やっぱり森とかは落ち着くわね～遠征の時の森は論外だけどね！

「よう姉ちゃん。一人かい？」

ん？マスキッパが二匹……ナンパかしら？迷惑なやつらね。

「そうだけど……何かようかしら？」

「ちょっと俺達と遊ばないかい？」

「悪いけどあんた達に興味ないの。急いでいるからどいてくれる？」

「この女……下手に出てればいい気になりやがって！」

あら、怒り始めちゃった。本当に迷惑なやつらね！

「喰らえ！葉っぱカッター！」

「そんなの当たらないわよ。エナジーボール！」

「ぐあぁぁ！」

何よ、一撃で二匹ともダウンしちゃうなんて。邪魔が入ったけどとりあえず早くいきましょ。

「やっと帰ってこれたわ～」

やっぱりウッドタウンは気持ち良いわね！ウッドタウンはトレジャータウンみたいに活気あふれるような所ではないけど、緑が多くてとても良い所なのよね。

「あらミズキ。お帰りなさい」

「チェリンボ。ただいま」

「ドダイトスさんが心配していたわよ。早くギルドに戻ってあげて」

「言われなくてもそのつもりよ。それじゃ」

私はチェリンボと別れた後、私が修業をしている所……ドダイトスのギルドに向かった。

「皆ただいま！」

「ミズキ～お帰り～」

最初に出迎えてくれたのは体格は私とあまり変わらず、亀みたいなポケモン……ナエトルのリーフだったわ。

「ただいまリーフ。あなたは相変わらずね」

「そうかな～？ボクって～そんなに変わらないかな～？」

相変わらずリーフはのんびり屋さんね……和むわ。

「あらミズキ！やっと帰ってきたわね」

「あっレイド。ただいま」

リーフと話していると、一匹のポケモンが話しかけてきた。体は緑色で両手に赤と青のバラを持っている……ロズレイドのレイド。ちなみにリーフとレイドは私達のチームシャインのメンバーなの。草タイプばかりでシャイン関係ないじゃんとか言うんじゃないわよ！

「早く親方の所にいきなさいな」

「ええ、そうね。いきましょ」

「ボク達も行くの～？」

「いいじゃないチームなんだから。行くわよ」

私達はドダイトス親方の所に向かった。

「親方、ただいま戻りました」

私の前には、リーフを凄い大きくしたような体格で、背中の甲羅には木がはえているポケモン、ドダイトスがいた。私が修業しているギルドの親方なのよ。

「ガハハハハ！戻ったかミズキ！一匹での探検はどうだった？」

「いつも三匹で行動しているので少し苦労しましたが……プクリンのギルドと会いました」

「そうか！プクリンと会ったか！それは良かったな！ガハハハハ！」

相変わらず親方は豪快な方ね……。

「では探検の報告をしてもらうとしよう！どうだった？」

どうしよう……霧の湖のことは内緒にしないといけないからね……言わない方が良いわね。

「……すいません、何も見つけることができませんでした……」

「あらミズキが？珍しいですわね」

私の言葉にレイドは少し驚いていた。そんな驚くことかしら？

「確かに珍しいな。何かあったのか？」

「……えっと」

私が言い訳を考えていると、異常事態が起こった。外から悲鳴が聞こえてきたの。

「……？悲鳴かな～？」

「のんびりしている場合じゃないわ！行くわよ！」

「当然ですわ！リーフ、行きますわよ！」

「え～ボクも～？」

少しリーフは嫌がっていたが、レイドは無理矢理リーフを連れていったみたい。

「親方、私達行ってきます」

「ワシも行こう！ワシはギルドの親方と同時にウッドタウンの長だからな！ガハハハハ！」

ドダイトス親方が来てくれれば心強いわね！私達は悲鳴のあった外に向かった。何事もなければいいんだけど……

私達が外に出ると、この町にはいないポケモンが暴れていた。そのポケモン達は目の所になにか機械のようなものを付けていた。いったい何者！？私達の町にこんな酷いことを！

「酷い……絶対に許さないんだから！」

「ミズキ！リーフ！行きますわよ！……リーフ？」

リーフは私の隣から動こうとしなかった。またあれね……

「あいつら……ボクが倒す！ミズキ！リーフ！行くぞ！！」

相変わらずバトルになると性格変わるわね……バトルの時は頼りになるのにな……って私何考えてるの！

「行くわよ！エナジーボール！」

私はさっき会ったチェリンボに攻撃しようとしていたポケモンにエナジーボールをぶつけた。

「チェリンボ！逃げて！」

「ありがとうミズキ！」

ふう……チェリンボはこれで大丈夫ね。目の前のポケモン……サナギラスは私のことをじっと見ている。私の顔に何かついてるかしら？

「……戦闘能力良好……ターゲットロックオン」

何言っているの？わけの解らない事を……そんな事を考えていると、サナギラスはストーンエッジで攻撃してきた。

「しまっ……」

「守る！」

サナギラスのストーンエッジはリーフの守るで弾かれた。リーフに

助けられたわね。

「どうした？ミズキらしくない」

「べっ別に助けてくれなんて言ってないんだからね！」

「その調子なら大丈夫だな。来るぞ！」

サナギラスは破壊光線を放とうとしていた。あれはまずいわよ！

「遅いですわよ！エナジーソード！」

レイドはエナジーボールを剣の形に変えてサナギラスに攻撃した。殺傷能力は低いとはいえ、エナジーボールを高密度にした剣だから威力は抜群ね！サナギラスはそのまま倒れたわ。

「レイド。ありがとうね」

「怪我がなくてなによりです」

「ガハハハハ！そっちも終わったか！」

私達がバトルが終わると同時にドダイトス親方がやって来た。

「なんとか終わりましたよ。町のポケモンの避難は終わりましたか？」

「こちらも終わったわ！後暴れていたポケモンも倒してジバコイル保安官に送ってやったわ！……だが……町のポケモンの何匹かがい

ないんだ！」
私達は驚いた。ポケモンがいない……どうゆうことなの！？

「……そのポケモン達は私達が預かりましたよ」

私達は声のする方を見た。そこには、鋭い爪を持つイタチのようなポケモン……ザングースがいた。

「預かったとはどうゆう事だ！！答えんかい！！」

「……何、彼らには私達の野望のために動いてもらうだけです」

「野望……野望っていったいなんなの！？」

私はザングースに問い掛けた。やってることだけにろくでもない事でしょうけど。

「私達の野望……それはソーマ様の思う世界を作る事！そのために私達は世界を征服する！」

こいつ何言ってるの？そんな話子供でも信じないわよ。でもドダイトス親方だけは何だか少し強張った顔をしていた。

「ソーマ……まさか……ミズキ！お前達シャインはプクリンの所に行け！この事を話せばプクリンならなんとか出来るはずだ！」

「親方！？どうゆう事だ！？」

リーフはドダイトス親方に問い掛けた。私だって親方を置いていけないわよ！

「こいつはワシが何とかする！早く行け！」

「でも親方！」

「……親方がああ言ってるのよ。行きましょう」

レイドは冷静な口調で私に告げた。でも私は納得できない！親方を置いて行くなんて！

「大丈夫だ……ドダイトス親方だ。負けるわけがない」

リーフは優しく私に言った。……そうよね……ドダイトス親方だもんね……大丈夫よね！

「早く行け！」

「……わかりました。親方も気をつけてください！」

「ガハハハハ！ワシなら大丈夫だ！お前達も気をつけるんだぞ！」

私達はギルドに向かって走りだした。

「弟子を逃がしたか……殊勝（しゅしょう）な心掛けだな……私に勝てるか？」

「ガハハハハ！ドダイトスのギルドの名にかけてお前を倒して見せるわ！」

私達はトレジャータウンに向かうための森の中でウッドタウンから大きな音が聞こえた。私は親方の無事を祈りながら森の中を走った。

## 第二十四話　奇襲（後書き）

う～ん……

チサ
「どうしたの～？」

今回の話がRに引っかかんないか心配だよ（汗）

チサ
「う～ん大丈夫だよ♪」

楽観的だな……

あっ新キャラのリーフとレイドです！

リーフ
「よろしくね～」

レイド
「はじめまして」

チサ
「わーいはじめまして～♪」

次回から二匹も活躍しますよ

リーフ
「頑張るよ～」

う～ん和むな～♪

## 第二十五話　四天王の実力（前書き）

第二十五話完成！

ミズキ
「テスト放置で投稿……」

気にしない気にしない♪

ちなみに今回かなり気合いが入ったせいかかなり長いです

では第二十五話をどうぞ！

# 第二十五話　四天王の実力

ウッドタウン襲撃から翌日、ミズキ達はプクリンのギルドにいた。

「なるほど……そんなことがあったんだね……」

さすがにプクリンも少し強張った顔をしている。

「それで……ドダイトス親方は私達を逃がして自分は残ったんです……」

「そうだったのか……」

その場に同席していたユウキが言った。ミズキ達が話しがあるとプクリンに言った時に、ユウキ達もいた方がいいとプクリンが呼んだのだ。

「それで……そのボスの名前は？」

「名前は……ソーマと言っていましたわ」

リサの質問にレイドが答えた。その名前を聞いてプクリンは驚いていた。

「ソーマ……？まさか……！」

「親方様？いかがなされました？」

ペラップはプクリンがいつもより深刻な顔だったので心配した。

「……明日詳しい事を話すから今日はシャインの皆はギルドで休んでいって」

「……わかりました」

ミズキ達はプクリンの部屋から出ていった。

「……ゴメン、悪いけど一人にしてくれないかな？」

プクリンの予想外の発言にユウキ達は驚いたが、プクリンの申し出に答え、部屋を出ていった。

「ソーマ……どうして……」

プクリンの悲痛な言葉は部屋の中で消えていった。

「プクリン……どうしたのかな……？」

リサはいつもと違っていたプクリンを心配していた。

「さあな……」

「ユウキ、リサ」

ミズキは部屋を出てきたユウキ達を呼んだ。

「どうした？」

「あなた達に紹介していなかったからね。私達のチームシャインのメンバーよ」

「はじめまして。ロズレイドのレイドですわ」

「ナエトルの～リーフだよ～よろしくね～」

ユウキとリサはリーフが凄いのんびり屋だと認識した。

「お前達も大変だったな」

「まったくよ！いきなり襲ってきたのよ」

ユウキはやっぱり何があってもミズキは変わらないと思った。

「とりあえず今日はここでお世話になりますわ」

「ボク～お腹すいたよ～」

リーフがそう言った刹那、チリーンが食事を伝えるベルをならした。

「何の音かしら？」

「ご飯を知らせるベルだよ」

レイドの質問にリサが答えた。

「良かったわねリーフ……リーフ？」

ミズキはリーフを探したが、隣にいたはずのリーフはいなかった。

「いないじゃないか」

「う～んとりあえずご飯食べに行こう」

ユウキ達は食堂に行ってみると、そこには、既に座っているリーフがいた。

『はやっ！』

ユウキとリサは思わずハモってしまった。

「……相変わらずリーフは食い意地は凄いわね」

ミズキが少々呆れたような口調で言った。

食事が始まると、リーフはいつもののんびりした感じから一転、ものすごい勢いで林檎やグミを食べはじめた。その光景に、ギルドの弟子達は、ただ呆然と眺めることしか出来なかった。

その日の夜、あるポケモンがギルドからかなり離れた洞窟にいた。
そこの一番奥にそのポケモン……ソーマはいた。

「失礼します、ソーマ様」

ソーマの部屋に一匹のポケモン、ルカリオが入ってきた。

「……ティルですか。収穫は？」

「はい、なかなかの実力のポケモンの捕獲に成功しました。今例の機械に接続しました」

「そうですか……次はトレジャータウンです。シャドーの部隊に知らせなさい」

「アヒャヒャ！その必要はないですぜ！」

地面から一匹のポケモンが出てきた。体は紫色で、背中にはトゲのようなものがある……ゲンガーだった。

「そんな任務、俺様達にかかれば楽勝だっての！」

「シャドー、またそんな口の聞き方を……」

「かまいませんよティル……シャドー、行ってくれますね」

「アヒャヒャ！任せな！」

そう言うと、ゲンガーのシャドーは去っていった。

「ああ……ティル、あなたは今仕事は特にありません。ゆっくりしていてかまいませんよ」

「……わかりました」

そう言うと、ルカリオのティルは去っていった。

「フフフ……待っていなさい……プクリン……」

次の日、ユウキ達ライトニング、シャイン、更に昨日の内に呼び出したマシンガンの二匹はプクリンの部屋にいた。ちなみにクロは今は事情があり、後で合流するらしい。

「僕達を呼び出すとはかなり深刻なんですか？」

「そうなんだ……急に呼び出してごめんね」

「いえ、気にしないでください、プクリンさん」

「ありがとう♪……まずソーマについてだね」

「……プクリンはそのソーマについて知っているのか？」

ユウキの質問にプクリンは一呼吸おいて話しはじめた。

「うん、ソーマは……」

プクリンが説明を始めようとした刹那、外で爆発音が聞こえた。

「これは……まさか！」

ミズキはいち早く外に出ていった。

「何があったのかな～？」

「……先手を取られたみたいだな」

「ユウキってば落ち着いてる場合じゃないよ！早く行こう！」

ユウキ達は爆発のあった方に向かった。

「親方様……」

「僕も行くよ。ペラップは他の皆と手分けしてトレジャータウンのポケモンを避難させて」

「わかりました！」

プクリンはユウキ達の後をおった。

ユウキ達が外に出ると、トレジャータウンが襲われていた。ウッドタウンを襲ったポケモンと同じ、目元に何かの機械を付けていた。

「酷い……」

「あいつらを止める！」

ユウキは目の前にいたムウマにアイアンテールで攻撃した。ムウマは一撃で倒れた。

「いきなりは酷くないかしら？」

「敵に同情は必要ない。ここから別れて行動するぞ」

ユウキ達はそれぞれのチームに別れて敵を倒しに向かった。

ジン達チームマシンガンの前には、サマヨール一体とヨマワル二匹がいた。

「ゴーストタイプ……相性最悪ですね……」

「なんとかなるよ♪」

「そうですね！行きますよ！」

ジンとチサはサマヨール達に突っ込んでいった。

「冷凍ビーム！」

「ブレイズキック！」

ジン達はそれぞれ効果がある技でサマヨール達に攻撃したが、避けられてしまった。サマヨール達はそのままシャドーボールで攻撃してきた。

「しまっ……」

ジンは構えたが、シャドーボールはチサによって阻まれた。

「大丈夫ですか！？」

「うん♪私にゴーストは効かないから♪」

チサはノーマルタイプ。ゴーストタイプの技は効かないのだ。

「チサはヨマワル達をお願いします。僕はサマヨールを倒します」

「気をつけてね」

ジンはサマヨールにブレイズキックで攻撃したが、受け止められてしまった。

「ちっ！止められましたか！」

「……戦闘能力……良好……捕獲……開始！」

そう言うと、サマヨールは雷パンチでジンを叩きつけた。

「ぐはっ！」

「……止めだ……破壊光線！」

「グアァァ！！」

ジンは至近距離で破壊光線を受けてしまった。ジンは既に意識が朦朧としてきていた。

一方、チサもヨマワルの連携に苦しんでいた。

「いくよー！シャドーボール！」

チサはこの前覚えたシャドーボールでヨマワルに攻撃したが、守るで防がれてしまった。その間に、もう一匹が後ろから悪の波動で攻撃してきた。

「うわっ！もー！どうしよー！」

チサが嘆いていると、前にいたヨマワルがシャドーボールで攻撃してきた。

（危ない！避けなきゃ！でも後ろにもう一匹いるよね……良いこと思いついた♪）

「わぁー！避けられないよー！」

チサはシャドーボールを避けられないという演技をしながら少しずつ後ろに下がった。後ろにはもう一匹のヨマワルがいる。

「もうダメー！……なんてね♪」

チサは思いっきり上にジャンプした。シャドーボールはチサの後ろにいたヨマワルに当たった。

「やったぁ♪後は一匹だけ♪シャドーボール！」

チサは動揺しているヨマワルにシャドーボールをぶつけた。ヨマワルは倒れた。

「終わり♪ジンは？」

チサはジンの方を見ると、既にボロボロのジンの姿があった。

「ジン！？今行くよ！」

チサはジンの元に走り出した。

「くっ……僕はここまでですか……」

ジンは目の前のサマヨールの攻撃でボロボロだった。立っているのがやっとだった。

「……シャドーボール」

ここまでか……そう思ったが、シャドーボールはチサの冷凍ビームで相殺された。

「大丈夫！？」

「見ての通り……ボロボロですよ……」

「ジンは休んでて！後これ食べて！」

チサはジンにオボンの実を渡して走り出した。

「……金縛り」

サマヨールはチサに金縛りをかけて体を麻痺させた。

「動けないよ……」

「……邪魔はさせない……シャドーボール」

サマヨールはまたしてもジンにシャドーボールで攻撃してきた。

「電光石火！」

ジンは電光石火でシャドーボールを避け、サマヨールに接近した。

「……シャドーパンチ」

サマヨールはシャドーパンチで、接近してきたジンに攻撃してきた。

ジンはそれを受けてしまった。

「くっ……喰らえ！カウンター！！」

ジンはサマヨールにカウンターでシャドーパンチの威力を倍返しした。

「……何故……？」

「接近した時に見破るを使って当たるようにしたんですよ……」

見破る……それは、ゴーストタイプのポケモンにノーマル技や格闘技が当たるようになる技。ジンはそれを使ってカウンターが当たるように仕向けたのだ。

「止めです……起死回生！」

「グオォォ！」

ジンは起死回生でサマヨールに攻撃した。サマヨールはその場に倒れた。起死回生は自分の体力が少ないほど威力が上がる。ジンはオボンの実で回復したとはいえ、かなりのダメージだった。威力はかなりのものだ。

「ジン！大丈夫！？」

「……なんとか……他の皆は……？」

「わからない。今近くにいるのは……シャインだ！かなり優勢みたいだよ！」

「さすがですね……とりあえず……シャインと合流しましょう……」

ジン達はゆっくりとした歩みだがシャイン達のもとに向かった。

「葉っぱカッター！」

「エナジーボール！」

「マジカルリーフ！」

シャインの三匹は襲い掛かってくるカケボウズ四匹とジュペッタ二匹と戦っていた。

「数が多いですわね！」

「二人ても離れろ！リーフストーム！」

リーフは自分の使える最強の技で攻撃した。カケボウズ達は全て倒れたが、ジュペッタ達は守るで防いでいた。

「ちっ……少し疲れたな……」

「リーフは休んでて！レイド！行くわよ！」

「ええ！」

ミズキとレイドはジュペッタ達に突撃していった。

「行くわよ！エナジーボール！」

「マジカルリーフ！」

ミズキは葉っぱカッター、レイドはマジカルリーフでジュペッタに攻撃した。ジュペッタは鬼火で相殺した。

「一気にいきますわよ！エナジーソード！！」

レイドはエナジーボールを剣に変えた。

「ハァァァ！木の葉乱舞！」

レイドはエナジーソードでジュペッタを攻撃した。それは踊っているような動きだった。

「準備できたわ！離れて！」

レイドはミズキの言う通りにした。

「終わりよ！ソーラービーム！！」

ミズキは最強技のソーラービームで攻撃した。ジュペッタ達は耐えられず、倒れた。

「やりましたわね」

「ええ！」

「終わった～？」

バトルが終わって、リーフはいつもののんびりした感じに戻った。

「おーいみんなー！」

「あ～チサさんだ～」

ちょうどジン達チームマシンガンが合流した。

「なんだ……終わっていたんですね……」

「ちょっ！ジンさんボロボロじゃないですか！」

レイドはそう言いながら鞄から薬を取り出した。

「薬？なんでそんなものが？」

「あるポケモンから貰ったんですよ」

そう言いながらレイドはジンに薬を使った。

「どうですか？」

「……大分楽になりました」

ジンは自分で立てるくらいに回復した。レイドはミズキがキョロキョロしていることに気づいた。

「どうしました？」

「ライトニングの二匹がいないなぁって……べっ別に心配してる訳じゃないんだからね！」

「そっか～……へ？」

リーフは何処からか爆発音が聞こえた。

「あっちですわ！」

「行ってみましょう！」

ジン達は爆発のあった方に向かって走り出した。

ジン達がバトルを始めたころ、ユウキとリサはあるポケモンと対峙していた。ゲンガーのシャドーだ。

「お前がボスか？」

「ん？そうだ。良くわかったな」

「お前には目元に機械がついていないからな」

「アヒャヒャ！ばれては仕方ない！俺様は四天王のシャドーさまだ！良く覚えておきな！」

ユウキはシャドーの自己紹介に興味はなさそうだった。

「あなた達はなんでこんなことするの！？」

「あ？ソーマの思う世界を作るため……そして俺様の世界のためさ！」

シャドーの言った「俺様の世界」にユウキとリサは首を傾げた。

「どういうことだ。お前達はソーマのために動いているんじゃないのか？」

「確かにな。だが俺様はソーマから世界征服をしたら世界を分け与えるって言われているのさ！アーヒャヒャ！！俺様の世界！俺様は王になる！アーヒャヒャヒャヒャヒャ！！！」

「こいつ……狂ってやがる……」

「だがそのためには手下が必要だ。だから俺様達はここやウッドタウンを襲ったのさ」

「なるほど……そういうことか……だが……」

ユウキはシャドーの言っていることには不可解な点があったが気にしないことにした。

「邪魔者は消す！シャドーボール！」

シャドーはユウキ達にシャドーボールで攻撃してきた。ユウキ達は

それを難無くかわした。

「リサ！行くぞ！十万ボルト！」

「うん！火の粉！」

ユウキ達はシャドーに得意技で攻撃したが、シャドーに片腕で止められてしまった。

「なに！？」

「アヒャヒャ！この程度か！十万ボルト！」

ユウキはシャドーの十万ボルトをまともに受けてしまった。

「ちっ……リサ！」

「……うん！まかせて！」

ユウキは穴を掘るで地中に潜った。リサはユウキに教わった影分身で分身を作った。

「面倒くせえ！シャドーガトリング！」

シャドーはシャドーボールより小さい球体をガトリングのように沢山放った。リサの分身は全て消された。

「そんな……こんなにあっさり……」

「アヒャヒャ！無駄なんだよ！」

「それはどうかな？」

ユウキは地中から出てきた。ボルテックススタイルだ。

「面白い能力だなぁ！来な！」

「ハァァァ！ライジング・ブレイカー！！」

ユウキはシャドーにライジング・ブレイカーで攻撃した。

「……単調だな！サイコキネシス！」

シャドーはユウキの攻撃が当たる前にサイコキネシスで動きを止めた。

「アヒャヒャ！この程度か！」

「……今だ！」

「うん！ファイヤーレイン！」

リサは今までためていた炎をファイヤーレインに変えて攻撃した。

シャドーは避けられなかった。ユウキは守るで攻撃から身を守った。

「やったかな……？」

「……貴様達許さねぇ！まとめて捕獲してやらぁ！！」

シャドーはさっきと打って変わって狂暴になった。

「貴様からだ小娘！シャドーガトリング！！！」

「キャアァァ！！」

シャドーは至近距離でリサにシャドーガトリングをぶつけた。リサはその場に崩れ落ちた。

「リサ！！貴様ぁ！」

「次はお前だ！！破壊光線！！！」

シャドーはユウキに破壊光線で攻撃した。その威力は絶大で、小規模な爆発がおこった。ユウキはその場で倒れていた。

「アヒャヒャ！ゴミどもが！ムウマ！この小娘を運べ！」

ムウマがリサを運ぼうとしたが、ユウキの十万ボルトで阻まれた。

「さ……せるか……よ……」

「しぶといやつだ……シャドー……」

「エナジーボール！」

「冷凍ビーム！」

シャドーは仕留めようとしたが、ジン達がそれを阻んだ。

「援軍かよ面倒くせえ！貴様！この小娘は貰っていくからな！アーヒャヒャヒャヒャ！！」

そう言うとシャドーはリサを連れて去っていった。

「リサ……ちく……しょう……」

ユウキ達はその場で意識を失った。

## 第二十五話　四天王の実力（後書き）

レイド
「ちょっ！リサさんはどうなるんですか！？」

いずれわかるさ

レイド
「しかしあのポケモン……強いですわね」

四天王だからね

レイド
「で……作者さん、明日のテスト勉強は？」

……逃げろ（ノ＞＜）ノ

レイド
「……ハァ」

## 第二十六話　ソーマの過去（前書き）

第二十六話完成！

ジン
「テストが終わって早速更新ですね」

本当は昨日したかったけど……

とりあえず第二十六話を……

ジン
「どうぞ！」

# 第二十六話　ソーマの過去

トレジャータウン襲撃の翌日、トレジャータウンのポケモンは、怪我人は少なかったが、ウッドタウン同様行方不明のポケモンがいた。ユウキ達はプクリンのギルドで一夜を過ごした。

ユウキは昨日から意識が無く、弟子達の部屋で休んでいて、ジンとレイドが看病していた。

「レイド、ユウキの具合はどう？」

「あらミズキ……まだ意識は戻っていませんわ」

「そう……プクリン親方がユウキが目を覚ましたら知らせてくれって。それだけだから」

ミズキはそう言って部屋を出ていった。

「ミズキさんも心配なんですね……」

「まあ、相変わらず素直じゃないですけど……あっ！」

レイドの素っ頓狂な声にジンは少し驚いたが、ジンも似たような声を出しそうになった。何故なら、昨日から意識が無かったユウキが目を覚ましたからだ。

「うっ……ここは……？」

「ここはギルドの弟子部屋ですよ」

ユウキの質問にジンが答えた。

「……リサは……？」

「……」

ジンとレイドは黙り込んでしまった。それを答えるのはユウキには残酷な事実だからだ。

「……リサさんは……」

「……いや、言わなくていい……わかっているから……」

「ユウキさん……」

「……俺は……一度ならず二度までも……リサを守ることが出来なかった……」

ユウキの言葉に、ジンとレイドは悲しい顔つきになったが、ジンは何か決意したような顔になった。

「ユウキさん、今もこうしている間にもリサさんは苦しんでいるかもしれません。だったら今するべきことは、後悔じゃなく、一日も早くリサさんを助け出すべきじゃありませんか？」

（ジンの言う通りだ。リサは今も苦しんでるかもしれない。なら俺のすべきことは後悔じゃなく、リサの救助……フッ……またジンに

助けられたな……）

ユウキは何処か吹っ切れたような気持ちになった。

「なら早くリサを助けにいかなくちゃな……」

「さっきミズキが、ユウキさんが目を覚ましたらプクリン親方の所に来てって言ってましたわよ」

「なら行くか」

ユウキ達はプクリンの部屋に向かった。

ユウキ達がプクリンの部屋に行くと、すでに昨日一緒に戦ったメンバーが揃っていた。

「ユウキー♪もう大丈夫なんだね♪」

部屋に入って早々、チサはユウキの体が治ったことが嬉しそうだった。どうやらかなり心配していたみたいだ。

「嗚呼……心配かけたな」

「全員～揃ったね～」

「ううん。まだ助っ人がいるよ」

「助っ人？誰なんですか？」

その場にいる者全員が首を傾げた。

「待たせたかな？」

プクリンの部屋に、二匹のポケモンが入ってきた。一匹はクロ、もう一匹は、ユウキ達よりも大きく、クリーム色と深緑色の体のポケモン……バクフーンだった。

「やあソウル♪久しぶりだね」

「うむ、そうだなプクリン」

ソウルと呼ばれたバクフーンはプクリンの知り合いのようだ。

「ソウルは前に僕達と探検隊をしていたんだよ」

ユウキはプクリンの僕達という言葉に少し引っ掛かった。

「へ～プクリン親方は～前は探検隊だったんだね～」

リーフの発言に、そりゃそうだろと、プクリンとソウル以外のポケモンが心の中で突っ込んだ。

「うん♪僕とソウル、ドダイトスに……ソーマの四匹でね」

「なに……ソーマだと？」

プクリンからの思わぬ発言にソウル以外のポケモンは驚いた。

「そう……ソーマは道を踏み外したんだ……」

「だけど……なんでなのー？」

「それは自分から話そう」

チサの質問にソウルが答えた。

「十年程前、自分達は探検隊をしていた。それゆえか、ソーマは家を空けがちだった。そしてそれがわざわいした。ある日、自分達が探検をし終わった後、ソーマにある知らせが入ったのだ。それは、ソーマの故郷が盗賊団に襲われた。ソーマの家族は全員盗賊団に……それからだ、ソーマはおかしくなったのは。自分達の声にも耳を傾けず、力に取り付かれた。自分達はソーマの暴走を止めようとしたが……自分達には出来なかった。それからのソーマはどうなったかは自分達は知らなかった。しかし現に今はソーマは世界を征服しようとしている。いったいソーマに何があったのか、自分にはわからない……だが、自分達にはソーマを止める義務がある。だから自分はプクリンに連絡をとったのだ」

ソウルの衝撃の発言に、ユウキ達は唖然としていた。

「そんな事が……」

レイドの声は震えていた。それほどにも、ソーマの過去は悲しいものだったのだ。その時、ユウキが口を開いた。

「一つ聞きたいんだが」

「なにかな？」

「ソーマの事はわかった。だが、何故クロと一緒にいるんだ？それにソウルから連絡をしたってことはソーマの襲撃を知っていたってことだろ？」

「うむ、それはだな……」

「……おれっちから説明するっす……こんなことがあったっす……」

クロは悲しげな瞳で話し始めた。

おれっちは三日前からジン達に無理を言って故郷のトールタウンに帰っていたっす。調度、昨日が妹の誕生日だったんっす……。

「ただいまっす～♪」

「あっお兄ちゃん！お帰り～！」

家に入ると妹のイーブイのリンが迎えてくれたっす。リンはおれっちの唯一の家族っす。リンは体が弱いっす。だからおれっちが探検隊になってお宝を見つければお金が入るっす。それでリンの薬を買おうと思って探検隊になったんすよ。

「お兄ちゃんが帰ってくるってわかっていたら何か用意したのにな～」

「気にしなくっていいっすよ！あっこれ誕生日プレゼント！」

「えっ！？ありがとうお兄ちゃん！開けていい？」

「いいっすよ」

リンは凄い勢いでプレゼントの箱を開けたっす。その光景は少し微笑ましかったっす。

「わ～♪ピチューのぬいぐるみだ～♪ありがとうお兄ちゃん！」

リンは凄い喜んでいたっす。なんかそれを見るとおれっちも嬉しくなったっす。だけど、ここで事件が起こったっす。

「大変だ！謎の集団が襲ってきた！」

凄い勢いで近所に住んでいるカモネギさんが家に入ってきたっす。

「えっ！？リン！家に隠れてるっす！」

「お兄ちゃんは!?」

「そいつらを止めに行くっす!おれっちは大丈夫っす!」

おれっちはカモネギさんにリンを任せて家を飛び出したっす。外は謎の集団に襲われていたっす。おれっちは手当たり次第に敵を倒したっす。だけど、おれっちは敵の不意打ちを受けてしまったっす。そこでバクフーンのソウルさんが助けてくれたっす。ソウルさんは調度ここに来ていたらしいっす。

「あっありがとうっす!えっと……」

「自分はバクフーンのソウルだ」

「おれっちはイーブイのクロっす!」

ソウルさんのおかげでおれっちは助かったっす。だけど、そこでこの町を襲った集団のボスに会ったっす。体はおれっちの何倍もあって、プロテクターみたいな物を付けたサイに似たポケモンだったっす

「そこのバクフーン、なかなかやりおるな!」

「……貴様は何者だ?」

「我輩はドサイドンのロック!後は貴様達で終わりだ!」

おれっち達で終わり?どういう事っす?

「……どういう事だ?」

「我輩達の目的はここのポケモンの捕獲してソーマ殿に届けること！貴様達にも来てもらうぞ！」

「ソーマ……だと……？」

ポケモンの捕獲……まさか！

「まさか……リンも！？おれっちの妹も！？」

「妹？あのイーブイのことか！そいつも我輩が頂いたわ！」

リンが……リンが……許さない！

「許さない！！返してもらうっす！シャドーボール！」

おれっちはシャドーボールでドサイドンのロックに攻撃したっす。けど簡単にかわされてしまったっす。

「あたらんわ！アームハンマー！」

ロックはおれっちにアームハンマーで攻撃してきたっす。おれっちは足がすくんで動けなかったっす。

「まずいっす！」

「フレアドライブ！」

ソウルさんはフレアドライブでアームハンマーを止めたっす。そのおかげでおれっちは助かったっす。

「貴様の相手は自分だ。気合い玉！」

「ぐおっ！」

ソウルさんの気合い玉はロックに命中したっす。相性がいいせいか少し足にきていたみたいっす。

「やりおるな！一気に決めてくれるわ！ギガインパクト！！」

「ならこちらもギガインパクトだ！！」

ソウルさんとロックの攻撃がぶつかり合ったっす。でも少しずつソウルさんが押されていたっす。

「くっ……」

「このまま押し切ってくれるわ！！」

「おれっちを忘れないで欲しいっす！手助け！」

おれっちは仲間の技の威力を上げる手助けを使ったっす。そのおかげか、ソウルさんが押し切ったっす。

「ぐっ……このままでは我輩が不利か……ここは退却だな！」

そう言うとロックは光の玉のフラッシュを使ったっす。おれっち達の目が眩んでいる間にいなくなったっす。

「逃げられたか……」

「リン……」

おれっちはさらわれたリンのことが凄い心配だったっす。まさかこんな事になるなんて……。

「クロ、君はこれからどうするのだ？」

「……とりあえずプクリンのギルドに行って仲間と合流するっす」

「プクリン？君はプクリンの知り合いなのか？」

その様子だとソウルさんも知っているんすね？プクリン親方はやっぱり凄いっすね。

「なら自分も同行しよう。構わないかな？」

「いいっすよ」

「それでおれっちはプクリン親方にソウルさんから連絡を入れてもらって、ソウルさんと一緒にここまで来たってわけっす」

「そうだったのか……」

「……どうやら事態は深刻みたいだね。ソーマはかなり行動を始めてきた。僕達もこのままじゃダメだね」

「ならどうするんですか？」

ミズキはプクリンにこれからどうするのか聞いた。

「君達の力じゃまだソーマの軍勢には敵わない。だけど時間もないからね。僕とソウルが三日で君達を強くするよ♪」

「つまり～特訓って～ことだよね～」

リーフが相変わらずののんびり口調でそう言った。

「うん♪かなり過酷になるけど……大丈夫かな？」

「聞くまでもない。俺達でソーマを止める」

ほかの皆の答えも同じだった。ソーマはなんとしてでも止めなくてはならない。

「わかった♪じゃあ皆！頑張っていくよー！たあぁぁぁーー！！」

こうして、ユウキ達はソーマを止めるべく、プクリンとソウルによる特訓をすることになった。

## 第二十六話　ソーマの過去（後書き）

新キャラのバクフーン、ソウルです！

ソウル
「よろしく頼む」

プクリンと知り合いだったんだね

ソウル
「プクリンは自分の友人だ」

さすがプクリンだな～（笑）

## 第二十七話　力への欲求（前書き）

第二十七話完成！

ソウル
「ネタが浮かんだのだな」

一応ね……今回は出来がかなり悪いです……サブタイトルもあまり関係ないし……スランプってつらい……

ソウル
「上手く乗り切るしかない」

だね……（泣）

では第二十七話をどうぞ！

# 第二十七話　力への欲求

ユウキ達はプクリンの提案で、ソーマを止めるためにバトルの特訓をすることになった。ギルドで特訓をするのは無理なので、今は海岸に来ている。

「海岸で特訓……前に特訓したのを思い出すな……プクリン、一体なにするんだ？」

「二人一組でバトルをして貰おうかな♪ペアの作り方は自分のチームとは組んじゃだめだよ。自分のチームじゃない人と組んでね。そのほかには特に言う事はないかな♪」

プクリンの説明に、皆納得し、ペアを作り始めた。

「俺はどうするかな……」

「よろしければ私とやりませんか？」

ユウキの所にレイドがやって来てそう言った。レイドのバトルの実力はなかなかなので、ユウキにもありがたいことだ。

「嗚呼。よろしくな」

ユウキはレイドとやることになった。ちなみに、ジンはミズキ、チサはリーフ、クロはソウルとバトルをすることになった。

「じゃあ……まずはユウキ達からバトルしてもらおうかな♪」

「嗚呼。レイド、本気でいくからな」

「こちらこそ。よろしくお願いしますわ」

「では自分が審判に入ろう。ではユウキ対レイドのバトル、開始！」

ソウルのコールと共に、ユウキ対レイドのバトルが始まった。

「こちらから行かせてもらいますわ！マジカルリーフ！」

レイドは避けられない葉っぱ、マジカルリーフで攻撃してきた。

「守る！」

マジカルリーフはユウキの守るで作ったバリアで防がれた。

「小手先の技ではユウキさんには勝てませんわね……なら本気で行きますわ！エナジーソード！」

レイドはエナジーボールのエネルギーを凝縮し、剣の形にした。

「あれはマズイな……あまり力は貯まってないが……仕方ない……はあぁぁぁ！」

ユウキの体から電気が漏れはじめた。ボルテックススタイルだ。

「行きますわよ！木の葉乱舞！！」

「ウオォォォ！ライジング・ブレイカー！！」

ユウキのライジング・ブレイカーと、レイドの木の葉乱舞のエネルギーがぶつかり合い、小規模な爆発が起こった。

「あれ～？見えないよ～？」

「一体どうなったんすか！？」

煙が晴れると、そこには、レイドだけが立っていた。

「勝負あり。レイドの勝ち」

ソウルのコールと共にレイドの勝ちが確定した。

「……負けたか……」

「いえ……正直私も立っているのがやっとです……」

レイドの言う通り、レイドの体はボロボロで、足も震えていた。

「レイド……さっきの剣……エナジーソードだったか？……教えてくれないか？」

「あれはエナジーボールが使えないとできませんわ。それにユウキさんの電気技を使えば出来るかもしれませんが、三日で完成するかわかりませんわ……」

「構わない。教えてくれ」

「……わかりましたわ」

どうやらユウキとレイドの方針は決まったみたいだ。

「うん♪ユウキとレイドの方針は決まったみたいだね♪じゃあ次はジンとミズキかな♪」

「わかりました。ミズキさん！よろしくお願いします！」

「負けないわよ！」

ミズキは相手が誰でも相変わらずだった。

「では、ジン対ミズキの試合、始め」

「僕から行きます！電光石火！」

ジンは、得意の連続攻撃で一気に勝負を決めようとした。だが、ミズキはそれをさせるほど甘くはなかった。

「守る！」

ミズキはジンの電光石火を守るで防いだ。

「さすがにやらせて貰えませんか」

「当たり前よ！影分身！」

ミズキは影分身で自分の分身を作り出した。

「無駄ですよ！ハァ！」

ジンは自分の波動を使ってミズキの位置を確認した。ジンの種族、リオルの進化系はルカリオ。波動を使えるポケモンだ。リオルのジンも、波動の力を少ないが使うことができる。だがここで不思議な事が起こった。分身の中にミズキの波動が三つあったからだ。

「!?これは一体!?」

「隙あり!蔓の鞭!」

「くっしまった!」

ミズキは蔓の鞭でジンを拘束した。だがミズキは三人いた。

「…!?どういう事ですか!?」

「影分身を使った時に一緒に身代わりを二体作ったのよ!」

身代わりは体力を使って実体のある分身を作る技だ。ミズキは身代わりの分身にジンを拘束させた。

「これで決めるわ!ソーラービーム!!」

ミズキはソーラービームでジンに攻撃した。煙が晴れると、そこには倒れたジンがいた。

「勝負あり。ミズキの勝ち」

この勝負はミズキの勝利となった。ミズキは倒れているジンのもとに向かった。

「ジン、大丈夫？」

「ええ……さすがですね……完敗ですよ……」

ジンは負けてしまったが、何処か清々しいような感じだった。

「その様子は何か掴めたのね」

「はい……とっさの判断力……それが僕には足りなかったみたいです……ミズキさん……ありがとうございます」

「べっ別に感謝されても嬉しくないんだからね！」

「ミズキは相変わらずだね♪次はチサとリーフだね♪」

「はーい♪リーフ、行くよー♪」

「……この勝負、ボクが必ず勝つ！！」

チサは、リーフはバトルの前と今の変わりように驚いてしまった。

「ずいぶんやる気だねー♪私も頑張るよー♪」

「ではチサ対リーフの試合、開始」

「一撃で決める！リーフストーム！」

リーフは自分の持つ最強の技でチサに攻撃した。

「焦りすぎだよ♪穴を掘る！」

チサは穴を掘るでリーフのリーフストームをかわした。リーフはチサを見失ってしまった。

「くっ！何処に行った！」

「こっちだよ！冷凍ビーム！」

「ちっ！エナジーボール！」

チサの奇襲に何とか対応したリーフだったが、エネルギー不足だったか、冷凍ビームに打ち破るられてしまった。冷凍ビームはリーフに直撃した。リーフはその場に崩れ落ちた。

「そこまで。勝者、チサ」

「わーい♪勝ったぁ♪」

リーフは倒れながら自分の敗因を考えていた。自分の何がいけなかった？最初のリーフストームは当たるはずだった。最後のエナジーボールのエネルギーは不足していない。なら何故？答えは出なかった。

「私、リーフの弱点に気づいたよ♪」

「ボクの弱点……？」

「うん♪リーフは自分の力を信じすぎて周りの状況を冷静に判断出来てないと思うよー♪」

確かにリーフはどんな状況でも、相手を力で捩じ伏せようとしていた。だがそれでは冷静にいろんなことに上手く対応できない。リーフの弱点はそれだった。

「……なるほど。ありがとな、チサ」

「良い感じだね♪最後はクロとソウルだよ♪」

「ソウルさん、よろしくお願いしますっす！」

「うむ、良い試合をしよう」

「なんか目的が変わっている気がするが……とりあえず俺が審判に入ろう。じゃあクロ対ソウルの試合、開始！」

「おれっちから行くっす！シャドーボール！」

クロはシャドーボールでソウルに攻撃した。ソウルはそれを片手で弾いた。

「マジっすか！？」

「ではこちらからも行くぞ。気合い玉！」

「うわっ！守るっす！」

クロはギリギリ気合い玉を守るで防ぐ事が出来た。

「休む暇は与えん！フレアドライブ！」

「危ないっす！電光石火！」

クロはソウルのフレアドライブを何とか避けることが出来たが、防戦一方になっていた。

「影分身っす！」

クロは影分身で分身を作った。しかしソウルの火炎放射で分身を全て消してしまった。

「なら突進っす！」

「気合いパンチ！」

クロの突進に対して、ソウルは気合いパンチで応戦した。相性で言えばクロの方が圧倒的に不利だが、少しクロが押していた。

「特性適応力か……一旦離れる」

適応力は自分と同じタイプの技の威力を上げる特性だ。このままでは危ないと考えたソウルは少し後ろに下がった。

「ならこっちから攻めるっす！目覚めるパワー！」

クロは使うポケモンによって威力と技のタイプが変わる目覚めるパワーで攻撃した。クロの目覚めるパワーのタイプは地面。ソウルには効果抜群だ。

「これはマズイな……守る！」

ソウルは目覚めるパワーが危険と判断し、守るで防御してきた。

「防御に成功……こちらから……な、なんだ……？」
ソウルは突然目眩に襲われた。

「やっと効いてきたっすね！突進した時に毒々を使ったっす！」

毒々は相手に当てると猛毒状態にし、毒のダメージを与える事ができる。更に、その毒のダメージは段々増えていくのだ。

「これでは長期戦は無理だな……これで仕留める！ギガインパクト！」

ソウルはギガインパクトでクロを仕留めようとした。

「……並大抵の攻撃はダメっすね……なら！とっておき！！」

クロはとっておきでソウルのギガインパクトに応戦した。とっておきは威力は絶大だが、とっておき以外の自分の技を使ってないと発動しないのだ。

「ウオォォォ！！」

「ハアァァァ！！」

二人の技がぶつかり合い、今までで一番大きい爆発が起こった。

「凄い……まさかクロがこれ程やるとは思わなかったよ♪」

さすがのプクリンも驚いていた。ユウキ達がクロ達を見ると、そこには倒れているクロの姿があった。

「……試合終了！勝者、ソウル！」

『クロ！！』

ジンとチサはクロのもとに走り出した。クロは意識を失っていた。

「クロー！大丈夫ー！？」

「ううっ……ジン……チサ……」

クロは意識を取り戻した。クロは体中が傷だらけだった。

「おれっち……負けちゃったっす……」

「いや……正直自分も危なかった……」

ソウルはプクリンから貰ったモモンの実を食べながら言った。ソウルも既にボロボロな状態だった。

「状況の判断や技の選択……言うことがないくらいだ。強いて言うなら……技の威力の強化ぐらいか」

「それが……おれっちの課題っすね……」

そう言うとクロは眠りについた。

「皆お疲れ様♪皆疲れたと思うから今日は休んで明日の朝に備えてね！」

プクリンの提案に皆納得し、ギルドに戻っていった。だが、ユウキ

はレイドに頼んで少し残ってもらった。

「レイド、教えてくれ」

「今日は疲れたんではないですか？」

レイドはユウキの体を心配した。無理もない。先程のバトルから殆ど時間がたっていないからだ。

「……頼む」

「……わかりましたわ」

ユウキとレイドはその日の晩御飯まで特訓した。晩御飯の時にリーフが、また凄い勢いで平らげたのは言うまでもない。

次の日から、皆昨日決めた課題に取り組んでいた。その取り組みから、更に強くなるために、課題を発展させていった。ユウキはレイドのエナジーソードをマスターするための特訓をしていた。

「腕に電気を貯め、凝縮する……うわっ！」

腕に貯めた電気は凝縮できずに放出してしまった。

「ちっ……まだダメか……」

「諦めてはだめですわ」

「諦めるかよ。もう一回だ」

ユウキはその日、腕に電気を貯めて凝縮出来ず、放出するを繰り返していた。

その日の夕方、皆がギルドに戻った後、ユウキは一人で特訓をしていた。

「ここで剣の形に……ぐあっ！」

始めたころより出来るようになってきたが、また失敗してしまった。

「頑張っているね♪」

ユウキの様子を見にプクリンがやって来た。

「プクリン……まあな」

「……リサを助けるため？」

「……嗚呼。俺が絶対にリサを助ける……だから俺は力が欲しいんだ」

「そっか。ともだちを助けるためなら僕も手伝うよ♪」

その日はプクリンと共に特訓をしたユウキだった。

特訓最終日、明日から戦いということで、皆あまり激しい特訓はしなかった。ジン達の特訓も上手くいったらしい。チサ達やクロ達も上々な結果だ。だが、ユウキだけはまだ完全には完成していなかった。

「くそっ……こうしている間にもリサが……くそっ！ウオォォォ！」

ユウキは電気を凝縮し、ついに剣の形を作ることに成功した。

「……出来た……出来た！」

「まさか……本当に完成させるとは思いませんでしたわ……」

「……雷鳴剣の完成だな……疲れた……」

ユウキはその場に座り込んでしまった。

「やりましたわね！どうします？まだやりますか？」

「……少し休んだら再開する。なあレイド。雷鳴剣を使って新しい技って出来るか？」

「うーん私は出来ませんけど……ユウキさんならオリジナルを作れるかもしれませんわ。私が出来ることはここまでですわね」

「そうか……レイド、ありがとな」

「どういたしまして」

ユウキはそれから雷鳴剣を使ったオリジナル技の開発を行った。その日は皆はいつもより早く特訓を終えた。だがユウキだけは新技の開発に取り組んでいた。全てはソーマを止めるため……そして……リサを助けるために。

## 第二十七話　力への欲求（後書き）

ユウキ
「やっと完成した……」

お疲れ

ユウキ
「クロが強いことに驚いたな」

クロ
「照れるっす♪」

いつの間に……

## 第二十八話　助けるっす！（前書き）

第二十八話完成……

クロ
「テンション低いっすね」

なんか最近文章の出来が激減してるよ……（泣）

クロ
「……おれっちには頑張れしか言えないっす」

……シクシク……（泣）

クロ
「……とりあえず第二十八をどうぞっす！」

## 第二十八話　助けるっす！

ソーマの基地突入の日、ユウキ達はプクリンの部屋にいた。

「プクリン、ソーマの基地の場所はわかるのか？」

「うん♪彼が教えてくれたよ♪」

プクリンの指差す方を見ると、そこには、ユウキ達が捕まえたグラエナがいた。

「……お前」

「久しぶりだな……プクリン、説明を始めていいか？」

「うん♪」

グラエナはプクリンの了解を得て説明を始めた。

「まずソーマの居場所だが……あいつは南西にある漆黒の洞窟にいる。そして、あいつは誘拐したポケモンをあるマシンで操っている」

「あるマシン？なんですの？」

「まあ簡単に言えば催眠術を強化したようなマシンだ。それで操っているらしい。そのマシンを破壊すれば殆どのポケモンはもとに戻る。ちなみに四天王と呼ばれるポケモンがいるんだが……その幹部の内の三匹は操られていないらしい」

ユウキは殆どという言葉が少し引っ掛かった。

「……殆ど？」

「嗚呼。一部のポケモンはそのマシンを破壊してももとには戻らない。四天王が持っている特殊なマシンを破壊する必要があるらしい。マシンの場所はわからんが……」

「それだけわかれば十分♪あっユウキとミズキ、ジンには通信機を渡しておくね♪なにかあったらそれで連絡してね♪じゃあ皆！行くよー！たあぁぁぁ！」

ユウキ達はソーマを止めるべく、漆黒の洞窟に向かった。ユウキ達が出発した後、ジバコイル保安官がグラエナを迎えに来た。

「ソロソロ行クゾ」

「嗚呼……頑張れよ……」

グラエナは誰にも聞こえないような声で呟いた。

「ここか……」

「よし、皆！頑張って行くよ♪」

ユウキ達は漆黒の洞窟に入っていった。

「どうなっているんですの！？」

入ってそうそう、レイドが驚いたような声を上げた。なぜなら、洞窟の中のはずが、ドアや人為的に作ったような壁があった。まるで建物の中のような感じだった。

「おそらくソーマが改造したのだと推測する。あいつは昔から頭がよかったからな」

ユウキ達は更に奥に進むと、少し広い空間に出た。その空間にはいくつかゲートが存在していた。

「ガハハハハ！貴様達！待っていたぞ！」

奥のゲートから高らかな笑い声と共にドサイドンのロックが現れた。

「お前はノールタウンを襲った！」

「ん？貴様はあの時のイーブイか！」

「おれっちの妹は……リンは何処っすか！？」

「妹？あのイーブイなら……ほれ！あそこだ」

ロックの指差す方のゲートから、一匹のイーブイが出てきた。

「リン！無事だったっすね！」

しかしリンはクロに突進で攻撃してきた。

「ぐはっ！……リン？」

「クロ、どうやら君の妹は操られているようだ」

そう、グラエナの情報通り、ソーマ軍はポケモンを操っているようだ。

「ガハハハハ！どうする？」

「……あいつはおれっちが倒すっす！」

「面白い……来い！」

ロックが掛け声をかけると、ゲートからポケモンが七匹出てきた。

「マズイね……ここはチームに分けるよ！僕とユウキ、ミズキ、リーフは先に進むよ！ジンとチサは僕達とは別行動で、例のマシンを探して破壊して！クロとレイドはここをお願い！ソウルはクロ達を援護して！」

ユウキ達は了解し、チームに別れて行動し始めた。

クロ達はロックを倒すためにここに残ることになった。「あのマシンを知っていたか！だが我輩の配下のポケモンはあのマシンを破壊した所で正気を取り戻すことはないわ！」

「なら特殊なマシンを破壊すれば良いのだな？」

「ガハハハハ！我輩の持っているマシンを破壊すればもとに戻るなんて口が裂けても言えんわ！」

『……』

ロックは言ってはいけないことを言ってしまった。ロックは結構天然な所があるらしい。それを聞いたソウルは、事前に持っていた通信機でプクリンにその情報を伝えた。

「フン！ばれてしまってはしょうがない！行け！我がしもべよ！」

ロックの指示で、操られているポケモンが攻撃してきた。

「クロ！君はロックを！手下は自分とレイドに任せてくれ！」

「わかったっす！」

クロはロックのもとに、ソウルとレイドは手下のポケモン達のもとに向かった。

「レイド、来るぞ！」

ソウルの言った通り、手下のポケモンのストライクが電光石火で攻撃してきた。

「火炎放射！」

ソウルは火炎放射でストライクに攻撃した。ストライクは一撃で倒れた。

「私も！エナジーソード！」

レイドはエナジーソードで手下のポケモン三匹を倒した。その間に、ソウルは残りの三匹を倒した。

「あとは……ロックとリンちゃんですわね」

「……ロックはクロに任せよう。それより早くリンを保護しよう」

「わかりましたわ」

レイドはリンに近づいて、持っていた睡眠の種でリンを眠らせた。

「よし。後はクロに任せよう」

「……わかりましたわ」

「なに、危なくなったら自分が助けに行く。それに……クロなら大

丈夫だ」

ソウル達はクロの戦いを見守ることにした。

「こっちからいくっす！シャドーボール！」

「無駄だ！岩石砲！」

ロックはクロのシャドーボールを消して、クロにダメージを与えようとしたが、シャドーボールと岩石砲は打ち消しあった。

「ほう……なかなかやるな！」

「まだまだっす！電光石火！」

クロは電光石火でロックの背後に回った。

「突進っす！」

「メガトンパンチ！」

クロは突進で攻撃したが、ロックのメガトンパンチで返り討ちにさ

れてしまった。

「くっ……まだまだ！影分身！」

「地震！」

クロの分身はロックの地震で消されてしまった。

「この程度か……ん？」

ロックは急なだるさに襲われた。

「作戦成功っす！毒々が効いてきたっすね！」

クロは突進をした時に毒々を使っていたようだ。

「貴様……なに？何処に行った！？」

「こっちっす！とっておき！！」

クロは穴を掘るでロックの後ろに回り込んでいた。

「グアァァ！！」

「止めっす！シャドーボール！！」

クロはありったけの力をシャドーボールに込めて攻撃した。ロックはその場に倒れた。

「……倒したっす……」

クロはその場に倒れ込んだ。ソウル達はクロのもとに向かった。

「大丈夫か？」

「大丈夫っす……リンはもとに戻ったっすか……？」

「今レイドがマシンを探している」

「ありましたわ！これを……マジカルリーフ！」

レイドがマシンを破壊すると、ロックの手下達のソーマ軍が目元に付けているマシンが砕け散った。それと同時に、手下達が正気に戻っていった。

「ううん……」

「目が覚めたっすか？」

「お兄ちゃん……？」

「よかった……正気になったんすね……」

「クロ、今プクリンに四天王を一人倒したことを報告した。君はこのポケモンを外に避難させてくれと言っていた。レイドはジン達とマシンの破壊をやってくれ」

「四天王……？何故わかったんですか？」

「あいつは他のポケモンを引き連れていた所や、前に会った時のこ

とからそう推測した」

「そうですの……で、ジンさん達は？」

「プクリンによると地下にいるらしい。ジンにも連絡したらしいから今から言う場所に行ってくれと」

「……わかりましたわ！」

レイドはジン達と合流すべく走り出した。

「クロ、少し休んだら頼むぞ」

「任せるっす！」

ソウルはプクリン達と合流するために走り出した。

四天王、ロック撃破。リンの救出に成功。

## 第二十八話　助けるっす！（後書き）

クロ
「リンが無事だったっす！」

よかったね（笑）

えっと、今回の文章はかなりやばいので、解説を入れたいと思います

ソーマはあるマシンでポケモンを操っている。四天王の内、三匹は操られていない。つまり一匹は操られていて、三匹は自分の意思で行動している。操られているポケモンは、そのマシンを破壊すれば正気に戻るが、四天王の配下にいる厳選されたポケモンは、四天王が持っている特殊なマシンを破壊しないと正気に戻らない。

こんな感じかな？

クロ
「つまり四天王と一緒にいるポケモンは、四天王が持っている特殊なマシンを破壊しないとダメってことっすか？」

まっそんな感じかな

説明が下手ですいませんでした……（泣）

## 第二十九話　お姉ちゃん（前書き）

第二十九話完成！

ジン
「今回は僕達ですね」

うん

では第二十九話をどうぞ！

## 第二十九話　お姉ちゃん

「……そっか。わかった！ありがとうね♪ソウル♪」

ユウキ達は今、ソーマのいる場所を探すために行動している。ちょうど今プクリンの通信機にソウルから連絡が来ていた。

「ソウルは～何だって～？」

「四天王を一匹倒したって♪後、リンも救出したって。これから合流するみたいだよ♪」

「じゃあソウルさんをここで待つのかしら？」

「ううん。後から合流するから先に行ってくれって」

「なら先に進むぞ」

ユウキ達は、ソウルからの良い知らせに、このままうまくいけば良いなと思いながら走り出した。

一方、ジン達はポケモンを操っているマシンを破壊するために行動していた。

「マシンって何処にあるのかなー？」

「おそらく重要なマシンでしょうからね……かなり厳重にしていると思いますよ……」

そんな話をしていると、ジン達の目の前に頑丈そうな扉があった。

「この奥かなぁ？」

「なんとも言えませんが、調べる価値はありそうですね」

そう言ってジンは扉を開けようとしたが、扉はびくともしなかった。

「開きませんね……チサ、この扉に冷凍ビームをしてくれませんか？」

「わかったよー！冷凍ビーム！」

チサは扉に冷凍ビームをぶつけた。扉は冷凍ビームの冷気で凍ってしまった。

「気合いパンチ！」

ジンはその後、凍ってしまった扉に気合いパンチを放った。扉は粉々に砕け散った。

「うまくいきましたね！中を調べましょう」

ジン達はその部屋に入っていった。部屋の中は、いろんな本や資料があった。

「ここは資料室かなー？」

「みたいですね……なにか情報を探してみましょう」

ジン達はなにか有益な情報があるかも知れないと考え、資料室を調べ始めた。数十分後、ジンとチサはある資料を見つけた。

「ジンー！こんなの見つけたよー！」

「僕も面白いものを見つけましたよ」

ジンはある資料、チサはこのソーマの基地の地図を見つけた。

「それは地図ですね……えっと今いる場所はここで……例のマシンは……結構遠いですね」

地図には例のマシンの場所が記してあった。

「場所がわかっただけでも収穫だよー♪他にわかることある？」

「そうですね……ん？チサ、この部屋、明らかに他の部屋より大きくないですか？」

ジンの言う通り、ここから結構離れた、ある部屋だけ明らかに他の部屋より大きかった。

「もしかして……ここがソーマのいる部屋かなー？」

「位置もかなり奥ですし……可能性はありますね」

「あっ、ジンは何を見つけたの？」

「僕はこれですよ」

ジンはそう言うと、書類の束を取り出した。

「これは何の書類なのー？」

「さっき読んでみたんですが……どうやら例のマシンについてみたいですね」

「ホント！？」

「はい。では読んでみますね」

ジンは書類に書いてあった要点を話し始めた。

「まず……僕達が破壊しようとしているマシンは、ポケモンを操る事が出来ると思ってましたが……実は少し違うみたいですね」

「違うってー？」

「そのマシンは、あるポケモンが自分で判断して行動出来るようにするマシンみたいですね」

チサはジンの言っていることがよくわからなかった。

「……どうゆうこと？」

「僕達が破壊しようとしているマシンは実はポケモンを操るのではなく、あるマシンを付けたポケモンが、自分で行動出来るようにするためのマシンみたいですね」

「……そのマシンって？」

「僕達も見ているはずですよ。操られているポケモンは皆目元にマシンがついていましたよ」

「あのマシン？」

「はい。まとめると、ポケモン達が付けているマシンは、付けたポケモンの自我を無くし、ソーマの命令に逆らえなくするためのもの。そして、僕達が破壊しようとしているマシンは、マシンを付けているポケモンがソーマのために動くようにするためのものみたいですね」

「なるほどねー。だったらポケモンについてるマシンを破壊すればいいんじゃないのー？」

チサの言う通り、ポケモンについてるマシンを破壊すれば、ポケモン達は正気を取り戻すはずだ。

「いえ……僕達が破壊しようとしているマシンを破壊しなければ、自我を無くすマシンを破壊できないみたいですね」

「じゃあやっぱり私達は破壊しに行くんだねー！」

「はい、後、幹部の配下のポケモンは、幹部が持っている特殊なマシンを破壊すれば自動的に正気になるみたいですね……このことをプクリンさんに報告しなければ」

ジンは今までに得た情報を、通信機でプクリンに報告し始めた。

「プクリンさん、僕です。ジンです」

『ジン？なにかあったの？』

「ある情報を得たので報告しようと思いまして」

『うん♪じゃあ話して♪』

ジンはプクリンに話し始めた。

『そっか。わかったよ♪情報ありがとう♪』

「はい。では」

ジンは通信機を切った。

「よし、行きましょう」

ジン達はマシンを破壊するために、マシンがある部屋に向かった。

「この先なの？」

「もう少し先ですね」

ジンは地図を見ながら答えた。

「……！？ジン！前！」

ジン達の前には、操られているポケモンが六匹襲い掛かってきた。

「くっ！マシンを破壊してないのに！」

「まかせてー！それ！」

チサは持っていた爆睡玉を使い、襲い掛かってきたポケモン達を眠らせた。

「今のうちに行きましょう！」

ジン達はマシンのある部屋に向かって走り出した。

「ここみたいですね……」

「じゃあ開けるね」

チサは目の前の扉を開けた。中には、大きなマシンと、一匹のポケモンがいた。そのポケモンはジンに似ている、ルカリオだった。そのルカリオの右耳には、少し大きな傷があった。

「……侵入者ですね」

「……その傷……うそ……」

「……お姉ちゃん?」

ジンは、そのルカリオを、お姉ちゃんと言った。

「お姉ちゃん……?あなた……ジンですか?」

「どうして……ティルお姉ちゃんがここにいるの……」

チサの声は震えていた。何故なら、ジンとチサの故郷は、昔に、ソーマの故郷と同じ様に盗賊団に襲われ、壊滅してしまった。その時にティルは盗賊団にさらわれてしまったのだ。ジンとチサは、ティルを捜すために探検隊になったのだ。

「久しぶりですね……何しに来たんです?」

「……僕達はそのマシンを破壊しに……」

「そうですか……私は四天王のティル……あなた達は私の敵ですね……」

ティルはそう言うと、集まれ玉を使って自分の配下のポケモンを呼び出した。

「私はこの事をソーマ様に報告してきます。あなた達には目の前の二匹の排除を」

ティルは配下のポケモンのカイロスにそう命じた。カイロスは黙ったまま頷いた。ティルはそれを確認するとその場を去った。

「嘘だ……お姉ちゃんが……嘘だ……僕は信じません……お姉ちゃんが……ソーマの部下なんて……」

「ジン！しっかりして！今は目の前の敵に集中だよー！」

チサがそう言った刹那、アゲハントがかぜおこしで攻撃してきた。ジン達はなんとか避けることが出来た。

「ジン！」

「……うわぁぁぁぁ！！！」

ジンは目にもとまらないスピードで、敵のポケモンを倒していった。

「ジン……」

「ハァ……ハァ……あと一匹……」

ジン達の前にはカイロスが一匹残っていた。

「……消す……捨て身タックル」

「守る」

ジンはカイロスの捨て身タックルを、守るで難無く防いだ。

「……はっけい！」

ジンははっけいで攻撃したが、カイロスに簡単にかわされてしまった。

「……ハサミギロチン！」

カイロスは隙だらけのジンに、当たれば一撃で先頭不能に出来るハサミギロチンで攻撃してきた。

「まっまずい！」

「ピヨピヨパンチ！」

カイロスのハサミギロチンは、チサのピヨピヨパンチによって阻まれた。

「チサ……すいません…」

「ジンは一人じゃないんだよ。一人で抱え込んじゃダメだよ」

「……そうですね。一気に行きますよ！」

「まかせてー！」

ジンとチサは、カイロスに向かっていった。

「消す……破壊光線！！」

カイロスは、自分の最強技の破壊光線で一気に勝負を決めようとしてきた。

「穴を掘る！」

「守る！」

ジンは穴を掘るでかわし、チサは守るで防いだ。カイロスは反動で動けなくなっていた。

「決めます！はっけい！」

ジンは穴を掘るでカイロスの背後に回り込み、はっけいでカイロスに攻撃した。カイロスは反動でかわすことが出来なかった。

「止めだよー！冷凍ビーム！」

チサは止めの冷凍ビームを放った。カイロスはその場に崩れ落ちた。

「やったね♪」

「……そうですね。あとはマシンの破壊ですね……」

「……うん。冷凍ビーム！」

チサは冷凍ビームでマシンを凍らせた。

「ふぅ……気合い玉！！」

ジンは、前から練習していた気合い玉を放った。そのエネルギーでマシンは壊れた。

「とりあえず破壊に成功だね」

「……」

ジンは黙ったまま頷いた。

「大丈夫だよー！あのティルお姉ちゃんだよ！悪いやつなんかに従わないって！それにグラエナが言ってたじゃない！幹部の三匹は操られていないってー！なら操られている一匹はきっとティルお姉ちゃんだよー！」

「……そうですよね。お姉ちゃんがソーマの言うことを聞くはずないですよね……」

「そうそう♪とにかくプクリンに知らせようよ」

「……わかりました」

ジンは通信機でプクリンに報告した。姉への不安感を抱きながら。

## 第二十九話　お姉ちゃん（後書き）

クロ
「お姉ちゃん……」

元気ないね……

次回はユウキ達です

チサ
「どうなるのかな」

次回のお楽しみさ

## 第三十話　許さない！（前書き）

第三十話完成！

リサ
「なんか短いね」

……なんでここにいるの？

リサ
「だって最近出番ないんだもん……（泣）」

……ごめんね

では第三十話をどうぞ！

# 第三十話　許さない！

ユウキ達はジンと通信機で話しをしていた。

『……と言うわけです』

「ご苦労様♪とりあえず合流する？』

『はい。今のいる場所を教えてください』

プクリンは今いる場所の特徴を教えた。

『ちょっと待ってください……わかりました。その先に広間があるみたいですからそこに行ってください。僕達もそこに向かいます』

そこでジンからの連絡は切れた。

「この先に広間があるって。そこに行こう♪」

ユウキ達は、ジンの指定した広間に向かった。

広間に向かう途中、少し開けた部屋に出た。

「ここなのかな～？」

「……いや、もう少し奥だと思うが……！？おい！前！」

ユウキの指差す方から、操られているポケモンが襲ってきた。

「皆ジンの言葉は覚えているわね！目元のマシンを破壊するのよ！」

「言われなくても……ボクに任せろ！」

リーフは操られているポケモンの中の、ラフレシアに向かっていった。

「やっぱりバトルの時は頼りになるわね……って何言ってるの私！？早く戦わなきゃ！」

ミズキも、リーフに続いてカモネギに向かっていった。

「うーん、友達を傷つけたくないなー……なら、歌う♪」

プクリンは、歌うで操られているポケモン達を眠らせた。

「上手くいった♪はたく♪」

プクリンは、はたくで眠ってしまったポケモンについているマシンを破壊していった。

「さて……来い！」

ユウキは、ソルロック、ロゼリア、キノガッサの三匹に囲まれてい

た。しかしユウキは、どこか余裕があるような雰囲気だった。

「影分身！」

ユウキは影分身で自分の分身を作り出した。しかし、その分身は、ロゼリアのマジカルリーフで消されてしまった。だが、分身が消えたのに、ユウキは本体を含めて四体いた。ユウキは影分身をしたときに、身代わりを使って、実体のある分身を作っていたのだ。

「分身の俺、頼む」

分身のユウキ達は、電光石火でソルロック達を撹乱し始めた。ユウキはその間にあの技を使うために集中し始めた。

「ふぅ……ハァァァ……」

本体が準備をしている間、分身はソルロック達を撹乱していた。しかし、分身達はソルロックの岩石封じで消されてしまった。

「チッ……まあいい、準備は出来た……ハァ！」

ユウキは自分の電気を使って剣を作り出した。雷鳴剣だ。

「いくぞ！召雷斬（しょうらいざん）！」

ユウキは雷鳴剣から、雷（いかずち）を放った。それはソルロックに当たった。ソルロックはその場に倒れた。

「かなりの威力だな……これが完璧に扱えたら……」

ユウキが雷鳴剣の威力に少し驚いていると、キノガッサがマッハパンチで攻撃してきた。

「ちっ！雷壁波（らいへきは）！」

ユウキは雷鳴剣を地面に刺し、雷の波を自分の回りに発生させ、それを壁の代わりにして、キノガッサのマッハパンチを防いだ。キノガッサが痺れている間に、召雷斬で倒した。

「あと一匹だな……一気にいく！鏡面刹（きょうめんせつ）！」

ユウキは、目にも留まらぬ速さでロゼリアを切り付けた。レイドのエナジーソードと同じく、殺傷能力は無いが、雷を凝縮されているので威力はかなりのものだ。ロゼリアは耐えられず倒れた。

「ふぅ……結構疲れるな。後は……」

ユウキは雷鳴剣を止めて、雷パンチでロゼリア達のマシンを破壊した。破壊が終わると同時にミズキとリーフが来た。

「そっちも～終わったみたいだね～」

「嗚呼。プクリンは？」

「さあ……あっ来たわよ」

プクリンは少し上機嫌でユウキ達の所に来た。

「終わったみたいだね♪こったは友達を傷つけずにすんだよ♪」

「そうか。マシンの破壊はしたが……どうするんだ？」

「探検隊バッジを使えばいいんじゃないかしら？」

ミズキのいう通り、もともとここは不思議のダンジョンだ。探検隊バッジを使うことが出来るはずだ。

「とりあえず試してみるか」

ユウキは、いつもの依頼みたいに、探検隊バッジを使った。操られていたポケモンは外に脱出した。

「上手くいったね～」

「だな。先に進むぞ」

ユウキ達は、ジンの指定した部屋に向かって走り出した。

ユウキ達は、ジンの指定した部屋に着くまでに操られているポケモンが何回か襲ってきたが、マシンを破壊して探検隊バッジで脱出させるというのをやっていった。しばらく走っているとかなり広い部屋に出た。

「どうやらここみたいだな」

「ここまで来ましたか……なかなかやりますね」

ユウキ達の前には、ウッドタウンを襲ったザングースと、いなくなっていたウッドタウンの住人がいた。

「あんたは！！」

「おや……確か貴女はウッドタウンに駒を手に入れに行った時にお会いしましたね」

「駒……ですって……！」

「ええ。駒ですよ。さすがにあの時はまだ戦力不足だったので。何か問題でも？」

ミズキらザングースの言葉で、自分を抑える事が出来なかった。

「お前……ポケモンを駒とはな……とんだクソヤロウがいたものだ」

リーフも怒りからか、バトルの時の口調になっていた。

「クソヤロウとは心外ですね。私には四天王のスィックいう名前があるのですよ」

スィックと名乗ったザングースは高らかに自分の名を言った。

「そんなものには興味ないわ！！リーフ！行くわよ！」

「任せろ！！」

ミズキとリーフはエナジーボールでスィックに攻撃したが、一匹のポケモンに阻まれてしまった。

「なに……！？」

「ドダイトス……親方……」

そう、スィックに向かって放ったエナジーボールは、ウッドタウンにあるギルドの親方、ドダイトスに阻まれたのだ。

「ドダイトス！？君も操られているの！？」

さすがのプクリンも、かつての仲間が操られていることに、驚きを隠せずにいた。

「ふむ、そういえば貴方達はもともと仲間でしたね。それが今は敵同士……実に面白い」

「こいつ……絶対に許さない！！ユウキ、プクリン親方！こいつは私に任せて！」

「ボクもやる！お前だけは許さん！」

ミズキとリーフは、スィックとドダイトスに向かっていった。

「さて……俺達は……」

「うん♪ウッドタウンの皆を止めなくちゃね♪」

「だがこいつらは四天王の配下だ。奴のマシンを破壊しなくちゃ無理だな」

「そこはミズキ達に任せようよ」

今、ミズキとリーフ対スィックとドダイトス、ユウキとプクリン対ウッドタウンのポケモンのバトルが始まった。

## 第三十話　許さない！（後書き）

ミズキ
「あいつは許さないわよ！」

リーフ
「当然だ！」

気合い入ってるな……最近僕もスランプ気味だからな……頑張らねば

## 第三十一話　合流（前書き）

第三十一話完成！

チサ
「なんかあまりサブタイトル関係ないねー」

気にしない気にしない♪

では第三十一話を……

チサ
「どうぞー！」

# 第三十一話　合流

ユウキとプクリンは、操られているウッドタウンのポケモンに囲まれていた。

「さて……こいつらは四天王の配下だからな……どうする？」

「友達を傷つけるのは嫌だけど、仕方ないよ」

「決まりだな。フン！」

ユウキは雷鳴剣を作り出した。しかし、先程よりチャージしていないのであまり大きくなかった。だがユウキはそれが狙いだった。これなら、さっきのロゼリア達みたいに、ボロボロにならずにすむからだ。

「じゃあユウキ、行こうか」

「嗚呼。召雷斬！」

ユウキは、雷鳴剣から雷を放った。それは操られているポケモンの数体に当たり、倒す事が出来た。

「まだ雷のコントロールが上手くいかないな……まあいい。さっさと次に行くか」

そう言った刹那、一匹のラフレシアがユウキに攻撃してきた。

「くっ！しまっ……」

「火炎放射！」

ユウキは、何処からか放たれた火炎放射に助けられた。

「ユウキ、大丈夫か？」

「ソウル！すまない！」

火炎放射を放ったのは、ソウルだった。

「私達もいるよー！ピヨピヨパンチ！」

「気合い玉！」

ソウルの後から、ジンとチサがやって来て、操られているポケモン達を倒していった。

「ジン！チサ！」

「ユウキー！大丈夫ー？」

「嗚呼。援軍は助かるな。一気に行く！」

ユウキ達は残りの操られているポケモン達を止めるために戦い始めた。

一方プクリンは、操られているポケモンを傷つけずに済む方法を考えていた。

「ダメだ～思い浮かばないや～仕方ない！たあぁぁぁぁ！！！」

プクリンはハイパーボイスで操られているポケモン達を、一発で吹っ飛ばしてしまった。

「……やりすぎちゃった」

プクリンがそう言った刹那、ユウキ達が戦闘を終えてプクリンの所に来た。

「こっちは終わった……やりすぎじゃないか？」

「ユウキもそう思う？やりすぎだよねぇ……やっぱり……」

プクリンは少し落ち込んでしまった。

「ミズキ達に加勢しに行くか」

「いや、ミズキ達は自分達がやるって言ってたよ。ミズキ達に任せよう」

「……わかった」

ユウキ達は、ミズキ達の勝利を信じて見守ることにした。

ミズキ達は、スィックとドダイトス親方と対峙していた。

「フゥ……貴女達が私達に勝つと？舐められたものですね」

「ボク達が必ず勝つ。そう決めた」

スィックは軽いため息をした。

「やれやれ……勝手な妄想は構いませんが、それでは私には勝てませんよ」

「いちいち腹立つわね！エナジーボール！」

ミズキはスィックにエナジーボールを放ったが、簡単に弾かれてしまった。

「頭に血が上っていては、勝てる戦いも勝てませんよ」

「奴の言う通りだミズキ。まずは落ち着け」

ミズキはリーフの言ったことに納得した。この戦いに勝てなくてはドダイトス親方は救えないと気がついたからだ。

「ではドダイトス、奴らを片付けなさい」

「……リョウカイ」

ドダイトスは、ミズキにウッドハンマーで攻撃してきた。ミズキは守るで難無く防いだ。

「ミズキ、どうする？」

「私が行くわ！リーフはサポートをお願い！」

「わかった。無理するなよ」

「べっ別にあんたに心配されて嬉しいわけじゃないんだからね！勘違いしないでよ！」

リーフは少し呆れ顔になったが、さっさと行けとミズキに言った。

「ドダイトス親方、行きますよ！マジカルリーフ！」

「……エナジーボール」

ミズキのマジカルリーフは、ドダイトスのエナジーボールに消されてしまった。更にそのままエナジーボールが、ミズキに向かって飛んできた。

「えっ！？守る！」

ミズキはギリギリ守るで防ぐことに成功した。

「危なかったわね……にほんばれ！」

ミズキは、にほんばれで天気を晴天に変えた。

「隙アリ。エナジー……」

「隙があるのは親方だ。リーフストーム！！」

リーフは、ドダイトスがミズキに気を取られている間にドダイトスの後ろに回り込み、リーフストームを放った。しかしその威力が半端なかった。

「かなりの威力ですね……なにかしたんですか？」

「なに、猛撃の種を使ったまでさ」

猛撃の種、それは、食べると攻撃と特殊攻撃の威力が格段に上がる種だ。リーフはそれを食べ、リーフストームの威力を上げていたのだ。

「グッ……消エロ！ハードプラント！」

「うわぁぁぁ！！」

「きゃぁぁぁ！！」

ドダイトスは草タイプ最強の技、ハードプラントでミズキとリーフに攻撃した。ミズキとリーフはハードプラントをまともに受けてしまった。

「終わりですね」

『……光合成！』

スィックがそう言った刹那、ミズキとリーフは光合成で体力の回復を始めた。

「かなりの威力だったな……」

「まったくね……でも今がチャンスよ！ソーラービーム！」

ミズキは、自分の持つ最強の技、ソーラービームでドダイトスに攻撃した。さっきのリーフストームのダメージのせいか、ドダイトスはその場に崩れ落ちた。

「……やったな。だが親方にしては弱い気がするな……」

「そりゃそうよ。操られている状態で本気を出せるとは思えないわ」

「……やりますね。いいでしょう。私自ら貴女達を引き裂いてあげましょう！！」

スィックはそう言うと、ブレイククローでリーフに攻撃してきた。

「ちっ！エナジー……」

「遅い！」

リーフはエナジーボールで反撃しようとしたが、スィックのブレイククローの方が早かった。

「うわぁ！」

「リーフ！この！マジカルリーフ！」

「無駄ですよ！火炎放射！」

ミズキのマジカルリーフは、スィックの火炎放射で消されてしまった。

「うそっ！」

「隙ありですよ！シザークロス！」

「きゃぁぁぁ！」

ミズキはスィックのシザークロスをまともに受けてしまった。相性が悪いせいか、かなりのダメージだ。

「ミズキ……貴様ぁ！ばかぢから！！」

リーフは、ばかぢからでスィックに攻撃した。

「これは止められませんね……見切り！」

スィックは、見切りでリーフのばかぢからを簡単にかわした。

「なっ……」

「さよならです……シザークロス！！」

「うわぁぁぁ！！」

リーフは、スィックのシザークロスをまともに受け、その場に倒れた。

「ふっ、他愛もない……後は貴女ですよ」

「リーフ!?大丈夫!?」

ミズキの問い掛けにリーフは反応しない。気を失っているようだ。

「うぅ……リーフ……」

「おやおや、パートナーがいないと不安ですか?」

「だっ誰が!私一人でもあんたを倒すわ!」

「面白い、ではやってみなさい!火炎放射!」

スィックは火炎放射を放ってきた。ミズキはそれを守るで防いだ。

「影分身!」

ミズキは影分身で自分の分身を作り出した。これで時間を稼ぐつもりだ。

「無駄なあがきを……火炎放射!」

ミズキの分身は火炎放射で消されていった。そして遂に全ての分身はが消されてしまった。

「終わりです!シザークロス!」

スィックは、シザークロスで止めを刺しにいった。しかしミズキは避けるそぶりは見せず、じっとしていた。

「諦めましたか？まあいい、これで終わりです！」

スィックはそう言うと、ミズキにシザークロスを放った。

「ふふっ……別れはいつも切ないですね……」

「……終わりはあんたよ！カウンター！！」

「なっ！グハァァ！」

ミズキはカウンターで、スィックから受けたシザークロスのダメージを倍返しにした。

「これで……終わりよ！エナジーボール！！」

ミズキはありったけの力をエナジーボールのエネルギーに変えて攻撃した。スィックはカウンターのダメージに、更にエナジーボールのダメージは耐えられなかったか、その場に崩れ落ちた。

実はミズキは、影分身を使った時、光合成で回復、更にリフレクターで防御を上げていたのだ。だからこそスィックのシザークロスに耐え、カウンターを放つ事が出来た。

「やった……私達の……勝ち……ね……」

ミズキもダメージが溜まっていたか、その場に倒れ込んだ。

## 第三十一話　合流（後書き）

ミズキ
「勝ったわ……」

お疲れ～

ユウキ
「次回はどうなるんだ？」

う～ん……次は君が主になる……かもよ？

ユウキ
「疑問形……」

## 第三十二話　相棒との戦い（前書き）

第三十二話完成！

ユウキ

「なんだこのタイトル？」

読めばわかる

では第三十二話をどうぞ！

## 第三十二話　相棒との戦い

「ミズキ！　大丈夫か！」

ユウキ達は、倒れたミズキとリーフのもとに走り出す。二匹ともかなり疲労しているが、さほど怪我は酷くなかった。

「ええ……ちょっと疲れただけよ。それよりリーフは！？」

「問題ない。疲れて寝てしまっているだけだ」

ミズキは、ソウルの言葉にほっと胸を撫で下ろした。いつもあんな態度をしているが、やはり仲間のことは心配のようだ。

「ちょっと待ってください……今オレンの実を……」

「大丈夫よ。光合成！」

ミズキは光合成で体力の回復を試みた。幸いまだにほんばれの効果で、日差しが強い状態だったので、ミズキの傷は殆ど回復した。

「これで良し。リーフはどう？」

「とりあえず傷はそこまで深くはないようだ。意識が戻ったらオレンの実を与えれば大丈夫だろう」

「じゃあとりあえず少し休もうよ♪」

さすがにこれ以上の連戦はきつい。そう考えたプクリンの提案に

より、ユウキ達は少し休むことにした。

「……そういえばジン、少し元気がないように見えるが」

「……」

ソウルの問い掛けに、思いつめた表情のままジンは応答しなかった。

「ちょっといろいろあってねー……」

「僕から話します……こんな事があったんです……」

ジンは、自分の姉ティルについて話し始めた。

「……という訳なんです……」

「まさか四天王の一匹がジンのお姉さんなんて……」

まさか仲間の知り合いがいるなんて思ってもいなかったミズキは驚きを隠せなかった。

「でも四天王の一匹は操られているって言ってたからー、多分ティルお姉ちゃんだと思うの」

確かに一匹は操られているポケモン、そして後の四天王はおそらくあのポケモン。

「多分ビンゴだな。おそらく残りの四天王はティルと……シャドーだ」

そう、トレジャータウンを襲い、リサを連れ去った張本人。シャドーもおそらく四天王の一匹だ。

「あいつが操られているとは思えないからな……多分ティルは操られていると思うがな」

「……そうですよね！お姉ちゃんが自分から悪に走るはずないですよね！」

ジンが納得したと同時に、リーフも目を覚ました。

「リーフ！大丈夫！？」

「大丈夫じゃないよ～お腹すいたよ～」

リーフの予想もしてない返答に、ユウキ達は気が抜けてしまった。

「……リンゴ二つにオレンの実三つだ」

ソウルはバックから取り出してリーフの前に置いた。それを見て

リーフの目はキラキラと輝いていた。

「いただきま～す！！！」

リーフは目にも留まらぬ速さで目の前の物を平らげてしまった。

「ごちそうさま～！元気でたよ～」

「良し、リーフも復活したし、先に進むぞ」

「その前にウッドタウンのポケモンを外に避難しなくては」

「ガハハハハ！ワシにその必要はないわ！」

ユウキ達は、声の聞こえた方を見ると、そこには、正気に戻ったドダイトスがいた。

「親方！？大丈夫なんですか！？」

「傷は自分で治したわ！ワシもついていくからな！」

「わぁー♪ドダイトスがいれば百人力だねー♪」

プクリンは凄い上機嫌だった。さっきのウッドタウンのポケモンにいきなり放ったハイパーボイスへの罪悪感はないのだろうか。

「とにかく脱出させるぞ」

ユウキは探検隊バッジを使って、操られていたポケモン達を脱出させた。

「良し。先に行くぞ！」

ユウキ達は更に奥へと走り出した。

ユウキ達がスィックのいた部屋を出て数十分後、またしても広い部屋にでた。

「アヒャヒャ！　やっとご到着か！」

「貴様……！！」

ユウキの目の前には、ユウキの最も憎い敵、ゲンガーのシャドーがいた。

「ん？　お前はあの時の負け犬か！　また俺様に倒されに来たのか！」

「貴様と話すことはない。勝つのは俺だ」

「皆！　一気に倒すよ！」

「エキストラは引っ込んでな！」

そう言うとシャドーは、何かの機械のボタンを押した。刹那、ユウキ以外のポケモンはカプセルみたいな物に閉じ込められてしまった。

「なに！？」

「アヒャヒャ！そこでこいつがボロボロになるのを見学してな！」

「つくづくクソヤロウだな……十万ボルト！！」

「無駄だ！　シャドーボール！」

ユウキの十万ボルトは、シャドーのシャドーボールと衝突し消されてしまった。

「せっかちな野郎だ。それに相手は俺様じゃないぜ？」

シャドーがそう言った刹那、シャドーの後ろからあるポケモンが出てきた。そのポケモンは……

「リサ！」

そう、リサだった。リサの目元には、操られているポケモンが付けているマシンが付いていなかった。

「無事だったのか！」

「ユウキ……助けに来てくれたんだね……余計な事しないでよ」

「……なに？」

ユウキはリサの思ってもいなかった発言に耳を疑った。

「私はシャドー様の部下なのよ。ギルドに帰るつもりはないよ」

明らかにリサの言葉ではない。ユウキにはシャドーがリサになにかしたとしか考えられなかった。

「貴様ぁ！リサになにをした！？」

「アヒャヒャ！　ソーマが新たに作り出した洗脳装置！　それは自分で考え、余計なマシンの装着が必要なくなるのさ！　俺様はそれを使った！　ちなみに正気に戻す方法は俺様は知らないがな！　アーヒャヒャヒャヒャヒャ！！」

シャドーは高らかに笑いながら答えた。その言葉だけであの冷静沈着なユウキの怒りはピークに達していた。

「意地でも正気に戻す！」

「シャドー様の敵は私の敵！　ユウキとはいえ容赦しないよ！　火炎放射！」

「くっ守る！」

ユウキはリサが今まで使えなかった火炎放射に、少し戸惑いながらも、守るで防ぐ事が出来た。

「リサ……今助けるからな！」

ユウキはリサに向かって走り出す。リサもユウキを迎え撃つために走り出す。

「十万ボルト！」

「火炎放射！」

ユウキとリサの技がぶつかり合い、小規模な爆発がおこった。

「さすがユウキだね……でも勝つのは私よ！　電光石火！」

「守る！」

ユウキはリサの電光石火を、守るで防いだ。電光石火の勢いを止められなかったリサは、守るで出来た壁にぶつかってしまった。

「雷パンチ！」

ユウキはリサに雷パンチを放った。だが、リサに当たる寸前に止めてしまった。

（リサ……くそっ俺にはリサを傷つけるなんて……）

「甘いよ！　火炎放射！」

リサの火炎放射は、ユウキの頬を掠める。この至近距離で攻撃をはずすと思えない。そのことから、ユウキはあることが頭に浮かんだ。

（リサ……まだ心が残っているのか……？　なら助けられるかもしれない！なりふりかまっている場合じゃないな……）

「作戦は決まった？　なら行くよ！　火炎放射！」

「電光石火！」

ユウキは火炎放射を電光石火でかわした。そこからそのスピードを保ちながら、リサに接近する。

「電磁波！」

ユウキは電磁波でリサを麻痺させる。リサの動きを封じ、わずかに残っているリサの心を呼び戻そうと試みたのだ。

「リサ！　俺だ！　目を覚ませ！」

「目を覚ます？　これが本当の私なのよ！　電光石火！」

先ほどのスピードはないが、リサはなんとか動いてユウキに突進する。いつもなら反撃したり防いだりするのだが、ユウキはなんの抵抗もしないまま攻撃を受けた。

「くっ……」

「あきらめたの？　ファイヤーレイン！」

リサは更に炎の雨をユウキに浴びせる。それでもユウキは反撃も抵抗もせず攻撃を受けた。ユウキの体は所々火傷していて、もうぼろぼろだった。

「どうして……攻撃も防御もしないのよ！」

「……俺はもうお前とは戦わない」

「どうして……どうして……？」

ユウキの行動で心が揺れ始めたのか、リサは動揺を隠せなかった。反応してか、リサの体から黒い煙のようなものが出てきた。

もう少しでリサの心を取り戻せる。そんな中、リサの後ろにシャドーが怪しい笑みを浮かべながら立っていた。

「ちっ心が揺れてきたか。まあいい。もうこいつは用なしだな！死にな！」

シャドーはシャドークローを使いリサに攻撃しようとする。リサは突然の事にリサは動けずにいた。

「させるかぁぁぁ！！」

ユウキは咄嗟にリサを庇うように抱え込むと、リサを抱きしめながら地面を転がった。リサは怪我は無かったが、ユウキは腕に爪が当たってしまっていた。

「どうして……？　どうして私を……」

「……大切な相棒を傷つけたくなかったからな」

「ユウキ……」

リサの目から自分でも知らず知らずの内に、一筋の涙がこぼれた。
それと同時にリサの体から完全に黒いオーラが消え去った。

「あ？　なんだ、黒渦がでていっちまったじゃねえか！ったくソーマのやつ、何が完璧なマシンだ！ダメじゃねえか！」

「リサ！？」

「ううっ……ユウキ……？　私……なにを？」

「正気に戻ったのか！？」

リサの体から、シャドーの言う黒渦が出ていったことによりもとに戻ったようだ。

「良かった……本当に……」

「ユウキ……それよりなんか……体が痺れて……」

「あっすまない」

電磁波で麻痺していたことを思い出し、ユウキはリサに麻痺が治るクラボの実を渡した。

「ありがとうユウキ」

「ったく！　結局俺様が相手すんのかよ！　面倒くせえ！」

「貴様だけは許さん！　リサは下がっていろ！」

「でも……」

「お前はまだ体が痺れてるだろ？　無理するな。痺れが取れたら加勢してくれ」

「……うん。気をつけてね」

「嗚呼。任せろ」

ユウキはオレンの実を食べてき傷を治すと、シャドーを倒すために走り出した。

## 第三十二話　相棒との戦い（後書き）

リサ
「私が出てきたよ！」

はい、リサ復活です

ユウキ
「もっと早くだせ」

（リサのことになるとうるさい奴だ）

ユウキ
「なんか言ったか？」

とんでもございません！（滝汗）

## 第三十三話　宿敵との戦い！ＶＳシャドー！　前編（前書き）

第三十三話完成！

ユウキ
「今回は俺がバトルか」

うん

では第三十三話を……

リサ
「どうぞ！」

# 第三十三話　宿敵との戦い！ＶＳシャドー！　前編

ユウキは今、宿敵のシャドーと対峙していた。

「アヒャヒャ！そいつの洗脳を解いたのは褒めてやる！だがてめえの実力じゃあ俺様には勝てないぜ！」

「ごちゃごちゃうるさい奴だ……」

「……なに？」

シャドーは少しいらついたような表情になった。

「勝てないかどうかは戦えばわかる」

「フン！負け犬の分際で生意気なことを言いやがるなぁ！」

ユウキはシャドーの言ったことに、少しいらつきを覚えた。

「雑魚は良くしゃべるな……さっさと来い！」

「生意気な奴だ！ブッ潰してやる！シャドーガトリング！」

シャドーは、シャドーボールを小さくした玉を、ガトリングのように放ってきた。

「電光石火！」

ユウキは、シャドーガトリングを電光石火で簡単にかわした。

「ちっ！よけんじゃねえよ！」

「十万ボルト！」

「アヒャヒャ！無駄無駄！シャドーボール！」

ユウキの十万ボルトは、シャドーボールで打ち消されてしまった。

「アヒャヒャ！じゃあな！」

シャドーはそう言うと、急に姿を消した。

「……何処に行った？」

「アヒャヒャ！後ろだよ！シャドークロー！」

「グアァァァ！」

ユウキはシャドークローをまともに受けてしまった。

「ユウキ！……でもどうやって消えたの！？」

「アヒャヒャヒャヒャ！俺様は影に入る事が出来るのさ！」

リサの問い掛けにシャドーが答えた。

（影に入れる……厄介だな……どうする？）

「じゃあな！」

シャドーはそう言いながらまた姿を消した。

（影に入れる……今この部屋には影はあまりない……そして俺に致命傷を与えるのに適した影は……俺の後ろの影！）

「じゃあな！シャドーガトリング！」

「当たるか！」

ユウキはジャンプしてシャドーガトリングをかわした。

「なに！？かわしてんじゃねえよ！！」

「穴を掘る！」

ユウキは穴を掘るで地中に潜った。

「またパワーアップするか！無駄だなぁ！……なに！？」

ユウキはすぐに地中から出て、シャドーにアイアンテールを決めた。

「ふざけやがって！エナジーボール！」

ユウキはエナジーボールを受け、その場に倒れた。

「その程度か！？つまんねえな！……なに？」

ユウキの体はその場から消えてしまった。

「喰らえ！雷鳴剣……鏡面刹！」

「グハァ！」

ユウキは雷鳴剣で、目にも留まらぬ速さで何回も攻撃した。

「ふざけやがって！シャドーガトリング！」

「ぐっ！」

ユウキは鏡面刹の途中に、シャドーのシャドーガトリングを受けてしまった。

「ハァ……ハァ……そろそろやばいな……」

「アヒャヒャ！そろそろ終わりかぁ！？エナジーボール！」

「くっ……召雷斬！」

ユウキは召雷斬で、シャドーのエナジーボールを相殺した。

「アヒャヒャ！影分身！」

シャドーは影分身で自分の分身を作り出した。何故かゲンガーがたくさんいるのは少し気持ち悪いと、ユウキは思った。

「面倒だな……羅刹陣（らせつじん）！」

ユウキは雷鳴剣に更に電気を流して大きくし、分身達を一刀両断に

した。だがその時、何故かユウキの両腕に鋭い痛みが走った。その痛みで、ユウキに少し隙が出来た。

「隙ありだぜ！ヘドロ爆弾！」

「グアァァ！！」

ユウキはヘドロ爆弾をまともに受けてしまった。ユウキは今までのダメージもあり、既に足元がふらついていた。

「くっ……まずいな……」

「そろそろ終わりにするか！？破壊光線！」

シャドーはユウキに破壊光線で止めを刺しにきた。

「……一回雷鳴剣を消すか……ハァ！」

ユウキは雷鳴剣の雷を自分の体に戻し、その雷でボルテックススタイルになった。

「……守る！」

ユウキは破壊光線をぎりぎり守るで防いだ。だが、破壊光線の衝撃で、少し押されてしまった。

「アヒャヒャヒャヒャ！俺様の勝ちだ！！」

シャドーは、ユウキが守るで防いだ事に気づかず、自分の勝利を確信した。だがユウキは、その場にいなかった。

「なんだぁ!?消し飛んだか!」

「油断……過信……それがお前の弱点だ!ライジング・ブレイカー!!」

「なっ!グアァァァ!!!」

シャドーは、ユウキのライジング・ブレイカーを受けて吹き飛ばされ、壁に衝突した。シャドーはその場に崩れ落ちた。

ユウキは破壊光線の衝突時に発生した煙りを使った。煙りで自分の体が見えない時にボルテックススタイルの雷を足に集中、スピードを高めて、一気にシャドーの後ろに回り込んだ。そして雷を右手の一点に集中し、ライジング・ブレイカーの威力を上げて、それを放つ。それがとっさに思い付いたユウキの作戦だった。

「……終わった」

ユウキは疲労からか、その場に倒れ込んだ。

「ユウキ!!大丈夫!?」

リサは、ユウキの事を心配しながらユウキのもとに来た。まだ痺れているのか、少し歩き方が変だった。

「嗚呼……なんとかな……」

「……ユウキ。助けてくれてありがとう……」

ユウキはリサの言葉に、少し顔を赤くしながらそっぽ向いた。

「リサも大丈夫か？」

「うん。大分痺れも引いて来たし、怪我もないよ」

「……そうか」

ユウキがリサと話していると、シャドーが少し不信な動きを始めた。

「アヒャ……ヒャ……俺様は……負けない……“あのお方”から貰った……この力……解放の時！」

シャドーがそう言った刹那、シャドーの体から闇があふれてきた。

「なんだ……何が起きている！？」

「アヒャ！アヒャ！アーヒャヒャヒャヒャ！！！貴様達ヲ！！ブッ潰ス！！！」

シャドーはどうやら暴走しているように見えた。

「まだ終わりじゃないということか……」

「ユウキ！私も参戦するよ！ユウキは少し休んでて！」

「……大丈夫なのか？」

「うん……だって私、守られてばかりは嫌だもん！」

リサは自分の気持ちをユウキにぶつけた。

「……わかった。３０秒でいい！時間を稼いでくれ！」

「うん！わかったよ！」

リサはシャドーに向かって走り出した。

「さて……プクリンから貰った薬を使うか……」

ユウキは前にプクリンから貰っていた回復の薬を探検隊バッグから出し、薬を飲んだ。

「……やっぱり薬というものはマズイな……まあいい、リサ！今行くからな！」

ユウキは戦っているリサのもとに走り出した。

「アヒャヒャ！ダークボール！」

シャドーは、シャドーボールを漆黒の色に染まったボール、ダークボールを放ってきた。

「電光石火！」

リサはダークボールを電光石火でかわした。ダークボールが当たった所は、小規模なクレーターみたいになっていた。

「あんなの受けちゃったら一回でやられちゃうよ……でも頑張らなくちゃ！」

リサはそう言いながら火炎放射を放った。だがリサは火炎放射を使える事を知らなかったので少し驚いてしまった。

「えっ？私火炎放射が使えるようになってる！」

「無駄ダ！悪の波動！」

シャドーは、悪の波動で火炎放射を相殺した。その間に、シャドーはリサに接近した。

「えっ！？いつの間に！？」

「アヒャヒャ！終ワリダ！ダークスラッシュ！」

シャドーは右手に漆黒の爪を作り出し、リサを切り付けようとした。

「マズイよ！！」

リサは思わず目を閉じた。しかしいくら待っても攻撃は来ない。恐る恐る目を開けると、ユウキが雷鳴剣で漆黒の爪を受け止めていた。

「ユウキ！」

「大丈夫か？ここからは俺も参戦する。リサは援護を頼む」

「うん！」

リサは、やっぱりユウキはカッコイイと内心で思いながら少し後ろに下がった。

「アヒャヒャ！コノ能力ガアレバ貴様達ナド相手ニナラン！！」

「フン、いくら強大な力でも勝てるとは限らない。それを証明しよう。リサ！行くぞ！」

「任せて！絶対に負けないんだから！」

ユウキとリサは、シャドーと決着をつけるために走り出した。

## 第三十三話　宿敵との戦い！ＶＳシャドー！　前編（後書き）

ユウキ
「後編もあるのかよ」

まあね♪

リサ
「始めてじゃないかな？」

その通りさ♪

## 第三十四話　宿敵との戦い！ＶＳシャドー！　後編（前書き）

第三十四話完成！

ユウキ
「奴との決着か」

その通り！

では第三十四話をどうぞ！

# 第三十四話　宿敵との戦い！ＶＳシャドー！　後編

「アヒャヒャ！貴様達ハココデ終ワリだ！ダークボール！」

シャドーは、漆黒の球を作り出して、ユウキ達に攻撃してきた。ユウキ達はそれを難無くかわした。

「今度はこちらからいくぞ！召雷斬！」

「私も！火炎放射！」

「無駄無駄ァ！ダークウォール！」

シャドーは自分の周りに漆黒の壁を作り出し、召雷斬と火炎放射を吸収した。

「えっ！？吸収したよ！？」

「オカエシダ！」

シャドーは、漆黒の壁に吸収した召雷斬と火炎放射のエネルギーでユウキ達に攻撃してきた。

「なに！？」

「跳ね返してきたの！？」

ユウキ達は驚いたが、とっさの判断で、ぎりぎりかわすことが出来た。

「びっくりした～！」

「まさか跳ね返してくるとはな……なら接近戦でいくか」

「……ねえユウキ、私試したい事があるの……いいかな？」

「今か？大丈夫か？」

ユウキはこのバトル中に試したい事があるとは思ってもいなかったので、少し驚いてしまった。

「うん！まず……」

リサは自分の試したい事を、ユウキに説明した。

「……なるほどな。確かに理論上なら上手くいくかもしれないが、危険を伴うかもしれないな……」

「大丈夫！上手くいくよ！」

ユウキは少し悩んだが、リサの意気込みを信じる事にした。

「……わかった。無茶はするなよ」

「任せてよ！」

「相談ハオワッタカ？ナライクゾ！ダークスラッシュ！」

シャドーは漆黒の爪でユウキに攻撃してきた。

「無駄だ！雷壁波！」

ユウキはシャドーの攻撃を、雷の波を発生させ、それを壁のかわりにして防いだ。

「ソンナ雷ナド無駄ダ！」

シャドーは雷など気にせず突っ込んで来た。

「なら……羅刹陣！」

ユウキは雷鳴剣で、シャドーを一刀両断しようとしたが、シャドーはそれを難無くかわしてしまった。

「かわされたか……ぐっ！」

ユウキはまたしても両腕に鋭い痛みを感じ、思わず雷鳴剣を消してしまった。

「隙アリダ！ダークボール！」

「守る！」

ユウキはシャドーのダークボールを、守るで難無く防いだ。

「影分身！」

ユウキは守るで防いだ直後、影分身で自分の分身を作り出した。そしてここからユウキの作戦が始まった。

「面倒クセエ！ダークスラッシュ！」

シャドーは、漆黒の爪で分身を一気に消しにかかっていた。しかし、分身がいなくなったのに、ユウキは四匹いた。

「ナンダ？ミガワリカ？ソンナ技シカ使エナイカ！ヤッパリ俺様ノ方ガ強イナ！」

「さっきも言ったが……貴様の弱点は油断、過信だ……十万ボルト！」

ユウキは十万ボルトで、シャドーに攻撃したが、簡単にかわされてしまった。

「無駄ダァ！ダークボール！」

「グアァ！」

ユウキの分身は、シャドーのダークボールで消されてしまった。

「残リモ消シテヤル！ダークボール！」

シャドーは残りの分身もすべて消してしまった。

「アヒャヒャヒャヒャ！！終ワリカ！？ン？本体ガイネェ！」

「やっと気づいたか……終わりはお前だ！電磁波！」

ユウキは地中から出てきて電磁波を使い、シャドーを麻痺させた。

「貴様ァ！！」

「リサ！今だ！」

「うん！エクス・クロー！！」

リサはシャドーに接近し、炎を纏った足の爪で、シャドーにXの形に引っかいた。そして引っかいた場所は爆発した。

「グアァァァ！！」

シャドーは、麻痺していたので、リサのエクス・クローをかわすことが出来なかった。

「貴様ァァァ！！ダークストーム！！」

シャドーは漆黒の竜巻を作り出し、ユウキとリサに攻撃しようとした。

「これはマズイな……電光石火から守る！」

ユウキは電光石火でリサに近づき、守るで漆黒の竜巻を防いだ。

「ありがとうユウキ！」

「気にするな。それにまだ奴は倒れていない！」

ユウキは、今回の作戦でシャドーが倒れると思っていたが、暴走してから、防御の面が強くなっていることは頭になかった。

ユウキは今回、自分が囮になり、シャドーを撹乱し、その間にリサがエクス・クローを使うためのパワーをためる。そして影分身が、リサの行動開始の合図だった。ユウキは影分身とともに身代わりを使う。そして本体は穴を掘るで地中に潜り、分身がいなくなれば、おそらくシャドーは油断するはずだ。その瞬間に電磁波を使い、シャドーを痺れさせる。そしてリサがエクス・クローで止めを刺す…はずだったが、ユウキの作戦は失敗に終わった。

「消エロ！ダークガトリング！」

シャドーは小型の漆黒の球をガトリングのように連続で攻撃してきた。

「くっ電光石火！」

ユウキは電光石火でダークガトリングをかわした。

「どうするの！？」

「正直手がない……どうすればいい……」

「アヒャヒャ！ダークストーム！」

ユウキが悩んでいると、シャドーは容赦無くダークストームで攻撃してきた。ユウキ達はシャドーの攻撃をかわす事しか出来ず、防戦一方になっていた。しかし、ユウキにある一つの作戦が思い付いた。

「……これで上手くいかなかったら終わりだな……」

「どうするの？」

ユウキは作戦の説明をした。それを聞いてリサは少し驚いてしまった。

「そんな事が出来るの！？」

「多分な……いや、そう信じたい」

「……わかったよ！私ユウキを信じるよ！」

「良し……いくぞ！充電！」

ユウキは充電を始めた。だがユウキは隙だらけになってしまった。その瞬間をシャドーは見逃さなかった。

「隙ダラケダ！ダークボー――」

「させないよ！火炎放射！」

リサは、ユウキに攻撃しようとしたシャドーに、火炎放射で攻撃したが、あまり効いていないようだ。

「邪魔ダァ！ダークスラッシュ！」

「私だって！エクス・クロー！」

シャドーの漆黒の爪と、リサの炎の爪がぶつかり合い、爆発がおこ

った。

「うぅっ……」

「終ワリダァ！ダークガト――」

「させるか！ライジング・ブレイカー！」

ユウキは充電が完了し、ボルテックススタイルになっていた。シャドーはユウキの奇襲に反応出来ず、まともに受けてしまった。さすかのシャドーも、ユウキがボルテックススタイルになっていたため、かなりのダメージだった。

「グッ！許サン！消エロ！！ダークボール！」

「来た！ハアァァ！！」

ユウキは、ボルテックススタイルの力を、自分のしっぽに集め始めた。しかし、その間にも、漆黒の球は接近してきていた。

「ユウキ！早く！」

「……よし！いくぞ！ライジング・テール！」

ユウキは自分のしっぽに雷をため、シャドーのダークボールをしっぽで打ち返した。

「ナニィ！？グアァァァ！！！」

シャドーは思ってもいなかったユウキの反撃に避けられず、まともに受けた。さすかのシャドーも、効果抜群の技を喰らえば耐えられ

ず、その場に崩れ落ちた。

「ユウキ！やったね！」

「あっ……嗚呼……上手くいったな……」

ユウキは気が抜けて座りこんでしまった。

今回はユウキが、ボルテックススタイルの雷をしっぽにため、シャドーのダークボールを跳ね返せば、さすがのシャドーも倒れるんじゃないかと考えたのだ。だが、この作戦はは成功の確率が低く、ユウキはあまり自信が無かったが、結果的には上手くいったのだ。

「早くプクリン達をカプセルから出さないと！……ユウキ？」

リサがユウキに声をかけても返事はなかった。確認すると、ユウキは座ったまま眠ってしまっていた。

「ユウキ……お疲れ様……」

リサはユウキを寝かせ、プクリン達を閉じ込めてるカプセルの方に行こうとした刹那……シャドーが急に立ち上がった。

「うそっ！まだ倒れないの！？」

「アヒャヒ……勝ツノハ……俺様……スベテ……フキトベ！！ダイバクハツ！アヒャ！アヒャ！アーヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！」

シャドーは自分を犠牲にして放つ大爆発を使ってきた。

「マズイよ！このままだと！」

そう、このまま大爆発を使われると、ユウキが巻き込まれてしまうのだ。

「ユウキーーー！！！」

「消エロォォォ！！！！！アーヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！」

そして、シャドーは自分を犠牲にして大爆発した……

## 第三十四話　宿敵との戦い！ＶＳシャドー！　後編（後書き）

リサ
「えっ！？どうなるの！？」

今言ったらネタバレでしょうが

リサ
「まあそうだけど……」

## 第三十五話　対面（前書き）

第三十五話完成！

チサ
「ユウキは大丈夫なのかなー？」

それは今回の話しの中で

では第三十五話をどうぞ！

# 第三十五話　対面

「アヒャヒャ！スベテキエロオォォォ……」

シャドーの捨て身の大爆発は、この部屋全てを巻き込んだ。幸いプクリン達はカプセルに閉じ込められていたので無傷ですみ、さらにその衝撃でカプセルが壊れ、脱出出来た。

「やっと出られたわ！みんな大丈夫？」

「大丈夫だよ♪それよりユウキとリサは！？」

プクリン達はユウキとリサの安否を気にしたが、煙りのせいで見えなかった。

「……無事なのか……」

「煙りが～晴れてきたよ～」

煙りが晴れると、そこにはボロボロになって倒れているシャドーしかいなかった。

「そんな……ユウキとリサは！？」

ミズキの悲痛な叫びは部屋に響き渡った。しかし誰からも返事は来ない。

「ユウキ……リサ……僕は……」

プクリンは今にも泣き出しそうだった。だがその刹那、急に地面が盛り上がってきた。

「……！？なんだ！？」

さすがのソウルも驚いていた。そして、地面からリサとユウキが出てきた。

「ユウキ！リサ！」

「ふぅ……なんとか助かったよ」

「でも～どうやって～？」

リーフの質問にリサは答え始めた。

リサはシャドーが大爆発をする刹那、どうにかしてユウキを助けたいと思った。そして、あることをリサは思い付いた。リサは電光石火でユウキに近づき、穴を掘るでユウキと自分が地中に潜り、大爆発をかわすという方法だった。かなりのリスクを伴う方法だったが、リサの迷いの無い動きが成功に導いたようだ。しかしリサは大爆発に少し巻き込まれたか、少し怪我をしていた。

「それよりユウキは！？」

「問題無い。疲れて眠ってしまっているだけだ」

リサの言葉に、ソウルが優しく答えた。リサはそれを聞いて一安心した。

「良かった……本当に良かった……」

リサは安心と疲れからか、座り込んでしまった。

「どうするー？少し休んでから行くー？」

「いや、ユウキさんもリサさんも疲れていますから、少し休んだ方が良いですね」

ジンの提案により、これからの戦いに備えて少し休むことにした。

休憩を始めてから数分後、ユウキが目を覚ました。

「うっ……俺は……？そうだ！シャドーは！？リサは！？」

「ユウキ！大丈夫！？」

「リサ！シャドーは！？」

「あそこにいるよ」

ユウキは、リサの向いた方を見ると、そこにはボロボロで倒れてるシャドーがいた。

「やっと終わったのか……」

「うん……ユウキ、ありがとう……私が怪我した時も今回も……」

「……気にするな。俺はリサを助けたかった……それだけだ」

ユウキは少しそっぽ向いたような感じで言った。リサはユウキのそぶりに穏やかな笑みを浮かべた。

「もう……ん？ジン？」

リサが振り返ると、そこにはジンがいた。

「もう良いんですか？」

「どっどういう意味？」

「フフッ……なんでもないですよ」

ジンはちょっと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「ジっジン！」

「フフッ……それよりプクリンさんがそろそろ出発しようと。お二人は大丈夫ですか？」

「嗚呼……リサから貰ったオボンの実を食ったからな……」

「私も大丈夫だよ！」

「じゃあそろそろ行こうか♪」

プクリンがユウキ達に近づいてそう言った。ユウキ達はソーマのいる部屋を目指して走り出した。

一方、クロはユウキ達が助けたポケモン達の手当てをしていた。ちなみにレイドも手伝っている。レイドは最初、ジンの手伝いに行ったが、途中にクロの手伝いをすることになったのだ。

「よし……次っすね！」

「お兄ちゃん！リンも手伝う！」

クロが次のポケモンの手当てに入ろうとした刹那、クロの妹のリンが手伝いたいと申し出た。

「出来るっすか？」

「うん！リン頑張る！」

「なら私が教えますわ」

「ならお願いするっす！」

レイドはリンに手当てのやり方を教え始めた。

「……みんなは大丈夫っすかね……でも今はおれっちに出来ることをやるっす！」

クロはユウキ達の勝利を信じ、今自分に出来ることをやり始めた。

ユウキとリサがシャドーと死闘を繰り広げた部屋から出て数分後、ユウキ達の前に頑丈な扉が現れた。

「頑丈そうな～扉だね～」

「こんな扉、ワシが破壊してくれるわ！」

「その必要はありません」

ドダイトスが扉を破壊しようとした刹那、突然声が響いてきた。

「その声は……ソーマ！」

プクリンは誰よりも早く反応した。

「プクリン、久しぶりですね。ドダイトス、扉を破壊しようとするなんて、相変わらずですね。心配しなくても今開けますよ」

ソーマの声が聞こえなくなった刹那、目の前の扉が開いた。

「よし……入るぞ」

ユウキ達が部屋に入ると、そこにはかなり大きなマシンと、ルカリオのティル、そして、マシンの前には、二本のスプーンを持ち、ヒゲのはえている人型のポケモン……フーディンがいた。彼がソーマだ。

「ようこそ。勇敢な者達よ」

「ソーマ！お前は一体なにがあったんだ！？」

ソウルがソーマに問い掛けた。ソーマは怪しい笑みを浮かべた。

「フフフ……私は私の理想の世界を作るのです！」

「理想の世界！？ポケモン達を操ってなにが理想の世界だよ！」

さすがのプクリンもソーマの言ったことに反発した。

「私は作るのです……誰も悲しまない……全てのポケモンが平和に暮らせる世界を……もう私みたいに悲しむポケモンを増やさないためにも……」

ソーマの言ったことにプクリンは黙り込んでしまった。だがいくら良い世界を作るためでもやってはいけない事がある。プクリンはそう考えた。

「でもソーマ！」

「あなたの言いたい事はわかります。ですが今のソーマ様には何を言っても無駄ですよ」

プクリンの発言を、ティルが止めた。

「お姉ちゃん！」

「ジン……あなたもわかるでしょう？私達の村みたいな事が起こらない世界を作れるのですよ？」

「それは……」

ジンも言葉を濁した。プクリン達はソーマ達の言った事に動揺し始めてしまった。だが一匹だけは違った。

「お前ら……そこまで腑抜けなのか？」

そう、ユウキだった。ユウキはいくら良い世界を作れるためとはいえ、こいつらのしたこと、そしてリサを傷つけた事は許さない。そう考えていた。

「ユウキ……でも僕は……」

「いい加減にしろ！！いくら正しい世界を作るとはいえ奴らのやっている事は間違っている！世界を作るためにポケモンを操る！？ふざけるな！俺達はそれを止めるために来たんじゃねえか！！」

ユウキの説得はプクリン達の心に響いた。そうだ、僕達はソーマに

これ以上暴走させない……ソーマを止めるのは僕達しかいない！―
―プクリンは決意した。ソーマを倒してでも止めると。

「……そうだね。僕達がやらなくちゃ！」

「……わかりました。なら新たな世界のための尊い犠牲になりなさい。ティル、行きなさい」

「わかりました。波動弾！」

ティルは波動弾でプクリンに攻撃したが、それはジンによって阻まれた。

「……ジン、何故わからないの？もう悲しむ必要がなくなるに……」

「……確かにそうかもしれません。でも……でも！お姉ちゃん達は間違ってる！平和な世界はポケモン達みんなが力を合わせて作る物じゃないんですか！？」

ティルはジンの悲痛な叫びを聞いても心は動かなかった。

「……ジン、あなたとはわかりあえませんね……」

「大丈夫。きっとお姉ちゃんはソーマに操られてるだけです。すぐに正気に戻します」

「ジンー！私も忘れないでよー！」

「すっすいませんでした」

ジンは突然チサに声をかけられて少し驚いていた。

「さすがにこの数は辛いですね……来なさい！」

ティルがそう言うと、ゲートから操られてるポケモンが現れた。その数、およそ十体。

「かなりの数ですね……」

「心配はいらない。雑魚は俺達に任せろ」

ユウキはジンにそう言った。ジンとチサはユウキとリサに任せ、ティルのもとに向かって走り出した。

「さて……かなりの数だが……リサ、いけるか？」

「うん！大丈夫！」

「ならいくぞ！」

ユウキ達は操られてるポケモン達に向かっていった。

一方、プクリン、ソウル、ドダイトスの三匹は、ソーマと対峙していた。

「まったく……あなた達にはかないませんね……まさか止めに来る

とは」

ソーマは少しため息をしながら言った。

「ソーマ、お前は間違っている。今からでも遅くない。戻って来い」

「それはかないません。あのお方からもらった技術を無駄には出来ませんからね……」

ソウルの説得にもソーマは応じなかった。

「これ以上は無駄だ！こいつはワシ達の敵だ！そう考えろ！」

「……ドダイトス」

「ソーマを止める……いや、救うためだ！！」

「わかった！」

プクリンも戦う決意をしたようだ。

「フフフ……そういえばあなた達と戦うのは始めてですぬ……皮肉なものだ……来なさい！」

この瞬間、ソーマとの決戦の火蓋が切って落とされた。

## 第三十五話　対面（後書き）

ユウキ
「いよいよソーマと対決か」

まあね。気合い入れなくちゃ！

ユウキ
「しっかりやれよ」

## 第三十六話　それぞれの戦い（前書き）

第三十六話完成！

ユウキ
「少し無理がある気がするな」

レイド
「同感ですわね」

うぅ……（／＿＞・）

レイド
「では第三十六話をご覧ください」

# 第三十六話　それぞれの戦い

ユウキとリサは、操られてるポケモンに囲まれていた。その数十匹。

「かなり多いな……」

「でもやるしかないよ！」

「そのつもりだ！十万ボルト！」

ユウキは十万ボルトで、操られてるポケモンの中のスターミーに攻撃したが、ゴローニャがスターミーの盾になり、スターミーにダメージは無かった。

「ふん、一筋縄ではいかないか。なら一気にいく！」

ユウキは雷鳴剣を作ろうと、両腕に電気をためたが、今までで一番鋭い痛みが両腕に走った。

「ぐはっ！？」

「ユウキ！？どうしたの！？」

リサは、ユウキが急に悲鳴を上げたので驚いてしまった。

（ちっ……雷鳴剣をつかうたびに両腕に痛みが走りやがる……）

「ユウキ！来るよ！」

リサがそう言った刹那、ユウキ達の前には、ハブネークが接近し、ポイズンテールを放ってきた。

「させるか！アイアンテール！」

ユウキは、ハブネークのポイズンテールを、アイアンテールで受け止めた。そしてハブネークが怯んだ瞬間に、雷パンチで攻撃した。ハブネークはその場に倒れ込んだ。

「さすがユウキだね！」

「油断するな！来るぞ！」

ユウキの言う通り、仲間が倒されたせいか、一気に襲ってきた。

「頭に血が上っていては俺には勝てないさ。電光石火から雷パンチ！」

ユウキは攻撃を的確にかわし、雷パンチで攻撃していった。

「私だって！火炎放射！」

リサも火炎放射で攻撃していったが、ソーマを守っているだけあってか、なかなか倒れない。

「さすがに倒れないか……なら、ハァァァ！！」

ユウキは充電を始めたが、そんなことはさせないと言わんばかりに攻撃してきた。

「フッ……愚かだな。俺には最高の相棒がいるのを忘れたか？」

「いくよ！エクス・クロー！！」

リサは、ユウキに攻撃してきたポケモンに、エクス・クローで攻撃した。事前にパワーをためていたのだ。この攻撃で三匹倒れた。残りは六匹になった。

「やった！」

「さすがだな……よし、準備完了だ。いくぞ！」

ユウキは充電でためた電気で、ボルデックススタイルになった。

「ライジング・ブレイカー！！」

ユウキはライジング・ブレイカーでブースターに攻撃した。ブースターは吹き飛ばされ、仲間のゴーリキーにぶつかってしまった。そして二匹ともダウンした。これで残り四匹になった。

「いくよ！穴を掘る！」

リサは穴を掘るで地中に潜った。操られてるポケモン達は、リサが何処から来るかとキョロキョロしていた。ユウキはそれを見逃さなかった。

「隙だらけだ。ライジング・テール！」

ユウキは隙だらけになっていたスターミーにライジング・テールで攻撃した。相性が良かったせいか、一撃で倒れた。あと三匹になっ

た。

「隙あり！火炎放射！」

リサは後ろに回り込み、火炎放射で攻撃した。三匹の中のラフレシアは火炎放射が直撃し、倒れた。残りはゴローニャと、マタドガスの二匹になった。

「あと二匹……いけるか……なに！？」

ユウキが後ろを向くと、マタドガスがジャイロボールで攻撃してきた。ユウキは突然の攻撃でかわす事が出来ず、吹き飛ばされて壁に激突した。

「グハッ！」

「ユウキ！？」

リサがユウキの方を向いた刹那、ゴローニャがリサに捨て身タックルで攻撃してきたが、リサはギリギリかわした。リサはユウキの所に行くと、ユウキはかなりダメージがありそうだった。

「ユウキ！？大丈夫！？」

「あっ……嗚呼……」

ユウキはなんとか立ち上がったが、フラフラしていた。

「ユウキは休んでて！私が行く！」

「……すまない」

リサは二匹のもとに走り出した。ユウキは一匹であることをしていた。

「……次の一撃で決めるか……」

ユウキは次で倒すために両腕に電気をためていたが、やはり鋭い痛みが走った。

「くっ……こんなもの、リサを守るためならなんて事はない……」

ユウキは痛みに耐え、雷鳴剣を作り出した。

「よし、いくぞ！」

ユウキは戦ってるリサのもとへ走り出した。

一方リサは、かなり苦戦していた。二匹のコンビネーションはかなりのものだったからだ。

「ハァ……ハァ……」

リサは敵の攻撃を、なんとかかわしていたが、こちらから攻撃が出来ず、防戦一方だった。

「ハァ……頑張らなくちゃ……」

リサは火炎放射を放ったが、ゴローニャは守るで簡単に防いだ。

「ハァ……ハァ……!?しまった!」

リサが火炎放射でゴローニャに攻撃している間にマタドガスはリサの後ろに回り込んでいた。

「もうダメ……ユウキ…」

リサが諦めかけた刹那、マタドガスが何故か吹き飛ばされた。

「えっ……？」

リサは恐る恐る目を開けると、そこには傷だらけのユウキがいた。

「ユウキ……」

「リサ、頑張ったな。あとは任せろ」

ユウキはそう言うと、マタドガスに鏡面刹で止めを刺した。ちなみに、この時リサの顔がほんのり赤くなっていたことはまた別のお話。

「ふぅ……あとはアイツか……アイツには雷鳴剣は効果ないな……ハァ！」

ユウキは雷鳴剣の電気を自分の体に戻し、再びボルデックススタイルになった。

「さあ……来い！」

ユウキがそう言うと、ゴローニャはストーンエッジで攻撃してきたが、ユウキは電光石火でかわした。

「後ろががら空きだ……アイアンテール！」

ユウキはゴローニャの後ろに回り込んでアイアンテールを決めた。相性が良く、ダメージは大きかったか、ゴローニャは倒れた。

「終わったな……ぐっ！」

ユウキに先程の雷鳴剣を出した時の痛みが襲った。

「やったね！……ユウキ？どうしたの？」

「いや、なんでもない」

ユウキはこの時確信した。雷鳴剣を使いすぎると、腕に負担がかかり、痛みが走る。このまま雷鳴剣を使いすぎるとマズイことになると。ユウキはそう考えた。

「はやくみんなの所に行かなくちゃ！」

「その必要はない」

「えっ？」

ユウキからの思わぬ発言で、リサは少し戸惑ってしまった。

「みんなそれぞれの戦いがある。俺達が邪魔する必要はないさ。本当にマズイ時だけで十分だ」

「……そうだね。うん、わかったよ」

ユウキ達はとりあえず先程の戦いのダメージを癒すことにした。

一方ジンとチサは、ジンの姉、ルカリオのティルとバトルをしていた。

「波動弾」

「冷凍ビーム！」

チサは、ティルの波動弾に対して冷凍ビームを放ったが、波動弾の方が威力が高く、打ち消され、そのまま向かってきた。

「僕に任せてください！守る！」

ジンは、波動弾を守るで防いだ。だがペースはティルに向いていた。

「行きますよ。メタルクロー」

「任せてー！ピヨピヨパンチ！」

チサはティルのメタルクローに対してピヨピヨパンチを使った。二匹の技の威力は同じぐらいだった。

「一気に決めます。ストーンエッジ」

ティルはストーンエッジで勝負に出た。

「チサ！」

「うん！冷凍ビーム！」

「気合い玉！」

ジンとチサは、それぞれの最強の遠距離攻撃をしたが、ティルのストーンエッジはそれすらを貫き、ジン達に攻撃した。

「うわぁぁぁ！」

「きゃぁぁ！」

ジンとチサは、ストーンエッジが直撃し、その場に倒れた。

「終わりですね……ん？」

ティルが去ろうとした刹那、ジンとチサが立ち上がろうとしていた。

「まだやる気ですか……」

「……お姉ちゃん……どうして……ソーマと手を組んだんですか！？」

「……ジンとチサも知っている通り、私達の村は盗賊団に襲われました。私は自分の力の無さを恨み、力を手に入れる為に行動していた時に……ソーマ様に出会いました。あの方の作りたい世界に共感を得ました。だから協力しているのですよ」

ティルの説明に、ジンは納得しなかった。ジンの知っているティルはもっと優しかった。絶対に変わらない。ジンはそう確信していた。

「お姉ちゃんは優しかった……僕はそれを信じています」

「無駄な……波動弾」

ティルはジンに波動弾で攻撃してきたが、ジンは守るで防いだ。

「チサ！あれを使います！」

「えっー！？まだ完成したかわからないのにー！？」

「やるしかないです！お姉ちゃんを助けたくないんですか！？」

「……わかったよー！」

ジンとチサは、取っておきの技を使うことにした。

「なにをしても無駄ですよ。気合いパンチ」

「お姉ちゃん……行きます！チサ！」

「うん！」

『ドレインパンチ！！』

ジンとチサは、ドレインパンチで、ティルの気合いパンチに応戦した。するとティルは少し動きが鈍くなった。ティルは気合いパンチでチサの攻撃を相殺、もう片方の手でジンの攻撃を受け止めた。

「この技は……」

「そうですよ……小さいころ、お姉ちゃんが僕とチサに教えてくれた技ですよ……」

「お願いお姉ちゃん！もとに戻ってー！」

「うるさいうるさい！これで終わりです！気合い玉！」

ティルは気合い玉で攻撃してきた。その様子は明らかに動揺していた。

「僕も！気合い玉！」

「冷凍ビーム！」

ティルの気合い玉は、ジンとチサの攻撃で相殺され、小規模な爆発が起こった。

「うぅ……私は……ジン……チサ……あぁぁぁぁ！！」

「ドレインパンチ！」

ジンはティルに渾身の気合いパンチを放った。だが、まだティルは立っていた。

「お姉ちゃん……」

「……ジン……チサ……」

ティルはそう言いながら、その場に倒れた。

## 第三十六話　それぞれの戦い（後書き）

クロ
「あれっ？どうなったんすか！？」

ティルの安否は次回です

クロ
「気になるっすー！」

## 第三十七話　友を救え！ＶＳソーマ！　前編（前書き）

第三十七話完成！

プクリン
「今回は僕達～♪」

その通り♪

では第三十七話をどうぞ！

# 第三十七話　友を救え！ＶＳソーマ！　前編

「お姉ちゃん！！」

ジンは倒れたティルのもとに向かった。ティルはぐったりしていた。

「お姉ちゃん！しっかりしてー！」

「ジン……チサ……私は……」

ティルがそう言った刹那、ティルの体から、リサの時みたいに、黒渦みたいのが抜けていった。

「うぅ……ジン……チサ……私は……」

『お姉ちゃん！？』

ティルの瞳は、殺気を出した感じから、穏やかな瞳になった。

「私は……そうだ。旅をしている時にあの男……ソーマに会って……一緒に行動するようになって……そうしたらソーマが作った装置に繋がれて……それからは覚えてないわ……」

「一体何があったんですか？」

ティルはジンの質問を聞き、ゆっくりと話しはじめた。

「ジン達が知ってる通り、私は村が滅びた後、旅に出たわ。私は力が欲しかったの。もう誰も失いたくなかったから……その旅の途中

であの男……ソーマに会ったの。ソーマは誰も悲しまない世界を作ると言っていたわ。私はそれを聞いて協力することにしたの……でも、ソーマのやっていることは間違っていた。だから私はソーマを止めようとしたんだけど……見たことの無い装置に繋がれて……そこからは覚えてないわ……」

ティルは今までにあったことを、ジンとチサに説明した。チサは凄い驚いていた。

「そんなことがあったなんてー……」

「でもジンとチサが助けてくれたんでしょ？ありがとう」

「……お姉ちゃーん！」

チサはティルに飛びついた。ティルはそれを優しく受け止めた。ジンはそれを見て、自分の感情を抑え切れなかった。

「お姉ちゃん……！」

ジンもチサと同じようにティルに飛びついた。やっと会えた……そう思いながら。

一方、プクリン達は、ソーマを相手に少し苦戦していた。一対三とはいえ、プクリン達の想像よりソーマの力は強かったのだ。

「どうしました？貴方達の力はその程度ですか？」

「なにを！リーフストーム！！」

ドダイトスは、自分の持つ技の中で、強力なリーフストームで攻撃したが、ソーマにテレポートでかわされてしまった。

「遅いですよ」

「ちっ！」

「だが甘いな。火炎車！」

ソウルは、ソーマがテレポートでかわすことを読んでいた。ソーマがテレポートて移動した所を素早く判断し、火炎車で攻撃した。

「甘いのは貴方ですよ、ソウル。守る」

ソーマは、ソウルの火炎車を守るで防いだ。ソウルは守るで作られたシールドに弾かれてしまった。

「くっ……まさか読まれるとは」

「フフッ……貴方達と何年一緒に行動したと思ってるんですか？貴方達の考える事は大抵わかりますよ」

「それは僕達にも言えるよ！たあぁぁぁ！！」

プクリンはハイパーボイスをソーマに放った。

「相変わらずプクリンのハイパーボイスは強力ですね……サイキック・ボール！」

ソーマは、プクリンのハイパーボイスに対して、自分の超能力のエネルギーを球体の形に変え、放った。二つの技はぶつかり合い、相殺した。

「なにっ！？プクリンのハイパーボイスを相殺しただと！？」

「私は強くなったのですよ。サイキック・ブラスト！」

ソーマは、自分の持つ二つのスプーンから、ドダイトスに向かって、自分の超能力のエネルギーを放ってきた。それはサイケ光線に似ているが、大きさも威力も桁違いだった。

「守る！」

ソウルはドダイトスの前に出て、守るでドダイトスを守った。

「スマナイ！」

「気にするな」

「油断は大敵ですよ。サイキック・ホーミング・シャワー！」

ソーマは、上空にサイキック・ボールを放ってきた。そしてそれを

破裂させ、小さくし、無数に出来た球体をプクリン達に向けて放った。それはまさにシャワーのようだった。

「みんな避けて！」

プクリンの言った通り、三匹はかわしたが、その球体は、プクリン達を追跡した。

「フフッ、伊達にホーミングと名付けてないですよ。その球体は私がコントロールしてますからね。避けることはほぼ不可能ですよ」

ソーマの言う通り、球体は避けてもプクリン達に迫って来る。

「なら避けなければいいわ！エナジーボール！」

「同感だ。火炎放射！」

「僕も！雷！」

プクリン達は、それぞれの技を球体にぶつけ、相殺することが出来た。

「隙ありですよ。サイキック・ブラスト！」

ソーマは、技を放った後の隙を突いてきた。

「任せて！たあぁぁぁ！！！」

プクリンはソーマのサイキック・ブラストにハイパーボイスをぶつけ、相殺した。

「なかなかやりますね」

「ちっ！このままじゃ拉致があかんわ！」

「自分に任せろ。影分身」

ソウルは自分の分身を作り出した。

「甘いですね……ミラクルアイ」

ソーマはミラクルアイで、分身の中にいるソウルの場所を特定した。
そして気合い玉でソウルに攻撃した。ソウルに気合い玉が直撃した。

「そんなものですか？……なに？」

攻撃を受けたソウルは、その場から消えていた。

「後ろだ。ブラストバーン！」

ソウルは地中から出てきてブラストバーンを放った。ソーマは反応出来ず、直撃した。

「グワァァァ！！」

「自分のタクティクスを舐めないでもらいたいな」

ソウルは分身を作り出した時、自分の身代わりを作り、穴を掘るで地中に潜っていたのだ。

「私は……負けない！自己再生！」

ソーマは自己再生で、今までに受けた傷を治してしまった。

「しぶといな！」

「私は負けない……私の理想の世界を作るためにも……ここで終わるわけにはいかない！サイキック・ボール！」

ソーマは超能力のエネルギーからさっきより大きい球体を作り出し、それで攻撃した。

「火炎放射！」

「水の波動！」

それぞれソウル、プクリンが技を放ち、ソーマの攻撃を相殺した。

「隙ありだ！ハードプラント！！」

ドダイトスは、プクリンとソウルが、ソーマの攻撃を止めた瞬間に、ハードプラントをソーマに決めた。

「ぐっ……仕方ないですね……使いたくなかったですが……サイキック・エンド！！」

ソーマは自分の二つのスプーンから超能力のエネルギーを自分の真上に集中させ、巨大な球体を作り出した。その大きさは、サイキック・ボールの比ではなかった。

「なんじゃありゃ！」

「あれはマズイな……」

「なんとかするよ！」

三匹は、ソーマのサイキック・エンドをどうにかして消滅させるためにパワーをため始めた。

「終わりだ！」

ソーマがそう言った刹那、巨大な球体を放った。

「いくよ！たあぁぁぁ！！」

「うむ！ブラストバーン！」

「ガハハハハ！任せろ！ハードプラント！！」

三匹は、それぞれの持つ最強の技を、ソーマの攻撃にぶつけたが、ソーマの技の威力は、プラント達の想像を遥かに越えた威力だった。プクリン達の攻撃は、ソーマのサイキック・エンドに負け、そのままプクリン達に向かって来た。

「マズイ！」

「任せろ！守……」

ソウルが守るで防ごうとしたが、間に合わず直撃した。

「私の勝ちですね」

プクリン達はその場に倒れてしまった……

## 第三十七話　友を救え！ＶＳソーマ！　前編（後書き）

ユウキ
「プクリン達がやられた？」

それは次回を待ってね

リサ
「気になるなぁ」

## 第三十八話　友を救え！ＶＳソーマ！後編（前書き）

第三十八話完成！

ユウキ

「内容ひどくないか？」

うぅ……それを言うなよ……今回はなんか無理矢理な感じがありますが……とりあえず第三十八話をどうぞ！

# 第三十八話　友を救え！ＶＳソーマ！後編

「フフッ……ちょうどいい……プクリン達を私の配下にするとしよう……」

ソーマは、倒れているプクリン達を、装置に繋げ、操ろうとした。だが、プクリン達はまだ意識があった。

「ほう……まだ意識があるとは……驚きですね」

「ソーマ……いつまでこんな事するの……？こんなことをしていても……君の友達も……家族も……妹のアヤカちゃんも喜ばないよ！！」

「っ！？」

ソーマはプクリンの言葉に動揺してしまった。

「……父さん……母さん……アヤカ……！……黙れ！戯れ事は沢山です！私に力がなかったから……アヤカは……！！」

ソーマはプクリンにサイキック・エンドで攻撃してきた。だがそれは守るによって防がれた。

「なに！？」

「自分を……なめてもらっては困るな」

そう、プクリンを守ったのはソウルだった。

「ワシもいるぞ！エナジーボール！」

ドダイトスは、驚いて、隙が出来たソーマに、エナジーボールで攻撃した。

「ちっ！サイキック・ウォール！」

ソーマは、超能力のエネルギーを自分の周りに発生させ、エナジーボールを防いだ。

「僕達は必ず君を止める……十年前、君を止められなかった償いのために……大切な友達を助けるために！！」

「……」

ソーマは、プクリンの言葉を聞いて、昔の事を思い出しはじめた……。

ソーマの住んでいた村は、小さいながらも、豊かな生活を送ってい

た。ソーマはその村で、両親と、妹のアヤカと暮らしていた。妹のアヤカは、ソーマとの血の繋がりはなかったが、ソーマはとても大切にしていた。

ある日ソーマは村の近くの森で凶暴なポケモンに襲われていた所を、プクリン達に助けてもらった。ソーマはプクリンに感謝し、プクリンの探検隊に入ることを決めた。

プクリンの探検隊に入って数ヶ月後、事件が起こった。そう、ソーマの村が盗賊団に襲撃され、滅びてしまった。ソーマはそれを聞き、村に帰ったが、そこにあったのは、村の残骸のみだった。

「そんな……父さん……母さん……アヤカ……」

「……ソーマ、まだ生存者がいるかもしれない。諦めるのは早くないか？」

絶望するソーマに、ソウルが優しく声をかけた。

「そうですね……」

ソーマ達は村を調べ回ったが、生存者はいなかった。

「……みんな……」

「……ん？なにか聞こえるよ？」

プクリンは、一つの音を聞き取った。

「あっちからだよ！」

「なに!?ミラクルアイ!」

ソーマはミラクルアイで調べると、瓦礫の下に、一匹のポケモンを発見した。

「あそこです!」

「ワシに任せろ!」

ドダイトスが、持ち前の大きい体を使い、瓦礫を退かした。そこにいたのはキルリアだった。

「アヤカ!?大丈夫か!?」

「……兄さん?……お父さんと……お母さんが……」

「アヤカ、喋るな!プクリン!オボンの実を!」

「うん!」

ソーマはオボンの実を、アヤカに与えた。アヤカはなんとか立てるぐらいは回復した。

「なにがあった?」

「えっとね……」

アヤカが話し始めようとした刹那、ソーマに攻撃が飛んできた。

「ぐはっ!」

「……まだ生き残りがいたか……やれ」

そこにいたのは、盗賊団らしきポケモンがいた。リーダー格のドンカラスが、手下のグラエナ達に命令を下した。

「させません！エナジー……」

「遅い……」

ドンカラスはソーマにシャドーボールを決めた。

「ぐはっ……」

ソーマはその場に崩れ落ちた。

「ソーマ！」

「許さないよ！たあぁ……」

「ケケケっ！させない！黒い眼差し！」

手下のムウマージが、プクリン達の動きを止めた。

「さて……まずこのフーディンからかたずけるか……」

ドンカラスは、ソーマに、悪の波動で、止めを指してきた。ソーマは思わず目を閉じた。だがいくら待っても攻撃はこない。目を開けてみると、アヤカがソーマをかばっていたのだ。

「アヤカ……！」

アヤカはその場に倒れてしまった。

「アヤカ……しっかりするんだ……」

ソーマははいつくばりながら、アヤカに近づいた。アヤカは既に虫の息だった。

「兄さん……ごめんね……」

「しっかりするんだ！」

「私……やっぱり……みんなが……仲良しなのが……いいな……」

アヤカはそう言いながら息を引き取った。

「アヤカ？アヤカ！？しっかりしろ！！」

ソーマの悲痛な叫びは、アヤカに届くことはなかった。

「……貴様らぁぁ！！！」

ソーマは自分の真上に、超能力のエネルギーを凝縮させ、球体にし、ドンカラス達に放った。後のサイキック・エンドだ。

「なっ！？ぐあぁぁぁぁ！！」

ドンカラス達は、ソーマの攻撃を受け、その場に倒れた。それと同時に、プクリン達が解放された。

「……ソーマ」

「……アヤカ……ぅわあぁぁぁぁぁ！！！」

ソーマの叫びに、プクリン達はなす術がなかった。

それからと言うもの、ソーマは何かに取り付かれたゆうに、力を欲するようになっていた。そして、遂にプクリン達の探検隊から抜けることにしたが、もちろんプクリン達は反発した。

「ソーマ、君が抜けるのは君の自由だよ……でも今の君はおかしいよ！そんなことをしてアヤカちゃんが喜ぶの！？」

「私に力がないせいでアヤカを守れなかった……だからアヤカの願い……誰も悲しまない……アヤカの理想の世界を作るのです」

「……プクリン、これ以上は無駄だろう」

「フフッ……ソウル、物分かりが良いですね……」

「……僕は許さない！」

「……これ以上は無駄ですね。ならあなた達を倒しますよ！」

ソーマはプクリン達に攻撃してきた。

「プクリン！やるしかなさそうだ！」

「……ソーマ」

プクリン達は、全力でソーマを止めようとしたが……プクリン達はソーマの暴走を止めることが出来なかった。

そして現在、ソーマはプクリン達と再び戦っている。

「……私は……」

「ソーマ！お願いだからもう止めてよ！！」

「……黙れ……黙れ黙れ黙れぇ！！私はアヤカの願いを！！」

「目を覚ませ！ポケモンを操る！？ポケモンを操るために村を襲う！？そんなことドンカラス達と何も変わらない！！」

ソウルは、ソーマに訴えかけた。

「私は……私は……！！」

「ソーマ！目を覚まさんかい！」

「うるさい……！これで終わりです！サイキック・エンド！」

ソーマは、今までで一番強力なサイキック・エンドで攻撃してきた。

「あれはソウルとワシに任せて、プクリンはソーマを救ってやれ！」

「うん！」

プクリンはソーマに向かって走り出した。

「ソウル！いけるな！」

「うむ、問題ない」

ソウルとドダイトスからは、今までより強いエネルギーを出した。

特性の猛火と新緑が発動していたのだ。

「いくぞ！ブラストバーン！！」

「ハードプラント！！」

ソウルとドダイトスの最強の技が、ソーマのサイキック・エンドにぶつかり、お互いに打ち消しあった。

「なっ！？」

「ソーマぁ！！」

プクリンは、ソーマに接近していた。その顔には、一筋の涙が流れていた。

「っ！！」

「たあぁぁぁぁ！！！」

プクリンはハイパーボイスで、ソーマに攻撃した。ソーマはかわせず、直撃した。

「アヤカ……私は……」

ソーマはそう言った刹那、その場に崩れ落ちた。

## 第三十八話　友を救え！ＶＳソーマ！後編（後書き）

リサ
「ソーマ撃破！」

チサ
「イエーイ！」

だね

次回でソーマ編は終わりです。

リサ
「長かったね」

こんな長くなる予定じゃなかったんだげどな

チサ
「計画性の無さが出たねー」

うぅ……（／＿＞・）

あっ現在人気投票実施中です！詳しくはＳＰに書いてあるので、そちらをご覧ください！初めての方もいつも感想くださる方も、どんどん参加してくださいね！

チサ
「よろしくお願いしまーす♪」

## 第三十九話　ただいま（前書き）

第三十九話完成！

プクリン
「お疲れ～♪」

ありがと♪そうだ。さっきセカイイチ貰ったからあげるよ

プクリン
「わーい♪」

では第三十九話をどうぞ！

プクリン
「ろうふぉー！（どうぞ！）」

## 第三十九話　ただいま

「ソーマ！」

プクリンは倒れているソーマのもとに向かった。ソーマは意思を失っていた。

「ソーマ！大丈夫！？」

「……うぅ」

ソーマは、プクリンの声に反応して、目を覚ました。

「ソーマ！」

「……プクリン……」

ソーマは弱々しくそう言った。

「さすが……プクリン達ですね……私の……負けです……」

ソーマの思わぬ言葉に、プクリン達は少し驚いた。

「今……夢をみました……アヤカと……一緒にいました……その時に……アヤカが……言ってたんです……もう止めてって……」

「ソーマ……」

「フフッ……戯れ事と受け取ってもかまいません……ですが……私

は止められなかったんです……この力を……あのお方から貰ってから……私は……おかしくなってしまったのかも……しれませんね……」

「……ソーマ、あの方とは誰だ？」

ソウルが、ソーマにあの方について質問した。

「……私も……よくわかりません……ただ……とても邪悪な感じがしました……私は……その方から……この装置を……教えて貰ったんです……」

「そんなことがあったのか……」

「ならそいつが悪いってことだな！」

ドダイトスは、ソーマの話しの結論を言った。

「私は……間違っていたんですね……」

「ソーマ！」

「やっと……目が覚めました……こんなことをしていても……アヤカは……喜びませんね……」

ソーマは自分の過ちに気がついたようだった。

「私は……罪を償わなくてはなりませんね……」

「……そうだね」

プクリン達が話していると、ユウキ達がやって来た。

「プクリン！ソーマは！？」

「うん♪もう大丈夫だよ♪」

プクリンはいつもの雰囲気に戻っていた。ソーマはふらつきながらも、なんとか立ち上がり、ティルのもとに向かった。

「ティル……すいませんでした……あなたを騙してしまって……」

「いえ、分かってもらえれば良いんです」

ティルはそう答えた。ソーマは、ティルが納得してくれて安心した。

「さて……さっさと脱出しないか？」

ユウキはプクリン達にそう提案した。

「そうだね♪じゃあみんな！帰るよ！」

プクリン達は、ソーマを連れて脱出することにした。ソーマはプクリンに支えられていた。

「……まってください」

「どうしたの？」

「……後始末を……サイキック・ボール」

ソーマはサイキック・ボールで、装置を破壊した。

「こんなものがあると……また私みたいな輩（やから）が……悪用するかもしれないので……」

「……そうだね」

プクリン達も洞窟から脱出した。

ユウキ達が外に出ると、クロ達が出迎えてくれた。

「ユウキ！大丈夫っすか！？」

「嗚呼……大丈夫だ」

「リサさん！無事だったんですわね！」

「うん。心配かけてごめんね」

クロとレイドは安堵の表情を浮かべた。

「そっちも上手くいったんだな」

「リンの救出に成功したっすよ！」

「そうか」

ユウキ達が話していると、さっきプクリンが呼んだジバコイル保安官達がやってきた。

「ビビビ！通報アリガトウゴサイマス！身柄ハコチラデ預カリマス！」

そう言いながら、ジバコイル保安官はソーマを連れていこうとした。

「プクリン、私は罪を償います……罪を償ったら……また会いましょう」

「うん……ソーマ、また一緒に探検しようね！」

「はい！」

ソーマはジバコイル保安官に連れていかれた。四天王のロックと、スィックも連れていかれた。だが、何故かシャドーだけは発見出来なかった。

「……お姉ちゃんはこれからどうするの？」

「そうね……私をジン達のチームに入れてくれないかしら？」

『えっ？』

ティルの思わぬ言葉に、ジンとチサは驚いてしまった。

「今まで一緒にいられなかったけど、今ならジン達と一緒にいれるから。ダメかしら？」

「そんなことないよー！むしろうれしい！ねージン！」

「僕も大歓迎です！」

「良かった。よろしくね」

ティルは、ジン達のチームマシンガンに入ることになった。

一方、クロは、妹のリンと放して

「リン、村に戻るっすか？」

「うん。リンがお家を守らないと！」

「大丈夫っすか？」

クロは、今回のことみたいにならないかと、かなり心配だった。

「大丈夫だよ！村の人達がいるもん！リンの心配はしないで、お兄ちゃんはジンお兄ちゃん達と探検隊やって！」

「……わかったっす！」

クロとリンが話していると、ジン達がやって来た。

「クロ、お姉ちゃんを仲間にしてもいいですか？」

「ティルをっすか？大歓迎っすよ！よろしくっす！」

「よろしくね」

クロは、ティルがチームに入るのを快く認めた。

「さて！わしはギルドに帰るか！」

「親方、もう帰るんですの？」

「あまりギルドを開けられないからな！村のポケモン達はわしが連れていくから心配はいらんぞ！ガハハハハ！！」

ドダイトスはそう言いながら、村のポケモン達と帰っていった。

「私達はどうするんですの？」

「そうね……とりあえずプクリン親方のギルドに行きましょ」

「わ～い！」

何故かリーフは喜んでいた。

「リーフ、何故そんなに嬉しそうなんですの？」

「だって～ギルドのご飯美味しいから～」

リーフのあまりにも拍子抜けな回答に、ミズキとレイドは呆れてしまった。

「プクリン、そろそろ帰らないか？」

「うん。そうだね♪」

ユウキ達は、操られていたトレジャータウンのポケモンと共に、トレジャータウンに帰っていった。

その日の夜は、ギルドで打ち上げ的なものが行われていた。ユウキ達はそれを楽しんだ。ちなみにリーフがかなりの量を食べたのは、言わなくても分かるだろう。

その日の夜中、一匹のポケモンが、洞窟の中を走っていた。

「ふぅ……もう少しだな……」

そのポケモンは、そう言いながら洞窟の奥に向かおうとしたが、ゴルバットが二匹、襲い掛かってきた。

「フン！邪魔をするな！」

そのポケモンは、たったの一撃で、ゴルバット二匹を倒してしまった。

「さて、先に進むとするか」

そのポケモンは、更に奥へと走り出した。

そのポケモンが走り出して、数十分後、目の前に、淡い緑色の光を放つ歯車が現れた。

「あった！これで二つめだ」

そのポケモンは、歯車を手に入れた。その刹那、周りの時が止まってしまった。

「時の歯車は後は三つか……それにしても……あいつは大丈夫か…

…いや、あいつとの誓いを果たすためにも、俺に出来ることをするまでだ」

そのポケモンは、そう言いながら洞窟を後にした。

## 第三十九話　ただいま（後書き）

今回でソーマ編は終わりです

リサ
「長かったね」

ここまで長くなる予定じゃなかったのにな（汗）
それにソーマの改心の動機がグダグダ……もっと精進しなくては

ミズキ
「しっかりやりなさいよ」

任せなさい！

## 第四十話　ヨノワール（前書き）

第四十話完成！

ユウキ
「ハイペースだな」

実は今日学校休みなんだ♪それでゆっくり休んで執筆始めたら進む進む♪

ユウキ
「出来は悪いがな」

……（´；ω；）

では第四十話をどうぞ……（泣）

# 第四十話　ヨノワール

ソーマとの戦いが終わった日の真夜中、消えたはずのシャドーが、ある場所で一匹のポケモンと話しをしていた。真夜中のせいか、そのポケモンの姿は見えない。

「……シャドー、失敗したようだな……」

「ヒャ！？申し訳ありません！邪魔が入りまして……」

「黙れ。私は言い訳が嫌いだ……失敗したからには、それ相応の処罰は下す」

そう言った刹那、シャドーの周りに闇が広がってきた。

「ヒャ！？止めてください！――様……」

シャドーは、その闇の中に飲み込まれていった。

「ふん……まあいい。本来の作戦は進行しているのだから……」

そのポケモンは、闇の中に消えていった……。

それから数週間後、ユウキ達は、いつもの日常生活を送っていた。

「起きろぉぉぉ！！朝だぞぉぉぉ！！」

ユウキとリサは、いつものドゴームによる、モーニングコールを受け、起き上がった。

「うぅ……おはよう……ユウキ……」

「あっ……嗚呼……」

二匹は眠い目を擦りながらいつもの朝礼に向かった。

『みっつー！みんな笑顔で明るいギルド！』

「さあみんなっ♪仕事にかかるよ♪」

『おぉー！！』

弟子達は、それぞれの仕事場に向かっていった。

「ユウキ！今日も頑張ろうね！」

「おっ！気合いが入ってるね♪感心感心♪では今日も一つ……」

ユウキ達は恒例の朝礼を終え、ペラップと話していると、ドゴームが大声を上げていた。

「なにっ！？足型がわからないだと！？」

突然のドゴームの台詞に、そこにいたユウキとリサ、ペラップは驚いた。

「わかんないってどういう事だ！？」

「だって～……わかんないものはわかんないよ～……」

どうやらなにかもめているようだ。

「なんだ？どうしたんだ？」

「ああペラップ。足型不明のポケモンが来ているみたいだ。ディグダは優秀な見張り番なんだが……あいつが足型がわからないなんてことは、滅多にないはずだ。まあ、お前達みたいな素人ならわかるんだがな」

ドゴームは、説明を終えたあと、軽く笑った。

「何によ！私達が初めて来た時には、ユウキの足型がわからなかったじゃない！」

「冗談だ。馬鹿にして悪かったよ」

ユウキ達が話していると、見張り穴に通じている穴から、ディグダの声が聞こえてきた。

「……えっ？親方にお会いしたいんですか？すいませんがお名前を……ヨノワールさん！？しっ！少々お待ち下さい！」

「ヨノワールだと！？」

「ヨノワールって……あの有名な！？」

ディグダの声に、ペラップとドゴームが反応した。だがリサは、ヨノワールが、誰なのかわからなかった。

それから間もなく、一匹のポケモンが、プクリンと話していた。体は黒く、貫禄のあるような体つき、頭にはアンテナのようなものがあった。このポケモンがヨノワールだ。

「尋ねて来てくれてありがと～♪」

「そんな滅相もない！お礼を言うのは私の方ですよ！あの有名なプ

クリンのギルドに来れたんですから」

ユウキ達は、ヨノワールとプクリンがそんなやり取りをしているのを見ていた。リサはすぐ近くにいたドゴームに声をかけた。

「ねえドゴーム」

「ん？なんだ？」

「あのポケモンは……誰なの？」

リサの質問に、ドゴームはずっこけそうになった。

「な！？お前、あのヨノワールを知らんのか！？とっても有名な探検家だぞ！？」

ドゴームは、いつもよりは小さい声で、リサに説明した。

「そう言われても……本当に私……知らないんだもん……」

リサは、少し落ち込んでしまった。

「まあ……無理はないですわね。知られるようになったのも、つい最近の事ですし……突如彗星（すいせい）の如く現れて、一躍有名になったポケモンですから」

キマワリは、ヨノワールについて、リサとユウキに説明した。

「そんなに凄いのか？」

ユウキは、あんまり興味がなさそうに、キマワリに問い掛けた。

「そうでゲス。これは聞いた話しでゲスが……ヨノワールさんは、チームを持たないで、単独で行動しているらしいでゲス。でも、更に凄いのは、その知識の多さでゲス」

「そんなに頭が良いの？」

「嗚呼。世の中で知らないものはないと言っても過言ではないな」

ビッパとドゴームが、説明に補足をした。

「へぇ～！そんなに頭が良いんだ！」

「まあ……あくまで噂ですが……でもその知識の多さで、次々と探検を成功させた訳ですし……ヨノワールを尊敬するポケモンも多いと聞いていますから……あながち嘘ではないと思いますわ」

キマワリは自分の考えを含めて説明した。

「ヨノワールってここに来たことあるの？」

リサが、ドゴームに問い掛けた。ユウキは全く興味が無いのか、欠伸をしていた。

「いや、初めてだ。ディグダがわからなかったぐらいだからな。多分、親方様も会うのは初めてじゃないか？」

「そうなの？あんなに仲が良さそうなのに」

「親方様はああいうお方だからな。初めてだろうが関係ないんだよ」

ユウキ達は、会話を中断し、再びプクリンとヨノワールの方を向いた。

「……成る程。成果はありませんでしたか。それは残念でしたね……」

「うん。今回は大失敗。なにもわからなかったよ♪」

どうやら、この前に行った遠征の話をしているようだった。

「プクリンのギルドが、霧の湖に挑戦したとお聞きして、先日来たのですが……プクリンさんが留守と聞いて、今日、その成果を伺いに来たんですが……」

ヨノワールは、ユウキ達がソーマと戦っている時に、ギルドにやって来ていたようだ。ちなみに、ヨノワールは、ギルドに着くまえにプクリンがいないと言う事を聞き、ギルドには来ていなかった。だからディグダが足型がわからなかったのだ。

「そうなの？ごめんね～なにもわからなくて～♪」

「いえいえ、良いんです。それよりこれも何かのご縁。私はしばらくトレジャータウンに滞在するつもりですので……その間は、たまにここにお伺いしてもよろしいですか？ここは新しい情報が沢山入るので、私の探検にも役立ちそうなので……」

「うん♪いいよ♪ここは他の探検隊も出入りしてるし♪大歓迎だよ♪」

プクリンは快く承諾した。

「というわけでみんな！しばらくの間、このヨノワールさんがトレジャータウンにいると思うからよろしくね♪」

「みんな！有名だからって、間違ってもサインとかねだらないようにな！」

ユウキは、何言ってるんだこの鳥は……と内心思っていた。

「いえいえ、サインぐらいお安いご用ですよ。私の知識など拙い（つたない）ものですが……皆さんのお役に立てれば幸いです。なにか相談があったら遠慮なく聞いてくださいね」

「光栄でゲス！」

「きゃー！よろしくですわー！」

弟子達は、一匹を除いて喜んでいた。そう、ユウキは何故かヨノワールが好きになれなかった。何故かは、ユウキにもわからなかった。

「じゃあみんな♪解散♪」

ペラップの号令で、弟子達は、それぞれの仕事場に戻っていた。

「では、私はトレジャータウンにいますので、なにかありましたらいつでも呼んでください」

ヨノワールはそう言い、ギルドから去っていった。

「嗚呼、お前達。今日の仕事は掲示板な♪頼むぞ♪」

ペラップはそう言い残しその場から去っていった。

「じゃあユウキ！今日も頑張ろうね♪」

「そうだな」

ユウキ達は、仕事をするために、掲示板に向かっていった。

その日の夜、ギルドの前に三匹のポケモンがいた。ドクローズだ。

「しかし……遠征では散々でしたね……」

「全くだな」

「くそっ！やり返してやりたいけど……あのプクリンはな……」

三匹は、途方に暮れていた。

「あっアニキ！ライトニングでウサ晴らししませんか！」

「おっ名案だな！じゃあ早速帰って悪巧みだ！ククククッ！」

『へいっ！』

三匹は、ライトニングの二匹でウサ晴らしするためにギルドの前から去っていった。

## 第四十話　ヨノワール（後書き）

はい、ヨノワール登場です！

ユウキ
「あいつは何故か仲良くなれないな」

なんで？

ユウキ
「なんで……？なんでだろうな？何故か好きになれないな……」

うーん不思議不思議（笑）

ユウキ
「なんだその笑みは？」

さっさあ？（滝汗）

## 第四十一話　更なる陰謀（前書き）

第四十一話完成！

最近ハイペースですが……もうストックがないですし、さすがに更新が遅れそうですね（汗）

ユウキ
「それぐらいが丁度良いんじゃないか？」

確かに……

では第四十一話をどうぞ！

# 第四十一話　更なる陰謀

『みっつー！みんな笑顔で明るいギルド！』

ユウキ達は、恒例の朝礼を済ませ、リサとどうするか話していた。

「今日はどうしようか？」

リサと話していると、ペラップが話しかけてきた。

「お前達、今日は仕事の前に頼みたい事があるんだ」

「頼み？なんだ？」

「嗚呼。カクレオンのお店に行ってセカイイチの入荷予定を聞いてきて欲しいんだ」

「セカイイチの入荷予定？つまり、カクレオンのお店でセカイイチが売られるか聞いてくれば良いの？」

リサは、思ったことをペラップに聞いた。

「そうだ。気を抜くと親方様がすぐに食べて無くなってしまうからな。だがセカイイチが無くなると親方様は……かといってセカイイチが無くなる度に林檎の森に行くのも面倒だからな……」

「成る程な。カクレオンの店で売っていたら買っちまおうというわけか？」

「その通りだ♪」

ペラップは少し上機嫌みたいになった。

「うん！わかったよ！じゃあカクレオンのお店に行ってくるね！」

「頼むぞ♪」

ユウキ達は、トレジャータウンのカクレオンのお店へと向かった。

カクレオンのお店に着くと、お店の前に一匹のポケモンがいた。ヨノワールだ。

「あれ？ヨノワールさん」

「おお、あなた達は確かギルドの」

「うん。私達はライトニング。ギルドで働いているの。よろしくね！」

リサは、ヨノワールに自己紹介をした。

「ところでヨノワールさんはどうしたの？買い物でもしてるの？」

「いえいえ、カクレオンさん達とおしゃべりしていただけですよ」

「私が呼び止めたんですよ。ヨノワールさんは有名ですから。そしたら！ビックリですよ！ヨノワールさんって本当に物知りですね！もう感激でしたよ～！」

カクレオンは、ヨノワールの説明に補足をした。どうやらかなり興奮しているようだ。

「へぇ～みんなも言ってたけど……ヨノワールさんって物知りなんだね！」

「ところで、リサさん達はどうしたんですか？買い物に来てくれたんですか♪」

「悪いな。買い物じゃない。聞きたいことがあるだけだ。セカイイチの入荷予定を教えてくれないか？」

「セカイイチですか？ちょっと待って下さいね……」

そう言うと、カクレオンは入荷予定の紙を調べはじめた。

「……すいませんね～セカイイチの入荷予定はまだ無いですね～」

「そっか……残念……」

リサは少し落ち込んでしまった。

「ないなら仕方ないな」

「そうだね……」

「ルリリ早くー！」

「お兄ちゃん待ってよー！」

ユウキとリサが話していると、二匹のポケモンがやって来た。マリルとルリリの兄弟だ。

「あっマリルちゃんにルリリちゃん！」

「カクレオンさん！リサさん達も。こんにちは！」

二匹は走ってたせいか、少し息が荒かった。

「ずいぶん急いでいたが、どうしたんだ？」

「僕達ずっと落とし物を探していて……」

「落とし物？嗚呼、前に探していたな」

そう、前にマリルとルリリが探していたものだ。それをスリープに利用された事もあった。

「そうです。水のフロートっていう道具です」

「水のフロート？それはまた貴重ですね！」

ヨノワールは、マリルの言葉に反応した。

「はい。だからずっと探していたんですが……海岸で見たっていってる人が！だから海岸に行くところなんです！」

「成る程な。だから急いでいたのか」

「はい！」

二匹はとても嬉しそうだった。だが、その話しを聞いているポケモンがいた。

「へへっ！良いこと聞いたな！」

「ケケッ！アニキに報告だ！」

そう言い残して、二匹は去っていった。

「見つかったんだ！良かったね！」

「はい！では僕達はこれで！ルリリ、行こう！」

「うん！」

マリルとルリリは、海岸に向かって走り去った。

「水のフロートですか……聞いた事無いですね～どんな道具なんでしょう？」

「水のフロートはルリリ専用の道具ですよ。貴重なお宝を繰り返し

トレードすることで手に入るそうです。とても貴重な道具です。私も実物を見たことは無いんですよ」

ヨノワールは、カクレオンに丁寧に説明した。

「そうなんですか！商売している私も知らないんですから……相当珍しいんですね～そんなものを私の店に入荷することなんか……一生無理なんでしょうね～……トホホ……」

「……入荷？おい、早くペラップに報告に行った方が良くないか？」

「あっ！早く帰ろう！」

ユウキとリサは、急いでギルドに戻っていた。

「えぇ～！セカイイチの入荷予定は無い～！？ハァ……ガッカリ……」

ペラップは凄い落ち込んでいた。

「ねぇ、私達が採ってこようか？林檎の森まで？」

「えぇ～～～！！冗談じゃないよ！お前達、前に失敗しているじゃないか！私はあんなめにあうのはやだよ！」

ペラップは全力で否定した。ユウキは、もういくら頼んでも行ってやらないと、内心思っていた。

「……スマン。お前達は遠征でも活躍してるし……私はお前達を認めて無い訳じゃないんだが……セカイイチと親方様の事は……私の中で……軽いトラウマになっていてな……」

ペラップは額に汗を流しながら言った。

「うぅ……仕方ない……セカイイチは自分で見つけるか……お前達はいつも通り、掲示板の仕事をしてくれ……」

「あっ嗚呼」

ペラップは、何かぶつぶつ言いながら去っていった。

「ペラップ、ガッカリしていたね……」

「仕方ないさ。とりあえず仕事に行くぞ」

ユウキ達は依頼をするために、掲示板に向かった。

「どうする？」

「そうだな……」

ユウキ達が悩んでいると、チリーンが声をかけてきた。

「ユウキさん、ちょっと良いですか？」

「なんだ？」

「昨日の食事の時に気になって……ちょっと両腕を見せてくれませんか？」

「……」

ユウキは無言で、チリーンに両腕を見せた。その腕は小刻みに揺れていた。

「やっぱり……ユウキさん、この前の戦いで無理をしましたね？」

「……どういうことだ？」

チリーンは一呼吸おいてから話しはじめた。

「ユウキさんの腕にかなりのダメージがあります。なにか心当たりがあるんじゃないですか？」

チリーンは、ギルドの医者みたいな立場でもあったから、ユウキの

異変に気づいたのだ。ユウキには、一つ心当たりがあった。

「……雷鳴剣か……」

「それを今やってくれませんか？」

「……嗚呼」

ユウキは充電をした後、雷鳴剣を作り出したが、腕に鋭い痛みが走り、思わず中断してしまった。

「……なるほど。ユウキさん、もうその技は使わない方が良いですよ」

「どういうことだ？」

「……どうやら、その技を使うと、腕に相当な負担がかかるみたいです。つまり腕が技の力に耐えられないみたいですね……このまま使い続けたら腕が使い物にならなくなってしまいますよ……」

「……そうか。わかった」

「では私はこれで」

チリーンは、ユウキ達の前から去っていった。

「ユウキ……大丈夫なの……？」

リサはかなり不安そうな雰囲気だった。

「心配ないさ。要するに雷鳴剣を使わなければいいんだろ？とにかく仕事に行くぞ」

「……うん」

ユウキ達は、掲示板で依頼を決め、仕事に向かった。

仕事が終わり、ユウキ達は食堂にいた。

『いっただっきまー……』

「みんな！ちょっと待ったー！」

ペラップが、晩御飯を食べようとしていた弟子達を止めた。

「えー今日は夕飯を食べる前に……みんなに伝えたいことがある」

ペラップが何か重大な事を言おうとしたが、弟子達は、腹ぺこなのに止められ、ブーイングを放っていた。

「静粛に！えーこれは先程入った情報だが……時の歯車が……また

盗まれたらしい」

ペラップの言葉に、弟子達は驚いた。

「それって……まさか霧の湖のじゃないでゲスよね……」

「いや、違う。どうやら別の所らしい。だが盗まれた時の歯車は二つだ。これ以上盗まれるのは非常に良くない。みんなを疑ってる訳じゃないが……霧の湖の事は絶対に誰にも言わないように！」

「当たり前だ！」

「ユクシーを裏切る訳にはいきませんわ！」

ペラップがそう言いきったあと、またしてもブーイングが起こった。

「わかった！わかったから！静粛に！それでは……お待たせしたな……では改めて……」

『いっただっきまーす！！』

弟子達は凄い勢いで晩御飯を食べはじめた。

ユウキ達は、晩御飯を終え、自分達の部屋にいた。

「また盗まれたかぁ……これで二つ目ね……誰が盗んでるのかなぁ……それに盗んでどうするのかなぁ……」

「さあな……考えてもわからないさ……」

「……そうだね。もう寝ようか……お休み、ユウキ」

「嗚呼」

ユウキとリサは、盗んだやつが気になったが、眠りについた。

ユウキ達が眠りについたころ、霧の湖の番人のユクシーは、一匹のポケモンと対峙していた。

「……やっぱりあの人達の記憶は消しておくべきでしたね……まさかこんなに早く……侵入者が現れるとは……しかも……本当に時の歯車を盗みにくるとは……」

「さて、時の歯車はもらうぞ」

「やっぱりあの人達の記憶は……消した方がよかったですね」

「……？なんのことだ？俺は前からここに時の歯車があることをしっていたのさ……とにかく、時の歯車は貰っていくぞ！」

そのポケモンは、ユクシーに攻撃を仕掛けていった。

## 第四十一話　更なる陰謀（後書き）

リサ
「ユウキ、あんまり無理しないでね？」

ユウキ
「……嗚呼」

そうだよ

あと、人気投票の期限が迫ってきていますので、まだの方はお急ぎくださいね。ちなみに現在はかなり接戦ですよ（笑）

ユウキ
「どうなるんだ？」

それはまだわからないよ

## 第四十二話　エレキ平原（前書き）

第四十二話完成！

ユウキ
「立ち直ったのか？」

まあね。活動方向に書いてくれた人達のおかげでね！

では第四十二話をどうぞ！

# 第四十二話　エレキ平原

翌朝、ユウキ達は恒例の朝礼を済ませたあと、仕事に向かおうとしていた。

「ユウキ！今日も頑張っていこうね！」

「嗚呼」

「……なに？どうした？……わかった。待っててもらえ」

ドゴームが誰かと話していた。おそらく見張り番のディグダと話しているんだろう。

「おーい！ライトニング！お前達にお客さんだ」

「客？誰だ？」

「とりあえずギルドの入口に行ってみな」

「誰かな？とりあえず行ってみよう」

ユウキ達は、お客さんがいるギルドの入口に向かった。

ギルドの入口に行くと、そこにはマリルとルリリの兄弟がいた。

「あっ！ユウキさん！リサさん！」

「お客さんって君達だったんだ。どうしたの？」

「はい。実は僕達、ライトニングのお二人にお願いがあって来たんです」

マリルは少し深刻な顔をして話した。

「お願い？なんだ？」

「水のフロートを取ってきて貰いたいんです！」

ユウキの質問に、ルリリが元気よく答えた。

「水のフロート？確かそれって君達が探していたものよね？」

そう、水のフロートは、マリルとルリリが探していたもの。先日、海岸にあるといっていた物だ。

「はい……海岸に落ちてるって聞いて行ってみたんですが……見つからなかったんです」

「見つからなかった？」

「はい。それで水のフロートの代わりにこんなものが……」

マリルは、ユウキ達に手紙を差し出した。

「手紙？」

「読んでみてください」

リサはその手紙を読みはじめた。

「えっと……海岸にあった水のフロートは俺達が預かった……返して欲しかったらエレキ平原の奥まで来い。だが力のないお前達に果たして来ることが出来るかな？ククククッ。無理ならせいぜい頼もしい仲間に頼むこったな。ククククッ！って……これって脅迫じゃない！これ！」

リサは手紙を読んでみて、驚きを隠せなかった。だが、ユウキは冷静でいられた。

「みたいです……」

「君達！行っちゃ駄目だよ！きっと罠だよ！」

「でも水のフロートはとっても大切なんです……だから絶対に取り返したくって……でもルリリを危険な目にあわせたくないんです……だから僕一人で行ったんですが……あそこは電気タイプが多くて……僕が行ってもすぐに倒されてしまうんです……僕は……僕は弱い自分が……悔しくて……」

マリルは少し泣き始めてしまった。

「……フン。こんな子供を虐める奴なんてあいつらだけだ」

「心当たりがあるの？」

「まあな……マリル、ルリリ、俺達がエレキ平原に行く。お前達はここでまってな」

「本当ですか！？」

マリルは暗い表情から明るい表情に変わった。

「嗚呼。だからもう泣くな」

ユウキには、脅迫してきた奴らの検討が既についていた。ユウキ自身も、そいつらに用があった。だから行くのを快く引き受けたのだ。

「さすがユウキだね。二人共！私達に任せて！絶対に取り返してくるよ！」

「ありがとうございます！よろしくお願いします！」

「よし、行くぞ」

ユウキ達は、水のフロートを取り戻すべく、エレキ平原へと向かった。

「ここがエレキ平原ね……ところでユウキ？」

「なんだ？」

「脅迫してきた奴らの検討がついてるの？」

リサには、ユウキが脅迫してきた奴らの検討がついてる理由がわからなかった。

「まあな……おそらく奴らは水のフロートを盗むことで、マリル達が俺達に頼むことを予測していた。そんな悪知恵が働き、手紙に書いてあったあの口調……それらから考えたら……答えは一つさ」

「……まさか」

「そのまさかさ。とにかく行くぞ」

ユウキ達は、エレキ平原へと入っていった。

ユウキ達がエレキ平原に入ると、そこは雷鳴が轟く土地だった。

「うぅ……凄い雷……キャア！」

リサは、驚きから、ユウキにくっついてしまった。

「あっ！ごっごめん！」

「……気にするな。それより大丈夫か？」

「うっ……うん……キャア！」

リサはまたしても、雷鳴のせいで悲鳴を上げてしまった。

「本当に大丈夫か？」

「雷……怖いよぅ……」

リサは半泣き状態になってしまった。

「……くっついても構わないからとにかく進むぞ」

「うん……」

ユウキ達は、とにかく水のフロートを取り戻すために、奥へと向かっていった。

しばらく進むと、エレキッドが三匹襲ってきた。

「いけるか？」

「うん。バトルしてる方が気が紛れるよ！」

「よし、いくぞ！」

ユウキは、十万ボルトで攻撃したが、何故か違う方向にいってしまった。

「……あっ？」

「もう！どこにやってるの！？」

さすがのリサも、少し怒っていた。

「全く違う方向にいった……？何故だ？」

ユウキが確認すると、そこにはラクライがいた。

「あいつに吸い寄せられたのか？」

そう、ラクライの特性は避雷針。電気タイプの技を自分に引き寄せてしまうのだ。

「なるほど……つまり電気タイプの技は使えないってことか……キツイな……」

ユウキがそうこうしている間にも、エレキッド達は、ユウキに攻撃してきた。

「ちっ！」

「ユウキ！火炎放射！」

リサは、ユウキに攻撃しようとしていたエレキッド達に、火炎放射で攻撃した。エレキッド達は、突然の攻撃に、戸惑っていた。

「済まない、助かった。アイアンテール！」

ユウキは、隙だらけのエレキッド達に、アイアンテールで攻撃した。エレキッド達は、自分達では勝てないと考えたのか、逃げ出してしまった。

「逃げられたか……あとはあのラクライだけだな」

ユウキは、さっき十万ボルトを吸収したラクライの方を向くと、既にラクライはいなくなっていた。

「いないね……」

「まあいい。とにかく先に行くぞ」
ユウキ達は、更に奥へと向かった。

一方そのころトレジャータウンでは、マリルとルリリが、カクレオン達と話していた。
「……なるほど、水のフロートがね～そんなことがあったんですか」
「はい。今ユウキさん達に行ってもらってるんです」
「なら安心だね。ライトニングなら！」
カクレオンも、ユウキ達のことをかなり信頼しているようだ。
「本当に……今回もルリリの時も、ユウキさん達にはお世話になりっぱなしです……」
マリル達が話していると、ヨノワールがやって来た。
「おや。皆さんどうしたんですか？」

「あっヨノワールさん！実は……」

カクレオンが、今マリル達から聞いたことをヨノワールに話した。

「……なるほど、何故そんなことをするかはわかりませんが、悪質な輩ですね」

「ですよね！こんな幼い子達に意地悪するなんて、私は許せないですよ！」

「それで、ライトニングのお二人は今どこに行ってるのですか？」

「エレキ平原です」

ヨノワールは、マリルの言葉に驚いてしまった。

「エレキ平原？この時期は確か……マズイ！このままではお二人が！すいませんが私はエレキ平原に行ってきます！！」

ヨノワールはそう言い残すと、エレキ平原へと向かった。

「えっ～！！ヨノワールさ～ん！！？」

「ふう……結構奥まで来たね」

「だな……そろそろ終わりか？」

エレキ平原に来てから約一時間。そろそろ一番奥についてもいいころだ。

「ん？着いたみたいだな」

そこは、かなり広く、所々に大きい岩があった。それに、今までより雷鳴が大きかった。

「キャア！！」

リサは、雷鳴に慣れてきていたが、さすがの音の大きさに、悲鳴を上げてしまった。

「今にも雷が落ちてきそうだな」

「早くこんな所からは……あっ！あそこ！あれが水のフロートかな？」

リサの示した方には、水色の宝石が一つついたリングがあった。おそらくあれが水のフロートだ。

「早く持って帰ろうよ」

ユウキ達が水のフロートに近づいた刹那、辺りが急に暗くなった。

「なんだ？」

「貴様達！ここへ何しに来た！？ここは我々の縄張りだ！」

「誰かいる！ユウキ！隠れよう！」

ユウキ達は、近くにあった岩に隠れた。

「ふん！それで隠れたつもりか！そうしてくれていた方が、我々にとってもありがたい。気配を消して近づき、仕留める！」

「ふん、隠れていても無駄か。貴様は何物だ！？」

「私の名はライボルト！そして、ラクライ一族のリーダーだ！！」

そのポケモン……ライボルトがそう言った刹那、辺りが明るくなり、周りには緑色の犬に近いポケモン、ラクライが八匹、そして、黄色い鬣みたいなのが印象的なポケモン、ライボルトがいた。

「なに！？」

「かかれぇ！！」

ライボルトの号令と共に、ラクライ達が襲ってきた。

## 第四十二話　エレキ平原（後書き）

ジン
「ユウキさん達は大丈夫なんですか？」

まあそれは次回ね

ミズキ
「来になるわね」

あと、人気投票の期限が近づいています。期限は五月の三日までです。まだのかたはお忙しいくださいね

ジン
「投票よろしくお願いします！」

## 第四十三話　VSラクライ一族！（前書き）

第四十三話完成！

ユウキ
「ライボルト達とバトルか」

そうゆうことさ

では第四十三話をどうぞ！

# 第四十三話　ＶＳラクライ一族！

「えっ！？いきなり！？」

リサが驚くのも無理はない。ライボルト達は、ユウキ達がなにもしていないのに襲ってきたからだ。

「やるぞ！」

「うん！火炎放射！」

リサは、ラクライ達に火炎放射で攻撃した。だが、ラクライ達に直撃はせず、あまりダメージはなかった。

「ユウキ！ラクライ達は私に任せて！」

「なに？一人で大丈夫か？」

そう、ラクライは八匹もいるのだ。リサ一匹ではかなり部が悪い。

「うん！いつまでも守られてばっかりじゃ嫌だもん！」

「……わかった。気をつけろよ」

ユウキは、ライボルトを倒すために走り出した。

「さて……私も頑張るよ！」

リサがそう言った刹那、ラクライ達の一匹が、十万ボルトで攻撃し

てきた。

「当たらないよ！電光石火！」

リサは、十万ボルトを電光石火でかわした。

「後ろだよ！目覚めるパワー！」

リサは、目覚めるパワーを使い、そのエネルギーでラクライに攻撃した。背後からの攻撃だからか、ラクライは倒れた。あと七匹になった。

「まだいっぱいいるよ……でもやらなくちゃ！火炎放射！」

リサは火炎放射で攻撃したが、ラクライ達にかわされてしまった。

「えっ！？」

ラクライ達は、リサに向かって一斉に十万ボルトで攻撃してきた。何発かは避けられたが、そのうち避け切れなくなり、直撃した。

「キャアァァ！！」

リサは十万ボルトを受け、悲鳴を上げた。リサはかなりのダメージを受けたようだ。

「うぅ……」

ラクライ達は、止めを刺すために力を溜めはじめた。

「マズイよ……でも私が無理を言ったんだから……勝たないとユウキに笑われちゃうよ……やるしかない！」

リサは、ラクライ達と同じように力を溜めはじめた。ラクライ達はチャージが終わり、一斉に攻撃してきた。だが、仕留めるのを意識し過ぎたが、攻撃は単調で、リサは簡単に避けることが出来た。

「一気に行くよ！ファイヤーレイン！」

リサは近くの岩を使ってジャンプし、ラクライ達の頭上に行き、ファイヤーレインを放った。パワーをチャージしていただけあって、炎の量も多く、威力も大きかった。ラクライ達は次々と倒れていった。残りは一匹になった。

「終わりよ！火の粉！」

リサは、ボロボロのラクライに、火の粉を放った。さすがに、リサは、ボロボロのラクライに火炎放射は使うのは可哀相と思い、火の粉で攻撃したのだ。ラクライはその場に倒れた。

「ふぅ……疲れた……ユウキは大丈夫かな……」

リサはユウキの加勢に行こうとしたが、かなりダメージを受けたせいか、体が上手く動かなかった。

「上手く動けないよ……ユウキ……大丈夫かな……」

リサは、その場に座りこんでしまった。

「でもユウキなら……大丈夫よね……」

リサは、ユウキの勝利を信じて、体力の回復に勤め始めた。

「いくぞ！雷！」

ライボルトは雷で、ユウキに攻撃してきた。

「おっと！」

ユウキは雷を簡単にかわした。雷は威力こそ高いもの、命中率に難が有り、なかなか当たらないのだ。

「雷パンチ！」

ユウキは右手に雷を溜め、それでライボルトに攻撃した。だが、雷は吸収され、ただのパンチになってしまった。

「ちっ！」

「貴様の雷、有効に使わせてもらうぞ！雷！」

ライボルトは、雷でユウキに攻撃した。しかも先程のユウキの雷を

吸収し、自分の雷の威力を上げていた。

「マズイな……守る！」

ユウキは、ライボルトの雷をギリギリ守るで防いだ。だが、かなりの威力だったのか、少し押されてしまった。

「……かなりの威力だな……」

「まだまだいくぞ！破壊光線！」

ライボルトは、ノーマルタイプ最強の技の一つ、破壊光線でユウキに攻撃してきた。

「……守るは使えないか……どうする？」

そう、守るは連続で使うと成功確率が下がる。ここで使うのはかなりの賭けだ。

「穴を掘る！」

ユウキは穴を掘るで地中に潜ることで、ライボルトの破壊光線をかわすことに成功した。

「くっ！何処だ！？」

「こっちだ。アイアンテール！」

ユウキはアイアンテールで攻撃したが、電気タイプのライボルトには、効果はいまひとつで、あまり効いていないようだ。

「効かんわ！噛み付く！」

「ぐわぁ！」

ライボルトはユウキの腕に噛み付くで攻撃した。ユウキに鋭い痛みが走り、思わず悲鳴を上げた。

「離れろ！雷パンチ！」

ユウキは雷パンチで、ライボルトに攻撃した。至近距離だったため、雷を吸収する前に攻撃出来た。

「フン！」

「……やっぱりダメージは少ないか……どうすればいい……」

ユウキは、ライボルトを倒すための作戦を練り始めた。

（奴は俺の雷を吸収する……つまり俺の雷を自分の雷に変えることに繋がる……だが溜められる雷にも限度があるはずだ……ならこれならいけるかもしれないな……よし！）

ユウキは一つの作戦を思いつき、実行に移した。

「まず……影分身！」

ユウキは自分の分身を作り出した。

「こんなもの！スピードスター！」

ライボルトは、必ず命中する技、スピードスターで攻撃した。だが、ユウキに命中することはなかった。

「なに!?何故だ!!」

ライボルトは少し焦った。いるのは分身だけで、ユウキの本体はなかったからだ。

「こっちだ!アイアンテール!」

「ぐっ!」

ユウキはアイアンテールでライボルトに攻撃した。ユウキはボルテックススタイルになっていた。それの効果でアイアンテールの威力が上がり、ライボルトにそこそこのダメージを与えた。

「こんなもの!」

「終わりだ!十万ボルト!!」

ユウキは十万ボルトでライボルトに攻撃したが、ライボルトはその雷を吸収していった。

「ハハハハッ!私に雷は効かない!!」

「ウオォォォ!!」

ユウキはライボルトの言葉に耳を向けず、十万ボルトで攻撃し続けた。

「フン……無駄な……」

ライボルトはユウキの十万ボルトを吸収し続けた。だが威力が高いせいか、身動きは取れない状態だった。

「……貴様の攻撃が止んだら……仕留める！！」

だが、十万ボルトを受けて吸収し続けていたライボルトが、急に苦しみ始めた。

「なっ……馬鹿な……」

「ウオォォォォ！！！」

「グアァァァ！！」

ライボルトは、雷に耐え切れず、その場に倒れた。

「終わったか……さすがにしんどいな……」

ユウキは、影分身を作り出し、穴を掘るで地中に潜っていた。それから充電をし、ボルテックススタイルになった。ここまではいつもと同じだ。そして、ボルテックススタイルの雷を十万ボルトに回し、ライボルトに攻撃した。確かにライボルトの特性により吸収されるが、それによる吸収量は限りがある。だからずっと雷を受けていれば、吸収し続けることが出来ず、ショートしてしまった。それがユウキの狙い、作戦だったのだ。

「そうだ、リサは？」

ユウキはリサの方に行くと、リサは座って休んでいた。

「ユウキ！無事だったんだね！」

「まあな……リサは大丈夫か？」

「うん……上手く動けないけどね」

ユウキは、リサの状態に気がついた。

「お前痺れて動けないんじゃないか？」

「えっ？そうかな？」

リサは、疲労からか、自分が麻痺していることに気がついていなかったのだ。

「ほら、クラボの実」

ユウキは、リサにクラボの実を食べさせた。その時、リサの顔が少し赤くなっていたことはまた別のお話。

「……ぐおぉぉぉぉ！おのれぇぇぇ！！よくも！！」

ライボルトは、気力で立ち上がった。

「なに？まだ倒れていなかったのか？」

「ちょっと待って！私達ここを荒らしに来たわけじゃなくて……」

「黙れ！！これでも喰らえ！！！」

ライボルトは、最後の力を振り絞って、ユウキ達に雷を放ってきた。

「ちっ……」

ユウキもリサも、疲労からか、動けなかった。

「キャアァァア！！」

リサの悲鳴が、エレキ平原に響き渡った……

## 第四十三話　ＶＳラクライ一族！（後書き）

リサ
「私達どうなったの！？」

次回を待ってね

ユウキ
「……」

## 第四十四話　ユウキの能力（前書き）

第四十四話完成……

ユウキ
「どうした？」

まったく駄文から脱出できない……次の更新はかなり遅れそうです……

ユウキ
「とにかくやるしかないな」

だね

では第四十四話をどうぞ

# 第四十四話　ユウキの能力

ユウキ達は、ライボルトの雷に思わず目を閉じた。だがいくら待っても攻撃は来なかった。ユウキ達が前を確認すると、そこにはヨノワールがいた。どうやら彼がライボルトの攻撃からかばってくれたようだ。

「まてっ！この物達に偽りはない！この物達は……ここを荒らしに来たのではない！」

「ヨ……ヨノワールさん！」

リサは、思わぬ助っ人に、驚いてしまった。

「貴様！何物だ！？」

「私はヨノワール！探検家だ！ライボルト！あなた達の怒りはもっともだ！以前あなた達が受けた仕打ちを考えれば、無駄で侵入してきた物達に、攻撃的になるのは当然だ！そして、この地が、あなた達に安らぎを与えていることも、私は理解しているつもりだ！この物達が縄張りを侵したのは詫びよう！だがそれはあなた達に危害を加えるためではないのだ！用がすんだら我々はすぐに立ち去る！信じてくれ！！」

ヨノワールは、ライボルトに必死に説得した。

「……貴様は私達のことをよく知っているな……フン、よかろう、ヨノワール。貴様を信じよう。しばらく時間をやる。その間に立ち去れ……行くぞ」

ライボルトは、ヨノワールの説得に応じ、ラクライ達と共に去っていった。

「ふぅ……ありがとうヨノワールさん！助かったよ！でも……彼らはなんだったのかな？」

ヨノワールは、ライボルト達の事について説明し始めた。

「彼らはライボルトとラクライの一族です。彼らは過ごしやすい場所を求めて、絶えず移動して生活しているんです。この時期、ここは雷が多いせいか、彼らは必ずこの時期はエレキ平原にやってくるのです。ですが……以前何物かに攻撃され、その時かなり傷を負ったそうです。それ以来、彼らは、この地なやって来るポケモンに敏感になったのです。この地に来るポケモンは、やられる前にやれ……それがライボルト達の掟になったみたいです」

ヨノワールは、ユウキ達に、丁寧に説明してくれた。

「なるほど……だから俺達の話を聞いてくれなかったんだな……それよりヨノワール、これは水のフロートで間違いないな」

ユウキは、ヨノワールの目の前に、水のフロートを持ってきた。

「……ええ。水のフロートに間違いないです」

「本当！良かった～！……でも……なんでここに水のフロートが？」

リサは、抱いていた疑問をヨノワールに聞いた。

「おそらく……今回のことを仕掛けた輩の仕業でしょう。その者は、多分あなた達が来るのをわかった上で……更にライボルト達の縄張りと知った上で……あなた達がライボルト達と衝突するのを期待して……水のフロートをここに置いたのでしょう。そうですよね！？そこにいる輩！」

「えっ？」

「やはりいたか……ドクローズ！」

リサは、ユウキとヨノワールの思わぬ発言に戸惑ってしまった。

「……ククク！わかっていたか！じゃあしょうがねえ」

その声がそう言った刹那、ドクローズの三匹が現れた。

「あ～！お前達は！」

「ドクローズ参上！」

リサは、ドクローズの出現に、声を荒げた。

「お前達だったのね！こんなことをしたのは！？」

「ケッ！お前達がライボルト達にズタボロにされた後を狙って、更に俺達が痛め付けてやろうと思ったが……計算違いだぜ！」

ドガースは、今回のスカタンクの作戦の説明をした。

「やりますか」

「ククククッライトニングなら当然やるつもりだったが……かの有名なヨノワールさまが相手は部が悪い……引き上げるぞ！」

ドクローズの三匹は、早急に立ち去った。

「なんてやつらなの！？もう私絶対に許さないよ！」

リサはかなり怒っていた。それもそのはず、自分達を狙っているなら、わざわざマリル達に手を出す必要がないからだ。

「逃げられては仕方ないですね。とにかくマリル達に水のフロートを届けましょう」

ユウキ達は、水のフロートを持ってトレジャータウンに戻っていった。

トレジャータウンに帰ってくると、真っ先にマリルとルリリがやって来た。

「ほら、水のフロートだ」

ユウキは、マリルとルリリに水のフロートを手渡した。

「お兄ちゃん！水のフロートだよ！」

「ルリリを助けて頂いた上に今度もまた……本当に、なんてお礼を言ったらいいか……本当に……ありがとうございました！」

マリルは、ユウキ達に感謝の言葉を言った。

「お礼なんかいいよ。それに私達にじゃなくてヨノワールさんに言ってよ。今回はヨノワールさんがいなかったら私達もおしまいだったのよ」

マリルとルリリは、リサの言葉を聞き、ヨノワールにもお礼の言葉を言った。

「ありがとうございました！ヨノワールさん！」

「いえいえ。良かったですね。水のフロートが戻ってきて」

「いや～！さすがヨノワールさん！でもライトニングのお二人も凄いと思いますよ～！今回の依頼も成功しましたし、ルリリちゃんを助けた時も場所を突き止めたし♪」

カクレオンは、ヨノワールだけじゃなく、ユウキ達も絶賛した。

「あの時は、場所を突き止めたと言うより、偶然夢を見て……」

「えっ？夢？夢ってどんなものですか？」

リサの言葉に、ヨノワールが食いついた。

「あっ！ヨノワールさんなら知ってるかな？なにかに触った時に目眩に襲われて……過去や未来が見えるものなんだけど……」

ヨノワールは、リサの言ったことに、いち早く反応した。

「……！！それは！時空の叫びでは！！」

ヨノワールは、ユウキの能力、時空の叫びについて知っているようだ。

「知ってるの！？ユウキ！ヨノワールさんにユウキのことを聞いてみようよ！」

「……嗚呼」

「ヨノワールさん、相談が……」

ヨノワールは、リサの申告な顔を見て、事態を察したようだ。

「なら海岸で聞きましょう」

ユウキ達は、ヨノワールと話すため、海岸に向かった。

「なるほど、ここに倒れていたんですね？」

ヨノワールは、ユウキが倒れていた所を見てそう言った。

「うん。この場所だよ」

「それで目を覚ましたら記憶を失っていたと……」

「うん。それで覚えていたのは自分の名前。あとはもともと人間だったってことみたい」

ヨノワールは、リサの言葉に驚いた。

「えぇ！？人間！？でもどう見てもポケモンですよ？」

さすがのヨノワールでも、わからないみたいだ。

「ヨノワールさんでもわからないか……残念。でもなにかしらあって記憶を失い、ポケモンになっちゃったと思うのよ」

「……あなたは名前を覚えていると言ってましたね？……して、その名前は？」

「……ユウキだ」

「！！……ユウキ……さん……」

ヨノワールは、ある一つの結論に至った。

「どう？なにかわかる？」

「……いえ……なにも……」

ヨノワールは、ユウキとリサに気づかれないくらい、微かな笑みを浮かべた。

「お役に立てず、申し訳ありません……でも、ユウキさんがもつ能力ならわかります」

「本当！？」

ヨノワールは、ユウキの能力について説明し始めた。

「はい。物に触れることで、過去や未来が見える能力は、時空の叫びと呼ばれています。きっかけはわかりませんが、物やポケモンを通して、時空を越えた映像が夢となって現れると聞いたことあります」

「時空の叫びかぁ……」

リサが時空の叫びについて考えていると、ヨノワールがなにか決意した。

「よろしい！これもなにかのご縁。ユウキさんが何故ポケモンになったのか、その謎を解くのに、私も協力しましょう！」

「本当に！？」

「はい。まあ……正直に言うと、私にわからない物事があるのは悔しいってのが本音ですけどね！ハハハハッ！」

なんと、ヨノワールがユウキ達に協力してくれると言いはじめた。

「本当に！？ヨノワールさんが協力してくれるなら心強いね！ユウキ！」

「……嗚呼」

その時、ユウキ達の頭上に、ペリッパーの群れが飛んでいた。

「あっ！ペリッパーだ！……数が多いね……」

「なにかあったのでしょうか？」

ヨノワールがそう言った刹那、ユウキ達のもとにビッパがやってきた。

「お～い！！」

「あっビッパ！」

「ハァ……ハァ……ここにいたんでゲスね……」

ビッパは息を切らせながら言った。

「どうした？」

「召集がかかってるでゲス！早く戻るでゲス！」

「なにかあったみたいだな」

「私も行きましょう！」

ユウキ達は、急いでギルドに戻っていった。

# 第四十四話　ユウキの能力（後書き）

ユウキ
「一体なにがあったんだ？」

ヨノワール
「気になりますね……」

うおっ！ヨノワールがいる！

リサ
「本当だ！」

ヨノワール
「ゲストらしいですよ」

……（汗）

## 第四十五話　ジュプトル（前書き）

第四十五話完成……

ミズキ
「どうしたのよ？」

最近スランプから抜け出せなくて……しかも風邪と花粉症のダブルパンチはきつい……

リサ
「……お大事に」

ありがと……では第四十五話をどうぞ

# 第四十五話　ジュプトル

ユウキ達がギルドに戻ると、ギルドの弟子達が、お尋ね者の掲示板の前に集まっていた。しかしなにか様子が変だった。なにか動揺しているような表情だった。

「もうみんな集まってるでゲスね！」

ユウキ達が近づくと、弟子達は一斉にユウキ達の方を向いた。

「お待たせ！召集って聞いたんだけど……なにかあったの？」

リサの質問に、弟子達の顔色が更に悪くなった。

「時の歯車が……また盗まれたのだ……」

「えぇ～またでゲスか～！？」

どうやらビッパも知らされてなかったらしく、動揺を隠せずにいた。

「どこの時の歯車が盗まれたんだ？」

「……それが……」

ペラップは、何故か言うのを躊躇していた。その間に、ユウキはどこの時の歯車が盗まれたか察知した。

「まさか……霧の湖か？」

「……その通りですわ……」

「本当に!?」

リサも驚きを隠せなかった。それと同時に、一つの疑問が浮かび上がった。

「でもなんで!?霧の湖のことは……私達の秘密にしていたよね?なのにどうして!?」

「……」

ペラップは何も言い返せなかった。その時、リサの脳裏に考えたくない事が浮かんだ。

「まさか……ギルドの誰かが?」

「んなわけないだろ!?」

「仲間を信用できないのかよ!ヘイヘイ!!」

ドゴーム、ヘイガニの順にリサに反発した。リサは思わずたじろいでしまった。

「そうよね……よく考えれば……わかることなのに……ゴメン」

「まあそう思うのも無理はないですわ。私達が遠征に行った直後にこうなったわけですし」

キマワリがそう言った刹那、ヨノワールが口を挟んできた。

「ちょっと待ってください！私よくわからないのですが……霧の湖に時の歯車があるなんて、初めて聞きましたし……それに今回の遠征は失敗だったんじゃ……」

そう、ヨノワールは遠征に失敗していたと言われていたので、ギルドのポケモン達が、霧の湖について知っている事に違和感を覚えたのだ。

「ゴメンねヨノワールさん。実はある約束があってヨノワールさんには言えなかったんだ……」

プクリンが理由を言い、ヨノワールに謝罪した。ヨノワールはプクリンの言葉に納得した。

「ともかく、霧の湖に来た侵入者はユクシーを倒し、時の歯車を盗んでいったのだ」

「……ユクシーは？」

さすがのユウキも心配になったのか、ユクシーの安否をペラップに聞いた。

「大丈夫。無事だ」

「今はジバコイル達に保護されているよ」

ペラップ、プクリンの順に説明した。それを聞いてリサはほっと胸を撫で下ろした。

「そっか……良かった……」

「それに……ユクシーの証言から、侵入者の詳細が判明した。掲示板に張り出したから確認してくれ」

ユウキ達が掲示板を確認すると、そこには一匹のポケモンの絵があった。そこには、盗賊ジュプトルと書かれていた。

「このポケモンが……」

「怖そうなポケモンでゲスね……」

ポスターを見て、リサとビッパがそれぞれの意見を述べた。

（こいつが……時の歯車を盗んでいる盗賊か……）

「このお尋ね者のポスターは、ユクシーの証言から先程一斉に指名手配されたものだ」

「なるほど、だからペリッパーがたくさん飛んでいたのね」

ユウキ達が先程見たペリッパーの群れは、この指名手配書を運ぶためだったのだ。

「ジバコイル達もこれ以上ほおっておくことは出来ないらしい。ジュプトルに多額の賞金をかけたようだ」

「……」

ペラップの説明に、リサは暗い表情を浮かべていた。

「私達はユクシーに……霧の湖の秘密を守るって約束したのに……どうしてこんなことに……」

「私達が秘密を漏らしてないとはいえ……ユクシーには顔向けできないですわね……」

キマワリの言葉に、弟子達は言葉を失ってしまった。

「でもよ！あんな綺麗な景色がなくなるなんて許せないよな！ヘイヘイ！」

「うぅ……」

何故かプクリンの様子が変わっていた。

「うぅ……ううううぅ……ううううぅぅぅ……」

「お、親方様！？」

ペラップの驚きから、プクリンの様子が変わったことが簡単にわかった。

「ううううううぅぅ……」

プクリンの様子が変わってから、何故か地響きのようなものが発生していた。リサは地震が苦手なのか、少し怯えていた。

「たあーーーーーっ！！！」

「うぉっ！」

「ひえぇぇぇ……」

いきなりのプクリンのハイパーボイスに、さすがのユウキも驚いていた。ペラップに至っては声にならないような声を発していた。プクリンは弟子達を見ながら話しはじめた。

「みんな！ジュプトルを捕まえるよ！プクリンのギルドの名にかけて、絶対捕まえるよ！ペラップ！！」

「はっはいぃ！」

ペラップはプクリンの変化と、急に呼ばれてからか、声が裏返ってしまった。

「みんな！今から全ての仕事をジュプトル捕獲にシフトする！ジュプトル捕獲に全力を尽くしてくれ！」

ペラップの言葉に、弟子達全員が納得した。弟子達はジュプトル捕獲にかなりやる気を出していた。

「プクリンさん」

ヨノワールが喋りだした刹那、一気に弟子達の注目が集まった。

「だいたいの事情はわかりました。ジュプトルの捕獲、私も手伝いましょう！」

「あっありがとうヨノワールさん！」

ヨノワールが協力すると聞き、弟子達はすごい喜んだ。

「ではこれから私と親方さまで話し合い、ジュプトルを探す段取りを決める。みんなはその間に探索の準備をしてきてくれ。準備が終わったらここに集合してくれ。ではみんな！頑張っていくよ！」

『おぉーー！！』

弟子達は、ジュプトルの捕獲するにあたっての意気込みや、何故時の歯車を盗んでいるのかなどを話しながら、トレジャータウンに準備しに行った。

「私達もトレジャータウンに行こう！」

「嗚呼」

ユウキとリサも、ジュプトル捕獲の準備のために、トレジャータウンに向かった。

ユウキとリサは、トレジャータウンにあるカクレオンのお店で買い物を済ませ、ギルドに戻ろうとしていた。

「なんでジュプトルは時の歯車を盗んでいるのかな？」

「さあな……何かしらの目的があるんじゃないか？」

確かに、ポケモン達の間ではかなり大切なものを盗むということはそれなりの理由があるはずだ。

「なんでかわかんないけど……私、なんか不安なんだ……」

リサは暗い表情を浮かべながらそう言った。

「不安？」

「うん……なんでかな？」

リサの問い掛けに、ユウキは的確な答えが出ず、少し困ってしまった。

「アハハ……ごめんね、困らせるつもりはなかったの。もしかしたら、ジュプトルが怖いのかな……」

「大丈夫か？」

「うん。大丈夫。早くギルドに行こっ！」

ユウキは、リサの事を心配したが、リサは気丈に振る舞いながら、ギルドに走っていった。ユウキは、リサの事が心配だったが、とりあえず先に行ってしまったリサを追いかけるために走って行った。

ユウキ達がギルドに着くと、既に他の弟子が集まっていた。

「よし、揃ったな。まず……これは当たり前だが……ジュプトルは時の歯車がある場所に現れる。たが……我々は時の歯車がどこにあるかわからない。そこでヨノワールさんに協力してもらい、時の歯車がありそうな場所の目星をいくつかつけた。みんなはグループにわかれて調査してくれ」

さすが物知りのヨノワール。時の歯車の場所の目星をつけることも出来るらしい。

「まず、ドゴームとヘイガニは東の森を頼む。東にある広大な森だ」

東の森、前にユウキ達も行ったことのある、かなり広大な森だ。

「ビッパ、ダグトリオ、キマワリは水晶の洞窟を頼む」

水晶の洞窟は、その名の通り、水晶が多い洞窟のことだ。

「そして、ユウキとリサは北の砂漠を頼む」

「北の砂漠？」

ユウキとリサは北の砂漠のことが知らなかったので、リサがペラップに聞き返した。

「そうだ。不思議な地図をだしてくれ」

ユウキはペラップの言う通り、トレジャーバックから不思議な地図を取り出した。

「ほら、ここだ」

ペラップは右の翼で、ギルドから遥か北の方を指した。未開の地なので、地図上では雲に覆われている。

「雲て覆われていてわかりにくいが……この辺から乾燥地帯が始まっていることから、この先は広大な砂漠が続いているではないかと言われている。もしかしたら、この砂漠のどこかに時の歯車があるかもしれないので、調査してきてくれ」

確かに未開の地なら、時の歯車がある可能性はある。ヨノワールはそう考え、ここの調査の必要性を示したのだ。

「嗚呼。わかった」

ユウキがそう言った刹那、ディグダが口を挟んできた。

「あのー……僕は？」

「ディグダはギルドでお留守番だ。さすがに見張り番がいなくなるのはまずいからな」

「私とグレッグルもお留守番よ。ギルドの仕事も大切なのよ。頑張りましょ！」

チリーンの言葉に、ディグダは、そうですねと納得した。

「それではみんなっ！時の歯車を探すよ！たあぁぁーーー！！！」

『おぉーー！！』

プクリンの号令を合図に、弟子達は一斉に行動し始めた。

「北の砂漠は砂嵐が厳しく、暑さもあり、かなり厳しい土地です。気をつけて行ってください！」

「うん！いってきます！ユウキ！行こう！」

「嗚呼」

ユウキとリサは、ヨノワールの忠告を胸に北の砂漠へと向かった。

## 第四十五話　ジュプトル（後書き）

ユウキ
「だいぶ物語が進んだな」

だね。なかなかスランプ抜けられないけど、頑張らなくちゃ……

リサ
「せっかくアドバイスもらったんだもんね」

だね。少しづつなれて、最終的には、読者の方全てに満足していただけるぐらいの作品にしたいなぁ……

ユウキ
「先は長いな」

……だね（´；ω；）

# 第四十六話　ダウン（前書き）

第四十六話完成！

ユウキ
「最近更新ペースが遅くないか？」

もうすぐテストだから仕方ないでしょ？

ユウキ
「なら仕方ないな。それよりこのサブタイトルはなんだ？」

それは今回の話で

では第四十六話をどうぞ！

# 第四十六話　ダウン

「ここが北の砂漠ね……」

ユウキ達は、時の歯車があるか調査するために、北の砂漠に来ていた。

「暑いな……」

さすがに砂漠と言うだけあって、かなり気温が高い。種族上、ユウキは暑さにそこまで強くない。正直かなり辛いのだ。

「大丈夫……？」

リサは、心配そうな赴きで聞いてきた。ちなみにリサは炎タイプなので、暑さには強いのだ。

「嗚呼……大丈夫だ。早く行くぞ」

「……うん」

リサは、ユウキの体調が心配だったが、先に行ってしまったユウキの後を追って行った。

ユウキ達が北の砂漠に入ると、ヨノワールの言っていた通り砂嵐が酷かった。更に、太陽が照り付け、その熱を帯びてかなり砂が熱くなっている。一応ここも不思議のダンジョンだが、砂嵐のせいで階段の発見も困難。今までのダンジョンの中でも、過酷さはずば抜けていた。

「凄い砂嵐だな……視界が悪いな。リサ、離れるなよ」

「うんっ」

この砂嵐の中ではぐれたら、見つけるのはかなりキツイ。ユウキはそう考え、リサに離れないように言った。リサは、ユウキから離れないように、ユウキの右腕にくっついていた。

「凄いね……」

「そうだな……グッ!?」

ユウキは突然、左腕に痛みが走った。

「なんだ今のは!?」

「ユウキ!前!」

リサの向いた方から、タネマシンガンが飛んできた。

「なに!?守る!」

ユウキは、攻撃を防ぐ壁を作りだし、自分とリサをタネマシンガンから守った。

「タネマシンガン……草タイプか?なら……リサ、頼む」

「うん!火炎……」

リサが火炎放射を使おうとしたが、何者かの攻撃を受けて中断してしまった。

「キャア!」

「砂嵐を使って目くらましにしているのか。それに敵は複数いるのか?とにかく……アイアンテール!」

ユウキは、リサに攻撃したポケモンに、鋼の如く硬質化した尻尾で攻撃した。アイアンテールはそのポケモンに命中した。

「手応えはあったな」

ユウキが確認すると、そこにはサボテンに似たポケモン、サボネアが倒れていた。

「まだいるのかな?」

「おそらくな……」

そう、まだ安心するわけにはいかない。おそらく敵は複数いる。今もユウキ達に攻撃しようとしているかもしれない。そう考えていた刹那、またしてもタネマシンガンが飛んできた。

「また来たよ！」

「フッ……それを待っていた！アイアンテール！」

ユウキは、アイアンテールで、タネマシンガンを弾き返した。それは相手に命中したか、小規模な爆発が起こった。
ユウキが確認すると、そこには一匹のポケモンが倒れていた。両手が一枚の葉っぱで出来ていて、大きい口が印象的なポケモン……マスキッパだった。

「もういないかな？」

「一応敵の気配は無いな……フゥ……」

ユウキは、今のバトルでかなり体力を消耗したようだ。更に暑さのせいか、かなり汗をかいていた。

「大丈夫……？」

「嗚呼……少し疲れただけだ」

「少し休んだ方が良いんじゃないかな？」

確かにリサの言う通り、休んで体力の回復に集中した方が良い。だがユウキはそれを承認しなかった。

「いや、ここで休んだらまた敵に襲われる。先に進んで、休める所を探した方がいい」

「……ユウキは大丈夫なの？」

「まあな。とにかく時の歯車を探すぞ」

リサは不安だったが、ユウキの言葉を聞いて少し安心した。二匹は、時の歯車の調査のために、先に進んでいった。だがこの時に、ユウキ達に忍び寄る影があるとは、知るよしも無かった……。

あれから、何回か敵の攻撃を受けてきたが、なんとか倒し、先に進んでいた。だが、さすがにユウキの体力は限界になってきた。リサも暑さに強いとはいえ、さすがに疲れてきた。

「ハァ……ハァ……」

「ユウキ……大丈夫……？」

リサはユウキの心配をした。だが、リサの顔からも疲労感が感じら

れた。

「さすがに……ハァ……キツイな……そろそろ休むか……」

だが、この辺に安全に休める場所はない。仕方が無いのでこの場で休憩することにした。

「砂漠ってだけあって、やっぱり広いね」

「そうだな……」

ユウキは、持ってきていた水を飲みながら言った。正直話すことも辛いぐらいの疲労が溜まっていた。

「早く時の歯車の調査しなくちゃならないのにな……くそっ」

「焦ったら返って失敗しちゃうかもよ?休む時は休まなくちゃ、ね?」

「……そうだな」

ユウキは、リサの言葉に頷いた。ユウキはリサの心遣いが心地好かった。だが、休む時間は、一匹のポケモンによって絶たれた。そのポケモンは、ユウキにアイアンテールで攻撃してきたのだ。

「ユウキ!?後ろ!!」

リサは、ユウキの前に座っていたので、いち早く気がついた。だがユウキは、疲労からか、反応が鈍かった。

「ユウキっ！！」

リサはユウキに向かって走り、突き飛ばした。幸いユウキとリサに怪我は無かった。

「大丈夫！？」

「あっ嗚呼……済まない……」

ユウキは弱々しく答えた。ほとんど休めなかったせいか、ユウキはまだ疲れているようだ。

「さっさと……かたずけるか……」

ユウキは、少しふらつきながら立ち上がり、目の前のポケモンを確認した。体格はユウキ達より少し大きく、鋼の鎧みたいなものが特徴的なポケモン……コドラだった。

「いくぞ……十万ボルト」

ユウキは、頬の電気袋から十万ボルトを放出し、コドラに攻撃した。それはコドラに命中したが、力の焦点が定まらなかった。そのせいか、コドラはあまりダメージが無かった。

「くそっ……威力が……定まらない……」

ユウキは、自分でも十万ボルトの威力がないことがわかった。コドラはその間に、アイアンテールで攻撃してきていた。

「っ！マズイ！」

「火炎放射！」

ユウキに向かっていたコドラに、リサが火炎放射を決めた。火炎放射はコドラに命中し、押し返した。

「済まない……」

「ユウキは休んでて！火炎放射！」

リサは再びコドラに火炎放射を放ったが、コドラは右にジャンプしてかわした。コドラはそこから、自分の爪を鋼のように硬質化して引っかく技、メタルクローで、休んでるユウキに攻撃してきた。

「ユウキ！？間に合って！」

リサは電光石火でユウキに近づき、攻撃のメタルクローからユウキを庇った。相性が良かったせいか、ダメージは少なかった。

「リサ……大丈夫か……？」

「うんっ！大丈夫！」

「……！？リサ！前！」

ユウキは、コドラが大量の小型の石を相手に向かって放つ技、ストーンエッジを放とうとしていた。

「あの技は……うおぉぉぉ！！」

そう、あの技は、前にリサが大怪我を負わされた時の技だ。そのせいか、ユウキはこの技にかなりのトラウマがあったのだ。

「動いてくれよ……俺の体……！守る！」

ユウキはなんとか体を動かし、ストーンエッジから、リサを攻撃を防ぐ壁で守った。

「ユウキ！？」

「だ……大丈夫……か……？」

ユウキはリサの事を心配したが、ユウキの体は既に限界で、暑さから、意識も朦朧としてきていた。

「これで……決める……雷パンチ！」

ユウキは、今ある雷を全て右腕に集中させ、コドラを殴りつけた。ユウキはそれでコドラの右の頬を殴った。その威力でコドラは吹き飛ばされたが、空中で体制を整え、上手く着地した。しかも、コドラのタイプは鋼と岩。防御力も高いせいか、ダメージはあまりないようだ。

「まだ……倒れないの？……ユウキ！？」

リサの言葉に反応することなく、ユウキはその場に俯せに倒れた……

## 第四十六話　ダウン（後書き）

リサ
「そんな……ユウキ……（泣）」

いやいや、別に死んだわけじゃないんだから（汗）

リサ
「とにかくどうなるの！？」

次回をまってね

## 第四十七話　リサ頑張る！（前書き）

第四十七話完成！

リサ
「ユウキ、大丈夫かな？」

それは今回の話で

では第四十七話を……

リサ
「どうぞ！」

# 第四十七話　リサ頑張る！

「ユウキ！？」

リサは、倒れたユウキのもとに向かって呼び掛けた。だが、ユウキは意識がなく、リサの言葉に反応しなかった。

「ユウキ！ねえ！！しっかりしてよ！！」

リサが心配しても、ユウキは反応しなかった。その間にも、コドラは、リサにメタルクローで攻撃してきた。

「ユウキは……私が守る！火炎放射！」

リサは、コドラをギリギリまで引き付け、近くまで来た瞬間に、燃え盛る火炎を放った。それはコドラに命中し、押し返した。コドラはかなりのダメージをおったらしく、苦悶の表情を浮かべていた。

「止めよ！ファイヤーレイン！」

リサは、コドラの上にジャンプし、上空から炎の雨を放った。コドラは避けようとしたが、その範囲は広く、どう足掻いても全てはかわせなかった。コドラは何弾か炎を受け、体力の限界が来たか、その場に倒れ込んだ。

「ふぅ……」

リサは、コドラを倒し安堵の息を漏らした。だがホッとしている場合ではない。まだ問題は残っているのだ。

「ユウキ！」

リサがユウキの容態を確認した。顔は赤く、汗もかなり出ている。
リサは、少し恥ずかしかったが、自分の額をユウキの額に合わせ、熱を測ると、かなり熱かった。
おそらくユウキは熱中症になり、脱水症状を引き起こしてしまったようだ。

「どうしよう……」

そう、リサはどうすればいいかわからなかった。だがグズグズしてはいられない。このままだと、命も危ないのだ。

「多分暑さでこうなっちゃったから……冷やせばいいのかな……」

リサは、トレジャーバックからタオルを取り出し、持ってきていた自分の水筒から水を出し、タオルを濡らした。それでユウキの体を優しく拭き、額に載せた。すると、ユウキの顔色が少し良くなった。

「少し良くなったかな……？目が覚めたらお水飲ませてあげられるのに……！？」

リサは、何者かの気配を察知した。刹那、一匹のポケモンがリサに攻撃してきた。そのポケモンは、体が岩みたいにゴツゴツして、額に角があるポケモン、サイホーンだった。

「また！？どうしよう……ううん！やるしかない！身代わり！」

リサは、前から練習し、最近習得した身代わりを使い、自分の分身

を作り出した。リサは、分身にユウキの護衛を頼み、自分はサイホーンのもとに向かった。

「一気にいくよ！目覚めるパワー！」

リサは、目覚めるパワーを使い、自分の周りに水色の小型の球体をいくつも作り出し、サイホーンに放った。

目覚めるパワーは、使用者によってタイプと威力が変わる。リサのタイプは水、威力もなかなかだ。サイホーンは、危険と判断したのか、守るを使い攻撃から身を守った。

「防がれちゃったよ……でもまだまだいくよ！電光石火から火炎放射！」

リサは、守るを使い終わり、隙が出来た瞬間に、電光石火でサイホーンの後ろに回り込み、火炎放射を放った。サイホーンは、思わぬ攻撃に苦悶の表情を浮かべた。タイプの相性が良いとはいえ、そこそこのダメージを受けたようだ。

「終わりよ！目覚める……」

リサが目覚めるパワーで止めを刺そうとした刹那、サイホーンは、何処からか出した少し大きめの岩を、リサに向かって放ってきた。ロックブラストだった。

「えっ！？キャアァァ！！」

リサは、まさか反撃が来るとは思っておらず、ロックブラストに反応できず、直撃してしまった。相性が悪く、かなりのダメージを受けてしまったようだ。だがまだサイホーンの攻撃は終わらない。威

力こそ低いが、ロックブラストは何回も攻撃できる技。一回では終わらないのだ。

「まだ来るの……？電光石火！」

リサは、傷の痛みを我慢し、電光石火でギリギリロックブラストをかわすことが出来た。だが、リサは既に体力の限界が近づいてきていた。

「ハァ……ハァ……火炎放射！」

リサは、サイホーンに火炎放射を放ったが、コントロールが定まらず、簡単に避けられてしまった。それを見て、サイホーンは止めを刺しに来た。

「えっ……あれは？」

リサは、サイホーンの様子の変化に気づいた。サイホーンは額の角をドリルのように回転させ、リサに向かって突進してきた。サイホーンは角ドリルを決めようとしていた。角ドリルは、命中率は低いが、当たれば確実に戦闘不能になる。今のリサになら決まると、サイホーンは考えたのだ。

「頑張って……私の体……穴を掘る！」

リサは、穴を掘るを使い地中に潜り、角ドリルをかわした。まさかかわされるとは思っていたなかったのか、サイホーンは動揺していた。

「終わりよ！目覚めるパワー！」

リサは、地中からサイホーンの後ろに出てきて、目覚めるパワーで攻撃した。サイホーンは耐えられず、その場に倒れた。

「良かった……終わったよ……」

リサはその場に座り込んでしまった。さすがに連続で戦うと疲労感は半端なかった。

「早くユウキの所に……」

リサは、ふらつきながらもユウキの所に向かった。幸いユウキに怪我は無かった。

「……怪我はないみたい……良かった……」

ユウキの顔色は大分よくなってきていた。リサは先程と同じようにタオルを濡らし、ユウキの額に乗せた。その刹那、ユウキに意識が戻った。

「……うっ」

「ユウキ？大丈夫！？」

「……リサ？」

ユウキは上半身を起こしながら言った。

「ひっく……良かった……ユウキにもしものことがあったら……」

リサは、安心からか、涙が止まらなかった。ユウキはそれを見て、リサを優しく抱きしめた。

「心配かけたな……」

ユウキはしばらくの間、リサを抱きしめながら、頭を撫でていた。

ユウキが目を覚ましてから数分後、ユウキは泣きじゃくっていたリサを見た。

「リサ……？」

すると、リサは安心したのか眠ってしまっていた。

「……寝ちゃったのか？随分心配かけたみたいだな……」

ユウキはトレジャーバックからオレンの実を出して食べ、体力を回復した。

「行くか」

ユウキはリサをおんぶして、北の砂漠の奥へと進んで行った。

リサをおんぶしながら歩き出して数分後、ユウキはなんとか北の砂漠の奥地にたどり着くことが出来た。

「だいぶ奥まで来たが……ここが一番奥か？」

周りを見ると、所々に、一点に向かって砂が下に流れ落ちていた。

「これは……流砂か？」

ユウキがそう言った刹那、リサが目を覚ました。

「ううん……ユウキ？」

「目が覚めたか？」

「えっ！？なんで私ユウキにおんぶされてるの！？」

リサは起きて早々驚いてしまった。まさかおんぶされているとは思わなかったからだ。ユウキはリサを下ろし、経緯を話した。

「そっか……ゴメンね、迷惑かけて」

「気にすることはないさ。俺も迷惑かけたな」

「ううん……でもあんまり無理しないでね？」

「……そうだな」

ユウキはリサと会話を終えると、周りの流砂を調べ始めた。

「これって流砂？下手に動いたら巻き込まれそう」

「危ないからむやみに動くなよ」

ユウキは周りの調査をしながら言った。だが調べてもめぼしいものは発見出来なかたった。リサも座りながらだが、周りを見渡したが、何も発見出来なかった。

「ここには何もないかもね。ユウキ？」

確かにここは流砂しかない。だがユウキは妙な感覚を覚えた。そう、前に遠征に行ったときに感じたものと同じ感覚だった。

「ユウキ？どうしたの？」

（この感覚……前にもあったな。俺はここを知っている……知っているだけか、それとも来たことがあるのか？どっちにしろ、俺はここを知っている……）

「ユウキってば！」

突然リサに声をかけられ、ユウキは少しびっくりした。

「なっなんだ？」

「どうしたの？ぼんやりして？」

「いや、なんでもない」

リサは、ユウキが何か隠してるようにも見えたが、深くは詮索しないことにした。

「何もないみたいだし……ギルドに帰ろうよ」

「そうだな」

リサは立ち上がろうとしたが、足に痛みが走り、上手く立ち上がれなかった。

「どうした？」

「なんか足怪我しちゃったみたい……」

ユウキは、リサの足を確認すると、確かに少し大きめの傷があった。

「確かに怪我してるな。ギルドで手当してもらいな」

「うん」

だが、リサが歩けないんじゃギルドに帰れない。ユウキは少し考えた後、一つの結論にたどり着いた。

「仕方ないな。またおんぶするか」

そう言いながらユウキはリサの前にしゃがみ込んだ。

「えっ!?ユウキ!?」

「痛いんだろ?早くしろ」

「……うんっ」

リサは少し顔を赤らめながら、ユウキにおんぶしてもらった。

「よし、行くか」

ユウキはリサをおんぶしながらギルドに帰った。この時、ユウキは少しドキドキしながら帰ったのはまた別のお話。

## 第四十七話　リサ頑張る！（後書き）

ふぅ……

リサ
「どうしたの？」

今回のリサの看護、大丈夫かな……

リサ
「ユウキの看護？」

かなり心配……

## 第四十八話　偉そうに（前書き）

第四十八話完成！

ユウキ
「……おい」

言いたいことはわかるよ！でもネタが下りてきて書かずにはいられなかったんだよ！（泣）

ユウキ
「……ハァ」

その哀れむような目は止めて……

では第四十八話をどうぞ！

# 第四十八話　偉そうに

ユウキとリサは、北の砂漠の調査を終え、ギルドに帰ってきた。

「ただいま～！」

リサはギルドに入って早々残っていたギルドの弟子に声をかけた。

「お帰りなさい……ってリサさん！？」

リサの声に反応したチリーンが、ユウキにおんぶされてるリサを見て驚いた。

「リサさん、どうしたんですか！？」

「あっチリーン。ちょっと怪我しちゃって」

リサがそう言うと、チリーンはリサの足を確認した。

「確かにそうですね……ユウキさん、すいませんがリサさんを治療したいので部屋まで運んでくれませんか？」

「わかった」

ユウキはチリーンの言う通り、自分達の部屋にリサを運んだ。

ユウキは部屋に入ると、リサを草のベッドに下ろした。チリーンはリサの足をもう一度確認した。

「うーん……そこまで酷くはないですね。ちょっと染みますよ」

チリーンは持ってきていた救急箱から薬を取り出し、リサの怪我している部分に塗った。ちなみにチリーンはギルドの看護も担当しているので、こういうことは慣れているのだ。

「痛っ……」

「はい、おしまい！」

チリーンはリサの足に包帯を巻きながら言った。

「所でリサさん、北の砂漠でユウキさんになにかありませんでしかた？」

「えっ!?なっなにかって!?」

リサはチリーンから思わぬ質問に声が裏返ってしまった。それと同時に顔も少し赤くなってしまった。

「なにか誤解してませんか？北の砂漠でユウキさんになにかいつもと違うことが無かったか聞いたんですよ」

「あっうん。暑さのせいか途中で倒れちゃったのよ」
リサは北の砂漠であったことを簡潔にチリーンに説明した。

「やっぱり……」

チリーンはこの時、なにかを確信したようだった。そしてチリーンは、もう一つのベッドに横になっているユウキに声をかけた。

「ユウキさん、ちょっといいですか？」

「……なんだ？」

「ユウキさん、無理してませんか？」

チリーンから思わぬ質問に、ユウキは少し戸惑ってしまった。

「無理？」

「はい。リサさんから聞いたんですが途中で倒れたそうですね？」

「それがどうした？」

ユウキには、チリーンがなにを言いたいのか、いまいちよくわからなかった。

「まだ調子悪いんじゃないですか？」

「いや、そうでもないな」

そう言いながらも、ユウキはどこかだるさがあった。

「私の目はごまかせませんよ。まだ本調子じゃないですよね？」

そう、目を覚ましてからここまで変に体が重く感じていた。チリーンの言っていることは間違っていなかった。

「無理はしてないが……確かに少しだるさはあるな」

「やっぱり。まだみんな帰ってきてないので、ゆっくり休んでくださいね！」

「あっ嗚呼」

ユウキはチリーンの気迫に押され、とりあえず休むことにした。それを見てチリーンはリサの所に来た。

「リサさん、ユウキさんにおんぶされた感想は？」

チリーンは小声でリサに質問した。リサは、チリーンから考えてもみなかった質問に驚き、顔を赤らめた。

「チッチリーン！」

「フフッごめんなさい。では私はこれで」

チリーンは意味深な笑顔を残し、部屋から出て行った。

「チリーンったら……」

そう言いながらユウキの方を見ると、ユウキは寝息を立てていた。
やはり疲れていたのだ。

「やっぱり疲れていたみたい……フフッいつもはクールなのに、寝顔はかわいいよね♪」

リサは寝ているユウキを見て、小声で言った。それを見ていると、リサも眠くなってきた。

「……私も寝ようかな」

リサも、連戦のせいかかなり疲労が溜まっていた。とりあえず、みんなが帰ってくるまでリサも休むことにした。

それから数時間後、ギルドの弟子達が帰ってきた。それからプクリンに報告するためにプクリンの部屋の前に召集した。チリーンはそれを知らせるために、ユウキ達の部屋に行った。

「ユウキさん、リサさん、起きてください」

「……あ？どうした？」

先に起きたのはユウキだった。チリーンはユウキに召集のことを説明し、部屋を出ていった。

「たいぶ楽になったな……それより早く起こすか……おい、リサ」

ユウキはリサの寝ているベッドに行き、リサを起こした。

「ううん……なに？」

「召集だとよ。行くぞ」

「召集……？うん、わかった」

リサはまだ少し寝ぼけていたが、とりあえず起きることにした。

「行くぞ」

ユウキはリサの前にしゃがみ込んだ。リサはまだ少し抵抗があったが、ユウキにおんぶしてもらった。

部屋を出ると、既に弟子達は揃っていた。ユウキ達が来たと同時に、キマワリがいきなりしゃべりだした。

「きゃー！なんでリサがおんぶされているんですのー！？」

キマワリはおんぶされているリサを見て大声を上げた。それは驚きもあったが、大半はからかいがしめていた。

「さっき足を怪我しちゃって」

「大丈夫でゲスか？」

ビッパは、リサの足を見ながら心配そうな赴きで言った。

「大丈夫だよ」

リサは笑顔でそう言った。それからすぐにプクリン、ペラップ、ヨノワールがやって来た。

「みんなお疲れさん！早速報告してくれ♪」

弟子達は、それぞれ報告を始めたが、時の歯車を発見した報告はなかった。

「他の所もなにもなかったの？」

リサは報告を聞き、思ったことを発言した。ちなみにリサはユウキに下ろしてもらい、座った体勢をしている。

「そういうことになりますわね」

「ヘイ！東の森に行ったけどよ、森ばかりでなにもなかったぜ！ヘイヘイ！」

ヘイガニが東の森の調査について説明した。

「水晶の洞窟は、水晶がいっぱいあって、凄い綺麗な洞窟だったでゲスよ～！あんまりにも綺麗だったから、思わず一個持ってきちゃったでゲス」

ビッパはそう言いながら自分のトレジャーバックから水晶を取り出し、ユウキ達に見せてくれた。確かに綺麗な水晶だ。

「まあ、いつの間に。一緒にいたのに気づきませんでしたわ」

キマワリがそう言った刹那、ダグトリオが少し声を荒げながら話し始めた。

「おいビッパ。我々の目的は時の歯車の探索だ。それなのに目的を達成するどころか、全く関係のないお土産まで拾ってきて、お前は一体なんなんだ！？そんなものを発見しないで時の歯車を発見してこい！」

ダグトリオはいきなりビッパを叱り付けた。確かにそう考えるのも無理はないが、ダグトリオの言葉にユウキが反論した。

「水晶を持ってきただけならともかく、ちゃんと調査はしたんだろ？なら別に良いじゃないか。そういうあんたはなんなんだよ？ビッパがあんたにそこまで言われる筋合いはないだろ！？偉そうに……」

ユウキの思わぬ発言に弟子達は黙り込んでしまった。ダグトリオは、まさか基本的にあまり喋らないユウキに反論されるとは思っておらず、黙り込んでしまった。

「良いんでゲスよユウキ。悪いのはあっしでゲスから」

「……そうか」

ユウキは納得いかなかったが、とりあえずそれ以上言うのは止めた。それと同時に、ユウキはダグトリオのことが一気に嫌いになった。弟子達に嫌な空気が流れたが、その空気を消すかのように、ペラップが話し始めた。

「ヨノワールさん、残念ですが、探索は空振りに終わったようですね」

「うーん。困りましたね……調べる場所としては良い線いってると思ったのですが……私の知識不足ですね。申し訳ありません」

ヨノワールは、少し悔しいのか、顔をしかめながら言った。

「とんでもない！ヨノワールさんがいたから今回の作戦も立てられたんですよ！？」

「でも失敗したのは事実です。まあがっかりしてもしょうがないですし、明日はまた違う作戦を考えましょう！」

落ち込み気味だったペラップとは裏腹に、ヨノワールはかなり前向きだった。

「はい！頑張りましょう！……というわけでみんな！今日の仕事は終わりだ。また明日に備えてくれ」

『はーい！』

「じゃあ皆さん！ご飯にしましょー！」

チリーンの合図と共に、弟子達は一斉に食堂へと走り出した。

「……」

だがユウキだけはその場に残っていた。その表情は、どこか怒っているような感じがした。ちなみにリサも動けないので残っていた。

「どうしたの？」

「気に入らないな……」

「ユウキ？」

「……嗚呼、悪い。どうもダグトリオみたいなやつは気に入らなくてな」

そう、さっきのやり取りから、ユウキは少し怒っていたのだ。

「ああいう奴嫌いなんだよ。自分だってなにも発見していないくせに偉そうに……」

リサは、久しぶりにユウキが怒っている顔を見た。それぐらいさっ

きの発言は、ユウキから言わせれば許せなかったのだ。

「ユウキ……」

「……悪いな。嫌な気持ちにさせて。早く飯食いに行くか」

ユウキは、苛立つ気持ちを抑え、リサおんぶしながら食堂へと向かった。

## 第四十八話　偉そうに（後書き）

リサ
「みんな収穫なしかぁ……」

だね

僕は早くテスト勉強！

リサ
「……」

## 第四十九話　休み（前書き）

第四十九話完成！

ユウキ
「誓いと絆のダブル更新か」

まあね～♪

リサ
「今回はどうなるかな？」

では第四十九話をどうぞ！

# 第四十九話　休み

北の砂漠を探索した次の日、ユウキとリサは朝の恒例の朝礼に出ていた。ちなみにリサの足は大分良くなっていたが、まだ痛みがあるので、今日もユウキにおんぶされていた。

「え～今日も時の歯車の探索だ。みんなしっかりやってくれ♪では頑張っていくよー♪」

『おぉー！』

ペラップの号令を合図に、弟子達は、時の歯車の探索に出掛けたり、ギルドで仕事をしたりと、それぞれの仕事へと向かっていった。だが、いつもいないポケモンがいた。ダグトリオだ。ダグトリオは昨日の事を少し反省していたのだ。あの時、さすがにビッパに言い過ぎた。口数の少ないユウキに反論されるのも無理はない。さすがに謝らないとと考えていた。

「……ユウキよ」

ダグトリオはまだ近くにいたユウキに声をかけた。

「……なんだ？」

ユウキは昨日のこともあるせいか、そっけなく返事した。

「その……なんだ、昨日は……私が言い過ぎた。済まなかった」

ダグトリオは昨日のことを、ユウキに素直に謝った。さすがのユウ

キも驚いたが、少したってから微笑んだ。

「なに言ってんだ?謝る相手が違うだろ?早くビッパに謝れよ」

「……そうだな。でもユウキにも謝っておきたかったのだ」

「……いや、俺も言い過ぎた。悪かったな」

ユウキは、素直に謝ってきたダグトリオに、自分も素直に謝った。

「では私はビッパに謝ってくる」

そう言うと、ダグトリオはビッパを探しに行った。

「……まさか素直に謝ってくるとはな」

「これでゴタゴタも解決出来たね」

ユウキの隣に座っていたリサが、笑顔で言った。

「おい、お前達」

ユウキ達の近くにいたペラップが、ユウキ達に声をかけてきた。

「リサの足の具合はどうだ?」

ペラップはリサの足の様子を聞いてきた。ここだけの話、ペラップもリサの怪我のことを心配していたのだ。

「大分良くなったけど、まだ一人で歩くのは辛いかな」

「そうか。なら今日はリサは部屋で休んでいてくれ」

ペラップのまさかの発言にユウキとリサは驚いてしまった。

「昨日親方様に言われたことだ。その足だと上手く探索出来ないからな。ライトニングは、リサの怪我が良くなったら時の歯車の探索に行ってくれ」

そう言い残して、ペラップは立ち去った。残されたユウキとリサは、どうするか悩んでしまった。

「どうしよう？」

「……とりあえず部屋に行くか」

ユウキはリサをおんぶして、自分達の部屋に戻っていった。

部屋に戻ったは良いが、ユウキ達は、今日はどうするか悩んでいた。

「どうするの？」

「そうだな……とりあえずリサは怪我を早く治した方が良いな」

「ユウキは？」

リサの質問に、ユウキはまた悩んでしまった。仕事がないと、正直なにをすればいいかわからないのだ。

「……まあせっかくの休みだしな。適当になんかしてるか」

そう言いながらユウキは部屋を出ていこうとしたが、リサが呼び止めた。

「どこ行くの？」

「ぼーっとしていても暇だからな。ちょっと散歩してくる」

「そっか……ユウキ？」

「なんだ？」

リサはユウキを呼び止めたが、その後の言葉がなかった。

「どうした？」

「……ううん！気をつけて！」

「あっ嗚呼」

ユウキはリサが言いかけた言葉が気になったが、とりあえず部屋を出ていった。

「もう……なんで私ユウキに……行かないでって言おうとしたのかな……そんなこと言ったらユウキに迷惑なのに……」

リサは、さっき行かないでと言おうとしたが、思わず言い留まってしまったのだ。

「とにかく今は治すことに専念しないと……」

そう言いながら、リサはベッドに横になった。

一方ユウキは、ギルドを出てカクレオンのお店にやって来ていた。

「おやユウキさん！いらっしゃ～い♪」

カクレオンは、相変わらず陽気に挨拶した。

「カクレオン、モモンの実あるか？」

「モモンの実ですか？ちょっと待ってくださいね～」

そう言うと、カクレオンは店の中を探し始めた。数分後、カクレオ

ンが店の奥から戻ってきた。

「ありましたよ～♪」

そう言いながらカクレオンはピンク色の木の実、モモンの実を持ってきた。ユウキはモモンの実を三個買った。

「ありがとうございました～♪」

カクレオンのお礼の言葉を聞きながら、ユウキはカクレオンのお店を後にした。

ユウキはトレジャータウンを後にしたが、ギルドには戻らず、海岸に来ていた。

「フゥ……」

ユウキはため息を一つしてから、あることを始めた。

「充電！」

ユウキは充電で、電気を溜めはじめた。どうやらバトルの特訓をす

るようだ。

「よし……ハァ！」

ユウキは充電で溜めた電気を使い、ボルテックススタイルになった。

「ここから……」

ユウキはボルテックススタイルのまま、雷鳴剣を作り出そうとしたが、上手くコントロール出来ず、電気は体から勝手に放出してしまった。

「くそっ……コントロールが難しいな……」

ユウキはボルテックススタイルなら体を強化出来るので、腕が雷鳴剣に耐えられると考えたが、予想以上にコントロールが難しかったのだ。

「どちらかだけでもコントロールが難しいが……両方は相当きついな……」

だが弱音を吐くわけにはいかない。これが上手く完成すれば、かなりの戦力になる。そうすればリサを守ることが出来るのだ。

「……もう一回やってみるか」

ユウキはそう言いながら特訓を再開し、約一時間ぐらい特訓した。

だがコントロールは難しく、ちょっとやそっとじゃ完成しなかった。

「これ以上はオーバーワークになるな……帰るか」

ユウキはさっき買ったモモンの実を持ってギルドに戻っていった。

「あっ！お帰りユウキ！」
「お帰りなさい！ユウキさん」

ユウキが自分達の部屋に入ると、リサとチリーンが出迎えてくれた。
丁度リサはチリーンに手当してもらっている所だった。

「リサの怪我はどうだ？」

ユウキは少し心配そうな赴きでチリーンに質問した。

「大分治ってますよ。これなら明日には治りますね。では私はこれで」

チリーンはリサの怪我の手当を済ませ、何故か笑顔で部屋を出ていった。

「ユウキ遅かったね。なにかしてたの？」

「まあな。それよりほら」

ユウキは持っていた紙袋からモモンの実を取り出した。

「モモンの実だ！どうしたの？」

「別に深い意味はない。ただのお土産だ」

ユウキは頭をかき、そっぽ向きながら言った。それを見てリサは何故か笑みがこぼれた。

「フフッなにそれ？それじゃあミズキみたいだよ？」

リサは、笑顔でユウキに冗談を言った。

「あいつと一緒は嫌だな……」

「そんなこと言ったらミズキに怒られるよ？」

「……確かに」

ユウキの表情にも、自然と笑みがこぼれた。

「……それよりモモンの実好きだったろ？」

「うん！ありがとうユウキ！」

リサは満面の笑みでユウキにお礼を言った。それを見てユウキも笑みを浮かべた。

「一緒に食べようよ」

「……そうだな」

ユウキは、本来リサだけに買ってきたが、リサの勧めで、一緒に食べることにした。おいしそうに食べてるリサを見ると、何故かユウキまで嬉しくなっていた。それからは自室でのんびりし、眠りについた。

## 第四十九話　休み（後書き）

ユウキ
「なかなか上手くいかないな……」

半端ないぐらいのコントロールが必要だからね

リサ
「でも初めての休日だったね」

さすがのペラップも怪我しているリサを働かせようとはしないみたいですね

## 第五十話　流砂の洞窟（前書き）

第五十話完成！そして僕絶好調！！

リサ
「この小説も五十話かぁ……」

まあプロローグを抜いたらね

ユウキ
「ここまで続くとはな……」

これからも頑張るよ！

では第五十話をどうぞ！

# 第五十話　流砂の洞窟

次の日、ユウキとリサは眠りから覚め、朝の朝礼に出ていた。リサの足は既に完治し、自分で歩けるようになっていた。

「えー今私とヨノワールさんで探索する場所を検討している。それまでは自由に探索してくれ。ではみんな♪頑張っていくよー！」

『おぉー！！』

一部の弟子を除いて、弟子達は時の歯車を探しに出かけた。ユウキ達もリサの怪我が治ったので探索に行くことにした。

「ユウキ、私達はどこに行く？」

リサに聞かれたが、ユウキにはあてがないので困ってしまった。

（どうするか……調べるといってもあてがないしな……いや、まてよ？）

ユウキは一つのある一つのことが頭に浮かんだ。

この前、北の砂漠の奥にあった流砂の地のことが気になっていたのだ。前に時の歯車を見た遠征の時と、同じ感覚を流砂の地で感じたのだ。

（そうだ。この前は流砂しかないと思ったが、あそこにはまだ謎があるかもしれない……調べる価値はあるな）

「どうしたの？またぼーっとして？」

「……リサ、この前の流砂の地に行ってみないか？」

ユウキはリサに申し出たが、リサはこの前は何も無かったのになんで行くのかわからなかった。

「でもなんで？この前は何も無かったよね？」

ユウキは行きたい理由をリサに説明すると、少し驚いていたが納得した。

「わかったよ。ユウキ、流砂の地に行ってみよう！」

ユウキとリサはもう一度流砂の地へと向かうために走り出した。

ユウキとリサは北の砂漠を越え、流砂の地にやって来た。幸い北の砂漠ではこれといった問題は起こらなかった。

だがやはり流砂の地にあるのは、大小さまざまな流砂しか存在していなかった。

「また来たけど……やっぱりここにあるのは、広がるように続く砂漠と流砂しかないね。当たり前なんだけど」

リサの言う通り、周りには砂漠と流砂しかない。ここに一体どんな謎があるのだろうか。

「どこから調べる？……ユウキ？」

ユウキはリサの呼びかけに反応しなかった。その表情はどこか思い詰めているようにも見えた。

（……やっぱり感じる……俺はここを知っている……だが見渡してもリサの言う通り砂漠と流砂以外はないな……流砂以外は……！？そうか！流砂しかないということは、やれることは一つしかない！）

「ユウキ？どうしたの？」

何度呼んでも反応しないユウキを、リサは心配したが、唐突にユウキが話し始めた。

「リサ、流砂に飛び込む」

「えっ……え～！！」

まさかの申し出にリサは驚きを隠せなかった。

「本気なの？本気で流砂に入るの？」

リサはかなり不安だったが、ユウキの言ったことを信じることにした。

「わかった。ユウキを信じるよ。ここまで頑張ってこれたのも……

ユウキのおかげだから……」

「リサ……」

リサは少し顔を赤らめながら言った。その後、なにかを決意したような表情になった。

「ユウキ、行こう！流砂の中に！」

「嗚呼」

「行くよ、せーの……それ！」

リサの掛け声を合図に、二匹は流砂に飛び込んだ。

「ぐはっ！背中打った……」

ユウキは流砂の中に入ったは良いが、まさかここまで高さがあるとは思っておらず、受け身を取ることに失敗し背中を打ってしまった。

「リサは？」

ユウキは、周りを確認したがリサを確認することが出来なかった。
ユウキの方が体重があるのか、先に落ちてきてしまったようだ。

「キャアァァ！！」

ユウキは頭上を見ると、リサが上から落ちてきていた。

「マジかよ……よっと！」

ユウキは落ちてきたリサを上手くキャッチした。その格好はお姫様抱っこみたいな形になっていた。

「大丈夫か？」

「う……うん。大丈夫」

リサはまたしても顔を赤くしながらユウキの腕から降りた。

「ここは……洞窟？私達あそこから落ちてきて……ユウキ！ユウキの思った通りだったんだ！流砂に秘密があったんだ！行こうユウキ！」

リサは目を輝かせながら言った。ユウキとリサは時の歯車を探すために洞窟……流砂の洞窟へと入っていった。

流砂の洞窟は北の砂漠と違ってそこまで暑くなかった。これなら暑さにやられることはないだろう。

だがポケモンの出現率が高く、今も襲い掛かってきたスコルピを倒した所だ。

「なんとか倒したね」

「そうだな……」

ユウキはスコルピに攻撃された右腕を気にしながら言った。

「大丈夫？」

「嗚呼、心配ない。それより早く奥に行くぞ」

腕に痛みはなかったので、リサに心配ないと言い、洞窟の奥に向かった。リサは先に行くユウキを駆け足で追いかけた。

「だいぶ奥まで来たな……」

「そろそろ一番奥に着くかな？」

洞窟に入って約一時間。そろそろ最深部についてもいい頃だ。だがその時、普通では起こらないことが発生しした。洞窟の中なのに砂嵐が発生したのだ。

「砂嵐だと？」

「洞窟の中なのに！？」

刹那、ユウキとリサに向かって破壊光線が飛んできた。

「なっ！？電光石火から守る！」

ユウキは電光石火でリサに近づき、守るで破壊光線を防いだ。

「大丈夫か？」

「うん！ありがとうユウキ！」

だが安心は出来ない。この砂嵐のなかにポケモンがいるのは間違いないからだ。

「破壊光線は反動で動けなくなる……それに破壊光線はあっちから来たから……リサ！あそこに向かって攻撃するぞ！」

「うん！」

ユウキは十万ボルト、リサは火炎放射で、破壊光線が飛んできた方向に攻撃した。どうやら攻撃はポケモンに命中したようだ。

「なんだあいつは？」

ユウキ達の前には、一匹のポケモンが現れた。ユウキ達より何倍も大きく、緑色で鎧のような体、背中には突起がいくつもあるポケモン、バンギラスだった。

「こいつはマズイな……」

ユウキはバンギラスの気迫に押されていた。でも逃げる訳にはいかない。倒して時の歯車の探索をしなければならないからだ。

「リサ！気を引きしめていくぞ！」

「うん！」

ユウキがそう言った刹那、バンギラスは集中した後、右手に力を溜め、ユウキを殴り掛かった。気合いパンチだ。

「ちっ！電光石火！」

ユウキは電光石火でギリギリ気合いパンチをかわす事に成功した。だが気合いパンチが当たった岩は粉々になってしまっていた。

（あんなの喰らったら一撃でおだぶつだな……どうする？）

ユウキが作戦を立てている間にも、バンギラスは黒い螺旋状の波動、悪の波動で攻撃してきた。

「マズイ！」

「火炎放射！」

リサはユウキの前に出て、火炎放射で悪の波動に対抗した。だが悪の波動の方が威力が高いか、火炎放射が押されてきた。

「マズイよ……」

「リサ！火炎放射を中断しろ！」

リサはユウキの言う通り、火炎放射を中断した。そのせいで悪の波動はユウキ達に向かって飛んできた。ユウキはリサを抱え右に飛び込み、悪の波動をかわした。

「ありがとうユウキ」

「礼を言うのは俺だ。それよりまた来るぞ！」

バンギラスは右手に黒い爪を作るシャドークローで攻撃してきた。

（とにかくあいつの動きを止めるしかない……だが普通にやっても意味がない……なら！）

「身代わり！」

ユウキは自分の体力を消費し、身代わりを作り出した。バンギラス

のシャドークローは、ユウキの身代わりに当たった。その時バンギラスに異変が起こった。攻撃を受けてないのに動きが鈍くなったのだ。

「……成功したか？」

「ユウキ？なにをしたの？」

「身代わりに電気を帯びさせていたのさ」

ユウキは身代わりを作り出した時に、体力と一緒に微弱な電気を消費した。それにより、打撃攻撃をしてきた相手を麻痺させることに成功したのだ。つまり、身代わりに物理攻撃してきた相手に、電磁波と同じ効果を与えることが出来るのだ。

「ユウキ凄いね！」

「あっ嗚呼」

ユウキはリサに褒められ、少し顔を赤くしながらそっぽ向いた。褒められて素直に嬉しかったのだ。

「とにかく一気に攻める。……試してみるか。ハアァァ！」

ユウキは先程のバンギラスのように集中力を高め、そこから右手に力を溜め、痺れているバンギラスの腹部を殴った。バンギラスは気合いパンチをまともに受け、顔を歪めた。

「よし！上手くいった！」

そう、ユウキは先程バンギラスが使った気合いパンチを、自分でも使えるか試したのだ。まだ威力は定まっていないか、そこまで高くはないが、悪と岩タイプを持つバンギラスには、十分な威力だった。その証拠にバンギラスはフラフラしていた。

「チェックメイトだ！十万ボルト！」

「私も！火炎放射！」

ユウキとリサの攻撃は、バンギラスに命中した。バンギラスは耐え切れず、その場に倒れ込んだ。それと同時に砂嵐が止まった。

「やったね♪」

「フゥ……ちょっと疲れたな……」

ユウキはため息を一つし、その場に座り込んだ。

「少し休んだら出発しようよ」

「そうだな」

ユウキとリサは、トレジャーバックからオレンの実を取り出して食べた。その後少し休憩をして、流砂の洞窟の奥へと向かった。

歩きだして数分後、ユウキ達の目の前には湖が広がっていた。

「これは……湖か？」

「凄い……まさか地底こんな湖が広がっているなんて……」

リサは目をキラキラ輝かせながら言った。

「あれっ？ねえユウキ、あそこになにか光ってるよ？」

ユウキは、リサの示した方を見ると、淡いグリーンのような光が見えた。

「あの光……前にも見たことあるような……」

「……霧の湖で見たものと同じだ」

そう、その光は前に遠征で行った霧の湖て見たものと同じだった。

「そっか！ということは……あの光は……時の歯車？」

「もう少し近くで確認してみるか」

ユウキとリサが湖に近づくと、急に当たりが暗くなった。刹那、誰かの声が聞こえてきた。

「まてっ！なんなの！？お前達は！」

「……誰だ？」

「ここへ何しに来た！？」

「何しにって……私達は時の歯車を探しに……」

「時の歯車に近づいてはならない！時の歯車に近づく者は……許さない！」

その声がそう言い終わった刹那、当たりが明るくなり、一匹のポケモンが湖から現れた。ピンクと薄い青を基準とした色に、二つのしっぽが印象的だった。

「……お前は？」

「私はエムリット！この地底の湖で時の歯車を守るもの！」

エムリットと名乗ったポケモンは、自分を時の歯車の番人だと言った。

「時の歯車を……守るもの！？」

「時の歯車を脅かすものは……私が許さない！いくよ！」

そう言いながらエムリットはユウキ達に襲い掛かってきた。

## 第五十話　流砂の洞窟（後書き）

ユウキ
「なんだあのポケモン？」

湖の番人（笑）

ユウキ
「とにかくやるしかないな」

エムリットとのバトルは次回です

リサ
「まあ読めばわかることだよね」

気にしない気にしない♪

## 第五十一話　ＶＳエムリット！（前書き）

第五十一話完成！

ユウキ
「エムリットとのバトルか」

そういうことさ。後この小説も誰でも感想を送れるようにしました

では第五十一話をどうぞ！

# 第五十一話　ＶＳエムリット！

「いくよ！エナジーボール！」

エムリットは出てきて早々、緑色のエネルギーを球体化させ、それをユウキ達に放ってきた。

「早速かよ。守る！」

ユウキはエナジーボールを、守るで発生した壁で弾き返した。

「くっ！」

「こっちもいくぞ。十万ボルト！」

「うん！火炎放射！」

ユウキとリサは、エムリットに向かってそれぞれの得意技を放った。だがそれはエムリットにかわされてしまった。

「時の歯車は渡さない！吹雪！」

エムリットは、凍えるような吹雪を、ユウキ達に向かって放った。

「こっちの話に耳を傾けるつもりはないようだな……」

「冷静にしている場合じゃないよ！火炎放射！」

リサは凍てつく吹雪に対して、火炎放射で対抗した。それが吉と出

たか、火炎放射の炎は吹雪で発生した雪を溶かした。

「ちっ……防戦一方だな……」

ユウキ達は、今だにエムリットに攻撃を当てていない。これではやられるのも時間の問題だ。だがいくら考えても、ユウキにはろくな手が浮かばなかった。

「勝つのは私よ！破壊光線！」

エムリットは、ノーマルタイプ最強技の一つ、破壊光線でユウキ達に攻撃してきた。

「ユウキ！？どうしよう！」

「俺の後ろに来い！守る！」

ユウキは守るで攻撃を防ぐ壁を作り出した。だが、破壊光線の威力は凄まじく、守るをしたにも関わらずかなり押されてしまった。

「くっ……」

「仕留める！シャドーボール！」

エムリットは、漆黒の球体、シャドーボールを作り出し、ユウキに放った。

「させるか！アイアンテール！」

ユウキは自分のしっぽを鋼のごとく硬質化し、シャドーボールをエ

ムリットに向かって弾き返した。エムリットは、ユウキの行動を予想していなかったか、弾き返されたシャドーボールをかわすことに失敗した。

（隙が出来た！考えろ！勝つための作戦を！）

確かに今が作戦を立てるチャンスだが、エムリットとの実力差を考えると、やはりろくな作戦しか思い付かなかった。

「……駄目だ……こんな作戦じゃ勝てない」

「でもなにか思い付いたの？」

「嗚呼……」

ユウキは作戦内容を話した。それは電気を帯びた身代わりを使って麻痺させ、その隙をついて攻撃するものだった。

「だけどあの分身……ライジング・トラップは物理技を使って来ないと通じない……あいつが物理攻撃をしてくるとは思えないからな」

「……ならこうしたらどうかな？」

リサは、ユウキに思い付いたことを話した。リサの作戦はかなり的確で、ユウキも少し驚いてしまった。

「確かに……上手くいくかもな。だが一つ不安が残る……最後のは上手くいくか？」

「私も自信ないけど……」

リサは少し暗い表情になってしまった。

「……いや、俺はリサを信じるさ」

「ユウキ……」

リサは、自分のことを信じると言われ、素直に嬉しかった。だがその間にエムリットは体制を整えていた。

「くっ……！なかなかやるね……でも勝つのは私よ！サイコニードル！」

エムリットは、自分の超能力のエネルギーを何個も固体化させ、それを針のように鋭くし、ユウキ達に向けて放ってきた。

「あれはマズイよ！？」

確かにあれをまともに受けたら致命傷になりかねない。だが、それをやすやすと受けるユウキではなかった。

「させるか！身代わり！」

ユウキは自分の体力を消費し、身代わりを作った。

「もう一人の俺は守るでリサを守れ」

「わかった」

分身は、リサの前で守るを使った。一方本体のユウキは、影分身を

使い、エムリットを錯乱させた。

「面倒ね！全部にやるまでよ！」

エムリットは、影分身によって作られた分身に向かってサイコニードルを放った。思ったより範囲、スピードが早く、本体のユウキに何本が命中してしまった。

「ぐはっ！」

「ユウキ！？」

ユウキは、サイコニードルによる鋭い痛みで思わず悲鳴を上げてしまった。

「くっ……」

痛みのせいか、少し意識が遠退いてしまったが、気力でなんとか立て直した。

「ユウキ！大丈夫！？」

リサと分身のユウキが、ひざまずいているユウキのもとに駆け寄った。

「大丈夫だ……」

口では大丈夫とは言っていたが、ユウキの表情はやはり辛そうだった。

「これで終わりよ！破壊光線！」

エムリットは、破壊光線で、ユウキ達に止めを刺しに来た。

（こいつを止めれば勝機はある！だがどうすれば……）

「もうユウキは傷つけさせないよ！火炎放射！」

リサは火炎放射で破壊光線に対抗した。ユウキの分身に守まれている時に力を溜めていたので、かなりの威力だった。それでも破壊光線の方が威力が高く、だんだん押されてきた。

「うぅ……絶対……負けないんだから……」

しかしそう言いながらも、その顔は辛そうな表情になってきた。

「十万ボルト！」

ユウキは破壊光線に集中していたエムリットに向かって十万ボルトを放った。

「えっ！？うわぁ！」

エムリットは集中していたか、十万ボルトをまともに受けた。

「チャンスだ！やるぞ！」

「うん！」

「いくぞ！電光石火！」

ユウキは目にも留まらぬ速さでエムリットの懐に入った。

「くっ！？」

「身代わり！」

ユウキは身代わりで分身を作りだし、分身にエムリットを掴ませた。

「離しなさい！」

「今だリサ！」

「うん！火炎放射！」

リサは、動けないエムリットに向かって火炎放射を放った。ユウキは穴を掘るで地中に潜ることで火炎放射をかわした。

エムリットは分身のせいで動けないので、火炎放射をまともに受けてしまった。

「うぅ……やってくれるわね……！？」

エムリットがそう言った刹那、エムリットの動きを封じていた分身が大爆発したのだ。

「……どういうこと？」

「よかった……成功して……」

「分身大爆発……成功だな」

リサが考えた作戦は、ユウキが身代わりを作り出す時に、ライジング・トラップの時の電気より更に強い電気、それこそトラップだと、体力を九割、電気は一割ぐらいだが、今のは体力を六割、電気を四割とかなり多い。だから火炎放射のエネルギーと、電気のエネルギーがぶつかり合い、大爆発を起こしたのだ。

「仕留める！」

ユウキはチャンスの今、地中から飛び出した。地中で充電をしていたか、ボルテックススタイルになっていた。

「ライジング・ブレイカー！！」

ユウキは電気を大量に右手に溜め、エムリットを殴り掛かった。

「させない！アイアンテール！」

「なにっ！？」

予想もしていなかったエムリットの物理攻撃の反撃に、ユウキは戸惑いを隠せなかったが、そのまま攻撃していった。

「うおぉぉぉぉ！！」

「ハアァァァァ！！」

ユウキとエムリットの技はぶつかり合ったが、お互い疲労からかそこまで耐えられず、お互い吹き飛ばされた。

「グハァ！」

「きゃあ！」

「ユウキ！？」

リサはユウキのもとに駆け寄った。ユウキはなんとか起き上がったが、かなりフラフラしていた。だがそれはエムリットにも言えることで、意識を保つのも辛いみたいだ。

「うぐっ……渡さない……時の歯車だけは……」

「だから！私達は時の歯車を盗みに来たんじゃないんだって！」

リサは必死にエムリットに説明したが、エムリットの耳には届かなかった。

「とぼけるな！私はユクシーからテレパシーで聞いてるんだよ！霧の湖の時の歯車が盗まれたことを！」

エムリットはユクシーから一連のことを聞いていたのだ。だからユウキ達に攻撃してきたのだ。

「ユクシーから！？」

「あれはお前達の仕業だろ！？」

「俺達じゃない……それは……」

「それは……俺の事じゃないかな？」

ユウキが痛む体を耐えながら、エムリットに説明しようとした刹那、一匹のポケモンが来た。緑色の体、頭に長い葉っぱに、両腕に三枚ずつ葉っぱがあり、かなり身のこなしが良さそうだった。

「ジュ……ジュプトル！！」

「こいつが……！」

そう、時の歯車を盗み続けているポケモン、ジュプトルだった。

「悪いが……時の歯車は頂くぞ」

そう言いながらユウキとリサに電光石火で攻撃した。ユウキとリサはそれを受け吹き飛ばされてしまった。

「……どいてくれ」

ジュプトルはエムリットの前に行き、そう静かに申し出た。

「嫌よ！時の歯車は渡さない！！

「……なら仕方ない……リーフブレード！」

ジュプトルは右手の三枚の葉っぱを剣のように鋭くし、エムリットに攻撃した。エムリットはダメージが貯まっていたせいか、その場に倒れ込んだ。

「エムリット！」

「お前は先程の戦いで相当ダメージを負っているはずだ。無理はするな」

「その先には行かせない！」

ジュプトルが湖に飛び込もうとした刹那、ユウキとリサがジュプトルの前に立ちはだかった。

「時の歯車は渡さない！」

「……そうか……悪いな」

ジュプトルは微笑を浮かべながらリーフブレードを放った。ユウキ達はダメージが濃いせいかかわすことが出来ず、まともに受けてしまった。

「ぐっ……」

「お前達に恨みはない。勘弁してくれ。時の歯車は……貰っていくぞ！」

そう言いながらジュプトルは湖に飛び込み、時の歯車のもとに向かった。

「うぅ……時の歯車が……盗られちゃう……」

「……済まない……ユクシーが言っていたのは……あいつだったんだね……疑って……ゴメン……」

エムリットがそう言った刹那、急に地面が揺れはじめた。

「い……いけない！はやくここから脱出しなくちゃ！」

「なぜだ？」

ジュプトルが時の歯車を取ると、洞窟の色が失われていった。これが時の停止を示しているのだ。

「あいつが時の歯車を盗ったんで……ここら辺一帯の時間が止まる！」

「なに！？」

「早く脱出しないと……うっ！」

ユウキ達は脱出しようとしたが、体の痛みと疲労から上手く動けなかった。

「みんなこっちに来い！」

ユウキの掛け声を聞き、リサとエムリットはユウキのもとに来た。

「それっ！」

ユウキはトレジャーバックから一個の青い球を地面に向かって投げた。それは穴抜けの球という不思議玉。これを使うとダンジョンの外に脱出出来るのだ。

これを使い、なんとかユウキ達は時の停止に飲み込まれる前に脱出することが出来た。

## 第五十一話　ＶＳエムリット！（後書き）

リサ
「時の歯車が……」

盗られたね

ユウキ
「なんか最近新しいオリジナル技が多いな」

……確かに（汗）

## 第五十二話　過去か未来か（前書き）

第五十二話完成！

リサ
「時の歯車が……」

元気だせよ

では第五十二話をどうぞ！

# 第五十二話　過去か未来か

ユウキ達は時の停止した流砂の洞窟から脱出し、なんとかギルドに戻ってこれた。エムリットはジバコイル保安官達に保護され、ユウキとリサもチリーンから治療を受け終わった所だ。今は弟子達が全員揃い、ジバコイル保安官と話していた。

「ビビ！オタズネモノノ捜査アリガトウゴザイマス。エムリットハ我々ガ保護シマシタノデゴ安心シテクダサイ。ジュプトルノ捜査ニハ全力ヲ尽クシマスノデ、オ互イ頑張リマショウ。デハ」

ジバコイルはそう言い残して去って行った。するとペラップが羽をばたつかせながら喋りだした。

「いや～！！ホントにビックリ！まさか北の砂漠の地下に湖があって、そこに時の歯車があるとは！」

確かに砂漠の下に湖があるだけでも驚きなのに、そこに時の歯車があったら誰でも驚く。

「うん？でも時の歯車は盗られちゃったし……ジュプトルも捕まえられなかったし……結果的にはなにも出来なかったと同じよ……」

リサは暗い表情を浮かべながら言った。それをすぐにビッパが否定した。

「そんなことないでゲスよ！ユウキもリサも頑張ったでゲスよ～！」

「ヘイ！オイラもライトニングは頑張ったと思うぜ！」

ヘイガニもユウキとリサを慰めてくれた。二匹ともその心遣いが有り難かった。

「……だが次に繋がる手がかりが無い」

ユウキが暗い表情で言った。そう、今回はたまたま見つけたが、次の時の歯車への手がかりがない。それはジュプトルの捕獲が出来ないということに繋がるのだ。弟子達が悩んでいると、ヨノワールが話し始めた。

「いや、そうでもないですよ」

突然ヨノワールが話しはじめたからか、弟子達の注目が一気に集まった。

「ヨノワールさん？」

「手がかりはあります。まず、霧の湖ではユクシーが時の歯車を守っていたんですよね？」

「はい」

「そして地底の湖ではエムリットが時の歯車を守っていた……」

最初ユウキ達が見た時の歯車は、ユクシーが番人をしていた。また、地底の湖ではエムリットが番人をしていたのだ。

「そういえば！エムリットが言ってた！エムリットはユクシーから

テレパシーで時の歯車が盗まれたことを聞いたって！」

リサの証言で。ヨノワールは確信したような表情になった。

「やはり。これは言い伝えなんですが、ユクシーは知識の神、エムリットは感情の神と呼ばれ、三匹で精神界を司っており、世界のバランスを保っているとされています」

弟子達は真剣にヨノワールの話しを聞いていたが、ユウキがあることに気がついた。

「三匹？ユクシーとエムリット以外にもう一匹いるのか？」

そう、三匹ならユクシーとエムリット以外にいるはずだ。だがユウキ達はもう一匹の存在を知らないのだ。

「そうです。残るはアグノム。意思の神と呼ばれています。ユクシーとエムリットは時の歯車を守っていた。ならばアグノムもまた時の歯車を守っているのではないかと」

ヨノワールの推理に、弟子達は驚いたが、納得した。

「そっか！アグノムのいる場所がわかれば、そこに時の歯車があるかもしれないし、そこにジュプトルが現れる可能性が高いですね！」

チリーンが自分の思ったことと、意見を話した。

「そうです。ユクシー、エムリット、アグノムの三匹は湖に住むと言われています。現にユクシーとエムリットは湖にいました。そこからアグノムもまた湖にいると推測できます。ただし、ユクシーが

いた湖は高台の頂上、エムリットの湖は砂漠の地底深くというように、それぞれ普通ではない場所に湖がありました。ですので、アグノムのいる湖も常識を超えた場所にあると思われます」

「なるほどな。普通に湖を探しても無駄ということか」

ヨノワールの説明を聞き、ユウキが腕を組みながら言った。

「さすがヨノワールさんですね！ホント尊敬しますよ！」

ペラップは羽をばたつかせながらヨノワールを絶賛した。

「そんな、照れますよ」

ヨノワールは少し困ったような感じで頭をかいた。

「そんなことないぜ！実際北の砂漠に行くように言ったのはヨノワールさんだしな！」

「それなら私達が調べた東の森や水晶の洞窟にも、なにかあるかもしれないですわー！」

キマワリは興奮しながら言った。その刹那、ヨノワールがなにかに気づいたような表情になった。

「ビッパさん」

突然呼ばれたビッパは、少し戸惑いながらヨノワールの方を向いた。

「へ？なんでゲスか？」

「以前拾った水晶を貸してほしいんです」

突然の申し出に、ビッパは困惑してしまった。この前拾った水晶は、ビッパにとって大切なものだったのだ。

「あの水晶を!?嫌でゲス!あれはあっしの大切な宝物でゲス!」

「いっいや、別に取ったりしませんからご安心ください。ユウキさん」

ユウキは一人で考え事をしていたが、ヨノワールに呼ばれて、ヨノワールの方を向いた。

「なんだ」

「あなたにビッパさんの水晶をさわってほしいのです」

「なぜだ?」

ユウキにはヨノワールが考えていることがよくわからなかった。

「もし水晶の洞窟に謎があれば、ユウキさんが水晶に触れた時、時空の叫びが発動し、なにか見えるかもしれません」

「……フン。なるほどな」

ユウキは、まだヨノワールのことが気に入らないのか素っ気ない反応を返した。

「時空の叫び？なんですのそれは？」

キマワリがユウキに質問した。弟子達はユウキの時空の叫びを知らないのだ。

「ユウキが持ってる能力よ。ユウキは物に触れると、たまにそこの過去や未来が見えるのよ」

『えぇ～！！』

弟子達は一斉に驚いていた。当然の反応だろう。

「ですのでビッパさん。水晶をお借りしたいのですが……」

弟子達の視線が一斉にビッパに集まった。ビッパは気が乗らなかったがユウキに水晶を渡した。

（この水晶からなにが見えるのだろうか……）

ユウキが周りを見ると、みんなの視線が集まっていた。

（ったくジロジロ見やがって……まあいい。集中するか……）

ユウキは目を閉じて水晶に触れた。すると、前にもあった目眩に襲われ、ある映像が見えた。

「悪いが……時の歯車は貰っていくぞ！」

「ダメだ……あれを取ったら……」

そこで映像は終わった。どうやらジュプトルが時の歯車を盗もうとした直前みたいだ。

「今のは……」

「ユウキ？なにか見えた？」

「嗚呼……ジュプトルが一匹のポケモンを倒し、時の歯車を盗もうとしていた……」

『えぇ～！！』

ユウキの言葉を聞き、また弟子達は全員驚いた。時の歯車が盗まれている映像もあったが、ユウキにそんなことが出来ることに驚いたのだ。

「ヘイユウキ！そのポケモンがアグノムだったかはわかんないんだよな？」

「嗚呼……」

「私もユウキさんに質問が……ユウキさんが見たものは過去なのですか？未来なのですか？」

チリーンの質問を聞いてユウキはハッとした。いつも過去か未来かはわからないのだ。

「そこまではわからない」

「そうですか……」

「なら盗まれた後かもしれないね……」

「えぇ～！手遅れってこと～！？」

ペラップが一人で騒ぎ、弟子達も、過去かもしれないと困惑し始めた。

「皆さん！まだ諦めるのは早いです！確かに過去が見えた可能性もありますが、未来の可能性もあります。リサさん、エムリットが言っていたことを思い出してほしいんですが……エムリットに時の歯車が盗まれたことをテレパシーで教えたのは……ユクシーなんですよね？」

リサは自分の記憶を駆け巡らせた。確か、エムリットはユクシーから聞いたと言っていた。

「うん、間違いないよ」

「アグノムの名前は？」

「聞いてないよ。私アグノムの名前はヨノワールさんから初めてきいたんだもん」

ヨノワールはそれを聞いてあることを確信した。

「それなら可能性はあります！エムリットがアグノムから聞いたというなら、ユウキさんの時空の叫びで見えたものは、過去の出来事に間違いないですが、そうではなかった。エムリットはアグノムの名前を口にしなかったということは、未来の可能性はあります！」

「なるほど……」

ペラップは思わず思ったことを呟いてしまった。

「それともう一つ、確実に言えることがあります。水晶に触れた途端ユウキさんの時空の叫びが発動し、時の歯車が盗まれる映像が見えた……ということは、水晶の洞窟に時の歯車に通じる道があるということです！」

『おお！』

ヨノワールの言葉で、弟子達に活気が出てきた。

「確かに手遅れかもしれません。ですが間に合う可能性だってあるんです！ならその可能性に賭けてみましょうよ！」

弟子達は、ヨノワールに賛同した。

「ヨノワールさん。これはもう水晶の洞窟に、ギルド総出で行くしかないですね！いきましょう♪水晶の洞窟へ♪親方様！号令を！」

ペラップは、プクリンに号令を求めようと呼び掛けたが、反応がなかった。

「親方様！……親方様？」

「……ぐうぐぅ」

ペラップがプクリンの様子を確認すると、なんとプクリンは目を開けたまま寝ていたのだ。それを見て弟子達がヒソヒソと話を始めた。ペラップは、プクリンが寝ていることがばれるとマズイ……といってもばれているが、大声でプクリンを起こした。

「親方様ー！！」

「……はっ」

「親方様ー！！！」

「ペラップ！」

どうやらペラップの大声のおかげでプクリンは起きたようだ。

「親方様！」

プクリンが起きて、ペラップはホッと一安心した。

「えー親方様。最初から説明しますと……」

「みんな！ジュプトルを捕まえるよ！たあぁぁぁ！！」

『おぉー！！』

まさかのプクリンの号令に戸惑いながらも、弟子達は返事をした。
ペラップに至っては、驚いた体制、表情をしながらフリーズしていた。

「いきましょう！水晶の洞窟へ！」

「水晶の洞窟へは私も同行します。頑張りましょう！」

『おぉー！！』

弟子達は、ヨノワールと共に水晶の洞窟に向かった。

「私達も行こう！」

「あっ嗚呼」

ユウキはペラップを方を見ると、まだフリーズしていたが、とりあえず自分達も時の歯車の調査をするために、水晶の洞窟に向かった。

## 第五十二話　過去か未来か（後書き）

リサ
「まだ希望があるね！」

ユウキ
「そうだな」

がんばれ（笑）

## 第五十三話　水晶の洞窟（前書き）

第五十三話完成！

ユウキ
「さっさと調査しなくちゃな」

では第五十三話をどうぞ！

# 第五十三話　水晶の洞窟

ユウキ達は、水晶の洞窟に行く前に、トレジャータウンで準備していた。ユウキはガルーラおばちゃんの倉庫で持ち物のチェックをしている。

「これと……あとこれも持ってくか」

ユウキはガルーラからオレンの実とリンゴ、それと猛撃の種を受けとった。

「君達ジュプトルの捕獲に行くんだって？頑張っておくれよ！」

「嗚呼」

ユウキは軽く返事をし、リサと合流するためにトレジャータウンの入口にある十字路に向かった。

ユウキが十字路に着くと、すでにリサが待っていた。

「ユウキ！準備は済んだの？」

「嗚呼。俺達も水晶の洞窟に向かって歩きだしたが、リサはその場に留まっていた。

「……そうだね」

「……どうした？」

「……なんか急に怖くなってきちゃって……」

今までジュプトルの捕獲に頑張ってきていたリサからの突然の告白に、ユウキは驚いてしまった。

「急にどうした？」

「だって時の歯車を盗んでいる悪党だよ？ユクシーも倒したし私達も守れなかった……本当に私達に出来るの……？」

「リサ……」

ユウキは言葉がつまってしまった。それほどリサの言葉に偽りがなかったのだ。

「……出来る出来ないの問題じゃない。俺達がやらなくちゃいけないんだ。それに俺は恐れて逃げ出し、後になって後悔するのは御免だ。だけどリサが怖くなるのもわかる。でも大丈夫だ。……俺が誰もリサを傷つけさせない」

ユウキは最後の所だけ間を開け、少し顔を赤らめ、頬をかきながら言った。リサはユウキの言葉を聞くと、なぜか恐怖心が消えていった。

「ユウキ……ありがとう……」

「……いくぞ」

ユウキ達は改めて、水晶の洞窟へと出発した。

「ここか……」

ユウキ達は、水晶の洞窟にたどり着いた。既に入り口に小さな水晶があった。

「ここのどこかに時の歯車があるはず。頑張って行こうね！」

どうやら先程の恐怖心は、リサの心から消えたみたいだ。

「よし……いくぞ」

ユウキとリサは、時の歯車を守るために、水晶の洞窟へと入っていった。

水晶の洞窟に入ると、洞窟の中は、外からの光が水晶に反射し、幻想的な光を放っていた。前にビッパが言っていた通り、あちこちに水晶が落ちていて、どこか神秘的な感じのする洞窟だった。

「うわー！綺麗ー！」

リサは水晶を見てはしゃいでいた。ユウキも素直に綺麗だと思っていた。

「さすが水晶の洞窟と呼ばれるだけはあるな……」

「ユウキ！あそこにおっきい水晶があるよ！」

リサは、青く光る、大きい水晶へと走り出した。

「おいおい……遊んでる場合じゃないだろ？」

「ハハッそうだね。ごめんねっ」

リサは笑みを浮かべながら言った。ユウキは内心、反省してるのか？と思っていた。

「まったく……！？リサ！後ろ！」

「えっ？」

リサが後ろを向くと、そこには、紫色をした蛇みたいなポケモン、ハブネークが、リサにポイズンテールで攻撃しようとしていた。

「キャァァァ！！」

「ちっ！電光石火からアイアンテール！」

ユウキは電光石火でハブネークに接近し、アイアンテールでポイズンテールを止めた。

「ユウキ！大丈夫！？」

「嗚呼。心配ない」

ポイズンテールは、当てた相手を毒状態にすることがあるが、ユウキが使ったのは、鋼タイプのアイアンテール。毒は鋼に効果はないおかげで、ユウキにダメージはなかった。

「畳み掛けるぞ！十万ボルト！」

「火炎放射！」

ユウキとリサは、得意な技でハブネークに攻撃した。だが、ハブネークは自分の周りに、緑色の壁を発生させ、攻撃を防いだ。

「ちっ守るが使えるのか」

「時間がかかりそうだね……」

ユウキは、相手は一体だから、焦らずに行く方針を立てたが、敵はそんなに甘くなかった。ハブネークはある一つの青い球を使った。どうやら不思議玉のようだ。

「えっ？」

「不思議玉だと？」

さすがのユウキも驚いていた。今まで敵が道具を使ってくることはなかったからだ。

「面倒なことにならなきゃいいが……」

不思議玉には動きを封じたり、眠らせたりするなど、自分が使うと心強いが、敵に使われると厄介なことこの上ないのだ。光が収まると、大変な状況になっていた。

「どっどういうこと！？」

「まさか……集まれ玉か！？」

そう、ハブネークが使ったのは集まれ玉だった。集まれ玉は、使うとそのフロアにいる仲間を集めることが出来るのだ。ハブネークが使うことにより、このフロアにいるポケモンが、全て集まってしまった。まるでミニモンスターハウスだ。その数八匹。

「マズイな……」

「どうしよう……」

「やるしかないだろ？」

「よし、いくぞ！十万ボルト！」

ユウキは頬の電気袋から十万ボルトを放った。だがその威力は半端なく、一気にハブネークを二匹、ダンバルを一匹、ズガイドスを一匹倒してしまった。

「凄い……なにかしたの？」

「なに、さっき猛撃の種を食べたのさ」

そう、さっきユウキがバックから出した種は、倉庫から持ってきていた猛撃の種だったのだ。猛撃の種は、食べると自分の攻撃と特殊攻撃の威力を格段にあげる物だ。

今の攻撃で四匹減り、残りはゴローン二匹にゴローニャ一匹、タテトプス一匹だ。

「仕留めるか」

「私もやる！火炎放射！」

リサは、タテトプスに火炎放射を放った。いきなりの攻撃だったことと、もともと素早くないタテトプスだから、避けるそぶりすら見せず、その場に倒れた。

「あと三匹だな……電光石火！」

ユウキは電光石火でゴローンに近づこうとしたが、ゴローニャとゴローン達は、地震を放ってきた。

「なにっ！？」

「キャア！」

思わぬ反撃を受け、ユウキとリサは、相性が悪いせいめあり、かなり深刻なダメージを受けてしまった。

「ぐっ……リサ……大丈夫か……？」

ユウキがリサの状態を確認すると、リサは気絶していた。

（くそ……なにが絶対に守るだ……俺はリサを守れなかったのか……！！）

ユウキが悔やんでいる間に、ゴローニャ達は、リサに止めを刺しに来た。

「させるかぁぁ！！」

ユウキは電光石火でリサの前に出た。

「絶対に倒す……影分身から身代わり！」

ユウキは影分身で分身を作り、更に体力、雷を消費して身代わりを作り出した。

「頼むぞ」

ユウキは身代わりで作った分身にゴローニャ達に接近させた。ゴローニャ達は分身に戸惑っていた。

「……今だ！」

ユウキはバックから爆裂の種を使い、身代わりで作った分身に向けて放った。爆裂の種の効果で、身代わりの周辺か爆発し、それに伴って分身も爆発した。雷が爆発に反応し、同じように爆発したのだ。防御力が高いゴローニャ達も、さすがにダメージが大きいようだ。

「止めだ！アイアンテール！！」

ユウキはしっぽを硬質化させ、ゴローニャ達に放った。それはゴローニャ達の頭部に命中し、その場に倒れた。

「ハァ……ハァ……」

ユウキはリサの所に行こうとしたが、地震によるダメージ、身代わりやアイアンテールでの体力の消費などから、歩く余裕もなかった。ユウキは壁にもたれながら座り込んだ。

「ハァ……ハァ……まだ俺の実力は……足りないか……」

ユウキはその場で意識を失ってしまった。

「ううん……」

ユウキが意識を失ってから間もなく、リサが意識を取り戻した。

「痛っ……」

リサは立とうとすると、地震で受けたダメージのせいで顔を歪めた。

だが、あるものを見るとその痛みも消えてしまった。

「ユウキ!?」

リサは痛む体を引きずりながら、ユウキのもとに歩み寄った。

「ユウキ！しっかりして！」

「……うっ」

リサの呼びかけに反応し、ユウキの意識が戻った。それを見て、リサは安堵の息を漏らした。

「よかった……大丈夫？」

「嗚呼……大丈夫だ」

ユウキはそう言いながら、バックからオレンの実を数個取り出した。

「ほら」

「ありがとう」

リサは、ユウキからオレンの実を受けとった。

「少し休むか」

「え？私は大丈夫だよ？」

「……一応な」

「……わかった」

リサはユウキの隣に座り、さっき貰ったオレンの実を食べた。

「……リサ」

「なに？」

「悪かったな……絶対傷つけさせないとか言っときながら……」

突然のユウキの発言に驚いてしまったが、少し間を開けてから微笑んだ。

「ううん、ユウキは悪くないよ。それに私も守られてばかりじゃなくて、私がユウキを守れるようになりたいから……」

「リサ……」

「エヘヘ……ちょっとクサイ台詞かな？」

リサは苦笑しながら言った。ユウキは少し間を開けてから首を横に振った。

「いや、少し気が楽になった。ありがとな」

ユウキは微笑を浮かべながら言った。リサもそれを見て微笑んだ。

「そろそろ行くか」

「うんっ！」

ユウキとリサは、時の歯車を探すために、水晶の洞窟の奥へと向かって歩きだした。

## 第五十三話　水晶の洞窟（後書き）

ユウキ
「まだまだ実力が足りないか……」

もう君はだいぶ強いと思うけど？

ユウキ
「まだ足りない」

努力家だな～

## 第五十四話　水晶の謎（前書き）

第五十四話完成～

ユウキ
「少し間が開いたな」

最近忙しくてね

では第五十四話をどうぞ

# 第五十四話　水晶の謎

ユウキ達は、なんとかミニモンスターハウスを切り抜け、水晶の洞窟を進んだ。幸い奥に着くまでこれといった強敵に出くわすことは無かった。

「ここが……一番奥かな……」

「だろうな……あれは？」

ユウキの目先には、赤、黄色、紫色の三色の水晶があった。しかも、ユウキ達より何倍も大きかった。

「こんなとこにこんなおっきい水晶が三つもあるなんて……それに三つとも色が違うね」

「明らかに他の水晶とは違うな」

今までであったのは、ユウキ達より小さいか、同じぐらいの大きさしかなかった。だからこの大きさには、なにかあるとユウキは思った。

「……今まで乏しいものがなかったからな。おそらくここになにか秘密があるかもな……」

そう、ユクシーの時はグラードンの石像、エムリットの時は流砂に秘密があった。ここにもなにか秘密があってもおかしくない。

「一体どんな秘密があるのかな……」

リサは試しに奥の紫色の水晶に触れてみた。刹那、紫からオレンジ色に変わった。

「キャア！ビックリした～」

リサは声を上げて驚いていた。さすがに水晶の色が急に変わったら、ユウキでも驚くはずだ。

「こっちもかな？」」

今度はリサが赤の水晶に触れると、緑色の水晶に変わった。

「こっちの水晶も触ると色が変わるね。もしかしたらこれが謎を解くヒントなのかもしれないね」

「多分そうだろうな……」

ユウキは黄色の水晶に触れてみた。すると水色の水晶になり、もう一度触れると赤色の水晶になった。

（いろんな色に変化するな……しかも色んな色に変わるな……三つの水晶……そして変化する色……一体何を意味してるんだ……？）

ユウキが一人で物思いにふけっていると、突然目眩に襲われた。

（ぐっ……時空の叫びか……？）

目眩が治まると、一人の声が聞こえてきた。声の質からして男だろう。

「成る程……知識・感情・意思という三つの精神のうち、アグノムは意思を司る神だ。意思とは、成し遂げようとする心。つまり意思の色を水晶の色を一つに合わせれば道は開くのか。問題はアグノムの心の色だな。アグノムは水晶の湖に住んでいる。ならばアグノムの心もまた水晶のように……」

ここで声は聞こえなくなってしまった。

「今のは……」

「どうしたの？」

リサはユウキを心配したが、今聞こえたことを考えていたか、ユウキの耳に入らなかった。

（今のは……今までとは違うか……？声しか聞こえなかった……いや。前にもあった。あれはグラードンの石像の時に起こった時だ。あの時も声だけだった。だが……なぜあの時と今回だけは声だけなんだ……）

「ユウキってば！」

「あっ？どうした？」

「どうしたの？ボーッとして」

「……今時空の叫びが聞こえた」

ユウキの発言に、リサは驚いていた。

「本当に！？それでどんなものだったの？」

ユウキは今聞こえた時空の叫びについて整理し始めた。

（確か……アグノムは意思を司る……つまり意思の色を一つに合わせれば……とか言っていたな。意思の色を一つに……成る程、つまり三つの水晶の色を一つに合わせれば良いんだな）

「どう？なにかわかった？」

リサは小首を傾げて聞いてきた。だがユウキの表情を見て、大丈夫だと悟った。

「なにかわかったみたいね」

「嗚呼」

ユウキは軽く頷いた。だが問題はまだ残っていた。水晶を何色に合わせるかだ。

（だが、水晶を何色に合わせるかだ……意思の色か……多分それはアグノムの心の色……アグノムは水晶の湖に住む。水晶の洞窟……

そして水晶の湖……アグノムの心もまた水晶のように……透き通っているのか？いや、あるいは冷たい水のような色か……）

「やっぱりなにか掴んだみたいね。ここはユウキに任せるよ」

「嗚呼」

ユウキは水晶に触れて水晶の色を変えはじめた。そして全ての水晶の色を青に変えた。刹那、三つの水晶が光り地響きが起こりはじめた。

「地響き！？」

リサが地響きに驚いていると、水晶から雷のようなものが、三角に並んでいた水晶の中央に向けて一斉に放たれていた。

「リサ、下がれ！」

ユウキの声を合図に、ユウキとリサは後ろに下がった。三つの水晶の中央からは、今まで見たことのないぐらいの大きさの水晶が現れ、その水晶の真ん中に裂け目があり、入れるようになっていた。

「凄い……」

「真ん中に裂け目があるな……あそこから入れるみたいだな」

「きっとアグノムのいる湖に続いているのよ！行ってみよう！」

ユウキとリサは、水晶の裂け目から、大水晶の道へと進んでいった。

ユウキとリサが大水晶の道を進んでいると、フローゼルとミノマダムが襲い掛かってきた。

「いくぞ、リサ」

「うん！」

リサはそう頷きながら、ミノマダム目掛けて火炎放射を放ったが、ミノマダムは守るを使い、リサの火炎放射を防いだ。

「安心するのはまだ早い。雷パンチ！」

ユウキはリサが火炎放射で攻撃している間に、後ろに回り込んでいたのだ。しかし、それをフローゼルが許さなかった。フローゼルは、ユウキに水鉄砲で攻撃してきたのだ。

「ちっ！」

ユウキは雷パンチを中断し、電光石火で回避することに成功した。

「なかなかのコンビネーションだな……」

「バラバラにした方がいいかも」

確かにあの二匹をバラバラにした方が戦いやすい。ユウキはそれに同意した。ユウキはフローゼルと、リサはミノマダムと対峙している。

「いくよ！火炎放射！」

リサは火炎放射を放ったが、ミノマダムにサイケ光線で相殺されてしまい、小さな爆発が起こった。

「これなら……身代わり！」

リサは身代わりを作りだし、ミノマダムに突撃させた。ミノマダムは、爆発で起こった煙りのせいで気づいていないようだったが、さすがに接近したせいか気づき、葉っぱカッターで消されてしまった。だが、ミノマダムは身代わりと知らなかったせいか、困惑していた。しかもリサの姿が見えないのだ。

「チェックメイトよ！火炎放射！」

リサは地中から出てきて火炎放射で攻撃した。穴を掘るを使っていたのだ。ミノマダムは耐えられず、その場に倒れた。

「やった♪ユウキは？」

リサはユウキの方を見ると、かなり苦戦しているようだった。

「……！？今行くよ！」

リサは、急いで苦戦しているユウキを助けるために走り出した。

「くそっ……」

ユウキはフローゼル相手に苦戦していた。フローゼルは周りの水を利用し、ユウキの死角から攻撃をしていたのだ。ユウキは完全に防戦一方になっていた。

「どうする……！？」

その間にも、フローゼルはユウキの背後を取り、ソニックブームで攻撃してきた。

「火炎放射！」

ユウキの前にリサが出て、火炎放射で、ソニックブームを相殺することで、ユウキを守った。

「大丈夫！？」

「嗚呼……悪いな」

「悪くないよ！私だってユウキを守りたいんだから！」

ユウキは、フッと軽く微笑み、フローゼルの方を向き直した。

「あいつに水を利用させたらダメだな……リサ、接近戦でいくぞ」

「うんっ！わかった！」

『電光石火！』

ユウキとリサは、一斉に電光石火で、フローゼルに接近した。

「雷パンチ！」

「引っかく！」

ユウキは、フローゼルの弱点の雷パンチで攻撃した。リサはもともと接近戦が得意じゃないので、威力がそこまで高くない引っかくで攻撃した。フローゼルはそれに対してアイアンテールで反撃してきた。

「くっ！リサ、引け！」

「うん！」

ユウキとリサは、技を中断し、一旦後ろに下がった。

「どうするの？」

「リサは止めを刺すためのパワーを溜めといてくれ……電光石火！」

ユウキは、先程と同じように、電光石火でフローゼルに突っ込んでいった。リサは、ユウキの考えがよくわからなかったが、言われた通りにした。

フローゼルは、ユウキの雷パンチに対して、瓦割りで反撃してきた。

「かかったな！ライジング・トラップ！」

ユウキは、フローゼルに激突する寸前に止まり、電気を帯びた身代わりを作り、フローゼルの瓦割りにぶつけた。刹那、フローゼルは身代わりが帯びていた雷のせいで麻痺してしまっていた。

「リサ！今だ！」

「任せて！ファイヤーレイン！」

リサは、近くの水晶を台にし、フローゼルの上空に跳んだ。そこからファイヤーレインを放ったのだ。ちなみにユウキは穴を掘るでかわしていた。フローゼルはまだ動けたのか、ギリギリファイヤーレインをかわした。

「かわしたか……だが動きに切れがないな。十万ボルト！」

ユウキは地中から出て、十万ボルトでフローゼルに奇襲をかけた。フローゼルは反応出来ず、直撃しその場に倒れた。

「よし、終わった」

「やったね♪」

リサは満面の笑みでユウキにそう言った。ユウキもそれを見て微笑を浮かべた。

「はやく行くぞ」

「うんっ！」

ユウキとリサは、時の歯車を目指して走り出した。

しばらく走っていると、ユウキ達の前には、湖が広がっていた。

「ユウキ！湖よ！」

「どうやらここみたいだな」

ユウキは湖を見て言った。湖は所々から水晶が突き出ていた。

「やっぱりここがアグノムのいる湖なのかな……？」

リサは湖を眺めながら言った。だが直ぐに何かに気づいたようだ。

「ユウキ！あそこ、なにか光ってるよ！」

ユウキは、リサの向いてる方向を見てみた。そこは湖の中心で島みたいになっていて、そこから淡い緑色の光りが発生していた。

「あの光は……」

「ユウキ、あそこから島に行けるよ」

ユウキが確認してみると、確かに今いる場所から、湖に沿っていくと、島に続く道があった。

「……？誰かいるみたいだな……行ってみるか」

ユウキとリサが、島に続く道に着くと、今起きている状況に驚いた。

「あいつは……！」

「ジュプトル！」

そう、ジュプトルが一匹のポケモンを倒し終えた、まさにその時だったのだ。

## 第五十四話　水晶の謎（後書き）

ふぅ……

ユウキ
「どうした？」

最近テンションがあがんない……

リサ
「なんで？」

う～ん自分でもよくわかんないや

ユウキ
「訳わからん」

## 第五十五話　VSジュプトル！（前書き）

第五十五話完成！

ユウキ
「ジュプトルとのバトルか？」

まあね。それになんだか調子が良い～♪

では第五十五話をどうぞ！

# 第五十五話　VSジュプトル！

「うぐぐっ……」

アグノムは声にならないようなうめき声を上げていた。かなりのダメージのようだ。

「悪いが……時の歯車は貰っていくぞ！」

「ダメだ……あれをとっては……」

ユウキはこの光景を見て驚いた。まさに時空の叫びで見えたものと同じだったからだ。

「あそこにいるのはアグノム！？このままだと！」

「嗚呼。いくぞ！」

ユウキとリサは、島に続く道を全速力で走り出した。

「あそこに沈むのが……時の歯車だな。ではアグノム、時の歯車は貰っていくぞ」

「まっ……待つんだ……ジュプトル……」

ジュプトルが時の歯車を取りに行こうとした刹那、アグノムがジュプトルを呼び止めた。自分の名前を呼ばれ、少し戸惑いながら、ジュプトルは、アグノムの方に振り返った。

「……俺を知っているのか？」

「……盗賊ジュプトル。お前がここに来ることは……ユクシーとエムリットから聞いていた……」

盗賊と呼ばれ、ジュプトルは少しムッとしたが、黙ってアグノムの話しを聞いていた。しかし、それは失敗だったと、ジュプトルは後になって気づくことになった。

「本当は……僕の手で倒せれば……良かったんだけど……万が一の事を考えて……ある仕掛けをしておいた……」

「なっ！？くそっ！」

ジュプトルが急いで時の歯車を取りに行こうとしたが、既に遅かった。アグノムが片手を上げると、それを合図に、地響きが起こりはじめた。

「貴様……！何をした！？」

ジュプトルは、予想もしていなかったアグノムの行動に、焦りを隠せなかった。その間にも、ユウキとリサは、ジュプトル達に近づいて来ていた。

「もう少し……えっ？地響き！？」

リサはバランスを崩し、尻餅をついてしまった。

「大丈夫か？」

「うんってユウキ！湖が！」

リサが驚くのも無理はない。湖のあちこちから、水晶が突き出し、湖に近づけないようになっていたのだ。これでは、ジュプトルが時の歯車を取りに行くことは不可能だ。

「馬鹿な……これでは時の歯車を取りに行けない……」

「ジュプトル……時の……歯車は……絶対に渡さない……僕の命に換えても……絶対に……」

「貴様ぁ！俺はなんとしてでも手に入れる！時の歯車を！アグノム！貴様を倒してでもな！！」

ジュプトルは怒りをあらわにし、アグノムに攻撃を仕掛けようとした。

「まて！」

アグノムを庇うかのように、二匹のポケモンがジュプトルの前に出た。ユウキとリサだ。

「ジュプトル。貴様に時の歯車は渡さない」

ユウキはジュプトルにそう言いきった。だがジュプトルは、それに臆することはなかった。

「お前達に用はない！邪魔だ！どけ！」

「いやだ！絶対にどくもんか！」

リサの言葉を聞き、ジュプトルは戦闘体勢をとった。

「本気で言ってるんだな！？仕方ない、お前達から倒す！リーフブレード！」

ジュプトルは、右手の葉っぱのようなものを、剣のように鋭くし、それで攻撃してきた。

「アイアンテール！」

ユウキは、それに対して、自分のしっぽを硬質化させて攻撃する技、アイアンテールで攻撃した。

「ちっ！」

「くっ！」

二匹の技は、ほぼ同じ威力だったか、お互い弾き飛ばされた。

「まだだ！エナジーボール！」

ジュプトルは、吹き飛ばされながらも、緑色のエネルギー弾、エナジーボールをユウキに向けて放った。

「なっ！？」

ユウキは突然の攻撃に、反応することが出来なかった。

「させないよ！火炎放射！」

ユウキの前にリサが出て、火炎放射を放った。エナジーボールは火炎放射によって打ち消された。

「まだよ！火炎放射！」

リサは、ジュプトルに向けてもう一度火炎放射を放った。だが、それはジュプトルの推測の範囲内だった。

「穴を掘る！」

ジュプトルは、穴を掘るを使って、地中に潜り火炎放射をかわした。

「えっ！？」

「穴を掘るか……どこから来る……」

ユウキが周りを警戒していると、ジュプトルはユウキとリサの後ろにいた。

「有効打を与えるのに適した場所……後ろか！？」

ユウキが後ろを振り返ると、ちょうどジュプトルが地中から出てきた所だった。

「読んでいたか！だが遅い！種マシンガン！」

ジュプトルは、たくさんの種のようなエネルギー弾、種マシンガンを広範囲に放ってきた。

「させるか！電光石火から守る！」

ユウキは電光石火でリサの前に行き、守るで種マシンガンを防いだ。

「甘い！リーフブレード！」

「なにっ！？」

ジュプトルは、守るの効果が切れた瞬間を狙い、リーフブレードで攻撃してきた。ユウキは守るを使い終わって直ぐだったせいか、反応することが出来なかった。

「ぐはっ！」

ユウキはリーフブレードをまともに喰らってしまった。ユウキは吹き飛ばされ、近くにあった水晶にたたき付けられた。

「ぐっ……」

「ユウキ！？」

「仲間の心配か？エナジーボール！」

「キャアァァ！」

リサがユウキの心配をしている間に、ジュプトルはリサに接近し、エナジーボールを放っていた。

リサはエナジーボールを受けてしまい、ユウキの近くまで吹き飛ばされた。

「うぅっ……」

リサは、ダメージが大きいか、声にならないうめき声を上げていた。

「大丈夫か!?」

「うっ……うん……」

ユウキの声に、リサは弱々しく答えた。リサはそれを最後に、意識を失った。それほどダメージが大きいようだ。

「リサは休んでろ!穴を掘る!」

ユウキは穴を掘るで地中に潜った。

「どこにいる?」

ジュプトルは、周りをキョロキョロしながら言った。その間に、ユウキはあることを実行していた。

「こっちだ!」

ユウキは地中から出てきた。だが、その数はユウキを含め、三体いた。

「身代わりか。だが所詮本体は一匹だ。エナジーボール!」

ジュプトルは、ユウキに向けてエナジーボールを放った。だがそれは分身だった。

「分身か。もう一度エナジー！……」

「させるか！電光石火！」

ユウキ達は電光石火で、ジュプトルに接近した。これでエナジーボールや、種マシンガンを封じた。だが、ジュプトルも甘くはなかった。

「無駄だ！リーフブレード！」

「ぐあっ！」

ジュプトルは、分身を含めてユウキに攻撃した。だがそこで異常事態が起こった。攻撃されたユウキが、全て消えたのだ。

「なにっ！？」

「掛かったな！ライジング・テール！」

そう、さっき地中から出てきたのは、全てユウキが作り出した分身。しかもそのうちの一体はライジング・トラップで作り出した、電気を帯びた分身だった。

ユウキは地中で、充電し、ボルテックススタイルになっていた。そこからライジング・テールでジュプトルに攻撃したのだ。

「ちっ！リーフ……ぐっ！」

ジュプトルは、さっきライジング・トラップで作られた分身に、リーフブレードで攻撃したせいで、麻痺していたのだ。そのせいで攻撃のスピードが鈍かった。

「うらぁぁ！」

「ぐあぁぁ！」

ジュプトルは吹き飛ばされ、水晶に激突した。かなりのダメージのようだ。

「止めだ！ライジング・ブレイカー！」

ユウキは、充電で溜めた雷を、全てを右手に集中させ、ジュプトルを殴りかかった。

「俺は……あいつとの誓いを……果たす！リーフブレードォ！！」

ジュプトルは、右手の葉っぱを剣のようにした。だが、その範囲、エネルギーの密度は、さっきの比ではなかった。特性の深緑が発動していたのだ。

深緑は、体力がギリギリになると、草タイプの技の威力を格段に上がる。それの効果により、リーフブレードの威力が上がっていたのだ。

『うおぉぉぉぉ！！』

二匹の技はぶつかり合い、爆発が起こった。爆発が収まり、煙りが晴れると、そこには、倒れているユウキと、それを悠然と眺めるジュプトルの姿があった……

## 第五十五話　ＶＳジュプトル！（後書き）

リサ
「うそっ……」

いやいや、嘘な訳ないでしょ？

リサ
「ユウキが……負けた？」

それはまだわからないよ

## 第五十六話　ジュプトルとヨノワール（前書き）

第五十六話完成！

ユウキ
「どうなるんだ？」

さあ？

では第五十六話をどうぞ！

# 第五十六話　ジュプトルとヨノワール

「ぐっ……」

ユウキは、なんとか立ち上がろうとしたが、体がいうことを聞かなかった。

「さて……アグノムを……」

ジュプトルは近くに倒れている、アグノムの方を向いた。そこには、倒れているアグノムと、それを庇おうとしているリサの姿があった。

（リサ……？意識が戻ったのか……？）

「そこをどけ！」

（……！声が出ない……！でも……どくもんか！）

リサは、アグノムの前からどこうとしなかった。ユウキはどうにかしようとしたが、体は動かなかった。

（このままだとリサが……！）

なんとかリサの所に行こうとしたが、体が動く気配すらなかった。

（まるで動かねぇ……リサ！）

「どかないと言うのか……なら仕方ない！」

ジュプトルは、リーフブレードの構えをとった。リサに止めを刺すつもりのようだ。

（このままだとリサが！畜生！動け！動けよ！動けぇーー！！）

「全ては時の歯車を取るためだ！許せ！」

「リサーーー！！！」

（ユウキ――！！）

リサは思わず目を閉じた。だが、いくら待っても、ジュプトルの攻撃が来ない。恐る恐る目を開けると、そこには、ボロボロのユウキと、ジュプトルの攻撃を止めているヨノワールの姿があった。

（ヨノワールさん！？）

「大丈夫ですか！？リサさん！ここは私に任せてください！」

ヨノワールは、ジュプトルに、暗黒の力を宿したパンチ、シャドーパンチを放った。

「ぐおっ！」

突然のヨノワールの登場、攻撃に、さすがのジュプトルも反応できず、まともに攻撃を受けた。

「リサ……大丈……夫……か……？」

（ユウキ……どうして……）

リサは、こくんと頷いた。その目には、涙が流れていた。

「そう……か……」

ユウキは、ジュプトルが攻撃しようとした瞬間、無理矢理自分の体を動かし、電光石火でリサに近づいたのだ。

安心したのか、ユウキは、リサの無事を確認し、その場で意識を失った。

（ユウキ!?）

「ユウキさん!?大丈夫ですか!?」

ヨノワールもユウキの心配をしたが、すぐにジュプトルの方を向き直した。

「貴様は!?」

「フッ久しぶりだな!探したぞ!ジュプトル!」

（えっ?どういうこと?ヨノワールは……ジュプトルを知ってるの?）

まさかの展開に、リサは驚きを隠せずにいた。

「ここまで追ってきたとはな……さすがと言うべきか……本当に執念深いな」

「ジュプトル!もう逃がさんぞ!」

ヨノワールは、いつもの穏やかな口調から、荒っぽい口調に変わっていた。ジュプトルは軽く笑みを浮かべた。

「ヨノワール、貴様がこの世界にいたのは驚いたが……しかし！」

ジュプトルは戦闘体勢をとった。それを見て、ヨノワールも戦闘体勢をとった。

「戦うのか？いいだろう。しかし勝てるかな？この私に？」

「だれが戦うって？」

ジュプトルは、持っていたバックから、ある玉を取り出し、それを地面に投げつけた。刹那、まばゆい光が発生した。光が収まると、そこにジュプトルの姿はなかった。

（ジュプトルがいない？）

「ジュプトルめ！初めから戦う気はなかったな！逃がすものか！」

そう言うと、ヨノワールの姿が消えた。

（ヨノワールさんも消えた……？なんだかわからないけど……）

リサは、隣で気を失っているユウキの方を見た。

（ユウキ……私のために……）

リサは、ユウキの方を見ながら思ったが、体が痛み、顔をしかめた。

（うっ……ダメ……意識が……）

リサは、ユウキの隣に倒れ込んでしまった。そしてそのまま意識を失った……

「……うっ」

「あっ気がつきました？」

ユウキが目を覚ますと、そこにはギルドの弟子のチリーンがいた。ユウキは周りを確認すると、自分達が慣れ親しんでる風景だった。どうやらユウキとリサの部屋みたいだ。

「ここは……俺達の部屋か？」

ユウキは体を起こしながら言った。

「そうですよ。二人共傷ついてずっとここで寝ていたんですよ」

「そうか……」

ユウキは、自分の体を確認すると、体のあちこちに包帯が巻かれていた。どうやらかなりの傷のようだ。

「あんまり動かない方が良いですよ。ユウキさんもリサさんも怪我がひどかったですから」

ユウキは、チリーンが言い終わったあと、リサを確認すると、リサにも包帯が巻かれていた。リサはまだ意識が戻らないのか、スヤスヤと寝息を立てていた。

「リサ……そういえばチリーン、アグノムは？」

「大丈夫ですよ。ユウキさん達に比べればダメージが少なかったです。先ほど気がつかれて、今はギルドにいますよ」

「そうか……」

「……ううん」

ユウキとチリーンは、声のした方を確認した。どうやらリサに意識が戻ったようだ。

「リサ、大丈夫か？」

「ここは……」

「大丈夫ですか？」

「ユウキ……チリーン……あれ？私……」

どうやらまだ状況を把握できていないようだ。チリーンは、さっきユウキにした説明を、同じようにリサに説明した。

「そっか……それよりユウキ、大丈夫!?」

「嗚呼」

ユウキの返答を聞き、リサは安堵の息を漏らした。

「良かった……あれ?そういえば声も出るようになってる……」

ユウキは、リサが声が出なかったことを知らなかったせいか、リサの体を心配した。

「本当に大丈夫か?」

「うん。今は声もでるし」

「とにかく二人共無事で良かったです!ギルドのみんなにも知らせましょう」

そういうとチリーンは、いつも晩御飯の時に使っているベルを鳴らした。すると、部屋のドアから続々とギルドの弟子達が入ってきた。

「目が覚めたんですねー!良かったですわー!」

「うぅっ……良かったでゲス……」

「いちいち大袈裟だな……」

口ではそんなことを言っていたユウキだが、内心ではそこまで悪い気はしていなかった。

「あっみんな！私話したいことが……」

「あっそれはまだ明日話してくれ」

その場にいたペラップがそう言った。

「えっ？でも……」

「今日は疲れているだろうから、報告は明日にしろと親方様に言われているんだよ」

「そっか。じゃあお言葉に甘えようかな」

「じゃあ私達はこれで」

チリーンが部屋を出ていくと、それに続いて、弟子達は部屋を出ていった。

「ふぅ……疲れたね……」

チリーンの話しによると、水晶の洞窟から出て数時間ぐらいたっているらしい。そんな短時間では疲れなど取れはしない。

「そうだな……」

ユウキはそう言いながら横になった。気を抜くと、傷が痛んできた。

「痛っ……」

「ユウキ……？大丈夫？」

「嗚呼……」

「そう……ユウキ、さっきはありがとうね」

「……？なにがだ？」

ユウキには、リサからお礼を言われる理由がわからなかった。

「私がジュプトルに攻撃されそうになったとき……ボロボロだったのに……私を守ろうとしたじゃない」

「嗚呼……とっさに体が動いたんだ」

ユウキは少し照れたような表情で答えた。リサはそれを見て、笑顔がこぼれた。

「それに……あの時はヨノワールが来たから良かったが……あいつがいなかったらどうなっていたか……」

「ユウキ……」

ユウキは、目を覚ましてからずっとジュプトルに負けたことを考えていた。時の歯車こそ盗まれなかったが、ユウキとリサは、ジュプトルに負けたのだ。その事実は変わらない。

「……もっと強くならないと……」

「そこまで思いつめることはないよ……」

リサはユウキに近づき、そっと寄り添った。

「リサ？」

「ユウキ、一人で抱え込めことないよ。一緒に頑張ろうよ。ね？」

「……そうだな」

ユウキとリサは、少しの間そうしていた。

「そろそろ休むか」

「そうだね。あっ！」

急にリサが声を上げたせいか、ユウキは少し驚いた。

「どうした？」

「ごっごめんね！その……ずっとくっついてて……」

リサは、もじもじしながら言った。ユウキはあまり見ないリサの仕種を見て、なぜか笑いが込み上げてきた。

「もう、なにっ？」

「いや、いつもそんな態度しないからな。なんか新鮮だった」

そう、今まで顔を赤らめることはあったが、もじもじすることはなかった。

「もうっ！今日はもう寝よう！」

リサは少し頬を膨らませながら、自分のベッドに戻った。

「ハハッ……おやすみ」

「……おやすみ、ユウキ」

この時、リサの顔は赤くなっていた。それが怒りからか、照れからかは定かではないが。

「……俺も寝るか」

ユウキはベッドに横になった。ちなみに今のことを思いだし、なかなか眠れなかったのはここだけの話。

## 第五十六話　ジュプトルとヨノワール（後書き）

ユウキ
「なんとか守ったな」

だね

ユウキ
「だが、もっと強くならないと」

がんばれ（笑）

## 第五十七話　困惑（前書き）

第五十七話完成！

ユウキ
「……」

まだ立ち直れないのかよ。あと今回のサブタイトルはあまり関係ないかもしれません

では第五十七話をどうぞ！

# 第五十七話　困惑

次の日、ユウキとリサは、朝の朝礼を終え、昨日のことを報告し始めた。ちなみにギルドのメンバーの他に、アグノムもいた。

「えっとみんなに話したいのは、もしかしたら、ヨノワールさんはジュプトルのことを、前から知っているかもしれないということなの」

「えぇ～そんな馬鹿な！」

ギルドの弟子達は、全員驚いていたが、その中でもペラップは、羽をばたつかせていて、この中で一番驚いているように見えた。

「多分間違いないよ。戦うまえにそんなことを話していたの」

ユウキは気絶していたので、二匹がそんな話をしていたことは知らない。それを思うと、負けたことを思いだし、悔しかった。

「それで……ヨノワールさんは今どうしているのでしょう……」

「多分ジュプトルを追っているんだと思うけど……」

ヨノワールは、ジュプトルを追って行ったが、まだ帰ってきたと連絡が入ってきていないのだ。

「心配ですね……」

チリーンがそう言った刹那、突然ギルドに設置されている緊急のサイレンが鳴り響いた。

「緊急サイレン?ディグダ!どうした!」

ドゴームの声に、見張り穴の近くにいたディグダが振り返った。

「コイルさんからです。ジバコイル保安官より至急の連絡だそうです。コイルさん。見張り穴からお話してください。どうぞ」

ディグダがそう言い終わると、見張り穴から声が聞こえてきた。

ユウキは、素直にギルドに入れれば良いんじゃないか?と思っていた。

「キコエマスカ?ジバコイルホアンカンヨリデンゴンデス。イマカラスグニ、ミナトレジャータウンノヒロバニアツマッテホシイトノコトデス。ソコデジュウヨウナハナシガアルソウデス。トレジャータウンノポケモンモヨバレテイマス。イジョウヨロシクオネガイシマス。デハ」

そう言うと、コイルの声は聞こえなくなった。

「重要な話ってなにかな?」

「さあな……まあ行ってみるか」

重要な話がなにかは気になったが、とりあえずギルドの弟子達はトレジャータウンへと向かった。

ギルドの弟子達がトレジャータウンに着くと、既にトレジャータウンに住んでいるポケモンがいた。その他にも、見たことのある姿があった。

「アグノム！」

既に集まっているメンバーの中の一匹が、アグノムの名を読んだ。霧の湖の番人のユクシーだ。

「ユクシー！それにエムリットも！」

アグノムは、ユクシーと、その隣にいた地底の湖の番人、エムリットのもとに行った。

「大丈夫？怪我はない？」

エムリットは、アグノムの体の心配をしていた。テレパシーで聞いてから、ずっと心配だったのだ。

「うん、大丈夫」

「時の歯車はどうなりましたか？」

「水晶の湖にあるよ」

アグノムの言葉に、二匹は驚いた。まさかまだ水晶の湖にあるとは思っていなかったからだ。

「ちょっと、ほっといて大丈夫なの？」

「とりあえずは平気だよ。時の歯車は水晶が覆うように守っている。簡単には奪えないよ」

「そう、なら大丈夫ね」

アグノム達がそんな会話をしていると、少し遅れてユウキとリサがやって来た。刹那、リサがヨノワールがいることにいち早く気づいた。

「ヨノワールさん！」

「おおっ！リサさん！ユウキさん！」

ヨノワールは、リサに呼ばれ元気よく返事をした。どうやら怪我はないようだ。

「無事でなによりです！」

「ヨノワールさんも帰ってきていたのね！あの時はありがとう！」

リサは、水晶の洞窟で助けてもらったことの礼を言った。ヨノワールは少し照れていた。

「それで……あのあとはどうなったの？ジュプトルは？」

「あの時、私もジュプトルの追ったのですが……残念ながら逃がしてしまいました……」

リサは、そっか……と肩を落とした。

「……ヨノワール、水晶の湖でジュプトルと戦ったときにあんたはジュプトルの事を知っているような感じだったと聞いたんだが？」

ユウキは、ヨノワールに真意を聞こうとしたが、そこにジバコイルが割って入ってきた。

「ソレヲフクメテ、コレカラヨノワールサンガセツメイスルソウデス。ナノデミナサンコチラニアツマッテクダサイ」

ジバコイルの指示通り、ユウキ達はトレジャータウンの広場に集まった。集まったポケモン達は、これからどんな話をするか、ジュプトルはどうなったのか、そんな話をしていた。

「エーミナサンアツマッタヨウナノデ……」

ジバコイルが話し始めると、集まったポケモン達の注目が一気に集まった。

「コレカラハナシヲハジメタイトオモイマス。ハナシトハ……サイキントキノハグルマガ、ヌスマレテイルジケンニツイテデス。トキノハグルマハ、ジュプトルトイウポケモンガ、ヌスミツヅケテオリ、ヌスマレタチイキハ、ジカンガトマッテシマイ、トテモモンダイニナッテイタノハ、ミナサンモゴゾンジカトオモイマスガ……コンカ

イ！ジュプトルノマノテカラ、トキノハグルマヲハジメテマモルコトガデキマシタ！」

ジバコイルの長い説明を聞き、その事実を知らなかったトレジャータウンのポケモン達が、一斉に喝采の声を上げた。

「マモッタノハ、ソコノアグノムサン！ソシテ、ソノアグノムサンヲスクイ、ジュプトルヲオイハラッタノガ……ココニイル、ヨノワールサンデス！」

ヨノワールの名前が出ると、再び喝采の声が上がった。

「ジバコイル保安官、すいませんがここからは私からお話を……」

「ワカリマシタ」

そう言うと、ジバコイルは下がり、代わりにヨノワールが前に出た。

「みなさん！時の歯車を守れたことは喜ばしい事ですが、ジュプトルには逃げられてしまいました。ですからまだ安心はできません。ジュプトルはまた必ず時の歯車を狙うでしょう」

そう言うと、みんな不安がったり、ジュプトルが逃げていることについて話し始めた。

「そしてまた……私はみなさんに、ある重大なことを伝えなければなりません」

その言葉を合図に、ポケモン達の話し声が止んだ。

「それを話していきます。まず……先ほどリサさんが私に聞いた質問……私がジュプトルを知っているのか、という質問ですが……」

ヨノワールは、一息入れてから話し始めた。

「その通りです。私は前からジュプトルを知っています」

『えぇっ！？』

まさかのヨノワールの言葉に、ここにいるポケモン達は驚いてしまった。

「今からするお話は……みなさんにはとても信じられないものかもしれません。しかし事実です。しかもこのまま放っておくと、とんでもないことになるのです。ですので、みなさん真剣に聞いてください」

ここにいるポケモン達は、皆息を呑んだ。これから話される事実に耳を傾けながら。

「まず……ジュプトルは“未来”からやって来たポケモンです」

## 第五十七話　困惑（後書き）

リサ
「未来……？」

ユウキ
「そんなことがあるのか？」

まあヨノワールがそう言ってるしね～

ユウキ
「……信用できるのか？」

さあ？

リサ
「さあ？って……」

## 第五十八話　作戦（前書き）

第五十八話完成！

リサ
「ジュプトルが未来から来たなんて……」

普通信じられないよね

では第五十八話をどうぞ！

# 第五十八話　作戦

『えぇ～！』

トレジャータウンに集まっていた、全てのポケモンは、ヨノワールの話した真実に驚きを隠せなかった。さすがのユウキも驚いていた。

「未来世界でのジュプトルは、やはりもの凄い悪党で……指名手配中のポケモンです」

ユウキは、未来世界という真実を、あまり信用出来なかった。だが、とりあえず話を聞くことにした。

「そしてジュプトルは、未来世界から逃げ延びるために……この過去の世界へとやって来たのです。そしてこの世界にやって来たジュプトルは、ある悪巧みを企てました」

「なんなんですか！？その悪巧みって！？」

ペラップは、声を裏返して言った。今までもあったが、ここまで焦っているペラップの様子に、リサはどこか新鮮な感じがあった。

「それは……“星の停止”です」

聞いたことのない単語に、みんなハテナを浮かべていた。

「星の停止？」

「そうです。星の停止とは、星じたいの動きが止まってしまうこと

です」

星が止まる……ユウキは、そんなことになったらみんなはどうなるんだ、と考えていた。

「時の歯車を取ると、その地域の時間も止まりますよね？いろんな地域の時が止まっていき……ついにはこの星自体の動きが止まってしまう……その成れの果てが星の停止です」

「星が止まると……この世界はどうなっちゃうの？」

リサがヨノワールに恐る恐る聞いた。

「星が停止した世界は……風も吹かず、昼もこないし……春も夏も来ない……まさに暗黒の世界……世界の破滅と言っても過言ではありません……」

世界の破滅。この単語に、またしてもみんな騒ぎ出した。まあ妥当の反応だろう。

「最近時が狂い始めたのも……全ては時の歯車が盗まれた影響です。このまま時の歯車が奪われ続けたら……世界は破滅してしまうのです」

「まさかそんなことになるなんて……」

リサは少し声を震わせながら言った。どうや、ショックを隠せないようだ。

そのなかで、ユウキはあることが引っ掛かっていた。なぜ未来のことをヨノワールが知っているんだ？と思っていた。

「一ついいか？」

「なんでしょう？」

ユウキがヨノワールに声をかけると、みんなの注目がユウキに集まった。

「引っ掛かることがある。なぜヨノワールはそこまで知っているんだ？いくら知識を貯めても未来のことまではわからないんじゃないか？」

ユウキの指摘に、みんな確かにと思った。そんなことは時を渡らないかぎり無理なはずだ。

「ユウキさんの言う通りです。普通なら知りようがない。でもなぜ私がそんなことを知っているのか？それは……私も未来から来たポケモンなのです」

『えぇ～！？』

ヨノワールの告白に、一匹を除いた、ここにいるポケモンが驚いた。だがユウキだけは、やはりと思った。聞く前からその仮説は立てていたのだ。

「ヨノワールさんも……未来から来たの！？」

「私の目的。それはジュプトルの捕獲です。そのために、私は未来から来たのです。また、私はジュプトルの捕獲を成功させるために、未来でこの世界をいろいろ調べました。私がこの世界に詳しいのも

そのおかげなのです」

ユウキは、ヨノワールの説明にどこか引っ掛かることがあったが、深くは詮索しなかった。

「でもなんで黙ってたの？」

リサが不意にヨノワールに問い掛けた。ヨノワールは少し申し訳なさそうな顔をした。

「すいません……それについては私も心苦しかったのです。今まで黙ってて、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。ただ、いきなり私は未来から来ました、と言ったとして、一体誰が信用してくれたのでしょうか？」

確かに、いきなり未来から来たと言われても、信用するポケモンはいないだろう。恐らくヨノワールの判断は正しかったと言えるだろう。

「それにジュプトルに感づかれないようにするためには、この話わ秘密にしたままにしたほうが良いと思ったのです」

「確かに……」

すっかり落ち着いたペラップが、ヨノワールに相槌を打った。

「しかし、今まで皆さんに隠していたのも事実です。本当に申し訳ありませんでした」

「いやいやいや！謝らないでください！そういうことなら仕方ない

ですよ！」

ペラップが、かなりの早口でヨノワールをフォローした。

「ヨノワールさんのせいではないです！悪いのはジュプトルです！」

ペラップの言葉に、ここにいる全員が、ジュプトルの捕獲に乗り出した。

「皆さん、ありがとうございます。皆さんの力を合わせて、ジュプトルを捕らえ、ジュプトルの悪巧みを阻止しましょう！」

『おおーーー！！』

ヨノワールの意気込みに、全員は一斉に声を上げた。

「ヨノワールさん。水晶の湖にある時の歯車を手に入れるためには、僕を倒せばいいことをジュプトルは知っている。だからもし手に入れようとするなら……ジュプトルは僕を倒しにくるはず」

「そこで、私とエムリット、アグノムの三匹が水晶の湖に行き、時の歯車を二度と奪われないように封印するという噂を流せば」

「ジュプトルはまた必ず現れるんじゃないかしら？」

それぞれアグノム、ユクシー、エムリットの順でヨノワールに提案した。

「なるほど……囮作戦ですね。しかしそれだとあなた方が危険な目

にあってしまいますが……」

「望むところだわ！」

「それでジュプトルを止められるなら……」

「私達、覚悟は出来ています」

どうやら番人の三匹に異存はないようだ。それほどまでしてジュプトルを止めたいようだ。

「……わかりました」

ヨノワールはあまり乗り気ではなかったが、三匹の決意は固く、ヨノワールはそれを受け入れた。

「皆さん！これから作戦を言います！」

ヨノワールの号令を聞き、それぞれ雑談をしていたポケモン達の注目が集まった。

「ですのでしっかり守ってください！まず皆さんはいろんな場所に噂を広めてください。『ユクシーさん、エムリットさん、アグノムさんの三匹が、時の歯車を封印するために、水晶の湖に帰っていった』と。とにかくその噂を広めてください」

「……なるほど、ジュプトルの耳にも入るようにするのか」

「はい。でもジュプトルは噂だけでは騙されない。ですのでユクシーさん、エムリットさん、アグノムさんの三匹には本当に水晶の湖に行ってもらいます」

ヨノワールの説明に、ここにいるポケモン達は作戦の内容を理解し始めた。

「そっか。それでジュプトルがアグノム達に近づいた所を捕まえるのね」

リサの言葉に、みんな確証を得た。みんなジュプトル捕獲に意気込んでいる。

「いや、せっかくですが……ジュプトルの捕獲は、私だけでやらせてください」

『えぇ～！！』

せっかく意気込んでいたところに、まさかのヨノワールの申し出で、みんな驚いていた。

「すいません……ですがジュプトルは非常に用心深い性格です。アグノムさん達が本当に水晶の湖に帰ってることがわかったとしても、そうとう警戒しているはずです。なので、そこでもし水晶の湖に、たくさんのポケモンが見張っているのを知ってしまったら、ジュプトルはアグノムさん達に近づいてこないでしょう。ですのですいませんが……ここは私だけでやらせてもらいます」

「そっか……」

「……まあしょうがないさ」

ジュプトルの捕獲を頑張ろうとしていたリサは、ヨノワールの言葉

にしぶしぶ納得した。

「すいませんリサさん。今度こそ確実にジュプトルを捕らえたいのです」

「ならしょうがないね。わかったよ」

リサが納得した所を見計らって、ペラップが話し始めた。

「そういうわけだ。ギルドのみんな。これまでは……ジュプトルを捕まえるよ！たあぁぁぁぁ！！……できたわけだが……今回は裏方に徹してくれ」

「まあ……」

「仕方ないですわね」

どうやらギルドの弟子達も納得したようだ。

「……親方様もそれでよろしくですね？」

「うん♪」

「かしこまりました」

ペラップは、ギルドの弟子達が納得したことと、プクリンがちゃんと起きていたことから、ホッと胸を撫で下ろした。

「それでは皆さん。いろいろお願いしてすいませんが、よろしくお願いします！そして、なんとしてでもジュプトルを捕まえましょう

！」

『おぉー！！』

かくして、ヨノワール達は水晶の湖に行き、トレジャータウンのポケモン達は噂を広めに、ギルドのメンバーはギルドに帰っていった。

## 第五十八話　作戦（後書き）

リサ
「ヨノワールさんも未来から来たって……」

なんか難しい顔をしてるね

ユウキ
「普通は信じられないだろ」

お前は信じたの？

ユウキ
「……正直なんとも言えないな」

そっか

## 第五十九話　兄妹（前書き）

第五十九話完成！

ユウキ
「俺達は裏方か」

腐らないの

では第五十九話をどうぞ！

# 第五十九話　兄妹

ユウキ達ギルドのメンバーは、ヨノワールの話を聞き終え、トレジャータウンから帰ってきていた。

「そういうわけで……みんなはいつも通りに仕事してくれ。まあ出来るだけ噂を流して欲しいが、あまり無理してジュプトルに警戒されてはいけないので、そこは自然に、普通に仕事をしつつ、出来るようならば噂を流す。とりあえずここ数日はそんな感じで頼むぞ。ではみんな♪仕事にかかるよ♪」

『おぉぉー！』

いつもの号令を合図に、弟子達はそれぞれの仕事に向かった。

「ああお前達。今日もいつも通りな」

ペラップの言う所のいつも通りは、掲示板のことだろう。ユウキはそう判断し、二匹は掲示板に向かった。

「どれにしようか？」

「……これにするか」

そう言いながらユウキは、一枚の紙を手に取った。それによると、一緒に薬草を取りにいって欲しいとのことだ。場所は暗夜の森。依頼人はプラスルだ。

「でも結構難しいみたいよ？」

依頼書に書いてある難易度は、今までの依頼より高かった。ちなみに、依頼には難易度というものがあり、探検隊はそれを基準に依頼を決めるのだ。

「確かに難しいが、達成すれば得るものも大きいと思ってな。嫌なら他にするが……」

「ううん。ユウキがそうしたいなら私はいいよ」

「……わかった。じゃあ行くか」

「うんっ！」

かくして、ユウキとリサは依頼人と会うために、待ち合わせ場所の、暗夜の森の入口に向かった。

暗夜の森に着くと、そこには二匹のポケモンがいた。体格はユウキ達とさほど変わらず、赤い耳に、プラスの形をしたしっぽ、両頬にもプラスの形をした模様があった。

「あっ！探検隊のポケモンか？」

「嗚呼」

「俺が依頼人のプラスルだ。よろしくな。んで妹のマイナンだ」

プラスルと名乗ったポケモンの後ろには、プラスルに似たポケモンがいた。

だがプラスルの赤い部分が青色で、プラスの形の変わりにマイナスの形になっていた。どうやらこのポケモンがマイナンのようだ。

「……」

マイナンは、プラスルの後ろに隠れたままもじもじしていた。どうやら人見知りをする性格のようだ。

「よろしくね」

リサさ優しくマイナンに接すると、マイナンはニッコリ笑った。

「……よろしく」

「さて、早速仕事にかかるとするか！」

「……なんの薬草を探しているんだ？」

ユウキ達は、薬草を探すのは聞いていたが、なんの種類かは聞いていなかったのだ。

「これさ！」

プラスルが、バックから図鑑を出し、目的の薬草を見せてくれた。

「これか……」

ユウキは図鑑を見ながら、前にリサが怪我した時に来たことを思い出していた。どうやら暗夜の森には薬草が豊肥にあるようだ。

「でもなんで薬草を取りに来たの？」

「それがな、俺達の母さんが倒れちまってよ。治すにはこの薬草が必要なんだ」

「……なら急いだほうがいいな」

ユウキはそう言いながら、暗夜の森に入っていった。残された三匹は、急いでユウキの後を追っていった。

「なあ、あんた名前は？」

ユウキが歩いていると、プラスルが名前を聞いてきた。ユウキ達はまだ名乗っていなかった。

「ユウキだ」

「私はリサよ」

「ユウキにリサか。早く薬草を取りに行こうぜ！」

プラスルは、意気込みながら走り出した。刹那、目の前からコンパンが襲ってきた。

「うわっ！」

「アイアンテール！」

ユウキは、プラスルに電光石火で近づき、アイアンテールで攻撃した。それはコンパンの頭部に当たり、そのままコンパンは倒れた。

「大丈夫か？」

「まあな。いきなり悪いな」

「……仕事だからな」

ユウキはそう言いながら歩きだした。

「……なんだか無愛想だな」

「ユウキはいつもそうなのよ」

リサはクスクス笑いながら言った。

「あっそうなんだ」

「でも根は優しいから大丈夫よ」

「そっか。所でリサさんに頼みがあるんだ」

「リサでいいよ」

プラスルは、うんと頷き、話を再開した。

「じゃあリサ。頼みとは……マイナンをお願いしたいんだ」

リサには、プラスルの頼みがイマイチ理解出来なかった。ポケモンなら少なからず自分の身を守ることぐらいは出来るからだ。

「どうして？」

「前にちょっとあってな。マイナンはバトルが出来ないんだ。だからリサにマイナンを頼みたいんだ。悔しいことに俺の力では守りきれない可能性があるんだ……」

プラスルは、喋りながら落ち込んでいってしまった。リサの答えはすでに決まっていた。

「うん、任せてよ！」

「すまない。じゃあ早くユウキを追い掛けるか！」

元気になったプラスルを率いて、リサ達は先に行ったユウキを追い

かけていった。

リサ達はユウキと合流し、暗夜の森を進んでいた。すると、ユウキはどこからか気配を感じた。それも敵の気配だ。

「みんな、気をつけろ。敵の気配がする」

「本当に？」

「マジかよ」

「……お兄ちゃん」

ユウキとリサは周りを警戒し、プラスルはマイナンを守るように立っていた。

「……来るぞ！」

ユウキがそう言った刹那、ロゼリア二匹、コンパン一匹が襲ってきた。

「十万ボルト！」

「火炎放射！」

ユウキとリサは、それぞれの得意技で攻撃した。その攻撃により、コンパンは倒れた。

「あと二匹か」

ユウキがそう言った刹那、ロゼリア二匹が、一斉に、必ず命中する葉っぱ、マジカルリーフで攻撃してきた。

「火炎放射！」

『十万ボルト！』

さっきの攻撃に、プラスルの十万ボルトを加えて、マジカルリーフに対抗した。そのおかげで、三つの攻撃はマジカルリーフを打ち破り、そのままロゼリア達に直撃した。

「終わったのか？」

プラスルは恐る恐る言った。だが、まだロゼリア達は倒れておらず、そのままマジカルリーフで攻撃してきた。

「キャアァァ！」

マジカルリーフはマイナンの方に向かっていき、マイナンは思わず悲鳴を上げた。

「させるか！十万ボルト！」

プラスルはマイナンの前に出て十万ボルトを放った。十万ボルトとマジカルリーフはぶつかり合い、相殺した。

「……イヤァァァ！！」

マイナンは、恐怖からか、その場から走り去ってしまった。

「マイナン！」

「大丈夫！マイナンは私に任せて！」

「……わかった。気をつけろよ」

「うんっ！」

ユウキはリサにマイナンを任せ、再びロゼリア達と対峙した。

「マイナン……」

「リサがいるなら大丈夫だ。それより目の前の敵に集中するんだ」

「……そうだな！十万ボルト！」

プラスルは、ユウキの言葉を信じ、バトルに集中した。その後十万ボルトを放ち、ロゼリアに攻撃した。その攻撃により、ロゼリアの一匹倒れ、残り一匹になった。

「よっしゃ！」

プラスルは、ロゼリアを倒したことを喜んでいた。だがそれもつかの間、残りのロゼリアがマジカルリーフで攻撃してきた。

「まじっ!?」

「……終わりだ。アイアンテール!」

ロゼリアが攻撃しようとした刹那、ユウキはロゼリアの後ろに回り込み、アイアンテールで攻撃した。それはロゼリアに直撃し、そのままダウンした。

「助かった!ありがとな!」

「……仕事だからな」

ユウキは、マイナン達が走って行った方に歩きだした。

「どこに行くんだ?」

「……あいつらを追い掛ける。ここは一方道だからな。おそらく走れば合流できる」

「なるほどなってなんで知ってんだ?」

プラスルは、前にユウキが来たことを知らなかった。だからこの森を知っているユウキが不思議だった。

「前に来たことあるからな。それより急ぐぞ!」

「わかった！」

ユウキとプラスルは、マイナンとリサが走り去った方に向かって走り出した。

「ん？なんだあれは」

プラスルの前を走っていたユウキが、なにかを発見した。そこには、少し小さめのペンダントがあった。

「これは……マイナンのペンダントだ！」

「なぜここに？」

ユウキは、ペンダントを拾い上げた。その後周りを確認すると、そこには戦闘の後があった。

（戦闘の後……戦闘があったのか……くっ！？）

ユウキが周りを確認していると、突然目眩に襲われた。

（これは……時空の叫びか？）

目眩が収まると、ある光景が見えてきた。そこは少し開けた場所で、そこにマイナンとリサがいた。しかも計五匹の敵に襲われていた。

「これで終わりだ！」

「キャアァァ！！」

リサとマイナンが敵に止めを刺される瞬間に、時空の叫びは終わってしまった。

「今のは……！？」

「どうした？」

「プラスル、お前の図鑑を見せてくれ！」

「わっわかった」

プラスルは、冷静なユウキがここまでなって驚いていたが、とりあえずユウキに図鑑を見せた。

「確かこのページに……あった！」

そこには、この暗夜の森の地図があった。ユウキ達のいる道を真っすぐ行った所に、調度開けた場所があった。

「……このままだとまずい！プラスル！急ぐぞ！」

「どうしたんだよ!?待てって!」

ユウキは急いで走り出し、プラスルはその後を急いで追った。ユウキ達は恐らくリサ達がいる場所に走り出した。

## 第五十九話　兄妹（後書き）

プラスル
「急がないと！」

うおっ！ここに来ていたのか！

プラスル
「別にいいじゃないか」

……

## 第六十話　助け（前書き）

第六十話完成！

ユウキ
「やっとか」

まあ……出来たけどグダグダな出来に……（泣）

ユウキ
「……」

そんな目で見るな～

今回はリサ視点で進みます。では第六十話をどうぞ！

# 第六十話　助け

私は走り去ってしまったマイナンを追いかけるために、森の中を走っていた。

「おかしいな……この辺にいると思ったのに……」

私はキョロキョロと周りを確認しながらつぶやいた。すると、私の前にマイナンはいた。

「良かった。見つかった」

「リサ……お姉ちゃん？」

マイナンは、近くの木にもたれながら少し泣いていた。

「怪我はない？」

「……うん」

マイナンは、潤んだ瞳で私を見ながら言った。あっなんかかわいいかも。

「プラスルも心配してたよ。一緒に帰ろう」

「うん」

マイナンはニッコリ笑いながら返事した。私は、マイナンも見つけ、このまま順調に行くと思っていた。だけどそうはいかなかった。

「……なにかいる？」

私は、なにかの気配を察知し、辺りを警戒した。刹那、突風が私達を襲った。

「キャアァァァ！」

「うっ！マイナン！大丈夫！？」

私は、マイナンの安否を心配した。マイナンは凄い怯えていたけど、どうやら怪我はないみたい。

「だれ！？」

私は突風が吹いてきた方に向かって火炎放射を放ったけど、それはヘドロによって阻まれた。あれはヘドロ爆弾かな？

「貴様達！ここは我々の縄張りだ！」

私達の前には、コンパンが四匹、その進化系のモルフォンがいた。こいつらが攻撃したのね。

「ごっごめん、すぐに出ていくから……」

「黙れ！貴様達は生きて帰さん！」

うっ……これはマズイ状況ね……とりあえずここは逃げた方がいいね。

「サイケ光線！」

「電光石火！」

私は、モルフォンのサイケ光線を電光石火で楽々かわし、マイナンに近づいた。

「ここは危ないから逃げるよ！」

「うっうん！」

私とマイナンは走り出した。モルフォン達は、私達を逃がすつもりはないのか、後を追ってきた。

しばらく走ると、少し開けた場所に出た。このままじゃどうしようもない。戦うしかないね！

「いくよ！火炎放射！」

「くだらん！サイコキネシス！」

モルフォンは、サイコキネシスの超能力を使い、火炎放射の軌道をずらしてしまった。

「マイナンは下がってて！」

「うん……」

既にマイナンは怯えていた。絶対にマイナンは守るんだから！

「マイナンに傷一つつけさせないよ！」

「……そうか。だがそれは夢幻に終わるな。コンパン！」

『へい！サイコキネシス！』

「えっ？」

モルフォンの合図と共に、コンパン達の目が光った。刹那、私とマイナンの体が動かなくなった。

「ヘドロ爆弾！」

「キャア！」

私は、モルフォンのヘドロ爆弾をまともに受けてしまった。このまま動けないままだと、なにも出来ずに倒される。どうすればいいの……？

「これで終わりだ！」

「キャアァァ！！」

モルフォンは私達に必ず当たる技、燕返しで攻撃してきた。ここまでなの……ユウキ……

モルフォンが攻撃をしかけてからいくらたっても攻撃がこない。私とマイナンは恐る恐る目を開けると、そこには、モルフォンの燕返しに、雷パンチで対抗しているユウキの姿があった。

「……面白そうじゃないか。俺も一枚噛ませてくれよ……ウラァァ!!」

「ぐはぁぁ!」

ユウキは、空いていた左手に雷を溜め込み、モルフォンの顔面を殴った。モルフォンはそれを受けて少し吹き飛ばされた。あれはちょっと痛そう……

「貴様、何者だ!?」

「名乗る理由はない」

あっユウキ……なんか怒ってる?私にはそんな感じに見えた。

「さて、終わらせるか」

「俺も忘れるなよ！十万ボルト！」

プラスルは、コンパン達に十万ボルトを放った。コンパン達はそれで一撃で倒れた。これで動けるわね！

「貴様！悪いのはこの二匹だ！我々の縄張りにそいつらが入ってきたんだよ！」

確かに……私達がモルフォン達の縄張りに入ったのが原因だけど……だからって！

「……なるほどな。それでリサ達がなにかしたか？」

「どういうことだ」

「リサ達が縄張りに入ってからなにかしたかと聞いた。お前達は無抵抗のリサ達に攻撃したんじゃないか？」

「そっそれはそいつらが攻撃してきたから……」

「それは急にお前達が攻撃したからじゃないのか？」

「……それは」

ユウキは段取りを踏まえてモルフォンを追い込んでいた。ユウキにはこんなスキルもあるのね。

「話は終わりだ」

「まって！こっちの話はまだ……」

「ならさっさと去れ。無駄に傷つけあいたくはない」

ユウキがそう言い終わると、モルフォンは、手下のコンパンを連れて逃げて行った。なんとか助かったよ。

「リサ、大丈夫か？」

「私はなんとか……マイナンは？」

「なんとか大丈夫みたいだ」

マイナンのそばに駆け寄っていたプラスルがそう答えた。

「どうしたの？」

「安心したのか寝ちまったよ」

あっ本当だ。マイナンは、プラスルに寄り添いながら寝ていた。なんかかわいいね。

「さて、本来の目的を済ませるか」

「図鑑みるか？」

「……そうだな」

ユウキは、プラスルから図鑑を受けとって広げた。

「……今はここで、目的地は……すぐ近くだな」

「なら行こうよ」

私達は、ユウキが示した場所に向かって歩きだした。マイナンはプラスルにおんぶされていた。なんかそれを見ていたら前にユウキにおんぶされたことを思い出しちゃった。

「どうした？」

「なんでもない♪」

私は微笑みながら言った。それに自分の顔が熱くなることを感じていた。

「あった！」

私達は、ユウキの示した場所に来ていた。調度プラスルが目的の薬草を見つけていた。

「これでお母さん元気になるね！」

「うん！ありがとなユウキ！リサ！」

「……とりあえずここから出るか」

そう言いながら、ユウキはダンジョンから脱出出来る不思議玉、穴抜けの玉を使って脱出した。

私達は、暗夜の森を脱出し、ギルドに帰ってきていた。

「これは礼だよ」

そう言いながら、プラスルはポケとグミを数個くれた。

「リサお姉ちゃん、今日はありがとう」

「ううん。マイナンも元気でね」

「うんっ」

マイナンは微笑みながら言った。そして二匹は、駆け足で自分の家

に帰って行った。

「なんとか成功したね」

「そうだな。それよりリサ、疲れてないか？」

「えっ？大丈夫だよ？」

「そうか。なんだか疲れたような顔をしていたような気がしてな」

うっ……ユウキにはわかっちゃうのかな？正直今日は少し疲れたんだよね。

「う～ん少しは疲れたかな？早くご飯食べて寝ようよ」

「そうだな」

その日は、晩御飯を食べると、私達はすぐに部屋に戻り、眠りについた。

## 第六十話　助け（後書き）

ユウキ
「なんとかなったな」

リサ
「少し疲れたよ」

お疲れ

## 第六十一話　さようなら（前書き）

第六十一話完成！

ユウキ
「変なタイトルだな」

浮かばなかったんだよ……今回の話は、繋ぎなので短いですが、物語は動きますよ！

では第六十一話をどうぞ！

## 第六十一話　さようなら

プラスルとマイナンの依頼を終えてから数日後、ユウキ達は、いつもの朝礼に出ていた。

「えージュプトル捕獲についてだが、まだ捕獲成功の知らせは来ていない。みんなヤキモキしていると思うが、ここは我慢していつも通りに仕事してくれ♪」

ペラップがそう言った刹那、ギルドに設置してあるサイレンがなり響いた。

「ん？このサイレンは？」

「コイルさんからです」

見張り穴の近くにいたディグダが答えた。コイルは、以前と同じように、見張り穴から話し始めた。

「ジバコイルホアンカンヨリレンラクデス！ジュプトルノホカクニセイコウシマシタ！」

コイルの吉報を聞き、ギルドのメンバーは歓喜の声を上げた。

「ソレデ……ジュプトルヲトラエタヨノワールサンハ……ジュプトルヲツレテミライニカエッテイクソウデス」

さっきまでの喜びとは打って変って、コイルの報告に、ギルドのメンバーは驚いた。

「だけどよ、未来にどうやって帰るんだ?」

不意にドゴームが呟いた。確かにどうすれば未来に帰れるのか、ユウキ達は知らなかった。

「ソレハワタシモヨクシラナイノデスガ、ナンデモ、ジクウホールトイウトンネルヲツカウソウデス。ジクウホールハ、トレジャータウンノヒロバニヒライタソウデス。ヨノワールサンハ、カエルマエニ、ミナサンニオワカレヲイイタイソウデス。デスノデ、ミナサントレジャータウンにキテクダサイ」

それを最後に、コイルの声は聞こえなくなった。

「ヨノワールさん……未来に帰っちゃうんだ……」

リサは寂しそうにいった。ユウキを除くギルドのメンバーも寂しがっていたが、とりあえず呼ばれているトレジャータウンへと向かった。

トレジャータウンに来ると、既にトレジャータウンに住むポケモンや、アグノム達時の歯車の番人がいた。どうやらまだヨノワールはいないようだ。

「みんな集まってますね」

「でもヨノワールさんはいないみたいだな！ヘイヘイ！」

「おっ！あれはなんだ！？」

ドゴームの指差す方には、灰色の、うねったような感じの、不思議な穴があった。

「コレハジクウホールデス」

「時空ホール？さっきコイルが言っていたものですわね」

ギルドのメンバーは、興味津々に時空ホールに近づくと、ジバコイルがそれを止めた。

「チカヅイテハイケマセン！ココニハイッタラミライニトバサレテシマイマス！」

ジバコイルの必死の呼びかけに、ギルドのメンバーは時空ホールに近づかなくなった。

「そうだ、アグノム」

「ん？なんだい？」

ユウキは、すぐ近くにいたアグノムに声をかけた。

「作戦はうまくいったか？」

「うん。さすがヨノワールさんだ。完璧だったよ。それにジュプトルから奪われた時の歯車は全て取り替えしたよ」

「そうか」

ユウキは、時の歯車が戻ったことに、安堵の息を漏らした。

「そろそろヨノワールさんも来る頃だと思うよ」

アグノムがそう言った刹那、ヨノワールがやって来た。ヨノワールの他に、ジュプトルと、見たことの無いポケモンが二匹いた。体格はユウキ達とさほど変わらず、紫色の体に、目は宝石のようだった。そのポケモンはヤミラミという名だ。

「みなさーん！今日はみんなに良い報告があります！ついにジュプトルの捕獲に成功しました！」

ヨノワールがそう言うと、集まったポケモン達から喝采の声が上がった。

「これもみなさんのおかげです！ありがとうございました！ジュプトルはこの通り凶悪なポケモンです。これでこの世界も平和になるでしょう」

「んー！！んー！！！」

ジュプトルがなにか言おうとしていたが、口を縛られていて喋れずにいた。

「……なぜだ?」

この時ユウキはあることが引っ掛かった。なぜジュプトルの口を塞ぐ必要がある?なぜ今まで反応がなかったのに、さっきのヨノワールの言葉には反応したのか?だが、前者は、口から発生する技を使わせないために、後者は、たまたまそこで反応しただけと、ユウキは解釈した。

「しかし……同時に悲しいお知らせもあります。それは私も未来に帰らねばならないということです。みなさんとは……お別れです」

そう、ヨノワールの目的はジュプトルの捕獲。目的が達成したということは、未来に帰ることに繋がるのだ。覚悟していたとはいえ、皆悲しみを隠せなかった。

「ユクシーさん、エムリットさん、アグノムさん。後の事は任せます」

「わかった。僕達で時の歯車をもとの場所に戻すよ」

「よろしくお願いします。ではそろそろ……」

ヨノワールは、部下のヤミラミ達に、ジュプトルを時空ホールに連れていかせた。

「ではみなさん……名残惜しいですが……」

ヨノワールとの別れに、何匹かのポケモンは涙を流していた。ペラップに至っては大声を上げながら泣いていた。
ヨノワールは、時空ホールに入ろうとしたが、なにか思い出したように、その場に止まった。

「……そうだ。最後にぜひ挨拶したい方が……リサさん、ユウキさん」

「私達だ。行こう」

リサは、目に涙を溜めながら行った。リサは先にヨノワールの所に歩きだし、ユウキは渋々リサの後に続いた。

「ヨノワールさん……今まで本当に……ありがとう！」

「……これで……お別れか……それはどうかな？」

ヨノワールは、今までに見たことのないような笑みを浮かべた。この瞬間、ユウキは危機感を感じた。

「別れるのはまだ早い！」

ヨノワールはそう言いながら、ユウキとリサの体を掴んだ。

「うわっ！？」

「なっ！？」

「お前達も……一緒に来い！」

「くっ！十万……！！」

「キャアァァァ！！」

ヨノワールは、ユウキとリサを時空ホールに引きづりこもうとした。
ユウキは抵抗しようと十万ボルトを放とうとしたが間に合わず、リサの悲鳴だけをトレジャータウンに残し、ユウキとリサを飲み込んだ時空ホールは消えていった……

## 第六十一話　さようなら（後書き）

リサ
「えっ？私達どうなっちゃったの！？」

未来世界に連れていかれたユウキとリサはどうなるか……次回もお楽しみに！

リサ
「だからどうなるの～！」

言ったらネタバレやん（汗）

## 第六十二話　未来世界（前書き）

第六十二話完成！……あれ？　あいつらいないや

ジン
「今は未来にいるんですからここにはいませんよ」

久しぶりだな～ジン

ジン
「最近出番ないですからね（泣）」

泣くなよ

ジン
「というわけで、しばらくの間、前書きと後書きは僕達が代理をしますね」

ほかにいるの？

ジン
「はい。ちなみに感想欄はユウキさん達がでますよ。では第六十二話をどうぞ！」

# 第六十二話　未来世界

ここはある建物の廃墟の頂上。かつてはなにかの塔だった所。過去の世界から帰ってきたヨノワールは、そこにいた。だがその塔も、周りも、普通とは掛け離れた惨状になっていた。

「お待たせしました……ディアルガ様。少し苦労しましたが、ようやく捕まえることが出来ました」

ヨノワールがそう言い終わると、目の前の暗闇の中から、二つの赤い光と、生き物の唸り声が聞こえた。

「……十分心得ています。歴史を変えようとするものは……消すのみ。すぐに排除します」

そう言い終わると、またしても唸り声が聞こえた。おそらくこの唸り声は、ディアルガと呼ばれたポケモンによるものだろう。

「……わかりました。必ず……では」

ヨノワールはそう言い残し、その場から消えた。

「ううっ……」

未来世界に飛ばされたリサは、ユウキより先に意識が戻った。

「ここは……？」

周りを確認すると、そこには灰色の岩の壁に、たった一つの出口であろう穴には、鉄格子がかけられていた。

「……私達、閉じ込められてるの……？　そうだ、ユウキ……起きてユウキ、起きてよ」

「……くっ」

リサの呼びかけに、ユウキはすぐに反応し目を覚ました。

「ユウキ、大丈夫？」

「嗚呼……ここは」

ユウキも、先程のリサと同じように周りを確認した。ユウキは、即座に自分達が置かれている状況を把握した。

「……ここは牢屋か？」

「そうみたい……私もさっき起きたばかりだからよくわかんないけど……でも」

リサは、そう言いながら鉄格子の方に向いた。

「あの扉を開けようとしたけど、閉まったままなの」

「……脱出不可能か……」

ユウキは試しに、岩の壁や鉄格子に十万ボルトを放ってみたが、びくともしなかった。

「やはり駄目か……」

「う～ん……なんでこんなことになっちゃったんだろう。あの時は確か……ヨノワールさんに掴まれて……そのまま時空ホールに……もしかしてここは未来世界!?」

「おそらくな」

ユウキの言葉で確信したのか、リサは少しパニックになっていた。

「そんな！　信じられないよ！　だって未来だよ！　私達なんだってこんな所に……」

「だが十中八九は未来世界だ。ここの部屋の構造も見たことないからな」

ユウキはそう言いながら、なぜヨノワールは自分達を連れて来たのかを考えていた。

「どうしよう!?　もし本当に未来だったら……私達どうやって元

の世界に帰ればいいの……？」

確かに帰る方法はわからない。だがユウキは、あまりそれについては不安はなかった。なぜなら、ジュプトルもヨノワールも、なにかしらの方法で自分達の世界に来たのだ。なら帰る方法は必ずあると考えた。

だがそんな悠長に考えている暇はなかった。突然扉が勢いよく開いたのだ。そこには、ヨノワールと一緒に未来に帰ったヤミラミが、四体いた。

「起きていたか。調度いい。手っ取り早くやるぞ」

ヤミラミのリーダー格が、子分と思われるヤミラミに指令をだした。刹那、ヤミラミ達はユウキ達を拘束した。

「放してよ！」

「くそが！　十万……」

「おとなしくしていろ。気合いパンチ」

「ぐはっ……」

リーダー格のヤミラミは、ユウキの腹部に気合いパンチを決め、ユウキの意識を刈り取った。

「ユウキ！？」

「お前もこうなりたいか？」

「うぅっ……キャア！」

リサが躊躇していると、子分のヤミラミが、リサに目隠しをした。

「さあ、こっちに来るんだ」

リサはヤミラミに言われるがままに歩きだした。しばらくあるいていると、リサは目隠しを外された。

「ここは……なんで私縛られているの！？」

リサの体は、ロープで縛られ、柱のようなものに固定されていた。

「ユウキは……どこ？」

リサは、唯一少し動く首を左右に動かすと、リサのすぐ右に、まだ意識が戻らないユウキがいた。

「ユウキ！？　しっかりして！！」

「……くっ」

どうやらユウキは意識を取り戻したようだ。だが、ユウキもリサと同じように縛り付けられてれた。

「なんだこれは……」

「よかった、意識が戻って……」

「お前達、ずいぶん呑気だな」

「えっ？」

ユウキとリサは、声のした方を見ると、ジュプトルがユウキとリサと同じように縛り付けられてた。

「ジュプトル！？」

「お前達、ここがどこだか知っているか？」

「知るはずがないだろう」

ユウキは、ジュプトルの問いに素っ気なく答えた。

「だろうな……ここは処刑場だ」

処刑場。その単語を聞き、ユウキもリサも驚きを隠せなかった。

「処刑場だと……？」

「ちょっと待って。ジュプトルが処刑されるのはわかるよ。でもなんで私達が処刑されるの？」

「さあな。どうせろくでもないことをしたんじゃないか？」

ジュプトルの素っ気ない態度に、リサはすぐに反論した。

「アンタと一緒にしないでよ！」

「どっちでもいい。ほら、おでましだ」

ジュプトルの言葉が終わると同時に、ユウキ達の目の前の扉が開き、ヤミラミ達が入ってきた。その数六匹。

「あいつらは!?」

「やつらは処刑の執行人であり……ヨノワールの手下だ」

「ヨノワールさんの!?」

ジュプトルの説明に、リサは驚きを隠せなかった。刹那、扉からヨノワールが現れた。

「ヨノワール様。準備出来ました」

「よろしい。ではヤミラミ達よ。これから処刑を開始する」

「なにっ!?」

「処刑開始!」

『ウィィーー!!』

ヨノワールの号令を合図に、ヤミラミ達はユウキ達の前に歩みでた。

「ヨノワールさん! 私だよ! 一体どうしちゃったの!?」

「やつに何を言っても無駄だ! それより……」

ジュプトルはそう言いながら、先程とは打って変わって小さな声で

話し始めた。

「ここからは小さな声で話せ。お前達、生き残りたかったら、俺に協力しろ」

「ジュプトルに？」

「……いいだろう」

「ユウキ？」

ユウキは、ここはジュプトルと協力し、脱出したほうが言いと考え、ジュプトルに協力する道を選んだ。

「なら教えてくれ。お前は今なにが使える？」

「……」

ユウキは考え込んでしまった。この状況では道具の使用は不可能。技も隙が大きく、リスクが高い。そこでユウキは、一つの結論に至った。

「……攻撃はどうだ？」

攻撃、それはポケモンの技を使わず敵にダメージを与えること。ダメージは少ないが、隙は技よりかなり少ないのだ。

「それだ！」

「攻撃なら私もできるよ！」

「決定だな。これから言うことを良く聞け。ヤミラミ達は、処刑の時、邪悪な爪を使う。そこに突破口がある。ヤミラミ達は乱れ引っかきを無差別に繰り出す。それがロープにヒットすれば……」

「なるほどな、そうすればロープが緩み、その瞬間に攻撃をするのか」

「そういうことだ」

ユウキ達が話している間に、ヤミラミ達は目の前に迫ってきていた。その爪には、まがまがしい雰囲気を漂わせている。

「でも……もし乱れ引っかきがロープにヒットしなかったら……それにヤミラミ達が乱れ引っかきを使ってこなかったら……」

リサが不安に駆られている間に、ヤミラミ達はユウキ達の目の前にいた。

「その時は！　俺達はおしまいだっ！！」

ジュプトルが言い放った刹那、ヤミラミ達は乱れ引っかきを繰り出してきた。

「キャアァァ！」

「ぐっ！」

「耐えろ！チャンスが来るまで！」

そう言っているジュプトルも、ダメージが大きくなっているのか、あまり声に元気がなかった。

「このままだと、チャンスが来るまえに……あっ！」

リサは、ロープに亀裂が入っていることに気がついた。ユウキもジュプトルも同様だった。

「今だ！」

「えぇーい！」

ユウキ達は、一斉に攻撃を繰り出し、ロープがら脱出した。

「なにっ！？」

「それっ！」

ジュプトルは、自分のバックから、一つの不思議玉を使った。刹那、辺りにまばゆい光が放たれた。

「眩しい！！」

「うろたえるな！　ただの光の玉だ！」

光の玉、それはダンジョンの中で使用すると、その階のマップがわかるようになる道具。ジュプトルはそれのフラッシュを使い、目くらましに利用したのだ。

フラッシュが消えると、その場にユウキ達はいなかった。

「ジュプトルめ！　光の玉のフラッシュを使ってこの場から逃げたな！　逃がすか！　行くぞ！」

ヨノワールは、ヤミラミを引き連れて処刑場を後にした。それを見計らい、ユウキ達は地面から出てきた。そう、光の玉を使った時、ジュプトルは穴を掘るを使って、地中に隠れたのだ。ユウキとリサは、ジュプトルが掘った穴に一緒に入ったのだ。

「げほっ！　げほっ！　土が口に入ったよ……」

「うまくいったみたいだな」

「とりあえずは凌いだが、まだ安心は出来ない。はやく脱出しよう」

ユウキとリサは、ジュプトルの指示に従い、処刑場を後にした。

## 第六十二話　未来世界（後書き）

チサ
「大変なことになってるね～」

人事みたいに言うなよ

チサ
「そんなことないよ～！　私だって心配だよ～！」

それはゴメン（汗）
それより、他の代理ってチサのこと？

チサ
「まあね～でも他にもいるよ～」

それは楽しみだ（笑）

## 第六十三話　止まった世界（前書き）

第六十三話完成！

ミズキ
「脱出は出来たけどね……」

今回はツンデレか（笑）

ミズキ
「なんですってー！！」

……（汗）

では第六十三話をどうぞ！

# 第六十三話　止まった世界

ユウキ、リサ、ジュプトルの三匹は、処刑場を脱出し、建物の外へと続く道を走っていた。

「こっちだ！　出口まで一気に走るぞ！」

ユウキとリサは、ジュプトルの案内をもとに出口に向かって走っていたが、さっきのダメージからか、リサの体力がなくなってきた。

「おい！　もっと全力で走れ！」

「これでも全力なのよ！　いちいち指図しないでよ！」

リサは走りながら、ジュプトルに反論した。

「ジュプトル」

「なんだ？」

「ここは……やはり未来世界なのか？」

「そうだ。よくわかっているではないか」

ユウキの問いに、ジュプトルは短く答えた。

「私達……元の世界に戻れるのかな……」

リサは声のトーンを落として言った。それほどリサは不安に陥っていたのだ。

「さあな。今はとにかく逃げることだ！　捕まったら元の世界もない！　もっとはやく走れ！」

「ハァ……ハァ……もう疲れたよ……」

「もう少しだ！　ほらっ出口が見えた！」

ジュプトルの言う通り、ユウキ達の前から光が見えた。

「もう少しだ！　リサ、がんばれ！」

「うん……ハァ……」

ユウキの励ましで、リサの走るスピードが少し上がった。

「やっと……外だ！」

ユウキ達は、なんとか処刑場を脱出した。だが、外は今まで見たことのある光景とは掛け離れていた。

「……どうなってるの？」

リサは絶句した。なぜなら未来世界は、岩が浮いたまま止まっており、空は暗く、大地は荒れ果て、風も吹いていない。自分達の世界とはまるで違っていたのだ。

「……時間が止まっているかのようだな……」

「その通りだ」

「えっ？」

ジュプトルの返答に、二匹は一斉にジュプトルに振り向いた。だがそんな悠長にしている場合ではなかった。

『ウィィィーー！！』

処刑場の中から、ヤミラミ達の声が聞こえたのだ。しかも距離はそこまで離れていないようだ。

「ヤミラミ達の声が……」

「早く逃げるぞ！」

休む暇なく、ユウキ達は処刑場を離れるために走り出した。

「ハァハァ……ハァハァ……ねえジュプトル……私もう疲れたよ……」

「休んでる暇はない！　捕まったらおしまいだ！　根性で走れ！」

確かにここて捕まったら話にならない。だが、体力の限界が来たか、リサはその場に座り込んでしまった。

「もうダメ……私休むよ……」

「仕方ないな……ここじゃ見つかりやすい。場所を変えるぞ」

「そうだな。よっと」

「ユウキ！？」

ユウキはリサをお姫様抱っこし、近くの岩場に運んだ。いつもは照れるリサも、疲れからか、素直にユウキに感謝した。ジュプトルもその後に続いた。

「ハァハァ……」

「ほら」

ユウキは、トレジャーバックからオレンの実を取り出し、リサに渡した。

「ハァ……ありがとう……ユウキ」

「ここなら見つかりにくいな。少し休んだら出発するぞ」

さすがにジュプトルも疲れたのか、その場に座り込んだ。

「ちょっと待ってよ。さっきはしょうがなく協力したけど、でもそのあとジュプトルと一緒に行くとは言ってないよ！　ジュプトルみたいな悪いやつ、私は信用出来ないよ！」

オレンの実を食べて回復したリサは、ジュプトルに反論した。確かにジュプトルは、自分達の世界で時の歯車を盗んでいた。信用できるわけないとユウキは思った。だが、ユウキの心のどこかで、ジュプトルは信用に値すると思っていた。

「ならば俺は悪いやつで、ヨノワールは良いやつなのか？　ならさ

っきのヨノワールの行動はなんだ？　俺と一緒に、お前達まで消そうとしたじゃないか」

「うぅっ……でも……私はジュプトルも……」

リサは、まだヨノワールが敵だということを認めたくないようだった。それに、ジュプトルがまだ信用できるとも思えなかった。

「……どうも信用してもらうのは難しいようだな……仲間は少しでも多い方が良いと思ったが……信用がなければ一緒にいても仕方ないな。ここで別れるしかないな。俺は先を急ぐ。お前達も早くここを離れるんだな……じゃあな」

ジュプトルはそう言い残し、ユウキ達のもとから去っていこうとしたが、それをリサが止めた。

「待ってよ！　早くここを離れろといっても……今は辺りが暗くて見通しも悪いよ。だから今すぐ動くよりは、朝になるのを待ってからの方がいいんじゃ……」

確かに今の暗さならヤミラミ達に発見されずらい。だが逆に敵に気づきにくい。なら朝に行動した方が良いはずだが、ジュプトルは、軽いため息を一つし、話始めた。

「残念ながら……朝は来ないんだ」

「……まさか」

「そうだ。この世界は暗黒の世界。日が昇ることはなく、従って朝は来ない。ずっと暗いままだ」

「どっどうして？」

ジュプトルは少し暗い顔になって話始めた。

「……星が停止しているからだ」

「星の……停止だって！？」

星の停止。それは前にヨノワールが言っていた、世界の破滅と言っても良いくらいぐらいのこと。まさか未来で星の停止が起きていたとは思ってもおらず、ユウキもリサも驚いた。

「確かにヨノワールの説明と同じだな……まさか未来では時が止まっているとはな」

「俺の話を信じるのかはお前達の自由だ。とにかくここから早く離れることだ。じゃあな」

そう言い残し、ジュプトルはすぐ近くにあった洞窟に入っていった。

「ユウキ……私よくわかんなくなったよ。星の停止は時の歯車がなくなることで起きるのよね？　だから私達はジュプトルが時の歯車を盗むのを防いだ。なのになんで……」

「俺もわからない。だが俺達の世界でなにかあったのは事実だ。今はとにかく……」

ユウキが話していると、近くからまたしてもヤミラミ達の声が聞こえてきた。

「近くまで来ているな。早くここを離れるぞ」

「……」

「どうした？」

ユウキが走り出そうとしたが、リサは暗い表情を浮かべたまま、その場に佇んでいた。

「ユウキ……私……」

「……不安な気持ちもわかる。だが行動を起こさない限りもとの世界に戻れる可能性は限りなく0に近くなる……とにかく今出来ることは、ヤミラミ達から逃げることだ。わかったか？」

「……うん」

「よし……行くぞ」

ヤミラミ達から逃げるため、そして自分達の世界に帰るために、先程ジュプトルが入っていった洞窟、空間の洞窟に入っていった。

## 第六十三話　止まった世界（後書き）

クロ
「逃走が始まったっすね」

二匹は無事にもとの世界に帰れるのか……次回もお楽しみに！

チサ
「それ、自分の首絞めてるねー（笑）」

うるさいな～

## 第六十四話　狂気に満ちた目（前書き）

第六十四話完成！

ミズキ
「逃走開始ね」

ユウキとリサはヤミラミ達から逃げられるか？　あと今回は少し残酷な言葉が出るかもしれないです

ミズキ
「この程度、普通の作品でも出るわよ」

まあ一応ね

では第六十四話をどうぞ！

# 第六十四話　狂気に満ちた目

ユウキとリサは、ヤミラミ達から逃げるために、空間の洞窟を進んでいた。そこは道が空中にあり、下に落ちたらおしまいだ。

「落ちないように気をつけろよ」

「大丈夫」

ユウキの後ろを走っていたリサがそう答えた。だが道は狭く、所々に空中に岩が浮いている。急ごうとすればするほど足を止められてしまう。

「ユウキ」

「なんだ？」

リサは不意にユウキの名を呼んだ。ユウキは走りながら返事した。

「ユウキは不安じゃないの？　これからどうなるかわからないのに……」

「……確かに不安じゃないと言ったら嘘になる。だが俺には成すべきことがある」

「成すべきこと？」

リサには、ユウキの成すべきことがわからず、疑問に感じた。

「まあ……それはあまり言いたくないな。とにかく今は行動するしかない」

ユウキの成すべきこと。それは無事に自分達の世界に帰るまでリサを守ること。それを成すためには、ヤミラミ達に捕まらないことが第一条件だ。それに、この世界を回れば、元の世界に帰る方法がわかるかもしれない。ユウキはそう考えたのだ。

「……そうだね。頑張ろう！」

そう言いながら、リサはユウキの前を走り出した。

「周りに注意しろよ」

「わかってるよ！……ユウキ！」

そう叫んだリサの前には、岩でできた蛇のような巨大なポケモン、イワーク、鋼の体を持つ鳥のようなポケモン、エアームドがいた。

「敵か」

「みたいね……？　ユウキ、あの二匹、なんかおかしくない？」

リサの問い掛けに、ユウキは最初わからなかったが、相手をよく見ることで、リサの言っていることが理解できた。

「普通のポケモンと出してる気迫が違う……」

そう、今までのポケモンは、ユウキ達を倒そうとしていた。だが全てそこまでだった。だがユウキは、ここのポケモンから、とてつも

ないくらいの殺気を感じるのだ。それに、普通のポケモンとは違い、狂気に満ちた目をしていた。

「リサ、気を抜くな。来るぞ！」

イワークは、体全体を使って体当たりする技、捨て身タックルで攻撃してきた。ユウキはとっさに動き、守るを発動した。

「くっ！」

「ユウキ！　大丈夫？」

「嗚呼。だが気を抜くな！　やつら本気で俺達を殺すきだ！」

今のイワーク攻撃、ユウキの急所を狙っていた。この二匹は、ユウキ達を倒すのではなく、本気で殺しにきている。

「どういうこと！？」

「さあな。おそらくは自分達以外の存在を絶対に許さないといった本能みたいなものかもしれないな」

「本能……」

「おしゃべりはここまでだ。来る！」

ユウキの指示通り、エアームドが、自分の羽を鋼のように硬質化させる技、鋼の翼をリサに向けて放ってきた。

「させないよ！　火炎放射！」

リサは、向かって来るエアームドに、火炎放射を放った。それはエアームドに直撃した。

「なにっ!?」

だが、エアームドは火炎放射を浴びている状態でも、構わず鋼の翼を続行してきた。

「十万ボルト!」

ユウキは、危険を察知し、エアームドに十万ボルトをぶつけた。さすがに弱点の技を二つも受けると耐えられないのか、押し返されてしまった。

「こいつら……自分がどうなってもいいのか?」

「私……怖いよ……」

さすがのユウキも、少し恐怖しかけていた。だがそんな余裕はない。一瞬でも気を抜いたら殺される。絶対に負けるわけにはいかないのだ。

「気持ちで負けるな! 十万ボルト!」

ユウキは、先ほどの攻撃の影響で、地面に降りていたエアームドに十万ボルトを放ったが、上空に飛んでかわされてしまった。

「ちっ」

ユウキは思わず舌打ちした。その間に、イワークはユウキとリサを一撃で仕留めようと、アイアンテールで攻撃してきた。

「マズイ！　守る！」

ユウキは、守るを使ってリサと自分の身を守った。だが威力が大きいのと、疲れからか、少しバランスを崩してしまった。

「ユウキ！？」

「リサ！　前を見ろ！」

エアームドは、ノーマルタイプ最強の技、ギガインパクトを、リサに向けて放ってきた。

「キャアアアア！！」

「リサァァァ！！」

ユウキは、恐怖で動けなくなってるリサの元に、全力で走り出した。その体からは、大量の電気が放出されていた。

「うおぉぉぉぉ！！」

ユウキは、大量の電気を放出したまま、エアームドみ突っ込んでいった。二つの技はぶつかり合い、爆発が起こった。

「ユウキ！！」

リサの悲痛な叫びに反応するものはなかった。

「ユウキ……」

煙りが晴れると、そこには、倒れたエアームドと、体がボロボロになったユウキがいた。

「ユウキ！？」

「ハァ……ハァ……」

ユウキの息は荒く、立っているのも辛そうだった。リサはユウキのもとに駆け寄った。

「ユウキ！　しっかりして！」

「ハァ……大丈夫だ……それより……今の技は……」

「今のボルテッカーだよ！」

ボルテッカー。それはピカチュウ系統しか覚えられない技。威力は高いが、自分にもダメージがくる諸刃（もろは）の剣なのだ。

「ユウキは休んでて！」

そう言いながら、リサはユウキの前に出た。

「大丈夫なのか？」

「うんっ！」

「わかった……頼む」

そう言いながら、ユウキはその場に座り込んだ。

「任せて！　火炎放射！」

リサは、灼熱の業火をイワークに向けて放った。だがイワークのタイプは岩と地面。炎タイプの技は効きづらいのだ。

「なら……目覚めるパワー！」

リサは、自分の周りに、水色のエネルギー弾をいくつも発生させた。ちなみにリサの目覚めるパワーのタイプは水タイプだ。イワークはそれを竜の息吹で相殺した。

「ならスピードよ！　電光石火！」

リサは、電光石火でイワークの周りを駆け回った。イワークは最初それについていけていなかったが、ある一つの対策方を実行した。イワークは自分のしっぽを地面にたたき付けて、地面を揺らした。イワークの地震だ。

「キャッ！」

リサはバランスを崩し、転倒した。イワークはそれを見逃さず、竜の息吹で攻撃してきた。

「電光石火！」

リサは、なんとか立ち上がり、ギリギリ電光石火で回避することに

成功した。

「後ろががら空きよ！　目覚めるパワー！」

リサはイワークの後ろに回り込み、目覚めるパワーを放った。弱点のタイプの技を受けたイワークは、苦悶の表情を浮かべていた。

「止めよ！　火炎放射！」

リサは、止めの火炎放射を、イワークの顔面に放った。さすがのイワークも、目覚めるパワーと火炎放射のダメージに耐えられなかったか、その場に崩れ落ちた。

「ふぅ、良かった……」

「大丈夫か？」

安堵の表情を浮かべていたリサのもとに、少し回復したユウキが駆け寄った。

「ユウキ、私頑張ったよ」

「……嗚呼。強くなったな……リサ」

ユウキはフッと微笑みながら言った。

「うんっ！」

リサは満面の笑顔で頷いた。その頬は少し赤らんでいた。

「……行くか」

ユウキはトレジャーバックからオレンの実を取り出し、食べながら走り出した。

「待ってよ～！」

リサも急いでその後を追っていった。ちなみに、さっきのリサの笑顔に、ドキドキしたのは、ここだけの話。

## 第六十四話　狂気に満ちた目（後書き）

クロ
「なんなんすかあのポケモンは……」

ジン
「普通じゃないですね……」

まああんな世界だからね～

## 第六十五話　見出だした希望（前書き）

第六十五話完成！

ジン
「未来のポケモンはかなり危ないみたいですね」

逃亡を続けるユウキとリサはどうなるか？　では第六十五話をどうぞ！

# 第六十五話　見出だした希望

ユウキとリサは、襲って来る敵を倒しながら、空間の洞窟を突き進んでいた。

「あっユウキ！　あれ出口じゃないかな？」

リサの目の前には、少しだけ明るくなっている所があった。おそらく洞窟より少し明るい外からの光だろう。光といっても、ユウキ達の時代の光の何倍も暗い。

「行ってみるか」

ユウキは光が差し込む所に走り出し、リサもその後に続いた。

「やっぱり出口だ！」

リサがそう叫びながら、ユウキより先に空間の洞窟を脱出した。ユウキもその後に続いた。

「ハァ……ハァ……」

リサは、バトルの疲れと走りっぱなしの疲れからか、その場に座り込んだ。

「だいぶヤミラミ達を引き離したか……」

ユウキは後ろを振り向きながらそう呟いた。リサは余裕がないのか、ユウキの言葉に反応を示さない。

「少し休んでいくか」

「……そうね」

リサは、近くの岩に寄り掛かりながら座った。ユウキはあたりを警戒しながら、リサの隣に座った。

「さすがに疲れたな……」

ユウキはそう呟きながら、周りをキョロキョロと確認すると、近くに小さな滝を発見した。

「水があるな。リサ、歩けるか？」

「うん。大丈夫よ」

ユウキとリサは、その滝に近づいてみた。だが、その滝は星の停止を受け、その場に停止していた。

「この滝、水の流れが止まってるね……」

「そうだな。水しぶきも跳ねたまま止まってるな」

「やっぱりジュプトルの言う通り、未来では時が止まってるのかな……ヨノワールさんはなんで私達を連れて来たのかな……あんなに親切だったヨノワールさんが……私なにを信じればいいかわかんないよ……」

リサはそう力なく言った。今までいろいろあったせいか、精神的に

も肉体的にも参っているようだ。

「なにか真実を解く手がかりがあれば……そうだ！　ユウキ、時空の叫びよ！　この滝に触れてみてよ。ひょっとしたらなにか見えるかもよ！」

ユウキは、なるほどと関心した。そしてわかったと軽く頷き、滝に触れてみた。

「どう？」

リサはユウキの顔を覗き込みながら問い掛けた。だがユウキに反応はなく、目を閉じたままだった。

しばらくして、ユウキは目を開けた。その表情は少し暗かった。

「駄目だ。なにも見えない」

「そっか……残念。少しでもなにかわかることがあれば安心できたのに……」

リサは力なくうなだれたが、すぐに立ち直った。こうしている間にも、ヤミラミ達は自分達を追い、処刑しようとしているのだから。

「だいぶ時間が過ぎちゃったね。早く行こう」

「そうだな」

ユウキはトレジャーバックの中身を近くのガルーラ像で整理し、二匹は暗闇の丘に入っていった。

暗闇の丘は、丘といっても今まで通り不思議のダンジョンとなっていた。ここは先程の空間の洞窟みたいに、足場を気にする必要はないが、ポケモンが異常に殺気に満ち溢れているということは変わらなかった。
ユウキとリサは、調度襲ってきたゴーストと、その進化系のゴーストを倒し終えた所だった。

「ここのポケモンも異常な感じだったな……」

「そうね……」

ユウキ達が一息入れたのもつかの間、サマヨールが襲い掛かってきた。

「またか！　十万ボルト！」

「火炎放射！」

ユウキとリサは、それぞれの技を、サマヨールに向けて放ったが、シャドーボールで打ち消されてしまった。

「ちっ！　電光石火からアイアンテール！」

ユウキは素早くサマヨールの後ろに回り込み、しっぽを硬質化させてサマヨールの後頭部にたたき付けた。そのせいか、サマヨールはフラフラしていた。

「終わりよ！　火炎放射！」

リサはチャンスを逃さず、火炎放射を放った。サマヨールは火炎放射をまともに受け、その場に倒れた。

「よしっ」

「やったねユウキ！」

ユウキ達はなんとかサマヨールを倒すことに成功したが、気を抜くことは出来ない。

「ヤミラミ達に追いつかれる。早く行くぞ」

「うんっ」

ユウキとリサは、なんとか敵を倒しつつ、出口に向かって走り出した。

「出口だ！」

ユウキとリサは、何度か敵に襲われたが、なんとか暗闇の丘から脱出することに成功した。

「ハアハア……だいぶ上ったね……」

ユウキとリサは、暗闇の丘を抜けて高い丘の上にいた。リサは下に光るものを発見した。

「ユウキ、見て！」

ユウキも丘の下を見てみた。そこには、いくつかの光があるだけで、あとは暗闇に包まれていた。

「やっぱり……未来は真っ暗な世界なんだね……あそこに光が集まってて綺麗なんだけど……もしかしてあそこが……処刑場だったりするのかな……」

リサは光が集まっている場所を見ながら言った。やはりその表情は暗かった。

「ユウキ……ヨノワールさんは今まで私達を助けてくれたし、いろんなことを教えてくれた。でもヨノワールさんは……私達を……ヨ

ノワールさんは、私達を騙していたのかな……信じられないよ……」

やはりリサは、まだヨノワールが悪人だと信じられないようだ。一方ユウキは、もともとヨノワールは胡散臭いやつだと思っていたからか、リサ程のダメージはなかった。

「私達……これからどうすればいいのかな……どこまで逃げればいいんだろ……もとの世界に帰れるのかな……ギルドどみんなはどうしてるかな……心配してるかな……みんなに……会いたいよぅ……」

疲れや不安のせいか、ついにリサは泣き出してしまった。ユウキもリサ程ではないが、心身ともに疲れてきていた。だが弱音は口にださなかった。必ずもとの世界に帰ると心に誓っていたからだ。

「リサ」

「ユウキ……？」

ユウキは後ろからそっとリサを抱きしめた。こんなときにと思うだろうが、リサを元気づけ、安心感を与えるには、こうするしか思い付かなかった。

「まだ希望はある。絶対に俺は諦めない」

「ユウキ……」

ユウキはしばらくリサを抱きしめた後、更に奥に歩きだそうとしたが、リサがそれを止めた。

「ユウキ、なにかあてがあるの？」

「嗚呼。ジュプトルを追う。あいつならなにか知っているはずだ」

ユウキは、ジュプトルはこの未来から過去に来た。ならなにか知っていても不思議はないはずだと考えたのだ。

「なにかって？」

「それはわからない。だがあてもなく逃げ続けるより、なにか目的があった方がいい」

「……確かにジュプトルならなにか知っているかも……でもあいつは！」

リサは不意にユウキに叫んだ。ジュプトルは時の歯車を盗んでいた。その事がリサの頭から離れず、結果ジュプトルを信用することが出来ないでいたのだ。

「リサの気持ちもわかる。正直俺も信用出来るかわからない。だが今欲しいのは情報だ。それに処刑場から脱出する時、やつからはそこまで敵意を感じなかった……まあそれはただの勘だが……とにかく俺はジュプトルを追う」

「ユウキ……あいつは時の歯車を盗んでいたのよ！　本当に信用出来るの！？　私は信用出来ないよ！」

リサはジュプトルに対する気持ちを爆発させた。それほどまでジュプトルのしてきたことを憎んでいたようだ。

「だが現に星の停止は起きている。やつが時の歯車を盗んだのが失

敗したなら、なぜ星が停止している？」

「……」

「リサ、わかってくれ。ジュプトルを信用しなくてもいい。今は俺を信じてくれ」

リサは、ユウキの目を見た。それはまっすぐとした、偽りのない目だった。リサはそれを見て、決心した。

「……わかった。私ユウキを信じるよ。だって今信用できるの……ユウキだけだもん……ジュプトルを追い掛けよう！」

リサも、ジュプトルを追い掛けることを決意したようだ。そして、リサもユウキの後を歩きだした。

「ユウキ」

「なんだ？」

リサは歩きだしてすぐに、ユウキの名を呼んだ。ユウキは急に名前を呼ばれ、少し驚いたが、すぐにリサの方を向いた。

「私が元気ないから心配してくれたのよね。ユウキだって不安なはずなのに……ゴメンね。その……一番大切な人が一緒にいるのに……私一匹で悩んで……ホントはユウキもいるのにね。私、もう諦めない。ユウキが一緒いれば私は大丈夫。頑張ろう、ユウキ」

そう言い、リサはユウキの前を歩きだした。ユウキもその後を追って歩きだした。ユウキもリサも、『一番大切な人』という所で顔を赤くしたのは言うまでもない。

## 第六十五話　見出だした希望（後書き）

ミズキ
「希望が見えたわね」

クロ
「なんとか逃げきって欲しいっす！」

だね

ミズキ
「作者さん次第でしょ？」

## 第六十六話　新技（前書き）

第六十六話完成！

リーフ
「このタイトルなに～？」

本編みればわかるよ

では第六十六話をどうぞ！

# 第六十六話　新技

「ユウキ、あそこに洞窟があるよ」

ユウキとリサは、歩きだしてから数分後、またしても洞窟を発見した。

「ジュプトルと別れてからここまで一本道だったからな。おそらくあいつもこの先を行ってるはずだ」

「よし、行こうユウキ！」

リサはユウキより先に、洞窟に入っていった。

「……迷いはないみたいだな……」

ユウキはそう呟き、リサの後を追って、その洞窟、封印の岩場に入っていった。

その頃ジュプトルは、ユウキ達より早く封印の岩場を抜け、一息ついていた。

「だいぶ来たな……もう少しだ」

ジュプトルは周りを警戒しながら、オレンの実を食べていた。さすがのジュプトルも疲れが溜まってきているようだ。

「さて、ここを抜ければ森に行ける。ヤミラミ達が追って来る。早く行くか……そういえば……あいつらは大丈夫だろうか……いや、心配だが今は自分の指名を果たさなくては。あいつとの誓いを果たすために……行こう」

「マテ」

ジュプトルは立ち上がり、歩きだそうとした刹那、どこからか声が聞こえてきた。

「誰だ？」

「ワレノナワバリニカッテニハイリ、ソノママタチサロウトイウノカ！」

ジュプトルは周りを警戒したが、ジュプトル以外にポケモンの姿はない。姿がない存在に、ジュプトルは少し戸惑いを覚えた。

「どこにいる！　隠れてないで出てこい！」

「……ワレガカクレテイルダト？　ワレハココニイル！」

謎の声がそう言った刹那、ジュプトルの後ろにあった小さい石の置物のようなものから、紫色をした気体のようなものが出現した。

「ワレノナワバリニハイルモノハユルサン！」

「ぐわぁぁぁ！！」

謎の声からの攻撃を受け、その場にジュプトルの叫び声が響き渡った。

「まずいな……」

一本、ユウキとリサも窮地に立たされていた。ただでさえ強力な未来のポケモンが、かなりの数が、ユウキとリサを襲っていた。二匹はモンスターハウスに入ってしまったのだ。モンスターハウスは、あるフロアの部屋に入ると、大量のポケモンに襲われる場所。探検隊の間では恐れられている場所だ。

「また来るぞ！」

「キャア！」

二匹は、電光石火を使い、ダイノーズの岩雪崩を回避することに成功した。ちなみに敵はダイノーズ三匹、コモルー二匹、メタングが二匹、計七匹だ。

「一匹づつかたずけるぞ！」

「任せて！」

ユウキとリサは、相性を考えて、メタングから倒すことにした。リサは火炎放射をメタングに放ったが、守るを使い、防御されてしまった。

「やっぱり一筋縄ではいかないみたいね」

「だが甘いな……電撃波！」

ユウキは、未来に来てから覚えた、必ず当たる雷の球体、電撃波をメタングに向けて放った。だがあまり威力は高くなく、あまりメタングにダメージを与えられなかった。

「あまりダメージはないか……」

「ユウキ！　前！」

「フン、守る！」

ユウキはコモルーの火炎放射を、守るでたやすく防いだ。

（電撃波は威力が足りないな……なら！）

「思いつきだが……やってみるか。電撃波！」

ユウキは電撃波を、自分の真上に放った。リサは、ユウキがなにをしたいのかまだよくわかっていなかった。

「くらえ！　マーシャル・ボルト！」

ユウキは真上に放った電撃波を、アイアンテールで硬質化したしっぽを使って、それをメタング達に向けて弾いた。それはアイアンテールの威力に、電撃波の正確さが加わった雷となり、メタング達を一発でノックアウトした。

「凄い……」

リサは思わずそう呟いた。それもそのはず、考案者のユウキでさえも、威力の大きさに驚きを隠せずにいた。

「かなり使えるな……電撃波！」

ユウキはもう一発マーシャル・ボルトを放とうと、電撃波を放ったが、それはコモルーの火炎放射で消されてしまった。

「ちっ面倒だな」

「私もサポートするよ！　炎の渦！」

リサは、ユウキの電撃波と同じ、未来に来てから覚えた炎の渦をダイノーズ達とコモルー達を包んだ。炎の渦は、威力こそ低いが、一定時間の間ダメージを与え続け、いくつかの動きも封じることが出来る。リサはこの技で少しでも時間を稼ごうとしたのだ。

「今よ！」

「十分だ！　電撃波！」

ユウキは電撃波を自分の真上に上げた。

「マーシャル・ボルト！」

ユウキはパワーアップした電撃波を、ダイノーズ達とメタング達に放った。それは五匹に直撃し、次々と倒れた。だがダイノーズが一匹だけ耐えていた。

「まだか……」

ダイノーズもボロボロだったが、さすがのユウキも疲れが溜まり、足元が覚束なかった。

「ユウキ！　見て！」

「なにっ！？」

ユウキとリサの前で、ダイノーズの体が光だした。

「まさか……リサ！」

「えっ？」

ユウキはリサの所に電光石火で近づいた。そう、ユウキはこの技を知っている。かつてソーマの手下だったポケモン、シャドーが最後

に放った技と同じだった。ユウキがそう判断した刹那、ダイノーズは大爆発を放った。

「キャアァァ！！」

「守る！」

ユウキは守るを使い、攻撃を防ぐバリアを張った。だが疲れている体に、向こうの攻撃は大爆発。いくら守るを使っているとはいえ、だんだん押されてきた。

「くっ……」

「ユウキ！」

ユウキの体は悲鳴を上げていた。だが諦めるわけにはいかない。自分はリサを守ると誓った。その信念と、リサを守るという思いが、ユウキを支えていた。

「うおぉぉぉぉ！！」

ユウキは最後の力を振り絞り、バリアを強化した。やがて爆発はおさまり、そこには倒れているダイノーズの姿があった。

「……」

リサはまだ状況が判断できず、その場に立ちすくんでいた。ユウキは体力の限界がきたか、その場に倒れた。

「ユウキ！？」

リサはユウキの名を呼んだ。ユウキは軽く返事をし、近くの岩に寄り掛かった。

「無茶しすぎだよ」

「……そうだな。リサ、トレジャーバックを貸してくれ……」

リサはユウキの言った通りトレジャーバックをユウキに渡した。ユウキは中からある液体が入ったビンを取り出し、それを飲み干した。

「それは？」

「探検隊を結成したときにプクリンから貰ったものだ。まだ数本あるな……」

ユウキはそれを飲み干すと、一気に疲れがなくなった。さすがプクリンがくれるだけあると感心した。

「大丈夫なの？」

「嗚呼。早くジュプトルに追いつくぞ」

「うんっ」

ユウキは、ジュプトルに追いつくために立ち上がり、走り出した。リサもユウキに続いて走り出した。大切な人と、もとの世界に帰るために。

## 第六十六話　新技（後書き）

ミズキ
「よくもまあいろんな技が思い付くわね」

ユウキ
「悪いか？」

なんでいるの？

ユウキ
「気にするな」

ミズキ
「あの新技の名前の由来は？」

ユウキ
「とっさに思い付いただけだ」

単純だなぁ～

## 第六十七話　挑発（前書き）

第六十七話完成！

ミズキ
「夏休みの割に更新遅いわね」

確かに……今回のタイトル、苦し紛れです……

ミズキ
「なにやってるのよ」

とっとにかく第六十七話をどうぞ！

# 第六十七話　挑発

ユウキとリサは、封印の岩場を脱出し、安堵の息を漏らしていた。

「ふぅ……疲れたな」

「あっ！　ジュプトル！」

「ジュプトル？」

なんと、封印の岩場を出た先に、ジュプトルが倒れていたのだ、その体からは、紫色のオーラのような物が纏わり付いていた。

「……お前達……」

ジュプトルはダメージが大きいのか、声に覇気が感じられなかった。

「ジュプトル！　大丈夫!?」

「来るな！」

ユウキとリサがジュプトルに近づこうとすると、ジュプトルは出来る限りの大きな声を出し、二匹を止めた。

「ジュプトル？」

「くっ……気をつけろ！　敵がいる！」

「敵だと!?」

ユウキは周りを警戒したが、敵らしい姿を確認することは出来なかった。

「どこにいるの！？」

「お前達の……すぐ隣だ！」

「えっ……？」

リサはジュプトルの視点の方を見ると、そこにはやはり石で出来た置物があった。

「まさか……これが？」

リサはにわかには信じがたかった。だがその置物が急にカタカタと動き出し、二匹は驚いた。

「キャアァァ！」

「なにっ？」

「ヒッヒッヒ！　ココニアシヲフミイレルモノハ……スベテユルサン！」

「貴様、何者だ！？」

「ワレワミカルゲ。１０８コノタマシイガガッタイシテ……ウマレタモノダ！」

その声がそう言うと、物から、紫色をした、ガス状のような体に、緑色の目と口があった。ミカルゲと名乗ったポケモンは、やはり今までのポケモンと同じように、殺気に満ちていた。

「気をつけろ……そいつは強い！」

「カクゴシロ！　シャドーボール！」

ミカルゲは、ユウキに向けて、漆黒の球体を放った。

「いきなりか。電撃波！」

ユウキは、シャドーボールを雷の球体、電撃波で相殺しようとしたが、シャドーボールの方が威力が大きく、電撃波は突き破られてしまった。

「アイアンテール！」

ユウキは、自分に向かって来るシャドーボールを、アイアンテールで弾き返した。

「ムダダ！　シャドーボール！」

ミカルゲは、もう一発シャドーボールを放ち、向かって来るシャドーボールを打ち消した。

「私もいるよ！　火炎放射！」

リサは、ユウキに気がいってるミカルゲの後ろに回り込み、火炎放射を放った。

「アマスギル！　アヤシイカゼ！」

「ぐっ！」

「キャア！」

ミカルゲの体から、紫色の風が発生し、ユウキとリサを襲った。予想していなかった攻撃に、ユウキとリサは成す統べなく攻撃を受けてしまった。

「ふざけやがって！　十万ボルト！」

「アクノハドウ！」

ユウキはミカルゲに十万ボルトを放ったが、漆黒の螺旋状の波動、悪の波動によって打ち消されてしまった。

「アヤシイカゼ！」

「守る！」

ユウキは、怪しい風を、守るで防いだが、ミカルゲの体から、黒いオーラが発生していた。

「なにが起こってるの？」

「……わからない。リサ、こっちに来い」

ユウキは、なにか嫌な予感がし、リサを自分の所に呼び寄せた。

「ケケケ！　シャドーボール！」

ミカルゲは、シャドーボールを放ってきたが、その大きさ、威力は先程より上がっていた。

「威力が高まった……？　防げるか……十万ボルト！」

「私も手伝うよ！　火炎放射！」

ユウキ、リサはそれぞれの得意技で反撃したが、二つの技が合わさって、ギリギリシャドーボールを打ち消すことが出来た。

「威力が高すぎる……まさか……」

「怪しい風の……能力だ……」

ユウキの疑問に、倒れているジュプトルが反応し、ユウキに助言した。

「ジュプトル、どういうことだ？」

「怪しい風は……使うと稀に全ての……能力が上がるのだ……」

そう、怪しい風は、ごく稀に全ての能力が上がる。ミカルゲはその効果が発動し、攻撃が強力になっていたのだ。

「アクノハドウ！」

「電光石火！」

ミカルゲは悪の波動をユウキに向けて放った。ユウキはそれを電光石火で右にかわし、ミカルゲの死角を突いた。

「ボルテッカー！！」

「ムダダ！　カゲブンシン！」

ユウキは自分の体に雷を纏わせ、ミカルゲに突撃していったが、当たったのは、ミカルゲの影分身で作られた分身だった。

「ちっ！」

「クルシメ！　ノロイ！」

ミカルゲの体から、黒い煙りのようなものが発生し、ユウキを包み込んだ。刹那、ユウキの顔色が悪くなり、息も荒くなってきた。だが同時に、ミカルゲの体もさっきより傷ついていた。

「ユウキ！？　どうしたの！？」

「なんだ……これは……」

「ツギハキサマダ！　イタミワケ！」

今度は、ミカルゲとリサの体に赤いオーラのようなものが発生した。すると、リサの体は傷つき、逆にミカルゲの傷は癒えていた。

「えっ……どうして？」

「ケケケ！　ワレノワザニクルシメ！」

ミカルゲは高らかに笑っていた。ユウキはこの戦いを切り抜ける方法を必死に考えていた。

（考えろ！　こいつを倒す方法を……くっ、ダメだ……意識が……混濁する……）

ユウキは、ミカルゲの、のろいの効果で、かなりダメージを受けていた。のろいは使うポケモンのタイプによって効果が変わる。ゴーストタイプが使うと、自分の体力を消費する代わりに、相手にジワジワとダメージを与えるのだ。

（しかも……やつはのろいで受けたダメージを痛み分けで回復した……かなりキツイ状況だな……）

痛み分けは、自分と対象にした相手の体力を同じにする技。つまり自分がダメージを受けていて、相手が元気でも、立場を同じに出来るのだ。ミカルゲはこれを利用し、リサを利用して自分の体力を回復したのだ。

（とにかく今は回復しないとな……）

ユウキはそう考え、トレジャーバックからオボンの実を取り出し、口に含んだ。

「オワリダ！　アクノ……」

「させない……火炎放射！」

「クッ！　キサマァ！」

ミカルゲがユウキに止めを刺そうとしたが、リサが火炎放射をミカルゲに命中させることで、それを食い止めた。だがそれは、逆にリサの状況を危ぶませる結果になった。

「シャドー……」

「ボルテッカー！！」

ユウキは背中を向けたミカルゲに、ボルテッカーを決めた。不意打ちだったからか、ミカルゲはかなりダメージを受けた。

「コノシニゾコナイガァ！！」

「ふん、雑魚が生きがいんなよ」

ユウキはミカルゲを鼻で笑いながら、ミカルゲを手招きした。

「キサマァ！！　シャドーボール！」

「守る！」

ユウキは、シャドーボールを守るで防いだ。自分の攻撃が防がれ、怒りがピークに達しつつあった。

「リサ、作戦だ」

ユウキは耳打ちで、リサに作戦を教えた。リサはそれを聞いて、顔をしかめた。

「そんな、使って大丈夫なの？」

「さあな……だがやつののろいの効果も残ってる。短期決戦で行かなければ勝機はない。なに、一発ぐらい大丈夫だ」

「わかった。任せて！」

リサは不安が残っていたが、ユウキを信じ、言われた通りにすることにした。

「コロス！　アクノハドウ！」

『電光石火！』

ユウキとリサは、ミカルゲの悪の波動を、それぞれ逆の方向にかわした。

「影分身から身代わり！」

ユウキは影分身で分身を作りだし、身代わりで体力を消費し、実体のある分身を作り出した。

「メンドウナ！」

「馬鹿なお前に本体がわかるか？」

「ゼッタイニコロス！　シャドーボール！」

ミカルゲは、やみくもにシャドーボールを放った。だがやみくもに

打った所で本体にあたるはずもなく、ユウキの本体を見つけることは出来なかった。

「ドコダ！？」

「エクス・クロー！！」

ユウキに目が行っていたミカルゲに、後ろから十字に引っ掻いた。刹那、引っ掻いた所は小規模な爆発が起こった。

「ナニッ！？」

「頭に血が上っていたら勝てるバトルも勝てないというわけだ。雷鳴剣！」

ユウキは地面から出てきてきた。先程の影分身と身代わりを使った時に、穴を掘るで、地中に潜っていたのだ。そして、両手から雷を発生させ、その形態を変化させ、剣を作り出した。

「お別れだ。羅刹陣！！」

「グアァァァ！！」

ユウキは、雷鳴剣で、ミカルゲを一刀両断した。ミカルゲはそのダメージに耐えられず、その場に倒れた。

## 第六十七話　挑発（後書き）

クロ
「厄介な敵っすね」

あの補助技は厄介だね

ミズキ
「ま、とりあえずなんとかなったから良いじゃない」

心配だった？

ミズキ
「だっ誰がユウキ達の心配なんかっ！」

ツンデレツンデレ（笑）

ミズキ
「なんですってー！」

逃げろ！（ノ＞＜）ノ

## 第六十八話　明かされる真実（前書き）

第六十八話完成！

ユウキ
「……疲れたな」

まあ前回かなり疲労しているからね～

では第六十八話をどうぞ！

# 第六十八話　明かされる真実

「終わったか……ぐっ」

ユウキはのろいのダメージや、雷鳴剣の反動の痛みなどが重なり、かなりの疲労感に襲われた。

「ユウキ！」

リサがユウキに近づこうとした刹那、倒れていたミカルゲが、うなり声を上げながら、急に起き上がった。

「ウグググ……」

「なっなに？」

「まだ倒れていないのか……？」

ミカルゲのうなり声と共に、地響きが起こりだした。

「なにがおこるの！？」

「グアァァァ！！」

ミカルゲのうなり声が収まると、ミカルゲの本体は、先程あった石の置物に吸い込まれていった。それと同時に、ジュプトルの周りに発生していた紫色のオーラが消え、それは石の置物に吸い込まれていった。

「ヒャ！　ニゲロ～！！」

そう言うと、ミカルゲはその場から一目散に逃げ出した。急なミカルゲの態度の変わり様に、ユウキ達は頭に『？』を浮かべていた。

「なんなんだ……？」

「急に弱気になって逃げ出しただけだ……」

「ジュプトル！」

ユウキはリサに肩を借りながら、ジュプトルのもとに駆け寄った。二匹はジュプトルの安否を気にしたが、幸いそこまで傷は深くなかった。

「大丈夫？」

「嗚呼……大丈夫だ」

「立てる？」

「大丈夫だ……」

ジュプトルは少しフラフラしながら立ち上がった。その表情は、穏やかだった。リサは、ジュプトルの表情を見ると、本当に悪者かと疑問を浮かべた。

「とりあえず……助けてくれたことは礼を言う……俺としたことが、やつに体を乗っ取られるとはな……」

「あいつ、悪い奴だったの？」

「いや、そうじゃない。多分奴は自分の縄張りを荒らされて怒っただけだ。怒ると見境がつかなくなっていたが……さっきのように、一旦旗色が悪くなると逃げて行ったように……本当は臆病なポケモンなんだ。本来は優しいポケモンなのに、世界が闇に包まれるせいで、心も歪む……未来にはそんなポケモンがほとんどなんだ」

ユウキとリサは、ジュプトルの話しを黙って聞いていた。確かにこんな漆黒の世界になったら正気を保っているのは難しいだろう。

「そうか……」

「この世界のせいで、良いポケモンも悪くなるなんて……悲しい話しね」

ジュプトルは、二匹が自分の話を信用するとは予想しておらず、驚きを隠せなかった。

「……お前達、俺の話を信用するのか？」

「うーん……半分くらいかな……正直まだ完全に信用した訳じゃないけど……」

リサからの、予想していた答えに、ジュプトルは顔を歪めた。

「前に言ったはずだ。信用が無ければ一緒にいても仕方ないとな……じゃあな」

ジュプトルは、自分の使命を果たそうと歩きだそうとしたが、それをリサが止めた。

「待ってよ！　信じてないとも言ってないよ！　正直言うと私達…もうなにがなんだか良くわからないのよ……だから少しでも情報が欲しいの。それに……ジュプトルのこと、まだ疑っている所もあるけど、ジュプトルの言っていることは筋が通っていると思うの。だからお願い！　ジュプトルの知っている事を聞かせて！　未来のことや……何故ジュプトルが私達の世界に来たのかも！」

ジュプトルはリサの必死の説得を黙って聞いていた。この時、ジュプトルの中で、こいつらを信用しても大丈夫だろうか……そんな考えが浮かんできていた。

「俺の言うことがでたらめだったらどうする？」

「大丈夫。鵜呑みにはしない。自分で判断する」

「……わかった。ついてこい」

ジュプトルは、先に進む道へと歩きだした。リサも、その後を追い掛けようとしたが、ユウキはその場に残っていた。

「ユウキ？　どうしたの？」

「……くっ」

ユウキはその場に倒れ込んだ。その顔は真っ青になっていた。

「どうしたの！？　ジュプトル！　ユウキが！」

「どうした……こいつは……さっきのミカルゲののろいか……お前、とりあえずここは見つかりやすい。運ぶのを手伝ってくれ」

「うっうん！」

ジュプトルはユウキをおんぶし、リサは後ろからユウキを支えながら歩きだした。

「あそこならいいな」

ジュプトルとリサは、ちょうどあった岩石で出来た壁にあった、凹みの所に座り込んだ。

「ここなら見つかりにくいな……お前、そいつにこれを飲ませるんだ」

そう言いながらジュプトルは、青色の液体が入ったビンと、黄色の液体が入ったビンを渡した。

「これは？」

「青色のは満タンの薬と呼ばれる薬だ。体力が回復する。黄色のは何でも治し。状態異常が治る」

「ありがとうジュプトル！　ユウキ、これを飲んで……」

リサは、ユウキに二つの薬を飲ませた。するとユウキの体の傷は治り、顔色が良くなった。刹那、ユウキは意識を取り戻した。

「ユウキ！　大丈夫？」

「嗚呼……」

「あまり無理はするな」

「……すまない」

ユウキは、リサに支えられながら起き上がった。まだ完全には回復していないようだ。

「じゃあ……なにから話す？」

「じゃあジュプトル。何故未来では星の停止が起こったの？」

そう、ユウキとリサがこの暗黒の未来世界に来てから直面した最大の謎。何故ジュプトルを止めたのに、星の停止が起こったのかをジュプトルに聞いた。

「星の停止が起こった原因……それはお前達が住んでいる過去の世界で……ディアルガが司る時限の塔が崩壊したからだ」

ユウキとリサは、知らないいくつかの単語を聞き、疑問が浮かんだ。

「ディアルガ？　なんなのそれは？」

「ディアルガは時間を司る伝説のポケモンだ。ディアルガは時限の塔で時を守っていた。しかし時限の塔が崩壊したのをきっかけに、少しずつ時が壊れ始め……ついに星の停止が起こったのだ」

「ディアルガはどうなったんだ？」

ユウキは、岩に寄り掛かりながらジュプトルに聞いた。ジュプトルは一つため息をした後、話を切り出した。

「ディアルガは時が壊れた影響で暴走した。そして時の崩壊を迎えた未来のディアルガは……ほとんど意識も無く、暗黒に支配されている。もはやあれをディアルガとはいえないだろう。全く別の存在……“闇のディアルガ”と言うべき存在になっている」

「……」

ユウキもリサも、ジュプトルの口から語られる壮大な真実に、言葉が出なかった。

「闇のディアルガは感情を失ったまま、ただ歴史が変わるのを防ごうと働く。だから俺はディアルガに狙われているのだ。俺は歴史を変えるため……つまり、星の停止を防ぐために……未来からお前達の世界に行ったのだからな」

「なっ！？」

「え〜〜！？」

ジュプトルの告白に、ユウキもリサも思わず声を荒げた。

「ジュプトルが星の停止を防ぐために……私達の世界に来たの！？
それは私達が聞いていた話しと真逆よ！　ジュプトルは星の停止を起こすために未来から来たんじゃないの！？」

「冗談じゃない。俺が時の歯車を集めていたのは、星の停止を防ぐためだ。時限の塔に時の歯車を収めれば、壊れかけた時限の塔も元に戻る。また、時の歯車を取ると、確かにその地域の時間は止まるが、時限の塔に時の歯車を収めさえすれば、元に戻るのだ」

ユウキもリサも、今だにジュプトルの話を信じられずにいた。

「じゃあ……ヨノワールさんが言っていたのは……ジュプトルは悪い奴っていう話も……全部でたらめ？」

「当たり前だ。ヨノワールは……この俺を捕らえ、抹殺するために、闇のディアルガが未来から送り込んだ……刺客だからな」

「え〜〜！？」

ヨノワールは闇のディアルガの刺客。この衝撃的な事実に、ヨノワールに絶対の信頼を置いていたリサは、動揺を隠せなかった。
一方ユウキは、最初からヨノワールを信用していなかったからか、あまり驚かなかった。

「ヨノワールさんが……刺客！？」

「そうだ。闇のディアルガは、俺がタイムスリップしたと知ると、ヨノワールを刺客として送り込んだのだ」

「そんな……」

「お前達には信じられないだろうが……」

「真実なんだろ？」

今まであまり喋らず、ジュプトルの話しを聞いていたユウキが、ジュプトルの発言に補足をした。ジュプトルは、そうだ、と頷いた。

「信じられないよ！　だってヨノワールさんだよ!?　確かに今のヨノワールさんは変だけど……でもあのヨノワールさんが……」

リサは、目の前の現実を受け入れられずにいた。だがユウキは、今までの事を踏まえると、ヨノワールは敵という、ジュプトルの話しに信憑性を感じた。

リサはある事を考え、今来た道を戻ろうとした。

「どこにいく!?」

「ヨノワールさんに会いに行く」

「なんだと!?　そんなことをしてどうする！　また捕まって処刑されるだけだ！」

「じゃあ……私はどうすれば……」

リサの弱気な言葉を聞き、ジュプトルは声を荒げた。

「どうすればいいだと!?　さっき自分で言っていただろ!?　自分で判断すると!　何を信じていいかわからないからこそ……話しを鵜呑みにせず、自分で考えると!」

リサはジュプトルの言葉に思わずたじろいだ。リサも心のどこかで、ヨノワールは敵だとわかっていた。わかっているからこそ、その現実を受け入れたくなかったのだ。

「私は……」

「苦しい時だからこそ、気持ちを強くもつのだ。後は自分で考えて行動してみろ」

そう言いながら、ジュプトルは先に進もうとした。

「お前はどうするんだ、ジュプトル」

「俺はまた過去に行く。そしてその為に……セレビィを探す」

「セレビィ?」

ユウキは、セレビィというポケモンの名前を知らず、それを聞くために、おうむ返しでジュプトルに問い掛けた。

「そうだ。俺について来てもいいし、来なくてもいい。自分達の道は自分達で決めろ。じゃあな」

そう言い残し、ジュプトルは先に進む道を歩きだした。ユウキとリサは、その姿を呆然と見送った。

「ユウキ……」

リサは、ユウキに救いを求めるような目で見つめた。だがユウキの目は、既になにか決意したような目だった。

「確かに何を信じたら良いかわからない。確かなのは、この世界では時間が停止しているということだ」

「……うん」

「真実を知るためにも、俺達は過去に戻らなくてはならない。リサ、なんとしてでも戻るぞ！」

ユウキは、まっすぐな目で、リサの目を見つめた。ユウキには、まだリサには迷いがあるように見えた。

「ユウキ……うん、そうだよね……ジュプトルの……言う通りよね……こんな時だからこそ……気持ちを強く持たなくちゃ」

まだリサの心は葛藤（かっとう）していた。だがリサは、悩みながらでも、前に進むことを決意した。

「私はもう大丈夫。行こう……ジュプトルを追い掛けよう」

「鳴呼」

ユウキとリサは、ジュプトルの歩いて行った道を走り出そうとし

たが、リサはユウキを呼び止めた。

「ユウキ」

「なんだ？」

ユウキは振り返り、リサの方を向いた。その目には、もう迷いはないようだ。

「絶対に……帰ろうね！　私達の世界に！」

「嗚呼……絶対にだ」

ユウキとリサは、再びジュプトルの後を、ダッシュで追い掛けて行った。

場所は変わって、ここは時限の塔の廃墟。闇のディアルガは、ヨノワールを呼び出していた。

「ディアルガ様。あの者達を捕らえる手筈は整っています。そして時が来たら……ディアルガ様のお力が必要になるかと……」

ヨノワールがそう言うと、闇のディアルガから、低い唸り声が聞こえた。

「……かしこまりました。では予定通りに」

そう言い残し、ヨノワールは闇のディアルガの前から消えた。

## 第六十八話　明かされる真実（後書き）

リサ
「……」

まだショックを隠せないのか？

リサ
「だって……ううん、今は前を向かなくちゃ……」

頑張れ

## 第六十九話　セレビィ（前書き）

第六十九話完成！

ミズキ
「まさかの真実ね……」

だね。では第六十九話をどうぞ！

# 第六十九話　セレビィ

ユウキとリサが走り出して、数分後、何とかジュプトルに追いつくことが出来た。

「ジュプトル！」

「……お前達、俺と行くのか？」

「嗚呼」

「フッ……そうか」

ジュプトルは、軽く笑みを浮かべた。自分に今だけでも、仲間が出来たことが、素直に嬉しかったのだ。

「ジュプトル、どこに向かっているんだ？」

「もう着く。ほらあそこだ」

ジュプトルの指差す所には、沢山の木々が生え、黒い霧に覆われている森が広がっていた。

「これは……」

この時ユウキは、何故か妙な感覚に襲われた。

（なんだこの感覚……前にもあったな……）

「ねえジュプトル。ここはどこなの？」

「ここは黒の森。絶えず黒い霧が掛かっているのでそう呼ばれている。そしてこの森の奥に……セレビィがいる」

「セレビィ？」

リサは、ジュプトルにおうむ返しで問い掛けた。

「セレビィは伝説の時渡りポケモンで、時間を越える力を使う。ちょっと変わったやつではあるんだけど……俺が過去に行けたのもセレビィの力を借りたからだ」

「じゃあセレビィに会えば……」

「過去に帰れる。だが……」

ジュプトルは少し暗い表情になりながら、淡々とユウキとリサに説明した。

「セレビィは俺を過去に送ったポケモンだ。つまりセレビィもまた歴史を変えることに協力したことになる」

「それは……セレビィも？」

「そうだ。セレビィも闇のディアルガに狙われている。グズグズしてはいられない。早く行くぞ」

ジュプトルは黒の森に入って行った。

ジュプトルの言葉に、リサは焦りを感じた。急がないとと思い、

ジュプトルの後を追い掛けようとしたが、ユウキはその場に立ちすくんでいた。

「ユウキ？　どうしたの？」

「……いや、なんでもない」

ユウキは、妙な感覚を深く考えず、ジュプトルの後を追った。

「ねえジュプトル」

「なんだ？」

リサは歩きながら、ジュプトルを呼んだ。リサはさっきからジュプトルに聞きたいことがあったのだ。

「ジュプトルは……もとの世界に戻ったら……やっぱり時の歯車を盗むの？」

「……そうだ。そうしないと星の停止は止められない」

わかっていた返答だった。だがリサはまだ完全にジュプトルは信じられずにいた。

「私は！　私はまだジュプトルを信用した訳じゃないからね！　もとの世界に帰りたいから一緒に行動しているだけで……もしもとの世界に帰れて、ジュプトルが間違っていたら、私はジュプトルを止めるからね！」

まだ信用されてないのか……ジュプトルはそう思ったが、今まで

のことを考えると仕方ないと考えた。

「好きにしろ。だが今大切なのな、お互い過去に行けるかだ。今はそのためだけに集中しろ」

そう言いながら、ジュプトルは再び歩きだした。

「行こう、ユウキ……ユウキ？」

ユウキはまたその場に立ちすくんでいた。やはり先程感じた違和感が気になっていたのだ。

（なんなんだ……この感覚……前にもあったな……そうだ、霧の湖や流砂の地で感じたものと同じだ……どういうことだ……）

「ユウキ？　どうしたの？」

「なにをしている！　早くしろ！」

待っていても来ない二匹に、ジュプトルが声を荒げながら二匹を呼んだ。

「今行くー！　ユウキ、行こう」

「そうだな」

二匹は、急いでジュプトルの後を追い掛けた。だが、ユウキとリサは、自分達の後を追ってきていた影に気づかずにいた。

黒の森は、外から見たより霧が深く、視覚で敵を見つけるのは困難を極めていた。
更にその敵も一体一体が強く、常に全力の戦闘を強いられていた。

「フフッ……」

「どうした？」

急にジュプトルが笑いだし、ユウキは不思議に思った。

「いや、仲間と行動を共にするのは久しいからな……ふとあいつを思い出したんだ」

ジュプトルは、右手に付けている銀色のブレスレットを見ながら言った。

「仲間がいたのか？」

「嗚呼……」

「二人共！　また敵よ！」

リサの言う通り、目の前には、ガバイトが二匹いた。

「どけ！　リーフブレード！」
ジュプトルは、自分の腕にある葉っぱを剣のように鋭くし、ガバイトを切り付けた。
効果抜群でもないのに、ガバイトは一撃で倒れた。
「やるな……」
「ユウキ！　前！」
「電光石火！」
ユウキは、迫り来るガバイトを、電光石火で軽く避け、バランスを崩した隙を突き、アイアンテールをガバイトの背中に決めた。
「終わりだ！　リーフブレード！」
ダメージを受け、よろついているガバイトに、ジュプトルが止めのリーフブレードをガバイトに決めた。ガバイトは悶絶し、その場に倒れた。
「良いとこ取りか？」
ユウキは珍しく、悪戯っ子見たいな笑みを浮かべながら言った。
「そんなことを気にしてる場合か？」
「早く行かないと！」
リサに後押しされ、三匹は再び走り出した。

それから程なくし、少し開けた場所に三匹は出てきた。

「ここ？」

「嗚呼。前に出会ったのもここら辺だ。闇のディアルガにばれていたらセレビィはもういないだろうが……まだ知られてなければ、セレビィはきっとまだここにいるはずだ。おーいセレビィ！　俺だ！　ジュプトルだ！　いるなら姿を見せてくれ！」

ジュプトルは、セレビィを大声で呼んだ。皆辺りを見回したが、セレビィらしい姿を確認出来なかった。

「出てこないね……やっぱり闇のディアルガに追われて逃げちゃったのかな……」

そう言いながら、リサは最悪の事態が頭を過ぎった。

「まさか……もうディアルガに……捕まって……それとも……」

「捕まるですって？」

リサがいろんな想像をしていると、どこからか、聞き覚えのない声が聞こえてきた。ユウキとリサは、周りを確認したが、やはり何も確認出来なかった。

「気のせい？」

「ウフフッ！　気のせいじゃないわよ！　私が捕まるですって？　失礼ねー。私が捕まるなんて、絶対にありえないわ！」

その声がそう言うと、ユウキ達の前が急に光だした。刹那、目の前に妖精のようなポケモンが現れた。
「お久しぶりです。ジュプトルさん」
「そうだな。セレビィ」
「ええっ！？　これがセレビィ！？」
驚きのあまり、リサは大声を出してしまった。セレビィはリサの言葉に少しムッとした。
「ちょっとー。私、あなたにこれ呼ばわりされる筋合いないんだけど」
セレビィは腰に手を当てながら、リサに文句を言った。
ちなみにセレビィという種族は、体が緑色だが、このセレビィはピンク色、いわゆる色違いという奴だ。
「ごっごめん。時間を越える力を持ってるって聞いていたから、なんか凄いポケモンを想像していて……」
実際リサは、セレビィはもの凄い、ドラゴンのようなポケモンを想像していたため、まさかセレビィが自分と殆ど変わらない大きさで驚いてしまったのだ。
「見た目で判断するのは良くないわよ。でも許してあげる。だってそれって……私が思ったより可愛くて、特別ってことでしょ？」
「……」

ユウキもリサも、セレビィの自画自賛に言葉を失った。ユウキはこの時、セレビィは自分とは性格が合わないと確信した。

「……セレビィ、また力を貸してくれ」

「わかってます。こうやってジュプトルさんがやって来たということは……過去の世界で失敗したからでしょう？」

「……まあそうだが」

あまりにも的確な指摘に、ジュプトルは言葉を濁した。

「しっかりしてくださいよね。私もう嫌ですから。こんな暗い世界で生きていくのは」

「悪いがおしゃべりをしている暇はないんだ。ヤミラミに追われている。早く行かないと迷惑をかけてしまう」

ジュプトルはセレビィの身を案じて言ったのだが、セレビィは軽く笑った

「大丈夫ですよ。ヤミラミが来たって私どうってことないですから。それに星の停止を食い止めて、この暗黒の世界が変わるなら、私も命をかけて……ジュプトルさんに協力します」

「……それで、時の回廊は？」

「すぐそこの高台に」

「時の回廊？」

時の回廊という聞き慣れない単語に、リサはジュプトルに問い掛けた。

「セレビィが時渡りをするのに使うものだ」

「小さい時渡りなら私だけで出来るけど、時代を越えるような時渡りは、時の回廊を使わないと無理なの」

セレビィの説明に、リサはなるほどと納得した。

「今回時の回廊を渡るのはこの三匹ですか？」

「そうだ」

「……あら？」

セレビィは、時渡りをする三匹を眺めていると、ある一匹に目が止まった。ユウキだ。

「あなた……まさか……ね」

「なんだ？」

「なんでもないわ。じゃあ行きましょ」

セレビィの脳裏には、ある疑問が浮かんでいたが、そんなはずないと結論付けた。

「ねえ」

「なぁに？」

時の回廊に向けて歩いていると、セレビィが唐突にリサに声をかけた。

「内緒の話しなんだけど、ジュプトルさんって凄いせっかちなの知ってた？」

「そうなの？」

確かにジュプトルは、ここまで凄い急いでいた。だがそれはヤミラミに追われていたり、星の停止が迫っているからだとリサは思っていた。

「ええ。急ぐのはわかるけど……もう少しゆっくりしてくれたら、私も嬉しいのになぁ……出来るだけ長い時間一緒にいたいし……」

「……ふ～ん」

リサは、悪戯っ子みたいな怪しい笑みを浮かべていた。セレビィは自分の言った事を思い出し、頬を赤らめた。

「あ……そういう意味じゃないからね！　私なんとも思ってないから！」

「そう♪」

セレビィの必死の弁解に、リサは思わずクスクスと笑ってしまっ

た。そのせいでセレビィは余計に焦っていたのは別のお話。

高台までの道は、一本道で特に敵に出会うことはなかった。

「そろそろか？」

「はい、あっ見えてきました！」

セレビィの指差す方には、どこにでもあるような岩に、光で出来た扉のような物があった。

「あれが時の回廊か？」

「そうだ。あれが時の回廊だ。あそこを通って俺は過去に行ったんだ。扉を開けられるのはセレビィだけだ。さっそく扉を開けてくれ」

「わかりました」

「待て！」

セレビィが時の回廊を開けようとすると、どこからか声が聞こえてきた。

「誰っ！？」

「この声は……」

「久しぶりだな、お前達」

時の回廊の前から、一匹のポケモンが現れた。その姿を見て、ユウキ達は驚いた。

「貴様……！」

「ヨノワールさん……」

## 第六十九話　セレビィ（後書き）

ミズキ
「ここでヨノワール……」

ジン
「ユウキさん達、大丈夫でしょうか？」

それは次回を待ってね

## 第七十話　ユウキとジュプトル（前書き）

第七十話完成！

ジン
「もう七十話なんですね」

チサ
「やったねー！」

ここまで続くとは……では第七十話をどうぞ！

# 第七十話　ユウキとジュプトル

「随分と逃げ回ったようだが……残念ながらもうおしまいだ」

ユウキ達の周りには、いつの間にかヤミラミ達が、ユウキ達を囲んでいた。

「なるほどな。俺達をわざと泳がせ、セレビィまで捕らえようとしたということか……まさかこんなことになるとはな……悪いな、セレビィ」

ジュプトルは、言葉でこそ少し弱気だが、まだ口調は余裕がありそうだった。

「あら？　謝るなんてジュプトルさんらしくないですよ。それに私が捕まると思います？」

セレビィもまだ余裕があるみたいだ。だがその間にも、ヤミラミ達はユウキ達に迫ってきていた。

「お前達！　戦う準備は出来てるな？」

「嗚呼」

「えっ？　もっもちろん！」

「ここは強行突破するぞ！　あいつらを倒し、時の回廊に飛び込む！」

ユウキ達は戦闘体制をとった。だがヨノワールのには、ジュプトルの勢いを止める秘策があった。

「無駄だ。お前達に勝ち目はない」

「そんなこと、やってみなきゃわからない。貴様が相手でもな」

「フフッ……ジュプトル、ここに来たのは、私だけだと思ったか？」

ジュプトルは、ヨノワールの言葉から、ある最悪の状況を考えた。いや、それしかないと、ジュプトルは確信した。

「まさか……！」

「ディアルガ様」

ヨノワールの口から出た名前。ディアルガ。その名前が出た刹那、辺りを闇が包んだ。

「急に暗くなったよ！？」

ユウキ達が辺りを警戒していると、何者かの咆哮が聞こえた。刹那、闇が晴れ、ユウキ達の目の前の高台には、一匹のポケモンが現れた。体格はユウキ達の十倍以上は軽く越え、背中には扇のような突起、胸にはダイヤモンドの原石のようなものがあった。

「ジュプトル！　なんだあれは！？」

さすがのユウキも、目の前のポケモンから発せられる気迫に、感情の制御が出来ずにいた。

「闇の……ディアルガだ……」

「なにっ！？」

「闇のディアルガ！？」

「どうした？　さっきの威勢の良さはどうした？」

「ぐっ……」

さっきまであったジュプトルの覇気は消え、完全に意気消沈していた。

「もはや……ここまでか……」

「えぇっ！？　戦うんじゃなかったの！？」

「無理だ……ヨノワールだけならともかく……ディアルガには絶対に勝てない……お前達もよく頑張ったが……ここまでだ」

ジュプトルは諦めていたが、ユウキ、リサは諦めていなかった。

「ふざけるな！　お前の使命はその程度だったのか！！」

「まさかディアルガが出てくるとは想定外だった……降参だヨノワール。すきにしろ」

確かにジュプトルは諦めた。だが、まだジュプトルには、時の停止を防ぐ方法があった。

「お前にしては随分諦めが早いな」

「まあな。確かに俺は諦めたが……まだ希望はある。セレビィも知っていると思うが……星の停止を食い止めるため、過去に行ったのは、俺だけじゃない。もう一人いる」

まさかの事実に、ユウキとリサは驚いた。だがジュプトルの言葉からは、偽りを感じられなかった。

「他にも私達の世界に!?」

「そうだ。俺には相棒がいた。だが時の回廊を通っている時にトラブルがあり、俺達はバラバラになったのだ。あいつはまだ過去にいる。たとえ俺がいなくなっても、あいつがきっと使命を果たしてくれる」

ジュプトルの相棒。その事実に、ユウキとリサはただ黙って聞いているしかなかった。その静寂を破ったのは、ヨノワールだった。

「フフッ……」

「なにが可笑しい?」

「ジュプトルよ。そいつの名前は?」

ジュプトルに、ヨノワールから不可思議な質問が飛んできた。ジュプトルは、ヨノワールが何を言いたいかわからなかった。

「聞いてどうする」

「言えんのか？」

「フンッ……名は……ユウキ。俺の親友だ」

「なっ……」

「なんだって～！？」

ジュプトルの口から出た名前は……ユウキ。そう、調度ジュプトルの後ろにいる者と同じ名前だった。

「ジュプトル！　ここにいるのがユウキだよ！？」

まさかリサから、後ろにいるピカチュウが、ユウキと言われて思ってなかったのだろう、ジュプトルとセレビィは、とっさにユウキの方を向いた。

「なんだって！？　お前が……ユウキだと？」

ジュプトルは一瞬焦りを覚えたが、すぐに落ち着きを取り戻した。

「……いや、違う。俺の知ってるユウキは……人間だ」

「人間！？」

「ワハハハハ！！　その通り！　ジュプトル！　そこにいるのはユウキに間違いない！！」

「どういうことだ！？」

ジュプトルは、自分の知っている相棒は人間。その事実を知っているからこそ、ヨノワールの言葉を信じることは出来なかった。

「そいつは元々人間だったのだ！」

「馬鹿な！？」

「フッ……説明してやろう」

ヨノワールの口から語られることは、ジュプトルにとってはただ敵を騙すための道具としか考えていなかった。だがこの時だけは、一言も逃さず聞いていた。

「私がディアルガ様から受けた使命、それは過去に行ったジュプトルとユウキの抹殺。私はお前達を追ってタイムスリップしたのだ。過去に行った私は、情報を集めながらお前達を探していた。そしてある時、ライトニングに出会った。あの時はなにも感じなかったが……時空の叫びの話を聞いた時、まさかとは思ったが……私の中にある考えが芽生えたのだ。そして……リサ、貴様から聞いたこと……貴様の相棒は記憶が無く、しかも元々人間で、時空の叫びを持つ……私は確信した。そして、その男の名前はユウキ。そう、私の追うユウキだったのだ」

ヨノワールから淡々と語られる事実に、ジュプトルは息を呑んだ。

「ユウキが記憶を失い、ポケモンになったのは、おそらくタイムスリップ中の事故が原因だろう。とにかくユウキが記憶を無くしていたのはラッキーだったよ。私を見てもわからないんだからな。こいつらを信用させておけば……いつでも未来に連れていける……」

やはりヨノワールは敵。内心リサはわかっていたが、やはりその事実は、ヨノワールに絶対の信頼を置いていたリサにとって、堪え難い真実だった。

「あとはジュプトル、貴様さえなんとかすれば良かったのだ」

それぞれ色んなことを考えている中、ユウキは真実を受け入れずにいた。

（俺は未来の人間……？　しかもジュプトルの相棒として……星の停止を食い止めようとした……？　馬鹿な……）

「ジュプトル、ユウキ。二匹はいまここにいる。お前達を倒せば全てが終わる……ジュプトル、お前の希望も含めて……全てが！」

「ヨノワールさん……いや、ヨノワール！！」

この時、初めてリサは、ヨノワールを自分達の敵と完全に認識した。

「覚悟は出来たな」

「ジュプトル！　ユウキ！」

「これがお前達の……最期だ！」

その言葉を合図に、ユウキ達を取り囲んでいたヤミラミ達が、じわりじわりと接近してきた。

「みんな！　諦めちゃダメ！」

「だが……この状況をどうしろというのだ……」

ジュプトルの言う通り、今の状況は、絶体絶命な危機。そう簡単に乗り越えられるものではなかった。

「だからなにか考えなきゃ！」

なにかあるはず。リサは必死に考えた。そしてある一つの案が浮かんだ。

「セレビィ！　時渡りで時の回廊に飛び込める？」

「出来なくはないわ。でもディアルガがいるから難しいわ。ディアルガは時間ポケモン……時渡りを使っても、すぐに破られるわ」

セレビィの説明通り、ディアルガは時を司るポケモン。セレビィの時渡りとはいえ、簡単に打ち破ることができるのだ。

「ちょっとでも構わない！　お願い！」

リサの説得に、セレビィは首を縦に振った。その間に、ヤミラミ達は、ユウキ達のすぐ近くに来ていた。

「かかれぇー！！」

「時渡りっ！！」

セレビィがそう叫ぶと、ユウキ達の体は光に包まれ、その場から

消えた。急にユウキ達が消え、ヤミラミ達は周りをキョロキョロしていた。

「消えた……？　そうか！　ディアルガ様！」

ヨノワールが、ディアルガの名を呼ぶと、ディアルガの胸の宝石が赤く光、そこを中心に、エネルギーが発せられた。刹那、時渡りは破られ、ユウキ達の姿が見えた。

ユウキ達は時の回廊に飛び込む寸前で、時渡りが破られてしまったのだ。

「くっもう少しだったのに……」

「そこかっ！」

ヨノワールはユウキ達の姿を確認し、ヤミラミを引き連れてユウキ達のもとに向かって来た。

「今飛び込めば間に合うわ！　時の回廊に早く！」

「えっ？　セレビィは？」

「私は大丈夫よ！　絶対に捕まらないって言ったでしょ？必ず……星の停止を食い止めてね！」

「すまない！」

ユウキ達は、セレビィに後押しされ、時の回廊に飛び込んだ。

「逃がすか！」

ヨノワールとヤミラミ達は、時の回廊に飛び込もうとしたが、セレビィの体から光があふれ、とっさに足を止めた。しかしそれが災いした。セレビィは時の回廊を消滅させ、その場から消えていたのだ。

「逃がしたか……」

ヨノワールは、消えた時の回廊のあった場所を見ながら、その場に佇んでいた。

## 第七十話　ユウキとジュプトル（後書き）

ユウキ
「やっと帰れたな……」

リサ
「帰れたのかな？」

無事に帰れたかは次回だよ～

ジュプトル
「次は今回より早く執筆しろ」

努力するよ……

## 第七十一話　夜明けの想い（前書き）

第七十一話完成！

ユウキ
「無事に俺達は帰れたのか？」

それは今回の話で

では第七十一話をどうぞ！

# 第七十一話　夜明けの想い

「うっ……」

ユウキは、その場で意識を取り戻した。どうやら時空ホールの中で、意識を失っていたようだ。

「ここは……」

まずユウキの目に入ったのは、青い空と、広がる海、そして白い砂浜だった。　ユウキの近くには、さっきまでのユウキと同じように、意識を失っているリサと、ジュプトルの姿があった。

「うぅ……」

「リサ？」

ユウキが二匹に近づこうとすると、その前にリサが目を覚ました。

「大丈夫か？」

「うん。それよりここって……」

リサはその場に立ち上がり、周りを確認した。リサの目に入ったのは、ユウキが見たものと同じ、青い空や広い海だった。

「ここ……私とユウキが出会った浜辺……？」

「みたいだな」

「ということは……帰って来れた……？」

「おそらくな」

「本当に！？　やったあ！　帰って来れたんだ！」

二匹は、無事に未来から帰ってこれたことを喜んだ。その声に反応し、ジュプトルは目を覚ました。

「うっ……」

「ジュプトル？　大丈夫か？」

「なんとかな」

「見てよ！　私達帰ってこれたのよ！　もとの世界に！」

ジュプトルも辺りを確認した。そこは色の無い、漆黒の世界ではなく、正常に時が流れる、過去の世界だった。

「そうか……戻って来れたのか……俺達は……」

「うんっ　ここはユウキと私が出会った場所なの」

「そうだったのか。俺がタイムスリップで着いたのは東の森だったから……随分離れた所に降りてしまったんだな」

ここから東の森はかなりの距離がある。それほど遠くに落ちてしまうほど、タイムスリップ中の事故は甚大なものだったのだろう。

「ねえ、そのタイムスリップの事も含めて、わからないことが沢山あるから、いろいろ聞かせてよ」

「いいだろう」

「でもここで話すのもなんだし……プクリンのギルドに行こうよ。私達そこで住み込みで修業してたし」

リサがプクリンのギルドに行こうとするのを、ユウキが止めた。

「いや、ジュプトルが行ったらマズイんじゃないか」

「えっ？」

リサには、ユウキが何故止めるのか、この時はまだ理解出来なかった。

「俺はこの世界ではお尋ね者だ。俺がそのギルドに行ったら、また俺を捕まえようとするんじゃないか？」

「確かに……じゃあどうしよう……」

リサは少し考えた後、ある良い場所を思い付いた。

「あっ！　それなら良い場所があるよ。でもトレジャータウンを通らないといけないけど……」

「隠れながら行けば問題ないだろう。案内してくれ」

「わかった」

ユウキ達は、リサを先頭に歩きだした。

三匹は、トレジャータウンのポケモンに見つからないようにしながら、なんとかトレジャータウンを抜けることに成功した。

「ここよ」

リサの示した場所は、崖になっていた。落ちたら命の保障は出来ないだろう。

「この崖はサメハダ岩って呼ばれてるの」

「サメハダ岩？」

「うん。岩の形がサメハダーというポケモンに似てるからそう呼ばれているらしいよ。とりあえず……見た目は変わってないかな」

リサは目の前にある、茂みを退かした。すると、そこには下に下りる階段があった。

「階段？」

「この下よ。ギルドに入る前は、私ここに住み着いていたの。中に入って」

ジュプトル、ユウキ、リサの順に階段を降りた。階段を下りると、そこは空洞になっていた。おそらくサメハダーの口の部分が空洞になっているのだろう。そこからは海を眺めることも出来る。

「良かった。誰にも荒らされてない。ここなら目立たないし……しばらくここにいた方がいいかも」

「そうだな」

とりあえずユウキ達は、今の拠点をサメハダ岩に決めた。ユウキ達は食べ物を確保し、寝床を設置した。

「もう夜か……」

いろいろやっている間に、外には満天の星空が広がっていた。

「しかしユウキ……お前があのユウキとはな……」

「……」

「詳しく話してくれない？」

ジュプトルは首を縦に振り、淡々と真実を話しはじめた。

「俺とユウキは……星の停止について一緒に調査していた」

「ポケモンと人間のペアで？」

人間とポケモンが組むことは、この世界では珍しいことだ。そもそも人間は殆どこの世界にはいないというのが最大の理由だ。

「そうだ。ユウキには誰にもない特殊な能力があった。それは星の停止の調査をするために、ある重要な役割を担っていたのだ。」

ジュプトルの言う、ユウキの特別な能力。リサにはその能力に心当たりがあった。

「時空の叫びね」

「その通りだ。ただ時空の叫びには問題があった。時空の叫びは、信頼できるパートナーが一緒にいないと発動しないのだ」

「信頼できる……パートナー……」

ジュプトルの言葉に偽りはないだろうが、この時リサは、あることが気にかかっていた。

「だから俺達は一緒に行動したのだ。時空の叫びは、時の歯車が存在する場所に反応して起こる。俺達は過去の世界での時の歯車が、どこにあるのかを探るために、時空の叫びを使ったのだ」

「ちょっと待って。時空の叫びは信頼できるパートナーが必要って言ったけど、私達が出会って間もないころから、時空の叫びは起きていたよ？」

確かにユウキとリサが出会ってすぐに時空の叫びは起きていた。ジュプトルの言葉が本当なら、なぜそんな短期間で起こるか、リサにはわからなかった。

「なにを言う。それだけお前達が初めから信頼しあってたってことじゃないか？」

ジュプトルの余りにもストレートな指摘に、ユウキとリサは顔を見合わせ、頬を紅潮させながら顔を背けた。

「フッ……それにユウキは記憶を失っていた。頼る者がいない時にリサに出会ったことで、ユウキの信頼も深まったんじゃないかな」

ユウキはその時のことを思い出していた。確かにあの時は孤独で、リサに頼るしかなかった。それがいつの間にか頼りから、違う気持ちになっていた。

「えっと、まだわからないことが……時空の叫びは時の歯車に反応して起こるの？」

「そうだ。逆に時の歯車が無い場所では発動しない」

「……そうかな？　ユウキ、スリープの時とか、滝壺の洞窟とか、他にも明らかに時の歯車とは関係ない場所でも、時空の叫びが聞こえたよね？」

「そういえばそうだな」

初めての時空の叫びは、お尋ね者のスリープの時、次は滝壺の洞窟で、他にも起きていたが、どう考えても時の歯車とは関係ないは

ずだ。

「そうか……しかし未来では時の歯車に関係しない所で、時空の叫びが発動したことはなかった。もしかしたら、この世界で発動する時空の叫びは、少し性質が違うのかもしれないな」

「未来では発動しない……なるほどな。だから未来世界で水しぶきに触っても発動しなかったのか」

「そっか……」

あの水しぶきは、時の歯車とは関係ない。だから時空の叫びは発動しなかったのだ。

「とにかく、俺達は星の停止について調査を続けた。そしてこの世界にある時の歯車の場所を、未来から時空の叫びで探したのだ」

ユウキは、ジュプトルの話から、時空の叫びで聞いた謎の声は、ジュプトルだと判断した。

「そうやって俺達は、この世界で時の歯車がある場所を突き止めたあと、時の回廊を渡り、未来から過去に向かったのだが……例の事故があり、俺とユウキは離れ離れになったのだ。なぜかわからないが、ユウキはポケモンになり、記憶を失ったのは、その事故が原因だと思う」

ユウキは、自分が未来から来たことや、星の停止を食い止めるために来たことなどを考えていた。

「ユウキ、お前は覚えていないだろうが、お前は俺の親友だった。

離れ離れになったあと、とても心配していたが、元気で良かった。たとえ姿が変わり……記憶を無くしたとしてもお前はお前だ。友達なのは変わらない。ユウキ、また会えて良かった」

ジュプトルは、ユウキ達が未来世界では見たことのない、穏やかな笑みを浮かべていた。

「さて、これからのことだが……俺は時の歯車を集める。お前達はどうする？」

「時の歯車を取ると、その地域の時が止まるが、それは一時的なものだよな？」

「そうだ。時限の塔に時の歯車を納めればもとに戻る」

「なら一緒に行くか。リサも良いか？」

「うんっ！」

リサはユウキの問い掛けに即答した。ユウキはよしっと頷いた。

「なら一緒に行くとしよう。ただ今日はもう遅い。とりあえず今日は休むとしよう」

ユウキとリサは同意し、三匹は色んな想いを抱きながら眠りについた。

しばらくして、リサはふと目が覚めた。横ではユウキとジュプトルが寝息を立てていた。

「もう少し寝ようかな……」

リサはそう思い、目を閉じたが、妙に頭が冴えてしまい、眠りにつけなかった。

「寝れないなぁ……少し夜風に当たってこようかな……」

リサは草のベッドから起き上がり、サメハダ岩の空洞から外にでた。

「気持ちいい風……」

リサはその場に座り込み、今日あったことを考えていた。

「ジュプトルの話しだと……やっぱりヨノワールは敵なのね……それにユウキは……やっぱり未来から来たのね……」

リサはぼんやりとそんなことを考えていると、ジュプトルが階段から上がってきた。

「眠れないのか？」

「まあね。さっきのジュプトルの話しを聞いて、ヨノワールが言っていたこととか、ユウキが未来から来たこととか、なんとなく考えてたよ」

リサとジュプトルがそんな話をしていると、東の空から太陽が昇ってきた。

「朝日……」

「綺麗だね……」

「そうだな」

二匹はしばらくの間、黙って朝日を眺めていた。その沈黙を破ったのはリサだった。

「今まで未来にいたからかな。夜が明けることが、こんなにも新鮮に感じるとは思わなかったよ。太陽が昇り、そして沈んでいく……当たり前だけど、それがとても大切だったんだね」

「俺は暗黒の世界しか知らなかったから……初めて太陽をみた時、衝撃を受けた……そして、だからこそ暗黒の未来を変えなくてはいけないと強く思ったんだ」

そう言い終わると、ジュプトルはそうだと言い、リサの方を向いた。

「リサ、お前に聞きたいことがあったんだ」

「なぁに？」

「あの時、未来でディアルガ達に囲まれ、絶体絶命の状況だったあの時……あの最悪な状況でも、お前は諦めなかった……俺でさえ諦めたというのに……あれはどうしてだ？　どうしてあそこまで、気持ちを強くもてたのだ？」

あの最悪な状況で、まさかリサがあそこまでの気持ちを保てるとはジュプトルは思っていなかった。だからだからこそ、その事をリサに聞きたかったのだ。

リサはうーんと首を傾げたが、すぐに話しはじめた。

「私にもわからないけど……もしかしたら……ううん、きっとユウキがいたからよ」

「ユウキが？」

「これを見て」

リサは自分のトレジャーバッグから遺跡のかけらを取り出し、ジュプトルの前に置いた。

「これは……なにか不思議な模様が描かれているな……初めてみたな……こんな模様は……」

「これは遺跡のかけら。私の宝物で……このかけらの謎を解くことが私の夢なんだけど、私意気地無しでさ……ギルドに弟子入りすることすら出来なかったの……でもそんな時、ユウキに出会ったの」

リサの話を、ジュプトルは黙って聞いていた。

「ユウキはいつも私を励ましてくれた。そして、いつも私を守ってくれて、勇気を与えてくれた。私、ユウキと一緒ならどんなことでも乗り越えられる……いつさかそんな風に思うようになったの。ユウキがいれば、私は頑張れる。だから諦めずに頑張れたんだと思う」

「フッ……そこまで好きなんだな……ユウキが……」

ジュプトルは軽く笑いながら言うと、またたくまにリサの顔が赤くなった。

「えっそ……その……」

「隠すことはないさ。俺がユウキを友達と思うように、お前にはお前の見方があるだけだ」

「……うん」

「あいつは……幸せ者だな……お前がいて」

それを最後に、二匹はまた黙ったまま朝日を眺めていた。

「もう朝だ。そろそろユウキを起こして出発するか」

「そうね」

リサは遺跡のかけらをトレジャーバッグにしまい、サメハダ岩の中に戻った。この時、ジュプトルは複雑な顔を浮かべていた。

「あいつに真実を教えるのは……辛いな」

ジュプトルは、ため息を一つし、サメハダ岩に戻った。

## 第七十一話　夜明けの想い（後書き）

リサ
「ジュプトルに知られちゃった……」

普通気づくでしょ？

ユウキ
「明日から大変だな」

頑張れ（笑）

## 第七十二話　キザキの森（前書き）

第七十二話完成！

ユウキ
「ペース速いな」

調子が良いときにガンガンいくのだ

では第七十二話をどうぞ！

## 第七十二話　キザキの森

次の日、ユウキ達はどこの時の歯車を取りに行くか相談していた。

「さてと、どこから行くかだな」

「とりあえず不思議な地図を見てみよう」

リサはトレジャーバッグから、不思議な地図を取り出して広げた。

「ここからだと、地底の湖が一番近いかな」

「確かに近いが、とりあえずキザキの森にしないか？　あそこならアグノムのような番人はいない」

「どこにあるんだ？」

「ここだ」

ジュプトルは、このトレジャータウンより、遥か東にある森を指した。

「時の歯車を巡って戦ったりすると、騒ぎが大きくなるし、ここから行ったほうが良いな」

「なら決まりだ。キザキの森に行くぞ」

ユウキ達は、遥か東にある森、キザキの森に向けて出発した。

「やっと着いたね」

ユウキ達は、数日かけて、ようやくキザキの森にたどり着くことができた。

「ここだ。キザキの森の入口は……ん？」

この時ジュプトルは、なにか不思議な気配を感じ取った。

「どうした？」

「……前に来た時とは雰囲気が違うような……気のせいか。準備したら行くぞ」

ジュプトルの言葉が気にかかったが、とりあえずユウキとリサは、近くにあったガルーラ像で道具の整理をした後、キザキの森に入っていった。

「深い森だな……」

キザキの森に入ると、沢山の木々が生い茂り、木の葉のせいで少し薄暗かった。

「……」

「ジュプトル？　どうしたの？」

「やっぱりなにかおかしい……そこらじゅうから殺気が満ち溢れている……」

ジュプトルは辺りを警戒しながら言った。だがそれは疑問から確信に変わる。ユウキ達に向かって、ポケモン達が襲ってきた。

「敵か！？」

「みんな、気をつけて！」

ユウキ達の周りには、ラルトスが二匹、ユンゲラーが一匹、ヘルガーが一匹、計四匹いた。

「来るぞ！」

ラルトス達は、ユウキ達に向けて必ず当たる葉っぱ、マジカルリ

ーフを放ってきた。

「リーフブレード！」

「火炎放射！」

ジュプトルは自分の手の葉っぱを剣のように鋭くして、マジカルリーフを切り裂き、残った葉っぱは、リサが火炎放射で焼き尽くした。

「一気に決めるか……リサ、ジュプトル、目を閉じろ！　フラッシュ！」

ユウキはリサとジュプトルにそう指示した後、自分の体からまばゆい光を発生させた。ここに来るまでに覚えたフラッシュだ。その光はラルトス達の目潰しにうまく利用したのだ。

「雷パンチ！」

そして、ユウキは電光石火でラルトス達に接近し、雷パンチをラルトス達の腹部に命中させ、意識を刈り取った。

「あと二匹！」

「記憶を失ってもユウキはユウキか……エナジーボール！」

ジュプトルはユンゲラーに向けて、緑色のエネルギー弾、エナジーボールを放った。それはユンゲラーに向けて一直線だった。だが途中で方向転換し、技の使用者のジュプトルに向かって来た。

「なっ！？」

「アイアンテール！」

ユウキはとっさにアイアンテールで、エナジーボールを弾こうとしたが、エナジーボールは途中で不規則な動きになり、ユウキはアイアンテールで弾くことに失敗し、直撃した。

「ぐっ……どうなってる？」

「そうか、ユンゲラーがサイコキネシスで操っていたのか」

ユンゲラーは、エナジーボールを自分の超能力で操り、ジュプトルに向けて放ったのだ。

「厄介だな……遠距離攻撃は無理か」

「なら接近戦だ！　電光石火！」

「私も！」

ユウキとリサは、ユンゲラーに向かって電光石火で突撃したが、何故かユンゲラーにぶつかる前に、弾き飛ばされてしまった。

「えっ？　えっ？」

「リフレクターか」

そう、ユンゲラーは事前にリフレクターを張っていたのだ。リフレクターは打撃攻撃のダメージを半減する防御技だ。

「これはマズイな。打撃も効果は薄く、遠距離攻撃封じられる……」

「なら一気に遠距離技をすれば、さすがに全ては跳ね返されないんじゃないかな？」

リサの言う通り、いくらエスパータイプのユンゲラーとはいえ、何個も防ぐことは厳しいだろう。ユウキ達はそれを決行しようとしたが、それを阻む者がいた。

「くっ！　守る！」

ヘルガーだった。ヘルガーはユウキに向かって灼熱の炎を放ってきた。ユウキはとっさにそれを、守るで防いだ。

「ユウキ！　火炎放射！」

リサは、ヘルガーに向けて火炎放射を放ったが、何故かヘルガーにダメージは全く無かった。

「あれ？　なんで？」

「特性の貰い火だ。奴には炎タイプの技は通用しない」

貰い火。それは炎タイプの技を受けると、その炎を利用して、自分の炎タイプの技の威力を上げるのだ。

「ジュプトルは草タイプで相性が悪い。しかもリサの炎も吸収される……あいつは俺がやる」

「大丈夫か？」

「任せろ」

わかったとジュプトルは笑みを浮かべながら良い、リサと共にユンゲラーの所に向かって走り出した。

「さて……来い」

ユウキは、ヘルガーに来いと手招きをした。ヘルガーは挑発にのり、ユウキに向かって突進してきた。

「動きが単調だな。雷パンチ！」

ユウキは、突進してくるヘルガーに向けて、雷パンチで攻撃したが、攻撃が当たる前に、ヘルガーの姿が消えた。

「なにっ？」

刹那、ヘルガーはユウキの後ろから火炎放射を放ってきた。

「ぐあぁぁぁぁ！！」

ユウキは灼熱の炎を背中にまともに受け、悲鳴を上げた。

「どうなってる……？」

ユウキには、何故ヘルガーが消えたかわからなかった。ヘルガーはユウキに突進した時に、騙し討ちをしていたのだ。

騙し討ちは相手をうまく騙し、必ず命中させる技。ヘルガーはそれを応用して、本来騙した後体当たりするのを、貰い火でパワーアップした火炎放射で攻撃したのだ。

「ユウキ!?」

「前に集中しろ！　瓦割り！」

ジュプトルは、瓦割りを使ってユンゲラーのリフレクターを突き破った。

「リサ！　一気に決めるぞ！　リーフブレード！」

「うっうん！　切り裂く！」

ジュプトルとリサの攻撃は、ユンゲラーに直撃した。ユンゲラーはその場に倒れ込んだ。

「ユウキ!!」

「ぐっ……」

ユウキは火炎放射のダメージが酷く、まともに返事が出来ずにいた。

「リサ、ユウキにこれを食べさせるんだ」

「うんっ」

ジュプトルは、リサに緑色の木の実、チーゴの実を渡した。チー

ゴの実は火傷にきく木の実だ。

「ユウキ、これ食べて……」

リサは、ユウキにチーゴの実を食べさせた。すると、背中の火傷が少し軽くなった。

「大丈夫？」

「嗚呼……大分楽になった。それよりジュプトルを援護するぞ」

ユウキはジュプトルを見ながら言った。相性が悪いからか、ジュプトルはかなり苦戦していた。

「ジュプトル、大丈夫か？」

「なんとかな」

「なら大丈夫だな。リサ、ジュプトル。やつはあまりスピードがない。少しの間スピードで撹乱してくれ」

「何か策があるのか？」

「まあな」

「相変わらずの策士だな……任せろ」

ジュプトルは電光石火でヘルガーの周りを動き回った。ヘルガーはジュプトルのスピードについていけず、むやみやたらに火炎放射を放っていた。

「……ユウキ、大丈夫？」

「……準備できた」

ユウキは充電をし、ボルテックススタイルになった。そのエネルギーを両手と両足に溜め込んだ。

「初めての試みだが……行くぞ！」

ユウキは一気にヘルガーに近づき、雷パンチをヘルガーの顔面に決めた。

「なっ……？」

「速い……」

そう、そのスピードはリサは、ジュプトルでさえ見切るのが厳しいくらいだった。

「かなりの速さだな……だが、かなり体力を消費するな。次で決める！」

ユウキは残りの雷を右手に溜め込んだ。すると、右手からは雷が漏れ、バチバチと音を鳴らしていた。

「ライジング・ブレイカー！」

ユウキはヘルガーの懐に入り込み、思い切り、ヘルガーの顎目掛けてアッパーをした。ヘルガーの体は上に少し浮き、体制を崩した

ままその場に倒れた。

「よしっ」

「さすがユウキ！」

リサはユウキのもとに駆け寄りながら喜んだ。

「フッ……その頭脳は変わらないな」

ジュプトルは腕を組みながら、はしゃいでいるリサと、疲れたような顔をしているユウキを見ながら、そう呟いた。

「じゃあ早く時の歯車の所に行くか」

「いや、その前にお前の背中の火傷の治療からだ」

「……そうだな」

ジュプトルはチーゴの実をすり潰して、背中の火傷に塗り付けた。

「痛っ……」

「もう終わる……いいぞ」

ジュプトル念のためにユウキの体に包帯を巻いた。

「まだ完治した訳じゃないからな。これからのバトルは無理するなよ」

「……嗚呼。すまないな」

ユウキは少ししかめっつらになりながら、ジュプトルに礼を言った。それを見ながら、リサがクスクス笑っていた。

「もうすぐ奥地だ。気を抜くなよ」

「わかった」

「うんっ」

ジュプトルがそう言ってからしばらくすると、少し開けた場所に出た。

「ここだ……なにっ!?」

ジュプトルは周りの光景を見て驚いた。空の雲の流れが止まり、葉っぱから落ちた雫はその場に停止していた。

「時が……止まっている」

「馬鹿な……」

「でも、私達が未来に行くとき、アグノム達が時の歯車を戻すって言ってたよね?」

そう、時の歯車を取り戻したアグノム達は、あの後時の歯車を戻すと言っていた。なら何故時が止まってるか、ユウキ達にはわからなかった。

「時の歯車があったのはこの先だ。行くぞ」

ユウキ達は更に奥に行くと、目の前には、淡い緑色をした歯車が存在した。

「これは……？」

「時の歯車だ。間違いない」

「でも……時は止まってるよね」

ユウキもリサも周りを見てみたが、やはりどう見ても時は止まっていた。

「風も吹かないし、木の葉も固まってる……でもどうして？」

「……」

ジュプトルは無言のまま、時の歯車を取った。すると時の歯車があった場所から発生していた淡い緑色の光が消えた。

「ジュプトル！？」

「既にここの時は止まっている。今更時の歯車を取ったところで変わりはない」

まあ……と少し複雑そうな顔をしながら、リサは小首を傾げた。

「それに……気になることが……」

「気になること？」

「とにかく、ここは引き上げよう」

ジュプトルは時の歯車を、自分のトレジャーバッグにしまいながら、リサの方を向いた。

「リサ、頼みがある」

「なに？」

「サメハダ岩に戻る前に、トレジャータウンで少し情報を得てきて欲しい」

「トレジャータウンで？」

「嗚呼。今この世界でなにが起きてるかを探ってきて欲しい」

リサは、わかったと言いながら首を縦に振った。

「みんなはお前が未来に行ったと思っているはずだ。だから……」

「見つからないようにね。わかってるよ」

「頼むぞ」

目的を果たしたユウキ達は、トレジャータウンに帰るために、キザキの森を後にした。

## 第七十二話　キザキの森（後書き）

ジュプトル
「なにが起きているのだ？」

さあ？

ユウキ
「まあ、なにか起きているのは確かだな」

それは次回わかるかもよ？

ジュプトル
「曖昧だな」

## 第七十三話　ギルドの仲間達（前書き）

第七十三話完成！

ユウキ
「この世界でなにが起きているんだ？」

それは今回の話で。ちなみに今回の話はかなり長いです

ユウキ
「途中で切れば良かったんじゃないか？」

区切りが良いとこがなくて……とにかく第七十三話をどうぞ！

# 第七十三話　ギルドの仲間達

ユウキ達は、キザキの森からサメハダ岩から戻り、情報収集に行ったリサの帰りを待っていた。

「ジュプトル、キザキの森の異常……心当たりがあるのか？」

サメハダ岩の空洞の壁に寄り掛かりながら、草のベッドに座っているジュプトルに話し掛けた。

「まだ推測の域を出ていない……リサの情報収集しだいだな……」

そんな話をしていると、リサがトレジャータウンから帰ってきた。その表情は少し暗かった。

「ただいま」

「どうだった？」

帰って来るなり、ジュプトルはリサに成果を聞いてきた。

「それが……あまり良くない感じみたい……」

サメハダ岩の入口から、自分のベッドに座り込み、手に入れた情報を簡潔に話し始めた。

「私達が未来に行った後、アグノム達は時の歯車を戻したらしいの。それで、またもとに戻るとみんな安心したみたいだけど……でも時は止まったまま。それどころか、時が止まる場所が場所がどんどん

増えてきているみたいなの……」

「本当か？」

さすがのユウキも、その事実に驚いていた。だがジュプトルの頭の中で、自分の中の推測が確信に変わってきた。

「うん。みんなも、なんでそうなるかわからなくて、うろたえてたよ。ジュプトル、なにかわかる？」

「……時が止まる地域が増える……その原因はただ一つ。時限の塔が壊れ始めたのだ」

「時限の塔が……壊れ始めた？」

時限の塔。前に聞いたことのあるワードだが、なぜその時限の塔が関係するのか？　リサの頭にはそんなことが過ぎった。

「そうだ。時間を司る時限の塔が壊れ始めることによって、各地の時も破壊され、星の停止に向かって世界が、急速に動きはじめたのだ」

「そんな！？　なら急がないと！」

「そうだ。早くしないと取り返しのつかないことになる。時の破壊を止める方法はただ一つ。時の歯車を集め、ディアルガのいる、時限の塔に、時の歯車を納めることだ」

ディアルガという名に、未来世界で出会った、狂気に満ちた闇のディアルガを思い出し、ユウキは背中に冷や汗が流れた。

「だが問題がある。時限の塔は、幻の大地と呼ばれる場所にある。だが……そこはその名の通り、どこにあるのか全くわからないんだ」

「でも……時間がないだろ？」

ジュプトルは、その通りだと頷き、話を続けた。

「だから手分けしよう。俺は時の歯車を集める。その間に、お前達は幻の大地を探してくれ」

「わかった」

「任せて」

ユウキもリサも、ジュプトルの提案を引き受けた。ジュプトルはよしっと頷いた。

「幻の大地はこの世界のどこかにあるはずだが……残念ながら手がかりはない。まだ誰にも発見されてないことを考えると、かなり遠くにあると考えた方がいい。海の向こうに渡る手段も考えておくべきだろう」

「海の向こう……」

「情報がなくてすまないが……頼むぞ」

ジュプトルはそう言い残し、時の歯車を集めに、サメハダ岩を後にした。

「さてと、私達も探しに行こう。幻の大地を！」

リサはそう意気込んだが、ここで重要なことに気づいた。どこを探せばいいか検討がつかなかったのだ。

「……」

リサはどうすれば良いかわからず、ただ黙るしかできなかった。

「海を渡ることを考えた方が良いと言っていたからな……とりあえずそれから考えるか」

「そうね」

とりあえず、ユウキ達は海を渡る方法を考えていたが、なぜか二匹は浜辺にきていた。

「なんとなく浜辺に来てみたけど……」

海に来たのは良いが、やはり海を渡る手段を思い付くことは出来なかった。

「やっぱり海を渡る手段なんて……思い付かないよ」

「そうだな……」

心の中では、リサは不安だった。早く幻の大地を探さないと、時の停止が起きてしまう。でも情報がない。なら私達はどうすればいいの？　そんなことを自問自答し続けていた。

「一体どうすればいいのかな……」

八方塞がりだが、ユウキにはそれをなんとかする方法が、一つだけ思い付いていた。

「リサ」

「んっ？　なぁに？」

「……プクリンのギルドに行くぞ」

そう、ユウキの思い付いた方法とは、ギルドの仲間達に協力を要請することだったのだ。

「ギルドに？　どうして？　私達、いきなり消えたことになってるのよ？　みんな凄い心配してると思うし……私も会いたいけど、でも今まで未来で見てきたこと……ジュプトルのことや、ヨノワールのこと……そしてユウキの過去のことを、ギルドのみんなは信じてくれるかな？」

「……さあな」

真実をみんなが信用するかなんて、ユウキにはわからなかった。でも、それでもみんなの力が必要だった。

「みんなから見たら、ジュプトルは悪者で、ヨノワールは凄い良いポケモンだから……多分信じてくれないかも……」

「確かにな。だが、あいつらの力が必要だ。そうじゃないと、時の停止に間に合わない」

「みんなの……力……」

リサには、まだギルドのみんなが信用したとは信じきれなかった。でも、自分達二匹より、仲間がいた方が良いに決まっている。リサはそう判断した。

「そうよね……みんなの力が必要よね……早くしないと星の停止に間に合わないもんね……」

リサは少し、ぼんやりと海を見ながら、自分の考えをまとめていた。その答えは、ユウキの想像通りだった。

「……わかった。プクリンのギルドに行こう！　本当のことを話そう！　みんな驚くと思うけど……きっとわかってくれるよ！　帰ろう！」

「嗚呼」

ユウキ達は、プクリンのギルドに向けて駆け出した。

プクリンのギルドに着くころ、既に空は黄金色に染まってきていた。いつのまにか、夕方になっていた。

「久しぶりだな……」

「そうね。でも……」

ユウキ達は未来に行ったことになっている。それを考えると、いきなり“ただいま”と言うのも、なんか少しおかしな感じがした。

「恥ずかしがってる場合じゃないね。私が見張り穴に乗るよ」

見張り穴に乗ると、ユウキ達にとって懐かしいフレーズが聞こえてきた。

「ポケモン発見！　ポケモン発見！」

「誰の足型？　誰の足型？」

「足型は……この……足型は……」

いつもなら、ここで見張り番のディグダがポケモンの名前を言う。だがディグダは、どこか動揺しているようだった。

「どうしたディグダ！　穴掘ってどこに行く！？」

「この……足型は……リサさんなんです！！」

『なんだって～～！！』

案の定の反応に、ユウキの顔には、少し笑みがこぼれた。

「やっぱりリサさんだ！　それにユウキさんも！」

「ディグダ！」

「……久しぶりだな」

ディグダがユウキ達の前に出て喜んでいると、急に地響きが起こりはじめた。

「なっなに？」

「……団体さんのお出ましだな」

ユウキがそう言った刹那、目の前の門が開き、ギルドの弟子達が、続々と走ってきた。

「ヘイヘイ！　本当だ！」

「ユウキ達ですわー！」

「お前達、生きていたんだなぁ！」

みんな、ユウキ達の帰りを、心から喜んだ。やはりこの雰囲気は心地良い……ユウキは内心そう感じていた。

「みんな……ただいま……」

リサの声は少し震えていた。みんなに会えてやはり嬉しいみたいだ。そんな所に、ペラップと、プクリン親方がやって来た。

「おかえり♪　ユウキ、リサ」

「さあさあ、こんな所で話すのもなんだし、中にお入り」

ユウキ達は、ペラップに言われた通り、ギルドの中に入って行った。

ユウキは、ギルドに入るやいなや、今までであった真実を、ギルドの弟子達に話した。

「ええっ!?　なんだって!?　ちょっと待て、少し整理させてくれ」

「……嗚呼」

ペラップは一匹でヒートアップし、今までに聞いたことを整理し始めた。

「まず、ジュプトルは良いやつで、世界を救うために行動していた。逆にヨノワールさんは悪者で、極悪非道な悪者……ユウキは実はジュプトルの仲間で……ヨノワールさんは、ユウキとジュプトルの命を狙って、未来に連れていったと。そしてお前達はヨノワールさんから逃げ出し、未来からなんとか帰ってきたと……そしてこの世界は、もうじき星の停止が起こる。だからそれを止めるために、ジュプトルは再び時の歯車を集め、お前達は幻の大地という場所を探していると。これで合ってるか？」

「嗚呼」

ペラップの長いまとめを聞き、ユウキは首を縦に振った。

「……ハハッ……ハハハハハ！！」

しばらく黙っていたかと思ったら、急にペラップは笑いはじめた。

「ユウキ、リサ。お前達はきっと悪い夢でも見たのだろう」

「えっ？」

「自分の部屋で休んできなさい」

どうやら、ペラップは全く信用していないようだ。

「私達、嘘なんか言ってないよ！」

「わかってるわかってる！　大分お疲れのようだけど、一晩寝れば治るから♪」

「本当だって！」

「しつこい！」

ついには、ペラップは怒鳴り始めてしまった。そこまでユウキ達の話を信じるつもりはないようだ。

「お前達の話のどこが本当だと言うのだ！？　幻の大地なんて場所、情報屋の私ですら聞いたことないよ！　だいたい、あの親切なヨノワールさんがそんなことするわけないだろう！」

ペラップの中では、ヨノワールの存在は絶対的だった。それが、ユウキ達の話を聞かない一番の理由だった。

「ヨノワールのことは、私だって信じられなかったし、ショックだったよ……でも！」

「うるさいうるさい！　とにかく、ヨノワールさんか悪者なんて、信じられるか！」

「……いい加減にしろよ？」

それまで黙って聞いていたユウキが、説明を終えてから始めて口を開いた。

「……リサ、行こう」

「ユウキ！？」

「こんなやつ、信じてもらう方が間違いだった」

「なにっ！？」

「だってそうだろ？　俺達の話を完璧に信じろというのも無理はある。だが、そこまで頭からけなされる筋合いはどこにもない」

ユウキは淡々と、ペラップに言っていた。ペラップは更にヒートアップしていった。

「全く、ギルドの情報屋様はその程度だったとはな……幻滅だ」

ユウキは、話を信じてもらえなかったことで怒っているわけではなかった。むしろ、信じてもらう方が困難だ。だがここまで頭から否定されるとは思っていなかった。ユウキの中で、ペラップの存在は、ただ邪魔な存在になりつつあった。

「お前達の話のどこを信じろと言うのだ！？」

「……あっしは信じるでゲス」

そう言ったのはビッパ。まさか賛同者が出るとは思っていなかったユウキは、かなり驚いた。

「ビッパ！？　お前、こんな根も葉も無い話を信じるのか！？」

真っ先にペラップはビッパに反論した。ユウキは、この時程ペラップを殴りたくなったことは無かった。

「それに、ヨノワールさんは悪者だって言いたいのかい！？」

「それを言われるとあっしも辛いでゲスが……でもそれ以上に、ユウキはリサが大切なんでゲス。だからあっしは……ユウキ達を信じるでゲス！」

「なんと～！？」

「ビッパ！」

初めて賛同者が出たことに、リサはとても喜んでいた。それに続いて、他の弟子達も、ユウキ達の話を信じていった。

「みんな……ありがとう……」

「まとまったみたいだね！」

今まで黙って話を聞いていたプクリンが、初めて言葉を発した。

『えっ！？』

「みんな友達を信じてくれて良かった良かった♪　じゃあ早速幻の大地を探しに……」

「いや親方。まだペラップが納得してないんじゃないか？」

ドゴームがそう言うのも無理はない。今だにペラップは、あんぐりと口を開けたままだ。

「どうして？」

「まだペラップが納得してないんじゃないか？」

ペラップが納得しないかぎり、全員が納得したことにはならない。ユウキは納得してもらう気はさらさらなかった。

「そんなこと？　ペラップなら心配ないよ？　だってペラップだって納得いってるもんね？」

『えっ？』

「ペラップだって本当はリサ達を信じてたもんね♪　ねーペラップ？」

みんなの注目が、一斉にペラップに集まった。当の本人は、後ろを向き、怪しい笑みを浮かべていた。

「フフッ……フハハハハハハハ！！」

突然大声で笑いだしたペラップを、みんなは、ペラップを変な目で見ていた。

「さすが親方様……仕方ない。私は最初からユウキ達を信じていたのさ」

『ハアァァ！？』

まさかの手の平を返したペラップに、弟子達は驚きを隠せず、ユウキに至っては、ペラップを殴りたくて仕方なかった。

「ただ、私が最初に信じると言っちゃうと、みんなそれについてきちゃうからな。だから、あえて私は、お前達の友情を試したかったのだ。でも私は確信していたよ。きっとみんなも……仲間を信じるだろうと♪　ハハッ！　ハハハハハ！！」

誰から見ても、ペラップはもうやけくそ状態になっていた。しかも、仲間を信じると言った時に、みんな“も”と言ったことに、ユウキは違和感と、軽い怒りを覚えた。

（……もうこの鳥とは……あまり仲良くしたくない……）

ユウキは内心そう思っていた。

「ユウキ、リサ。僕は信じるよ。なんたってギルドの仲間だからね♪　みんなも聞いて！　今いろんな場所で時が止まり始めている。そしてユウキ達の話で、僕達の世界に危機が迫っているのはわかった。であれば、なんとかしなくちゃね♪　だからここは、プクリンのギルドの名にかけて、幻の大地を発見するよ！」

『おぉー！！』

「ペラップ！」

「はっはい！」

半分放心状態のペラップは、急にプクリンに号令を指示され、思わず飛び上がってしまった。

「みんな！　今から全ての仕事を幻の大地発見にシフトする！　まか、この世界の異常事態をみんなに伝えなければならない。みんな

頑張るよ！」

ここで、ビッパとディグダはトレジャータウン、キマワリとヘイガニは、アグノム達に事情を知らせるの事を担当にした。

「では他のみんなは幻の大地の探索を頼む」

「みんなで幻の大地を見つけるよ！　たあぁぁぁぁ！！」

『おぉーー！！』

弟子達は、みんな意気込んでいた。それぞれ他愛ない会話をしていると、プクリンが話し掛けてきた。

「幻の大地については情報がないんだ。でもコータス長老なら……」

「コータス長老？」

コータス長老を知らないユウキとリサは、プクリンにおうむ返しで問い掛けた。

「トレジャータウンに住んでいる物知りなおじいさんだよ。温泉が大好きでいつもそこにいるから、温泉に行けば会えるよ♪」

「あっ思い出したよ」

以前リサ達は、初めての探検、滝壺の洞窟の探検で、温泉に飛ばされたときに、コータス長老に会っていることを、リサは思い出した。

「あのじいさんか」

どうやらユウキも思い出したようだ。

「亀の甲より年の功っていうし、コータス長老に聞きに行ってみなよ♪」

とりあえずユウキ達の方針は決まったが、夜も遅かったので、みんなと食堂でご飯を食べ、久しぶりの自分達の部屋で、暖かい床についた。

## 第七十三話　ギルドの仲間達（後書き）

ユウキ
「……」

リサ
「どうしたの？」

ユウキ
「なんでもない」

いや～今回は少し険悪な雰囲気でしたね

ユウキ
「……」

## 第七十四話　資格（前書き）

第七十四話完成！

ユウキ
「ずいぶん空いたな」

ちょっと……ね

ユウキ
「言い訳するな」

……では第七十四話をどうぞ！

# 第七十四話　資格

「起きろー！！　朝だぞー！！」

ユウキとリサにとっては、久しぶりのモーニングコール。二匹はそれで一発で、耳の痛みと共に目を覚ました。

「耳がぁ……」

「この起こされ方……久しぶりだな……」

フラフラしながらも、二匹は朝の朝礼へと向かった。

「えー昨日言った通り、各自の役割を覚えているな？　今日はその通りに動いてくれ。いくよ！　みんな！」

『おぉぉー！！』

弟子達は、幻の大地の調査や、他のポケモンに真実を伝える者など、それぞれの仕事へと向かって行った。

「さて、私達は温泉に行って、コータス長老に話を聞きに行こう」

「……またあの激流に呑まれるのか」

ユウキ達は、温泉への行き方は滝壺の洞窟の奥地で、あの激流に呑まれる以外の方法を知らない。またそれをしなくちゃならないと考えると、気が滅入った。

「お前達、温泉の行き方を教えてやろう」

すぐ近くにいたペラップが、ユウキ達を呼んだ。

「ここを行って……ここを通れば行けるぞ」

「わかった。ありがとうペラップ」

「気をつけてな」

そう言い残し、ペラップはその場から去って行った。

「じゃあ行こうっ」

「嗚呼」

ユウキとリサは、ペラップに教えてもらった道のりで、温泉へと向かって行った。

温泉に着くと、数匹のポケモンが温泉を楽しんでいた。その中、一匹だけ岩盤浴を楽しんでいた。彼がコータス長老だ。

「おや、おまえさんたち、久しぶりじゃな。疲れを癒しに来たのか？」

「いや、コータス長老に聞きたいことがある」

「ワシに聞きたいこと？　ではこの場でゆっくりと聞くことにしよう」

よっこらせと言いながら、コータスはその場に座り込み、それにつれて、ユウキとリサも手頃な岩に、腰をかけた。

「では聞こうか」

ユウキは、幻の大地についてコータスに聞いた。

「幻の大地のう……それなら聞いたことあるぞ」

「本当か？」

「うむ。幻の大地は、まさに伝説の場所。もはや言い伝えでしかないのだが……」

「それでかまわない」

小さな情報でも欲しかったユウキ達は、コータスに更に言葉を続けるように言った。

「わかった。では言うぞ。幻の大地は海の向こうの……隠された場所にあるといわれている」

「隠された……場所？」

「そうじゃ。幻の大地には選ばれた者しか行けん。そこに行くには、ある資格が必要なのじゃ」

資格との言葉に、二匹は首を傾げた。その資格とやらに、二匹共心当たりが無かったのだ。

「資格？　それってなに？」

「うむ、それは……」

リサはごくりと喉を鳴らした。しかしいくら待っても、コータスの口から、その続きが出てこなかった。

「……？」

「……あれ？　あれれ？」

しばらく黙った後、コータスはしれっとした顔になり、

「すまん。忘れた」

「……えっ？　えぇえええ！！」

まさかの発言に、リサは大声を上げてしまい、ユウキに至っては、口をあんぐりと開けてしまっていた。

「なんとか思い出して！　大事なことなの！」

「そう急かされても……」

しばらく考えた後、コータスは、まっすぐユウキ達を見ながら話しはじめた。

「そうじゃ！　証じゃ！　たしかなんらかの証が必要だったような……」

「証か……長老、その証とはなんだ？」

それはと言いながらも、またしてもコータスは黙り込んでしまった。

「……すまん。また忘れた」

「……はっ？」

「また～～！？」

また忘れられてしまうとは思っていなく、リサはまたしても大声を出してしまった。

「すまんのう……」

「……そっかぁ。他になにか知ってるの？」

「いや、それだけじゃ。すまん。せめて証がなんだったか思い出したら知らせるからの」

「……わかった。仕方ない、戻るか」

「……そうだね。ありがとうコータス長老」

あまり良い情報が手に入らなかったユウキ達は、重い足取りで、ギルドに戻っていった。

ユウキ達がギルドに帰って来ると、既に他の弟子達は帰ってきていた。

「帰ったか。どうだった？」

「それが……」

コータスに聞いたこと……と言っても、あまり良い情報では無かったが、とりあえず話さなくちゃと、リサはペラップに報告した。

「うーん……コータス長老もあまり知らなかった訳か……残念」

「そんなことないよ。証が必要とわかっただけでも収穫だよ♪」

「……そうだな」

「とりあえず今日は休んで、明日また頑張ろ♪」

明日に備えて、弟子達は早めに食事をし、各自の部屋へと戻っていった。

「はぁ……なかなか思うように進まないね……コータス長老から話を聞いた時はいける気がしたのになぁ……」

「まあ焦っても仕方ないさ」

「そうだね……」

そう言いながら、リサは部屋の窓から外を見た。その日は少し雲が出ていて、あまり星が見えなかった。

「……今頃ジュプトルはどうしてるかな……もう時の歯車をだいぶ集めたのかな……私達も急がなくちゃいけないのにね」

「……そうだな」

「でも、ユウキも言った通り、焦っても仕方ないよね。今日はもう寝よう」

「そうだな。おやすみ」

迫り来る時の崩壊に不安を抱きながらも、明日の事を考え、二匹は眠りについた。

次の日、未来から帰ってきてから二度目のモーニングコールを受け、ユウキ達は眠りから覚めた。やはり慣れるものじゃないな、と思いながら、ユウキ達は朝礼に向かった。

「えーという訳で、幻の大地については、依然わからないことばかりだが、でも私達は諦めないよ！　今日も頑張って調べよう！　みんないくよ！」

『おぉーー！！』

号令をし、弟子達は今日も、それぞれの仕事へと向かって行った。

「ユウキ。今日はどこを調べる？」

「そうだな……コータスには話を聞いたしな……他に当てもないしな」

二匹が悩んでいると、不意にディグダの声が響いた。どうやら来客のようだ。

「足型はコータス長老！　足型はコータス長老！」

「……コータス？」

何故コータスが来たのか？　ユウキとリサは首を傾げた。それから間もなくして、コータスはギルドの地下二階に下りてきた。

「はぁはぁ……やっと会えたわい。このギルドに来るのは……年寄りにはこたえるわい」

「で、どうかしたのか？　もしかしてなにか思い出したのか？」

ユウキには、コータスが温泉から、ギルドまで来る理由がそれしか浮かばなかった。

「そうじゃ。といっても……ほんの些細なことじゃが……」

「構わない。教えてくれ」

そうかと言いながら、コータスは話しはじめた。

「昨日幻の大地に行くには、証が必要と言ったな？　その証について、少し思い出したのじゃよ。証には……ある模様が描かれていたんじゃ」

「模様……かぁ。それってどんな模様？」

「うーん……なんといったらいいか……とにかく不思議、あまり見たことの無いような模様じゃ」

あまりにも大雑把なヒントに、弟子達は頭を抱えていた。

（見たことの無い模様……ん？　そういえば……リサが持っていたあれには……）

ユウキには、コータスの言っていたある模様について、一つだけ心当たりがあった。

「リサ、遺跡のかけらだ」

「えっ？　あっ！　あの模様か！」

リサは急いでトレジャーバッグから、遺跡のかけらを取りだし、コータスの前に置いた。

「これを見て」

遺跡のかけらを、コータスはジーッと見つめた後、信じられないような物を見たような顔になった。

「これじゃ！　まさにこのような模様じゃ！」

『えぇぇーー！！』

まさかリサが持っているとは誰も思っていなかったからだろう、その場にいる全員が声を上げた。

「おぬし、これをどこで……」

「どこって言われても……偶然拾っただけだけど……」

「でも凄いですわ！　リサがこれを持ってるということは、幻の大地に行くための資格があるってことかしら？」

ユウキ達の後ろで、キマワリが一匹でキャーキャー騒いでいた。

「それはわからん。そうとも言えるし、そうでないとも言える。こ

のかけらが関わっているとも限らんしの」

「でも！　この模様が幻の大地に関係しているのは間違いないよね？　それだけで十分だよ♪」

「まあ……」

一人ニコニコしながら言うプクリンに、コータスは言葉を濁した。

「っておまえさんたち、幻の大地は単なる言い伝えじゃぞ？　まさか幻の大地に本気で行くつもりか？」

「うん♪」

偽りのない、まっすぐな瞳で、プクリンは頷いた。

「なんとっ！　そりゃビックリじゃ！」

「ペラップ！　この模様は……見たことあるよね？」

『えっ？』

まさかのプクリンの発言に、弟子達はその場で固まった。

## 第七十四話　資格（後書き）

ユウキ
「半端だな……」

リサ
「確かに……」

気にしない気にしない♪

## 第七十五話　手紙（前書き）

第七十五話完成！

ユウキ

「今回プクリンの発言の意味がわかるのか？」

さあ？　では第七十五話をどうぞ！

# 第七十五話　手紙

「はい……ここから北西に行った入り江の……磯の洞窟に……」

遺跡のかけらの模様を知っているだけでも、リサには驚きなのに、まさか場所まで知っているとは夢にも思っていなかった。

「ですが！　あの場所は！」

「うん。わかってる。あそこには、とても手強いポケモンがいるよね」

手強いポケモン。その発言に、弟子達はザワザワと話しはじめた。

「みんな、ちょっと聞いて。以前、磯の洞窟という場所の奥深くで、これと同じ模様を見た。だからそこに行けば、多分なにかわかる。でも、そこには手強いポケモンが潜んでいるんだ」

最初は、手強いポケモンというのに驚いたが、ギルドの弟子達は、そんなことに臆する者はいなかった。

「ヘイヘイ！　ビビってなんかられないぜ！」

「ワシ達は探検隊なんだぜ！」

ヘイガニ、ドゴームの言葉で、弟子達の思いは一つになった。

「みんなありがとう♪　でもあそこは本当に手強いから、今日は準備を整えて、あした出発しよう！」

『おぉぉーー！！』

弟子達は、明日の探検について話しをしたり、意気込みを話したりし始めた。

「ほっほっほっ。若いものは良いのう。頑張って幻の大地を見つけるんじゃぞ」

そう言い残し、コータスはギルドから去って行った。

「じゃあみんな。今日は準備してきてね！　それじゃあ解散！」

『おぉぉーー！！』

弟子達は、それぞれの仕事に戻ったり、明日の準備をしにトレジャータウンへと向かった。

「ペラップ。明日はギルドでお留守番ね」

「親方様！　お言葉ですが、私にも行かせてください！」

「ダメ。もうあんな危険な目にあわせられない」

二匹の会話から、昔ペラップが、磯の洞窟で危険な事にあったと、ユウキは容易に考えついた。

「だからこそ行きたいんです！」

「……わかった」

ペラップの意気込みに、仕方なく、プクリンは首を縦に振った。

「そのかわり、明日はライトニングと行動すること。ユウキとリサに、模様の場所の案内をしなくちゃならないしね。わかった？」

「あっありがとうございます！」

ペラップは、満面の笑みで頷いた。一方ユウキは、正直な話、ペラップと行動したくないと思っていた。

「あと、僕はちょっと思うところがあるから、今から出掛けてくる。留守は頼むよ」

「かしこまりました」

そう言うと、プクリンは親方部屋に入っていった。それから間もなく、トレジャーバッグを肩に下げ、ギルドから出て行った。

「というわけで、明日は私と行動してもらうよ！　磯の洞窟は強敵が多い。油断しないように。あと、私の足を引っ張るんじゃないよ！」

「……わかったよ」

（……お前が足引っ張りそうだな……）

ペラップの、半ば強引な申し出に、リサは少したじろぎ、ユウキは内心、心の中で文句を言った。

「ユウキ、私達も準備しに行こうね」

「そうだな」

ユウキ達も、準備をしに、トレジャータウンへと向かって行った。

一方ペラップは、その場に残り、あることを考えていた。

（もう……あんな情けないことにならないようにしなければ……あいつらの事を、きちんと模様の場所に送らなくちゃな……）

ペラップは、未来から帰ってきた後の、あのユウキとの喧嘩以来、ユウキとギクシャクしているのは自覚していた。ユウキやリサにどう思われていても、大切な弟子だ。絶対に守らなくては……ペラップは……そう誓った。

その頃、コータスは、ユウキとリサがトレジャータウンに行こうとしている時に、ギルドを出てすぐにある十字路にいた。

「ほっほっほっ。やはり若いものは良いのう。ワシももう少し若ければ、幻の大地に挑戦したのにのう」

その呟きを、聞いていたポケモン達がいた。そのポケモン達は、コータスの前に出てきた。

「なんじゃおぬし達は！？」

「面白いことを言っていたな。少し聞かせて貰おうか」

そのポケモン達のリーダー格が、コータスを海岸に連れていった。その子分格のポケモン達も、その後について行った。

「ありがとうございま～す♪」

ユウキとリサは、久しぶりにカクレオンのお店に来ていた。未来から無事に帰ってきたからか、二匹はトレジャータウンのポケモン達に、無事で良かったと喜ばれたり、未来はどうだったかなど、いろんなことを聞かれた。

「さて、準備も出来たし、ギルドに戻るか」

「あっユウキ。もしかしたら、サメハダ岩にジュプトルが戻ってるかもよ？」

リサの提案に、そうだなとユウキは頷いた。

「じゃあ行ってみるか」

ジュプトルがいるかもという可能性を考え、二匹はサメハダ岩へと向かった。

「ジュプトルいるかな……」

「入るか……」

二匹は、ジュプトルがいるという期待感や、もしいたら、ジュプトル任されたのに、まだ幻の大地は見つかっていないということを言うという、罪悪感を胸に、階段を下りていった。

「……いないね」

ジュプトルは戻っていなかった。ユウキも中に入り、確認したが、やはりジュプトルはいなかったが、そのかわりに、紙切れを一枚見つけた。

「これは……手紙か？」

ユウキは手紙を読もうとしたが、その手紙は足形文字という、ポケモン達が使う文字だった。もともと人間のユウキに、それを解読することは困難だった。

「……リサ、頼む」

「足形文字？　確かにユウキには読めないね……うん、任せて」

ユウキは、リサの前に手紙を置いた。えーとと言いながら、リサは手紙の贈り主を確認した。

「これ……ジュプトルからの手紙だ。読んでみるね……」

えーとと言いながら、リサは、ジュプトルからの手紙を読みはじめた。

『ユウキ、リサ。元気か？　幻の大地の探索はどうだ？　俺の方は順調だ。時の歯車を三つ集めた。五つ集めたら、お前達と合流するつもりだ。こっちはアグノム達も理解しているようで、とてもやりやすい。お前達ギルドの仲間が、知らせてくれたようだな。感謝している。他にも俺達を信用しているポケモンが増えてきているようで、とても嬉しい。ただ、それでも、トレジャータウンや、ギルドには近づかないようにしている。この世界のポケモン達に、完全に信用されてるかどうか……わからないというのもあるが、ヨノワールがまた未来からやってくることも、十分考えられるからだ』

「えっ！？」

「驚くこともないだろ。現に奴は俺達を仕留め損ねている。また未来から来てもおかしくはない」

そっかと頷きながら、リサは手紙の続きを読みはじめた。

『ヨノワールが来ることを考えると、こちらも目立った行動はしない方がいいだろう。だからトレジャータウンや、ギルドには出来るだけ近づかないが……このサメハダ岩や、海岸には来ることがあると思う。もし出会うことがあれば……そこで情報を交換しよう。じゃあな。お互い頑張ろう。星の停止を……食い止めるために。

ジュプトル　』

手紙を読み終えたリサは、その場で黙り込んでいた。

「……そっか。ジュプトルも頑張っているみたいね」

「負けてられないな」

「うんっ」

微笑みながら、リサは頷いた。

「この手紙によると、ジュプトルはここか、海岸に来るかもって言ってるから、海岸に行けば、もしかしたらジュプトルに会えるかも。ギルドに帰る前に、海岸に寄ってみようよ」

「そうだな」

ユウキとリサは、ジュプトルがいる可能性を考え、海岸へと向か

って行った。

## 第七十五話　手紙（後書き）

リサ
「ジュプトル頑張っているね」

ユウキ
「負けられないな」

がんばれ～

ユウキ
「作者しだいだろ」

そりゃそうか（笑）

## 第七十六話　ラプラス（前書き）

第七十六話完成！

ユウキ
「いつになったら幻の大地に行くんだ？」

焦らない焦らない。では第七十六話をどうぞ！

# 第七十六話　ラプラス

「海岸に来たけど……ジュプトルいないね」

ジュプトルがいる可能性を考え、海岸に来たユウキとリサだったが、そこにジュプトルの姿は無かった。

「そういえば……今日はクラブ達がいないや……夕方になると、いつもここで泡を吹いてるのに。私、あの光景が好きなんだけどな……しょうがないよね」

「そうだな……」

リサの話を聞きながら、ユウキは、ぼーっと海を眺めていた。

「どうしたの？」

「いや……夕日を眺めてた」

「私もここの夕日好きなんだ」

しばらく二匹は、静かに西に沈もうとする太陽を眺めていた。

「まあね。でも……この遺跡のかけらの秘密を解くのが、私の夢だったけど……まさか幻の大地に関係していたとはね……」

「まだ確定した訳じゃないだろ？」

そうね、とリサは苦笑しながらも、話を続けた。

「そういえば、ここってズバット達に、遺跡のかけらを奪われたところね」

しみじみしながらリサが言う。二匹が出会った時に、ドガースとズバットに、遺跡のかけらを奪われた。その時に比べると、リサは心身共に成長したな、とユウキは思った。

「あの時……取り返しに行けない私に……勇気をくれたのがユウキだった。思えばこのかけらを取り返すことが……私達、ライトニングの始まりだったのよね。そして今度は、このかけらがきっかけで、幻の大地に行こうとしている。考えてみると不思議よね」

確かにそうだ。始まり、そして、もしかしたら終わりまで、このかけらが関係しているかもしれないのだ。ユウキはそう考えると、自分とリサが出会ったのは、なにかしらの宿命なのかもしれないと思った。

「この夕日も……海も……空も……星の停止が来たら失われてしまう……そうしないためにも……早く幻の大地を見つけなくちゃ」

「そうだな……」

その言葉を最後に、二匹は、黙ったまま、またしばらく夕日を眺めていた。

しばらく眺めていると、リサがその沈黙を破った。

「私ね……ユウキに……ユウキに感謝してるの……」

「感謝？」

「うん……その……えっと……」

口の中でもごもご何か言っていたが、ユウキの所まで届かなかった。

「リサ？」

「えっと――あっユウキ！　あれ見て！」

何か言いたそうだったリサは、とっさに海の方を見ながら言った。

「……？　なんだあれは？」

ユウキの見る先には、何かの影が、夕日を横切るように泳いでいる姿が見えた。かなりの距離があったので、何なのかは把握出来なかった。

「ポケモン……かな？」

「さあな……所で、なにを言おうとしたんだ？」

謎の生き物を見ている時は、至って普通だったリサの顔が、みるみると赤くなった。

「なっ何でもないよ！　それよりそろそろギルドに戻ろう！」

顔を赤くしたまま、リサは早足で、ギルドに戻る道を戻っていった。

「おっおい」

急いでユウキは、リサの後を追い掛けて行った。

（私……自分でもだいぶ強くなったと思ってたけど……まだ弱かったみたい……）

少ししょんぼりしながら、後を追い掛けて来るユウキを見ながら、そう思った。

二匹の海岸の様子を、影から見ていたポケモン達がいたが、二匹には気づくよしもなかった……

その日の真夜中、プクリンはある入り江に来ていた。ここで、あるポケモンと落ち合うことになっているのだ。

「あっ来た来た♪」

プクリンの前から、一匹のポケモンが泳いできた。青い体に、丸い可愛らしい耳、一方の角があり、首は少し長い。背中は、甲羅に似たものがあり、そこには何個も突起があった。

「久しぶり！　ラプラス！」

「ご無沙汰してます。プクリンさん。本当に久しぶりですね」

ラプラスと呼ばれたそのポケモンは、嬉しそうにそう言った。

「ペラップさんは元気ですか？」

不意にプクリンに質問するラプラス。どうやらペラップのことも知っているようだ。

「元気元気♪」

「それは良かった。あと……あの時、約束して頂いたこと……本当に感謝しています」

「たいしたことないよ♪　それより……その約束のことなんだけど……それがそうも言ってられないことになったんだ。だから話してもらえないかな？　あの時の……不思議な模様について……」

プクリンは、いつにも増して真面目な顔で、ラプラスに問い掛けた。ラプラスは無言のまま、プクリンの目を見つめていた。

次の日、プクリンが不在のまま、朝の朝礼が行われた。

「えー親方様はまだギルドに戻ってきていないが……予定通り、磯の洞窟に出発しようと思う」

ペラップがそう言うと、弟子達は少し不安そうにしていた。今までプクリンがいないことなんて、数える程度。それこそ、そんなことを体験したことがあるのは、弟子の中でもごく一部だった。

「ヘイ！　親方はどこに行ったんだ？」

思ったことをペラップに問い掛けるヘイガニ。その表情は、少し不安そうな顔をしていた。

「さ、さあ……私にもわからないんだ……」

「親方がいなくて大丈夫なのかよ！」

いつもの大声で言うドゴーム。彼は前にも、プクリンがいないことがあったが、やはり馴れるものじゃなかった。

「大丈夫！　親方様は自分がいなくても、大丈夫だと判断されたからこそ、まだ帰って来ないのだと思う。それに……親方様の代わりに……私がいるじゃないか！！」

ドドンという効果音が鳴ってもおかしくないくらいの、堂々とした態度で言うペラップ。だが、弟子達の視線は、とても冷たいもの

だった。

「えっ？　なんでみんな黙ってるの？　まっまさか！　みんな、私じゃ力不足だと思っているんじゃ……私って、そんなに頼り無いの！？」

少し涙声になりながら、羽をバタバタさせている。さすがに、少しペラップが哀れだと、ユウキは思った、

「そういうわけじゃないでゲスが……やっぱり親方様がいないと不安でゲス……」

こういうことに、上手く対応出来ないビッパは、弟子の中でも、かなり不安になっているようだ。

「ヘイ！　親方ってイマイチ掴み所がないけどよ……いざとなると、やっぱりすごいじゃん！　ヘイヘイ！」

「でも、親方様がいない以上、私達がやるしかないですわ」

キマワリが、弟子達をまとめる。さすがキマワリとリサは思った。

「ペラップさん。親方様がいない今……このなかでリーダーシップが取れるのは……ペラップさんしかいないんですよ」

「わ、私？」

少し涙目になっていたペラップは、チリーンの助言で、少し顔が明るくなった。

「さっき自分で言ってたじゃないですか。『親方様の代わりに自分がいるから大丈夫だ』と。頑張ってくださいね！」

チリーンがそう言うと、他の弟子達も、ペラップを支持し始めた。なんだかんだで、みんなペラップを信用しているのだ。

「うっ……みんなぁ……こんな時だけ頼りにしやがって……」

弟子達に背を向けながら、信用された嬉しさやら、こんな時だけ……という怒りやら、いろんな気持ちが入り混じり、頭の中はごちゃごちゃになっていた。

「どうしたペラップ！　号令頼むぜ！」

「相変わらず声がでかいよドゴーム！　わかってる！　では……これより私達は、ギルドを上げて、全員で磯の洞窟に出発する！　みんな！　頑張っていくよーー！！」

『おぉぉーー！！』

ペラップの号令を合図に、不思議な模様を求め、磯の洞窟へと歩きだした。

## 第七十六話　ラプラス（後書き）

リサ
「……はぁ」

元気だしなって

リサ
「……うん。今は幻の大地を見つけないと……」

一途だなぁ……

## 第七十七話　磯の洞窟（前書き）

第七十七話完成！

ユウキ
「夏休みももう終わりだな」

それまでに出来るだけ更新するよ。では第七十七話をどうぞ！

## 第七十七話　磯の洞窟

ギルドを出発して約一時間後、ギルドの弟子達は、磯の洞窟にたどり着いた。

「みんな聞いてくれ。ここが磯の洞窟の入り口だ」

ペラップは、それらしい空洞の前に立ち、話を続ける。

「この洞窟の一番奥に、例の模様があるのだが……そこには、ある強敵が潜んでいるのだ」

「強敵……でゲスか……」

早くもビッパが怯え始めている。こんなんで、この先探検隊を続けられるのか、ユウキは少し不安になった。

「ヘイペラップ！　昨日も親方と、そんな話をしていたけどよ、ペラップは随分ここについて詳しそうだよな？」

「まあな。昔、私は親方様とここを探検したことがあるのだ。そして、この奥で、例の模様を見たのだ」

この時、何故プクリンとペラップが、この洞窟について知っているかという、弟子達の謎が解けた。

「だが……あいつらが……あの手強いやつが現れて……」

ペラップの話を、弟子達は、喉を鳴らしながら聞いていた。

「そっそれで、そいつらは何者なんだ？」

「それが……よく覚えていないのだ……」

「どういうことだ？」

ペラップの曖昧な対応に、ユウキは首を傾げた。

「恥ずかしい話だが……やつらは現れるなり、いきなり襲い掛かってきて……私はあっという間に倒されてしまったのだ……意識を取り戻すと、親方様に解放されていたが……それまでの記憶が一切ないので……やつらのことも思い出せないのだ」

どうするかと、弟子達は頭を悩ませた。その沈黙をリサが破った。

「……まって。ねえペラップ。やつらってことは……敵は複数ってこと？」

「そういえば……一匹じゃなかったな……その時、一斉攻撃されて、もう全身ずぶ濡れー！　って感じだったな……」

ずぶ濡れということは、敵は水タイプだと、ユウキは判断した。自分にとっては相性の良いタイプだが、リサにとっては苦手なタイプなので、用心しなくてはと思った。

「一匹で行動するのは危険なので、何匹かに分けてグループを作る。後お前達」

「なんだ？」

「親方様は昨日、私はライトニングと行動するように申し付けられた。だから今回、私と一緒に探索する。あまり私の足を引っ張るなよ」

「はいはい……」

正直ペラップの対応が面倒だったユウキは、素っ気ない態度で返事をした。

「ではみんな！　磁の洞窟を攻略するよ！　頑張っていこー！！」

『おぉぉーー！！』

弟子達は意気揚々と、磁の洞窟に入っていった。だが、その後を付けている影に、弟子達は気づかなかった……

中に入ると、磁の洞窟というだけあって、水が多かった。それを好む水タイプのポケモンも多かった。

現在、突然襲ってきたオムナイトと、パウワウと戦っていた。

「十万ボルト！」

オムナイトに向けて、鋭い雷を放つユウキ。だが、その雷は、オムナイトの守るによって阻まれた。

「私がやる！　火炎放射！」

リサは、灼熱の炎をオムナイトに放った。だが、オムナイトのタイプは水と岩。炎タイプの火炎放射は、あまり効果がない。

「リサは下がれ！　電撃波！」

ユウキは雷の球体を作りだし、自分の頭上に放った。

「貫け、マーシャル・ボルト！！」

ユウキは、電撃波に向かってジャンプし、その球体を、アイアンテールで、オムナイト目掛けて弾いた。そのスピードは素早く、しかも電撃波の効果で、必ず当たる技になっている。

雷がぶつかったオムナイトは、その場で目を回していた。

「ユウキ！」

リサに呼ばれ、咄嗟に下を見ると、パウワウから冷凍ビームが放たれていた。

「くっ！　しまっ……」

「ハイパーボイス！」

ユウキが目を閉じた刹那、ペラップがユウキの前に出て、ハイパーボイスを放った。それが幸をそうし、二つの技は相殺しあった。

「あんまり世話焼かせるんじゃないよ！」

「……悪いな」

「あいつは私がかたずける！　乱れ突き！」

パウワウの体を、ツンツン突っつくペラップ。地味に痛そうだとリサは思う。

「ハイパーボイス！」

乱れ突きの痛みに顔を歪めるパウワウに、止めのハイパーボイスを放つ。至近距離でのダメージは大きく、パウワウは、その場で目を回していた。

「一丁上がり！」

いつもは口うるさいペラップだが、さすがはプクリンの一番弟子というだけあり、バトルの実力はなかなかだと、二匹は痛感した。

「さて、行くよ！」

「うんっ」

「嗚呼」

二匹は、更に奥へと歩みを進めていった。

しばらく歩いていると、少し開けた場所に出た。

「ねぇペラップ。模様の場所はまだなの？」

「もう少しだ。だが、前にも話したが、そこには強敵がいる。気を引きしめていくよ」

ペラップに促され、二匹は首を縦に振った。その時、リサは後ろから、何者かの攻撃を受けた。その拍子に、トレジャーバッグの中身をばらまいてしまった。

「だれっ！？」

その攻撃してきたポケモンを、確認する三匹。そこにいたのは……

「ドクローズ参上！」

そう、ドクローズだった。実は、コータスを脅し、幻の大地の情報を手に入れていた。そして、磯の洞窟に来たユウキ達から、遺跡のかけらを奪い、自分達が、幻の大地に行こうとしていたのだ。

「貴様ら……！」

「どうしてここに！？」

「あなた達は！？」

三匹は、それぞれ反応を浮かべる。ユウキとリサは、完全に敵を見る目だが、ペラップだけは、驚きを隠せずにいた。無理もない。ペラップにとって、ドクローズは遠征の時に助っ人をしてくれた、善良なポケモンだと思っているからだ。

「これか。遺跡のかけらは」

そう言いながら、リサのバッグから落ちた、遺跡のかけらを拾い上げた。

「それは！！」

「ククククッ。これは貰っていくぞ」

「しかしな～まさか前と同じ手に引っ掛かるとはな……」

「お前達、相当マヌケだな。へへっ」

「それは返してもらう。アイアンテール！」

ユウキはほぼ反射的に、スカタンクにアイアンテールで攻撃していた。

「フンッ」

スカタンクは冷静に、ユウキの前に遺跡のかけらを向けた。アイアンテールの盾として使ったのだ。

「なっ！？」

とっさの判断で、ユウキはアイアンテールを中断し、もといた場所に戻った。

「フンッ……相変わらず姑息な手だな」

「姑息だろうがなんだろうが、勝てればいいんだよ。ククク ッ」

「ちょっと待ってください！　よくわからないですよ私。何故あなた達がここに？　大胆、遠征の時、みなさんがいなくなって、私心配していたんですよ？」

今だに状況が把握出来ていないペラップは、オタオタしながら言った。

「心配……ね。ククク ッ。お前ら、本当におめでたいやつらばかりだな」

「ん？　なんか言葉遣いも悪くなってるような……」

「ペラップ！　こいつらはギルドを騙してたのよ！　悪いやつらなのよ！」

「えぇぇーー！！」

やっと状況把握が出来たペラップが、バサバサと翼を羽ばたかせながら驚いた。

「ケッ、当然のこと」

「今まで騙されてた、お前達がマヌケなだけさ！　へへっ！」

「とにかく遺跡のかけらは手に入れた。もうお前達に用はない。あばよ！」

そう言いながら、ドクローズは、悠々と奥に進んで行った。

残されたユウキ達は、後を追い掛けようとしていると、急にペラップが震え出した。

「うぅ……」

その震え方は、プクリンが今にも泣きだしそうな感じの震え方に似ていた。そう、その状態の者には、関わらない、もしくは全力で宥めなくちゃならない。そんな震え方だ。

「あいつら……許さん！！　絶対にとっちめてやるよ！！」

そう決意し、ドクローズの後をダッシュで追いかけて行った。

「行っちゃった……ペラップ、随分怒っていたけど、大丈夫かなぁ……」

「あいつも心配だが、とにかく遺跡のかけらを取り戻す。行くぞ」

「そうね」

ユウキとリサも、遺跡のかけらを取り戻すため、磯の洞窟の更に奥へと進んで行った。

## 第七十七話　磯の洞窟（後書き）

リサ
「ペラップ大丈夫かな……」

ユウキ
「しかしまさかドクローズが出てくるとはな……」

さすがドクローズ（笑）

## 第七十八話　優しさ（前書き）

第七十八話完成！

ユウキ
「ハイペースだな……」

夏休み中に出来るだけ更新したいんだよ。では第七十八話をどうぞ！

# 第七十八話　優しさ

ドクローズとペラップを追いかけ始めて数十分後、ユウキ達は、まだ追いついていなかった。

「なかなか追いつかないね……」

「早く追いつかないとな」

ペラップだけを追い掛けるなら、そこまで急ぐ必要はないが、ドクローズとなると話は別だ。早くしないと、自分達が幻の大地に行けなくなり、必然的に星の停止が起こってしまうのだ。

「あっ!?　ユウキ!」

「くっ!　敵か!?」

ユウキ達の前には、トドゼルガが仁王立ちしていた。

「ここは通さないってことかな?」

「上等だ。一気にかたずける」

二匹は、それぞれの技を駆使し、トドゼルガとのバトルに挑みはじめた。

その頃、ドクローズは悠々と磯の洞窟の奥に向かっていた。

「ケッまさかここまで上手くいくとはな」

「運は俺達に向いてるな！　へへっ」

「なんだお前ら。俺様の作戦を信じていなかったのか？」

「そっそういうわけじゃ……」

正直な所、スカタンクもここまで上手く事が運ばれるとは思っていなかった。ズバットではないが、自分達に運が向いているのかもしれないと思った。

「そろそろ奥地だな！　へへっ」

ズバットが先頭に立ち、超音波で調べていると、少し開けた場所に出た。

「この先だな」

スカタンクが先に行こうとすると、いきなり何者かの攻撃を受けた。

「ぐはっ！」

『アニキ!?』

いきなりの攻撃を受け、倒れるスカタンクを前に、驚く二匹。だがそんなことをしている間に、二匹も奇襲を受け、その場に倒れ込んだ。

「ぐっ……」

なんとか相手を確認しようとしたスカタンクだったが、既にその姿は確認出来ず、先程見た、カラフルな鳥、ペラップの姿が見えた。

「おやっ？　何故お前達が倒れている？　私が痛め付けようと思っていたのに」

それを期に、ペラップの長い説教や、文句が始まった。

「ふぅ……ってこんなことをしている場合じゃない！　お前達はそこで反省してな！」

ペラップはそう吐き捨て、更に奥へと走り出した。残されたドクローズの面々は、その場で倒れているしかなかった。

「くそが……」

なんとか起き上がろうと、四苦八苦していると、自分達が来た道から、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「だいぶ来たけど……ペラップやドクローズに追いつかないのかな……」

そう。それは、つい先程、自分達が遺跡のかけらを奪い取った張本人の声だった。

「ちっ……」

まさかここまで早く来るとは思っていなかったスカタンクは、苦虫をかみつぶしたような顔をした。

「あっちから声がしたな……行ってみるか」

もう一匹の方、スカタンクにとっては天敵と言えるポケモンの声が聞こえた。内心スカタンクは、近づくなと念じていたが、その想いは虚しく、二匹はスカタンクの前に現れた。そう、ライトニングの二匹だ。

「あっドクローズが！」

ユウキ達の前には、傷だらけで倒れている、ドクローズの姿があった。

「ぐっ……」

「どうしたの!?」

リサはスカタンクの様子を伺い、ユウキは残りの二匹の状態を見た。どうやら意識が無いようだ。

「まさか……謎の強敵にやられたの？」

「情けねえが……そうみたいだな……」

リサとスカタンクが話をしている間に、ドガースとズバットは意識を取り戻した。

「くっ……」

「アッアニキ……」

「目を覚ましたかよ……ククッ……」

「スカタンク、大丈夫？」

こんな時でも、敵であるドクローズを心配するリサを見て、誰にでも、ドクローズ相手でも優しくする、いや、敵が相手でも、倒れているポケモンはほっとけないんだな……とユウキは思った。

「ここに来て……俺様の心配をするなんて……相変わらずめでたいやつだな……」

「倒れていたら、誰でも見過ごせないよ」

「ククッ……俺達の心配なら無用だ……ペラップが……俺達の怒りに火をつけたからな……」

事情を知らないユウキとリサは、首を傾げた。

「ペラップが？」

「そうだ……ペラップのやつは後から来て……俺様達が倒れているの見るや否や……散々文句やら説教やらしていきやがった……そして一通り喋ると去っていった……本当にムカついたぜ……こんな所でくたばれねぇ……絶対にここをはい出てペラップを倒すってな……まあ、諦めていた俺様は、ペラップに元気を貰ったのかもな……」

倒れながらも、言葉が途切れ途切れになりながらも、ユウキとリサに事情を説明した。

「でも……凄い辛そうだよ？」

「ククク……俺様はここまで散々嫌がらせをしてきた……散々嫌な思いもしたはずだ……それなのにお前は……俺様の心配をするのか？」

スカタンクの言う通り、今まで散々嫌がらせされてきた。遺跡のかけらを奪われたことや、セカイイチを取りにいくのを邪魔されたり、マリル兄弟を利用し、エレキ平原に誘ってきたり……色々されてきた。だが、リサにはそんなことは関係なかった。

「そんなの関係ないよ。こうやって目の前で倒れていたら、見過ごせないよ」

リサの優しさを受け、スカタンクの心に、ある気持ちが芽生えた。
これは正直スカタンクにもわからなかったが、その気持ちは、スカタンクにある一つの行動をさせた。

「遺跡のかけら！」

スカタンクは、リサから奪った遺跡のかけらを、わざと二匹の前に落としたのだ。

「ククククッしまったな……俺様としたことが……遺跡のかけらを落としちまった……体も動かねえから……これだとリサに取られるな……ククククッ……」

「お前……」

「俺様は遺跡のかけらを落としただけだ……それを拾うかどうかは……お前の自由だぜ……」

少し躊躇しながらも、リサは遺跡のかけらを拾い上げた。

「あ、ありがとう……」

「何故例を言う。次にあったらまたいつも通りだからな……それより……俺様達より……ペラップの心配するんだな……」

「そうだ！　ペラップは？」

「先に進んでいった……お前達も早く行きな……」

リサとユウキは目を合わせ、一度頷いた。

「ありがとうスカタンク……スカタンク達も頑張ってここを出てね」

「フンッドクローズを舐めるなよ……早く行け」

スカタンクに後押しされ、リサは先に向かったが、ユウキはその場に残っていた。

「ククックッ……なにをしてる……止めでも刺すか？」

「……ほらよ」

ユウキは自分のトレジャーバッグから、オレンの実を数個出し、スカタンクの前に投げ渡した。

「……なんの真似だ」

「勘違いするな。リサの優しさに免じてだ……死ぬんじゃねえぞ」

そう言い残し、ユウキも奥へと走っていった。

残されたスカタンクは、ユウキから渡されたオレンの実をかじった。

「お前達……大丈夫か？」

「ケッ……それは無理ですぜ……」

「へへっ……体が動きませんぜ……」

「お互いざまあないな……ほらっ」

スカタンクは、オレンの実をドガースとスバットに渡した。

「しかしアニキ……アニキも最後の最後で……ちょっと良いやつになっちゃいましたね……」

「うるせー……クククッ……」

「でも……オレはそんなアニキも、ちょっと好きですぜ……へへっ……」

「うるせー……クククッ……」

言葉では怒っていたが、スカタンクの心は穏やかだった。

「お前ら……ドクローズがお情けを受けたんだ……もうこんなことにならないようにするからな……クククッ……」

『へいっ』

スカタンク達は、オレンの実をかじっていた。ユウキとリサにちょっぴり、ほんのちょっぴり感謝しながら。

「あっペラップ！」

ユウキとリサは途中で合流し、少し走っていると、目の前で、辺りを警戒しているペラップの姿があった。

「お前達か！　気をつけろ！　やつらは側にいる！」

首だけをユウキ達に向け、辺りに注意するように促すペラップ。

「さっきちらっと見て、ここまで来たが見失ってしまった。どこかに潜んでいるはずだ」

そう言われ、辺りを警戒すりユウキとリサ。だが、その強敵の姿を確認することは出来なかった。

「いないよ……？」

それはペラップもわかっていた。だが、言いようのない不安感に襲われていた。

「周りを見ても、岩壁しかないし……」

思想に耽っているペラップには、リサの言葉は耳に入らなかった。その間に、ペラップは過去の事を思い出そうと、頭をフル回転させていた。

（なにか……そうだ！　以前襲われていた時……やつらは突然現れた……その場所は……！）

ペラップは、恐る恐る上を見上げた。そこには、ペラップにとって、見覚えのある姿があった。

「気をつけろ！　上だ！！」

「なっ！？」

「えっ？」

咄嗟に上を見上げたが、既にそのポケモン達は下に落ちながら、ユウキとリサに、極太の光線や、大量の激流を放っていた。

「しまっ……」

「キャアァァァ！！」

突然の事で、その場に固まってしまったユウキとリサ。リサの悲鳴が、磯の洞窟に鳴り響いた……

## 第七十八話　優しさ（後書き）

ユウキ
「半端な終わり方だな……」

リサ
「どうなるの……」

それは次回

# 第七十九話　正体（前書き）

第七十九話完成！

ユウキ
「俺達はどうなるんだ？」

さあ？

リサ
「まあこんなとこでいなくなる主人公なんてないと思うけど……」

おいおい（汗）

では第七十九話をどうぞ！

# 第七十九話　正体

「……」

恐怖から目を閉じたリサだったが、いくらたっても攻撃が来ない。

ユウキの声が聞こえないことから、また自分のせいで、ユウキが傷ついているんじゃ……という、リサにとって最悪の事態が脳裏に過ぎる。

だな真実は違っていた。ユウキはリサのすぐ隣にいる。なら一体誰が守ってくれたのか？　そう思い、前を見ると、そこには、ユウキとリサを庇っているペラップの姿があった。

「ペラップ！？」

リサが悲鳴に近い声を出す。無理もない。ペラップの体は既にボロボロ。息も絶え絶えで、かなり危険な状態だった。

さすがのユウキも、ペラップの心配をしたが、それよりも重要なのが、敵の確認。これ以上不意打ちを喰らうわけにもいかないからだ。ユウキの前には、鋭い鎌を持つ、カブトプスと、アンモナイトのような貝殻に、触手のような手を持つ、オムスターが二匹いた。

「なんだ？」

全員に不意打ちをしたと思っていたカブトプスは、ペラップに庇われたことに、少し驚いていた。

「お前達に……手だしはさせない……」

必死に声を出すペラップだったが、カブトプスに軽く笑い飛ばさ

れた。

「自分から盾になったのか。愚かなやつだな」

クックッと笑いながら、ペラップを睨みつける。

「あっ思い出した！　カブトプスよぅ！　こいつ前にもここに来たことあるぜ！　その時も、こんな感じでやられたんだぜ！」

「繰り返し同じことを？　学習能力がないのか？　本当に愚かだな！」

三匹揃ってペラップを軽蔑する。体を張って自分達を守ってくれたペラップを馬鹿にされ、ユウキは拳を握りしめる。

「なんとでも言え……こいつらは……私の……かわいい弟弟子なんだ……！　お前達に……手出しさせるかぁ……！！」

その言葉を最後に、ペラップはその場に崩れ落ちた。

「ペラップ！」

「次はお前達の番だ！」

そう言い放ち、カブトプスは先程不意打ちの時に使った技――破壊光線で、ユウキ達に攻撃してきた。

「守る！」

それに対し、ユウキは自分の周りに壁を作りだし、破壊光線を防

いだ。

「リサ、ペラップを安全な場所に運べるか？」

「うっうん……」

「俺が時間を稼ぐ。その間に頼む」

ユウキはそう言い残しカブトプス達のもとに走り出す。

リサはなんとかペラップを運ぼうとしたが、アチャモという種族には手が無い。運ぶのには一苦労だったが、なんとかフロアのはじに運べた。

その頃ユウキは、三匹のコンビネーションに苦労していた。

「ハイドロポンプ！」

凄まじい激流を放つオムスター。それをユウキは電光石火で回避する。だがその先には、カブトプスが迫っていた。

「冷凍ビーム！」

「くっ十万ボルト！」

至近距離で凍てつく光線を放つカブトプスに対して、ユウキは鋭い雷を放つ。二つの技は、お互いに相殺しあった。

「ほう……我々のコンビネーションに対応するとはな……なら本気でいくぞ」

「おうよ！　雨乞い！」

カブトプスの声に反応し、オムスター達が、一斉に青い球体を、上に向けて放つ。刹那、洞窟の中なのに雨が降り出した。オムスターの雨乞いの効果だ。

「いくぞ！　切り裂く！」

「っ！？　消えた？」

ユウキの目の前にいたはずのカブトプスは、突然ユウキの前から消えた。

「どこを見ている？」

「ぐっ！」

消えたはずのカブトプスは、ユウキの後ろに回り込んでいた。声に反応して後ろを向こうとしたが、無情にも、カブトプスの鎌は、ユウキの背中を切り付けた。鋭い痛みが、ユウキの背中を襲う。

「ぐっ……」

「隙だらけだぜ！　吹雪！」

いつのまにか接近していたオムスター達は、凍てつく吹雪をユウキに向けて放つ。その冷気により、段々とユウキの体は凍りついていく。

「氷付けにしてやるぜ！」

「させない！　火炎放射！」

ペラップの移動を終えたリサが、オムスター達に向けて火炎放射を放つ。

相性では、オムスター達にはあまり効果はないが、吹雪に対しては効果はある。吹雪は火炎放射の熱で蒸発し、霧になった。

「ユウキ、大丈夫！？」

「……寒い」

ユウキの体の所々は凍っている。寒いのも当然だ。リサは小さい炎で、ユウキの氷を溶かした。

「すまない」

「ふん、獲物が増えたな」

「ほざいてろ。十万ボルト！」

カブトプスに向けて十万ボルトを放つユウキ。だがそれが当たる前に、カブトプスの姿が消えた。

（おかしい。早過ぎる。さっきまではあんなスピードは無かった……そうだ、この雨が降り出してからだ……なるほど、特性のすいすいか……）

すいすいは、雨が降っている時、素早さが倍になる。これでカブトプスとオムスターのスピードが、格段に上がっているのだ。

（なら天気を変える道具があれば……）

ユウキはトレジャーバッグの中身を確認する。中には、不思議玉がいくつかあり、その中には、天気を変える物もあった。だが今使う訳にはいかないのだ。

（今変えてもまたオムスターに雨乞いをされる……なら先にオムスターを倒し、それからこれを使えば……まてよ、カブトプスが雨乞いを使える可能性も……ある。だが……これでいくしかない）

ユウキは決断し、それをリサに知らせることにした。

「……うん、わかった」

「頼むぞ……待たせたな」

「なにをしようとも我々には勝てない。水の波導！」

カブトプスに向かって走って来るユウキに向けて、水色のエネルギー弾を放った。ユウキはそれを電光石火で簡単にかわす。

「雷パンチ！」

右手に雷を溜め込み、カブトプスに攻撃しようとしたが、すいすいの効果で上がったスピードの前には、スローモーションのようだった。

「遅い。切り裂く」

「穴を掘る！」

切り裂くで反撃してきたカブトプスだったが、ユウキが穴を掘るを使ったことにより、その攻撃は空を切った。

「どこにいる？」

「ここだ！」

地中から出てきたユウキだったが、その数は三匹に増えていた。

「なんだ？　身代わりか」

「電光石火！」

「甘いぜ！　吹――」

「甘いのはそっちよ！　火炎放射！」

全体に向けて吹雪を放とうとするオムスター達に対し、リサは火炎放射を放つことで、ユウキの作戦のサポートをした。

そうこうしている間に、三匹のユウキは、それぞれカブトプスと、オムスター達に近づいていた。

「雷パンチ！」

「遅い！　切り裂く！」

「噛み付く！」

カブトプス達は、それぞれの技で、ユウキに攻撃する。ユウキの攻撃スピードより、カブトプス達の方が早く、ユウキの攻撃は届かなかった。

「この程度か……ん？」

この時カブトプスは、あることに気がついた。三匹いたはずのユウキが、一匹もいなくなっていたのだ。それに、なぜか自分の体も痺れているのだ。

「どうなっている……」

「俺の罠に掛かったな」

そう言いながら、ユウキは地中から出てきた。体から電気があふれている。ボルテックススタイルだ。

「まさか……あの身代わりは……この為のフェイクだったのか」

ユウキはスピードが自分よりあるカブトプス達のスピードを下げるために、地中にいる時に、自分の身代わりに、電磁波と同じ電気を帯びさせ、地上に出した。そしてわざと接近させ、カブトプス達に物理攻撃をさせるように仕向けたのだ。

「チェックメイトだ。雷パンチ！」

「ぐあっ！」

「ぎゃぁぁ！」

ユウキは、ボルテックススタイルの雷をスピードに回し、その素早さでオムスターに接近、雷パンチで一気に攻撃した。オムスター達はその場に倒れた。

「よし……あとはこいつを……」

ユウキはトレジャーバッグから、一つの不思議玉を取り出した。それは日照り玉。これを使うと、天気が日差しが強い状態なるのだ。

「貴様ぁ！」

「これで私も参戦出来るよ！」

そうリサが言い放つ。今までは雨乞いのせいで、自分の炎タイプの技の威力が下がり、しかも自分の弱点の水タイプの技の威力が上がるため、なかなか前線で戦えなかった。だが今は違う。天気が日差しが強い状態なら、炎タイプの威力が上がり、水タイプの威力が下がる。リサが多少有利になるのだ。

「貴様！　絶対に倒す！」

「リサ、絶対に勝つぞ」

「うんっ！」

怒りで物凄い形相のカブトプスを倒すために、二匹は走り出した。

# 第七十九話　正体（後書き）

ユウキ
「今の所は順調だな」

リサ
「頑張らないと！」

意気込んでいるな～

# 第八十話　プクリンとペラップ（前書き）

第八十話完成！

ユウキ
「カブトプスとバトルか……」

リサ
「私相性悪いけど……頑張る！」

では第八十話をどうぞ！

# 第八十話　プクリンとペラップ

「いくぞ。雷パンチ！」

動きを鈍くすることに成功したユウキは、一気に勝負を決めるために、雷パンチでカブトプスに攻撃する。

もともと素早くないカブトプスに、更に麻痺しているため、ユウキの攻撃を、甘んじて受けるしか無かった。

「切り裂く！」

ただで喰らう訳にはいかないと、切り裂くで反撃するカブトプス。だが麻痺しているせいで、思うように動けず、雷パンチを腹部に受けてしまった。

「畳み掛ける！　十万ボルト！」

「舐めるなぁ！　破壊光線！！」

一気に仕留めようとするユウキに、自身の最強技の一つの破壊光線で反撃するカブトプス。最初は二つの技はぶつかり合っていたが、だんだんと破壊光線が押していき、ついには十万ボルトを突き破ってしまった。

「ちっ！」

「火炎放射！」

ユウキに迫り来る破壊光線に、リサは火炎放射で相殺しようと動

いた。天気が日差しが強い状態なので、火炎放射の威力は増している。それは威力の下がった破壊光線を相殺させるには十分な威力だった。

「すまない」

「任せて！　いくよ！」

リサがそう言うと、リサの体から炎が溢れだし、それはリサの体を包み込んだ。

「あれは……リサ？　」

「そっか……天気がこれなら……いける！」

そう言うと、炎を纏いながら、リサはカブトプスに向かって、電光石火で突っ込んでいった。その姿は、まるで火の玉――もとい、小さな隕石のようだ。

「無茶な……リサ！」

「メテオストライク！！」

カブトプスにぶつかり寸前に、さらに火力を上げ、カブトプスに向かって、電光石火のスピードを落とさずに体当たりした。

「ぐあぁぁぁ！！」

リサの攻撃をまともに受け、カブトプスは吹き飛ばされてしまった。だがリサにもかなりの疲労があるのか、その場に座り込んでし

まった。

「大丈夫か！？」

「うん……想像以上に疲れる……それに普通の時には使えないみたい……」

そう、あれはほとんど技を使ってない、つまりベストコンディションでないと使えず、なおかつ天気が日差しが強い状態じゃないと使えない――いや、威力が低く、逆に自分がダメージを受けてしまうのだ。

（これは……今回はうまくいったけど、実用性に乏しいね……）

リサが新技について考えていると、吹き飛ばされたカブトプスがその場で立ち上がった。

「まだ立つか……」

「……ギガインパクト！！」

「なっ！？」

とてつもないスピードで、ユウキ達に突撃してくるカブトプス。もう一つの最強技、ギガインパクトだ。

（リサは今は戦えない……一か八かやるか……）

ユウキは自分の雷を全て両腕に溜め込み、雷の剣を作り出した。

「ユウキ！？」

「これしかない！　ウオォォォ！！」

ユウキは雷鳴剣を発生させたまま、カブトプスに突撃していった。

「羅刹陣！！」

ユウキは更に雷を雷鳴剣にまわし、刃の部分を拡大させ、カブトプスを一刀両断した。それに負けじと、カブトプスもギガインパクトで雷鳴剣に対抗する。

最初は勢いのあるカブトプスが優勢だったが、それも最初だけ。相性の良い雷鳴剣が優勢になり、最終的には、ユウキの雷鳴剣が、カブトプスに打ち勝った。

「やった！」

「……ぐっ」

雷鳴剣の反動に、ユウキは顔をしかめる。それを心配したリサは、フラフラしながら、ユウキのもとに駆け寄ってきた。

「大丈夫っ！？」

「……まあな」

ユウキはフラフラしながらも、なんとか立ち上がった。

「俺は大丈夫だ……それより……」

「っ！？　ペラップ！」

二匹はペラップのもとに駆け寄る。ペラップの息は絶え絶えで、とても苦しそうだ。

「大丈夫！？」

「ううっ……」

「ペラップ！」

ユウキ達の後ろから、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「その……声は……親方……様……」

そう、ユウキ達の後ろには、プクリンの姿があった。そして、なぜかジュプトルの姿もあった。

「プクリン？　それにジュプトルも？」

予想していなかった二匹の登場に、ユウキとリサは戸惑っていると、他のギルドの弟子達もやって来た。

「親方ー！　ってジュプトル！？」

先頭を走っていたドゴームは、ジュプトルの姿を見て驚いた。他の弟子達も驚いている。

「説明は後だよ！　それより！」

かなり焦っているプクリンは、ペラップのもとに駆け寄り、怪我の具合を確認する。

「ペラップ！　大丈夫！？」

「ハハハ……大丈夫です……この通り……ピンピンして……」

言葉では平気なようなことを言っているが、ペラップは、今にも意識が飛びそうになっていた。

「ごめんねペラップ……ボクがもっと早く来ていれば……」

「そんな……親方様……しかし……情けないですよね……同じ敵に……また……やられるなんて……」

ペラップの弱音に近い発言を、プクリンは即座に否定した。

「そんなことないよペラップ！　前にボク達がここに来た時……ペラップ……カブトプス達の攻撃から、ボクを庇ってくれたんだよ」

「えっ……？」

プクリンから語られる事実に、ペラップは驚きを隠せなかった。

「カブトプス達はその後ボクが追い払ったけど……ペラップが庇ってくれなかったら、ボクはやられてた。ペラップはボクにとって命の恩人なんだよ」

「……そう……だったんですか……」

「ペラップは……ボクにとって一番の相棒だよ……」

その言葉を聞いて、ペラップの目から、一筋の涙が流れた。

「そんなことを……親方様に言っていただいて……とても……幸せ……です……」

それを最後に、ペラップの意識は無くなった。

弟子達は慌てていたが、ジュプトルだけは、冷静に状況を判断していた。

「慌てるな！　……大丈夫だ。今すぐギルドに運べば間に合う！」

「なら早くギルドに運ぼう！」

「いや、ペラップはボク達が連れていく。ユウキとリサ……ジュプトルは先に進んで」

リサの提案を、プクリンはやんわりと断る。リサはえっ？　と首を傾げた。

「いいから。ここで君達が進まないと、ペラップが君達を庇った意味がなくなる」

「でも……」

「わかった。リサ、ジュプトル、行くぞ」

「……うんっ」

ペラップの方を一度振り向き、三匹は、更に奥にある模様の所に向かって歩きだした。

「それにしても、ジュプトルはどうしてここに？」

模様がある場所に向かっている途中、さっきから感じていた疑問を、リサはジュプトルに問い掛ける。

「プクリンが連れてきてくれたんだ」

「プクリンが？」

「プクリンは俺を探していた。そして会うなり幻の大地に行けそうだから、一緒に来てくれと言ったんだ。俺も合流したいと思っていたから、調度良かった」

ジュプトルの言葉に、ユウキは少し引っ掛かった。

「合流したい……時の歯車は揃ったのか？」

「そうだ」

「じゃあ後は幻の大地に行くだけだね！」

準備は全て整った。ユウキ達は、幻の大地に向かって確実に近づいていると、ユウキは確信した。

「わっ！　水がここまできてる！」

少し歩いていると、入り江のような場所にでた。

「これ海の水だ……見てよユウキ！」

リサの目線からは、調度夕日が見えた。洞窟が大きく裂けて、そこから海と空が見えるのだ。

「岩の裂け目から、潮がここまで満ちているんだな」

「んっ？　これは……」

夕日をしばし鑑賞し、ふとユウキは後ろを振り向くと、そこには、例の不思議な模様があった。

「どうしたの？」

リサとジュプトルも、ユウキと同じように後ろを振り向くと、二匹は模様を見て驚いた。

「遺跡のかけらと同じ模様ね……もしかしてこれのことかな……」

「試しに遺跡のかけらを置いてみたらどうだ？」

ジュプトルの提案に、リサはそうだねと思い、遺跡のかけらを、模様の前に置いた。刹那、遺跡のかけらが光だし、それに共鳴するかのように、壁の模様も光だした。

「まるで……遺跡のかけらに反応しているみたい……」

模様は更に光を増し、今までに一番強い光を発した。それが終わると、模様から、岩の裂け目に向かって、光の筋が走った。

「……今のは一体……」

「光が……海へ向かって跳んでいったけど……なんだったのかな……」

光が走った海から、なにか生き物の影が、こちらに向かって泳いできていた。

「あれは……？」

「こっちに向かって……泳いできているな」

そのポケモンは、ユウキ達の前につくと、言葉を発した。

「リサさんとユウキさん……それにジュプトルさんですね？」

## 第八十話　プクリンとペラップ（後書き）

ユウキ
「中途半端だな……」

気にしない気にしない♪

リサ
「それより私の新技、なんかフレアドライブに似てない？」

タイプは似てる。でも威力とか、条件が違うからな～メテオストライクには反動ないけど、天気が日差しが強い状態じゃないとダメだし

ユウキ
「それにアニメので言えば、フレアドライブは青い炎だったな。メテオストライクは赤だったはずだ」

ま、そういうこと。って長くなったな……次回もお楽しみに！

## 第八十一話　決意の夜（前書き）

第八十一話完成！

ユウキ
「またハイペースだな」

まあまあ。今回あまりサブタイ関係ないかも……では第八十一話をどうぞ！

## 第八十一話　決意の夜

突然現れたポケモンに自分達の名前を呼ばれ、ユウキ達は驚いた。

「私達の名前を知ってるの？」

「はい。プクリンさんから伺ってます」

どうやらプクリンの知り合いのようだ。

「お前は……？」

「僕はラプラス。幻の大地へ誘う（いざなう）もの」

「幻の大地？　本当に？」

「あなた達は模様の光を放った。それこそが、幻の大地へ渡る道標なのです。海の向こうにそれはあります。さあ、僕に乗って。海を渡りましょう」

自分に乗れと言うラプラス。だが、ユウキには、自分達三匹を乗せるには、少し無理があるような気がした。

「大丈夫。僕は特別ですから皆さん乗れますよ」

ユウキの思ったことを悟ったのか、そう言うラプラス。

「海の向こうに……幻の大地が……」

「ユウキ！　リサ！　行こう！　海の向こうへ！」

冷静なジュプトルですら、声を上げている。それもそうだろう。やっと自分達の使命を果たせるのだから。

ユウキ達は、ラプラスの背中に乗った。ラプラスはそれを確認し、幻の大地へ向けて泳ぎだした。

一方その頃、ギルドでは、運ばれたペラップが治療を受けている最中だった。弟子達は、治療を受けているペラップがいる部屋の、すぐ外に集まっていた。万が一のことを考えると、落ち着かなかった。

治療を始めてしばらくすると、部屋からプクリンが出てきた。

「親方様、ペラップはどうでゲスか？」

「大丈夫！　一晩眠れば、明日には元気になると思うよ！」

プクリンがそう言うと、弟子達の力が一気に抜けた。ビッパに至っては、安心して座り込んでしまっている。

「親方様。一つ聞いてよろしいですか？」

「んっ？　なあにキマワリ」

「親方様は、昔ペラップに助けてもらったとおっしゃってましたよね？」

「うん。あの時は――」

昔ペラップと行った礒の洞窟について、プクリンは話始めた。

「あの時、カブトプス達は、不意をついてボク達を襲ってきた。ペラップはボクを庇ったばかりに犠牲になって……カブトプス達は、その後追い払ったけど……ボクには、倒れたペラップを、どうすることも出来なかった。途方に暮れてた時……ラプラスが現れたんだ」

「ラプラス？」

おうむ返しで問い掛けるキマワリ。プクリンはうんっと言いながら、話を続けた。

「うん。ラプラス。ラプラスはペラップを助けてくれた。ラプラスは、ペラップを助ける代わりに、ある約束をしてほしいと言ってきたんだ」

「ヘイ！　その約束って？」

「ラプラスは、ボク達を見て、すぐに探検隊だってわかったらしい。そしてこう言ったんだ。『あなた達が野心に満ちた盗賊か、あるいは正義の心を持った探検隊かはわからない。でも……世界のためにも、不思議な模様については探求しないでくれ』って……」

その後どうしたのか、弟子達は気になった。その中でビッパがそれについて、プクリンに聞いた。

「親方様はどうしたんでゲスか？」

「快く承諾したよ？　ペラップを助けてくれたしね♪」

プクリンの言葉を聞き、さすが親方と、弟子達は感心した。

「コータス長老の話……そしてリサの遺跡のかけらを見て、ボクはピンときた。あの模様こそ、幻の大地に通じるものだと。だからボクは、みんなが儀の洞窟に行く前に出かけたんだ。ラプラスに会うために。ボクはラプラスに会って話した。この世界に起こっている異変を。そして時限の塔に、時の歯車を納めなければならないことを……だから、幻の大地へ行く方法を教えて欲しいと頼んだんだ」

プクリンの長い説明を、弟子達は黙って聞いていた。

「そう言うと、ラプラスは教えてくれたよ。幻の大地に行くには、遺跡のかけらが選ぶって」

『えっ！？』

まさかあの石ころが選ぶなんつ思っていなかった弟子達は、驚きを隠せなかった。

「そして、遺跡のかけらはリサを選んだ。ラプラスに聞いた話しだけど、遺跡のかけらはリサの清らかな心に反応したんじゃないかな？　とにかく、ボク達に出来ることはここまで。あとは……リサやユウキ、ジュプトルに任せよう」

プクリンはそう言いながら、自分の部屋へと戻って行った。
弟子達も、不安の糸が切れたか、部屋に戻るや否や、すぐに眠りについてしまった。

同時刻、ユウキ達は、プクリンと同じような説明を受けていた。

「ふうん……そうやってプクリンとラプラスは出会ったのね」

「はい。本当は姿を見せるつもりはなかったんですが……傷ついたペラップさんをほっとけませんでした」

ラプラスとプクリンの関係についての説明を聞いていると、ユウキはあることが引っ掛かった。

「だが……なぜ探求してはならないんだ？」

「幻の大地には、ご存知かもしれませんが、ディアルガのいる時限の塔があります。ディアルガは、この塔に、いろんな者が訪れるのを恐れました。そして、時限の塔を守るために、幻の大地を時の狭間に隠したのです」

ユウキとリサは、よくわからなかったが、ジュプトルだけは、一匹で納得していた。

「時の狭間か……どうりで見つからないわけだ」

「時の狭間って？」

「そうですね……簡単に言えば、時と時の……ほんの隙間部分と申しましょうか……」

イマイチピンとこないリサだったが、とりあえず納得することにした。

「ま、そんな所、誰も行けないな」

「いえ、ディアルガは、幻の大地に入る資格を、一つだけ設けました」

「それが……あの模様と、遺跡のかけらか？」

ユウキの答に、ラプラスははいと頷いた。

「まだ幻の大地につくまで時間がかかります。少し休んでおいたらどうでしょうか？」

「そうだな……」

ラプラスの申し出に、ユウキ達は承諾し、三匹は眠りについた。

それからしばらくした頃。ユウキはなかなか寝付けずにいた。調度ラプラスの背中に寄り掛かりながら座っている。リサはユウキに寄り添いながら、すやすやと寝息を立てている。

（……眠れないな……）

ユウキはふと右腕を見る。先程雷鳴剣を使ったばかりに、ブルブルと小刻みに震えている。

「……眠れないのか？」

不意に、目の前で、ラプラスの背中にいくつかある突起に背を預けていたジュプトルが、ユウキに声をかけてきた。

「まあな……やっと幻の大地に着くんだな……」

「嗚呼……やっと俺の使命が果たせる……ん？　その腕、どうした？」

「……これか？　実はな……」

先程のカブトプスとのバトルを、ジュプトルに話すと、ジュプトルは少し顔をしかめた。

「まったく……記憶が無くても相変わらず無茶する……」

「そうなのか？」

「そうだ。まあそれもお前らしさなんだがな」

ユウキは少し居心地が悪くなったのか、少し顔を逸らした。それを見て、ジュプトルはフッと笑った。

「それにしてもその技……それで完成なのか？」

「どういうことだ？」

「いや……他の方法で、負担は減らせないのか？」

他の方法と言われても、ユウキには、これだというアイディアが浮かばなかった。

「今の所は無いな……」

「そうか……あんまり無理するなよ？　リサの為にも……な？」

「……そうだな」

少し顔を赤らめながらユウキは言った。それを最後に、ユウキは眠りについた。残されたジュプトルは、なんとも言い難い心境だった。

（……俺はユウキに真実を伝えなくてはならないのか……心苦しいな……）

ジュプトルは目の前で、寄り添いながら眠るユウキとリサを見た後、右腕に付けているブレスレットを見ながら、そう思った。

## 第八十一話　決意の夜（後書き）

ジュプトル
「やっと幻の大地か……」

やっとだね

リサ
「頑張らないと！」

# 第八十二話　到達（前書き）

第八十二話完成！

ユウキ
「まだ着かないのか？」

リサ
「早くしないと！」

慌てない慌てない

では第八十二話をどうぞ！

# 第八十二話　到達

翌日、ユウキはラプラスの背の上で目を覚ました。その日は雲一つない青空で、ユウキは果てしなく広い空を見ながら一つ伸びをした。

目の前には腕を組みながら寝ているジュプトル、隣には、自分に寄り添いながら、静かに寝息を立てているリサの姿があった。

「ふぅ……よく寝たな」

もう一度伸びをするユウキ。それに反応したのか、リサが少しだけ動いた。そのせいで、ユウキの顔の目の前に、リサの顔があった。

「……」

いつも冷静なユウキが、この時ばかりは平然を保つのは困難を極めた。その緊張から逃れるために、ユウキはラプラスに声をかけた。

「ラプラス、幻の大地はまだか？」

「おや、おはようございます。あと少しですね……」

「そうか……」

ラプラスと他愛ない話をしていると、二匹の声に反応したのか、リサとジュプトルが目を覚ました。

「うぅん……おはようユウキ」

「まだ海の上か……」

「よう」

そっけなく答えるユウキ。まだ緊張で思考力が上手く機能していないようだ。

「ところでラプラス。だいぶ長い時間泳いでるけど、大丈夫？」

「大丈夫ですよリサさん。あと、もう少しで着きますよ」

それからしばらくすると、不意にラプラスが声を出した。

「見えてきましたよ」

「えっ？」

リサは急いで前をみたが、島らしい物は影も形も無かった。

「なにも無いけど……？」

「前方にちょっと違う所が見えませんか？」

島じゃなく、海に着目して見てみると、三匹はあることに気がついた。

「波が……捻れてる？」

そう、他の海と違って、目の前の、その場所だけ、波が不規則にねじ曲がっていたのだ。

「ラプラス！　あれは！？」

「時の狭間の境目です。あそこを通って幻の大地に行きます」

ラプラスがそう言うと、ラプラスの体が、段々と海から離れていき、ついには空を飛びはじめた。

「ラプラスが跳んでる！？」

「違う！　これは……時の海を渡っている！」

「なんでもありだな……」

三匹がそれぞれの感想を言っていると、目の前が突然光った。刹那、ユウキ達の目の前には、空中に浮かぶ島が眼下に見えた。

「ラプラス！　あれが……幻の大地なのか！？」

「そうです！　これから突入します！」

ラプラスは、幻の大地に向かって泳ぎだす。ラプラスは大地の端に止まった。

「着きました」

ユウキ達はラプラスの背中から下り、辺りを見渡した。ユウキのイメージでは、生き物はディアルガのみ、時限の塔の他にはなにもないような感じだったが、ここは自然が豊かで、他のポケモンの気配も感じた。

「ここが……幻の大地なのね」

「ついに来たんだな……俺達は」

「みなさん、正面を見てください」

ラプラスに促され、目の前を見ると、半分崩れた浮島の上に、上空に伸びる建造物が目に入った。

「あれは……」

「時限の塔です」

「あそこにディアルガが……そして、あそこに時の歯車を収めれば……」

意気込むジュプトルだったが、一つ疑問があった。それはユウキとリサも同じだった。時限の塔は、浮島の上にある。自分達は空を飛ぶ能力は無いので、普通の方法では行けないのだ。

「どうやって行けばいいのかな……？　ラプラス、どうすればいいの？」

三匹を代表して、リサがラプラスに問い掛けた。

「虹の石船に乗るのです」

「虹の石船？」

ジュプトルはおうむ返しでラプラスに問い掛ける。

「はい。この先に行くと古代の遺跡があります。そこに古代の船、虹の石船が眠っているのです」

「それに乗れば時限の塔に行ける訳だな。よし、リサ、ジュプトル、まずは古代の遺跡を目指すぞ」

「時限の塔を目指して頑張ってください！」

ラプラスの声援を背に、三匹は時限の塔を目指して歩きだした。

幻の大地の中は、さっき見たように自然が豊富で、空気がとても清んでいた。だが、三匹はなぜか落ち着かない。急いでいるというのもあるが、どこかまがまがしい雰囲気を感じていた。

「緑は豊かなのにね……」

「落ち着かないな」

「そうだな……それより早くい――」

行くぞと言おうとしたジュプトルの頭に、小さい氷の固まりが落

ちてきた。

「痛てっ……なんだこれは」

ジュプトルの言葉を期に、その氷の固まり、霰（あられ）が沢山落ちてきた。

「キャア！」

「どうなってるんだ？」

ユウキが空を見上げる。空は透き通ったかのような青空。霰が降る要素は皆無だ。なのになぜか霰は降っている。しかもそのせいで、少しづつだが、三匹の体に傷がつき始めた。

「なにか原因があるはずだ……」

「ユウキ、原因を探すぞ！！」

「でも探すって？」

リサの言うことも最もだ。三匹には、そのようなポケモンを探知する術（すべ）がないのだ。

「これを使うんだ」

そう言ってジュプトルが取り出したのは、一つの不思議玉だった。

「これは探知の玉。これを使えば他のポケモンの居場所がわかる。幸いこの近くにしか霰は降っていない。ならこの辺りにその現況がいるはずだ」

そう言いながら、探知の玉を使うジュプトル。それは一点の方向に向かって反応していた。

「よし、行くか」

ユウキを先頭に、探知の玉が示した方角に向かって走り出した。

少しの間走っていると、三匹の前には、一匹のポケモンがいた。雪のように白い大きな体に、腕と足は緑色――ユキノオーだ。

「こいつか！」

「先手必勝だ！　リーフブレード！」

ジュプトルは、自分の両腕にある葉っぱを刃のように鋭くし、ユキノオーに攻撃した。それに反応し、ユキノオーはウッドハンマーで対抗する。二つの技はぶつかり合ったが、すぐにジュプトルは攻撃を中断し、バックステップした。

「あのパワーはきついな……」

「なら私がやる！　火炎放射！」

灼熱の炎を放つリサ。だがそれはユキノオーから放たれる凍てつく吹雪によって相殺されてしまった。

「技自体の威力が強いな……」

「どうしよう……」

二匹が悩んでいるのをよそ目に、ユウキは一匹で作戦を練っていた。

（技自体のガチンコ勝負に勝ち目はない。なら補助技で撹乱して……いや、撹乱するにしても、俺達にそんなことが出来る技はない……なら動きを封じる……よしっ）

そうこうしている間に、ユキノオーは大量の鋭い葉っぱを放ってきた。葉っぱカッターだ。

「火炎放射！」

「リーフブレード！」

リサは火炎放射で葉っぱを炭にしてしまった。一方ジュプトルは、リーフブレードで、葉っぱを粉みじんにした。

「お前ら、目を閉じろ！」

ユウキの急な申し出に、二匹は半分反射的に目を閉じた。

「フラッシュ！」

それと同時に、ユウキは体から、眩しい光を放った。それをまともに見てしまったユキノオーは、目を押さえていた。

「電磁波！」

さらに追い撃ちをかけるかのように、ユウキは弱い電気をユキノオーに向かって放つ。それの効果で、ユキノオーは麻痺してしまった。

「今だ！」

「うんっ！　火炎放射！」

「任せろ！　エナジーボール！」

二匹はそれぞれの技を放つ。二つの技は途中で融合し、赤いエナジーボールになった。

体が麻痺し、なおかつ目もまだ見えない状況のユキノオーは、成す統べなく攻撃を喰らった。その威力に耐えられなかったか、ユキノオーはその場に倒れた。

「やったぁ！」

「おっ、霰も止んだな」

ジュプトルが空を見上げると、確かに霰は降り止んでいた。なんの対策も無く霰を受けていたせいか、三匹の体には、細かい傷が沢山ついていた。

「地味に痛たいよ……」

「ほらリサ、ジュプトル」

「すまないな」

ユウキは、バッグからオレンの実を取り出し、リサとジュプトルに渡した。

「ふぅ……」

軽くため息をしながら、ユウキはオレンの実をかじっていると、どこからか殺気に近い気配を感じた。

「……ジュプトル」

「わかっている」

「どうしたの？」

リサがそう言った刹那、どこからか、極太の光線が、地を這うかのように、ユウキ達に向かっていた。

「キャアァァ！！」

「ユウキ！」

「任せろ！　守る！」

ユウキはとっさに守るを発動させ、淡い緑色の壁を発生させた。その壁を盾にして、光線を防いだ。

「これは破壊光線か？」

ジュプトルが技の名前を予測していると、目の前に一匹のポケモンが現れた。黄色を基調とした大きい体に、翼の部分は緑に近い色をし、二本の触角があり、ドラゴンのようなポケモン、カイリューだ。

「随分大物が出てきたものだ……ユウキ、リサ、気を抜くなよ！」

「当然」

「わかったよ！」

ユウキは内心休む暇もないな……と思いながら、三匹はカイリューに向かって走り出した。

## 第八十二話　到達（後書き）

ユウキ
「休む暇もないな」

やっとここまで来たなぁ……もう少しでこの小説終わりだなぁ……

リサ
「うそっ！？」

だってもうすぐ終わるじゃん（汗）

## 第八十三話　意思（前書き）

第八十三話完成！

ユウキ
「連戦きついな……」

主人公が愚痴るな。では第八十三話をどうぞ！

# 第八十三話　意思

「いくぞ！　雷パンチ！」

「リーフブレード！」

二匹はそれぞれの得意技でカイリューに攻撃した。二つの技はカイリューに命中したが、ほとんどダメージはないようだ。

「効いていないの！？」

「カイリューのタイプはドラゴンと飛行。俺草タイプの技や、リサの炎タイプの技の威力は効果は薄い」

「ならどうするの？」

リサに聞かれたがいいが、ジュプトルは良い策が浮かばなかった。そうしている間に、カイリューはかなりのスピードで、ユウキ達に体当たりしてきた。ドラゴンダイブだ。

「フラッシュ！」

ユウキはフラッシュを使い、自分達の体を光で見えなくした。それが幸をそうし、ドラゴンダイブの狙いがそれ、ユウキ達に当たることは無かった。

「ならユウキに頑張って――あっ」

リサは途中で言葉を切った。またユウキに頼ったら確実に無理を

する。リサはそんなユウキの姿は見たくなかった。

（なら……私が頑張らないと……）

リサが意気込んでいると、カイリューは、スッと右腕を上げた。
刹那、カイリューの目の前から大波が発生し、カイリューはその波に乗った。

「なっ！」

「波乗りか！　ユウキ！　あれを打ち消すぞ！」

「わかった！」

ユウキとジュプトルは、それぞれ十万ボルトとエナジーボールで反撃したが、波乗りは消滅せず、ユウキ達に迫ってきた。

「ぐあっ！」

「ぐっ！」

波乗りはユウキとジュプトルに直撃した。だが二つの技で反撃したおかげが、相性の悪いリサには、波乗りは当たらなかった。

「ぐっ……」

いくら半減したとはいえ、あの波をもろに受けたユウキとジュプトルは、少し苦しそうだった。

（私が弱いせいで……ユウキが……ジュプトルが……）

「ユウキ、パワーが駄目ならスピードでいくぞ！」

「わかった！」

「「電光石火！」」

二匹は電光石火でカイリューの懐に潜り込もうとした。だがカイリューはそれに対抗するために、右足で地面を思い切り揺らした。そのせいで、二匹はバランスを崩し、転倒してしまった。

「ユウキ！　ジュプトル！」

転倒している隙をついて、カイリューは両腕に炎を溜め込み、ユウキとジュプトルを殴りつけた。炎のパンチだ。

二匹はその衝撃で吹き飛ばされ、木に激突した。

「ぐはっ……」

「ぐっ……」

微かな声で言う二匹。二匹の体は既にボロボロ。強敵二匹を連続で相手にしたのならなおさらだ。

（このままだと……ジュプトルが……ユウキが……いや……そんなの……いやぁぁ！！）

カイリューは止めを刺そうと、両腕で一つのエネルギー弾を作りだし、上空に向けて放った。刹那、そのエネルギー弾は無数の細かいエネルギー体になり、ユウキに降り注いできた。流星群だ。

「これは……マズイな……」

「ユウキとジュプトルは私が守る！！」

リサは身を呈して流星群から二匹を庇った。もともと威力の高い技なので、その攻撃だけで、リサの体はボロボロになっていた。

「リサ……！」

「――ぅぅうあああ！！」

いつも聞かないリサの雄叫びを聞き、ユウキは少し驚いたが、それは違う驚きに変わった。リサは雄叫びを上げた直後、リサの体がオレンジ――といってもリサの体はオレンジだが、いつもより、更にオレンジ色になった。刹那、リサは上空にエネルギー弾を放った。それは先程の流星群と同じようにバラけ、同じようにカイリュー向かって降り注いだ。

「馬鹿な……リサが……流星群を使った？」

「あれは……おうむ返しか！？」

ジュプトルの言葉にユウキが反応する。おうむ返しは、相手が最後に使った技を、そのまま返す技。その効果で、先程の流星群を、カイリューに向けて放つことに成功したのだ。

そのダメージは大きかったか、カイリューはフラフラしていた。

「私は負けられないの！　火炎放射！！」

リサは火炎放射をカイリューに向けて放つ。だがその威力はいつもの火炎放射より、格段に威力が上がっていた。

「猛火か……」

ユウキが、一匹でなるほどと納得する。猛火は体力が少なくなると、炎タイプの技の威力が上がる特性だ。だがそれが発動するには、前述したように、体力がすくないとならない。事実、リサは立っているのも困難を極めるほど、ダメージが溜まっていた。

「ユウキ……」

「ジュプトル！　リサが作ったチャンスを無駄にするな！」

「わかっている！」

二匹は倒れそうなリサを心配したが、チャンスを無駄にしまいとカイリューに突撃していった。

「ボルテッカー！！」

「リーフブレード！！」

ユウキは体から体力の電気を放出しながら、ジュプトルは腕の葉っぱを刃のようにしながら、カイリューに突撃していった。二つの技が決めてとなり、カイリューはその場に倒れた。

「終わったか……」

「リサ！」

ユウキは一目瞭然にリサのもとに駆け寄る。リサは座ったまま、疲れたせいか、寝息を立てていた。

「やれやれ……大丈夫みたいだな」

ジュプトルは少し呆れたようなそぶりをしながら、ユウキにオレンの実を二つ手渡した。

「すまない」

ユウキは、オレンの実の一つは自分が食べ、もう一つは、寝ているリサに食べさせた。その効果で、二匹の傷はだいぶ軽くなった。

「仕方ない、少し休むか？」

ジュプトルの申し出に、ユウキは首を横に振った。

「いや、もう時間がない……よっと」

ユウキはリサをおんぶした。リサの体温や、体のフワフワした毛が、背中越しから、ユウキの体に伝わった。

「わかった。なら急ぐぞ」

ユウキとジュプトルは、古代の遺跡を目指して歩きだした。

しばらく歩いていると、ユウキにおぶられていたリサの意識が戻った。

「うぅん……あれ、ユウキ？」

「大丈夫か？」

「ユウキ……？　あれ！？　なんで私！？」

「あんまり動くな。まだ無理はするな」

「……うん」

ユウキに促され、頬を紅潮させながら、リサは頷いた。

そんな会話をしていると、三匹の前には、石で出来た建造物が目に入った。そこには、壁に三匹が見たことのないポケモンが描かれていた。

「ここが古代の遺跡か……」

ジュプトルが独り言のように呟く。その絵の中には、未来世界で会った、ディアルガの絵もあった。

「虹の石船を探すぞ」

ユウキ達は辺りを捜索すると、目の前に、石で出来た、神殿のような物があった。三匹はその階段を上る。頂上につくと、そこには不思議な模様と、石碑が存在していた。

「ここが頂上か……」

「みたいね……あっユウキ、もう大丈夫よ」

「そうか？」

リサはユウキの背中から降り、神殿を見渡していると、あるものを発見した。

「この模様の真ん中……窪みがあるよ？」

「……ん？　この石碑は？」

「どうしたユウキ」

三匹は模様から、石碑の方に注目した。そこには足型文字とは異なった文字で書かれていた。

「これはアンノーン文字だな」

「読めるの？」

「任せろ……なるほど、わかったぞ。どうやらここ自体が、虹の石船のようだ」

ジュプトルの説明に、二匹は驚いた。

「この神殿がか？」

「そのようだ、あそこに窪みがあるな」

ジュプトルの視線を追い掛けるかのように、二匹はその窪みに注目する。

「そこに遺跡のかけらをはめ込む……そうすれば虹の石船が起動する……あの石碑にはそう書かれている」

「わかった！　やってみるね！」

「そこまでだ！！」

遺跡のかけらを埋め込もうとすると、どこからか聞いたことのある声が聞こえてきた。刹那、ユウキ達は、あるポケモン達に囲まれた。紫色の体に、目はダイヤモンドのようなポケモン、ヤミラミ――ユウキ達にとって、二度と見たくないポケモンの一匹、そして……

「久しぶりだな」

もう一匹、ポケモンの中で最も会いたくなかったポケモン、体は漆黒のように黒く、貫禄のある体に一つ目のポケモン――ヨノワールが、ユウキ達の前に現れた。

「なぜここに！？」

冷静なジュプトルも驚いている。それもそのはず、ヨノワールが、ここに来る理由が、ジュプトルには皆目検討がつかなかったのだ。

「なに、ディアルガ様にここに飛ばしてもらったのだ。お前達は、必ずここにやってくるはずだからな」

「くっ……」

ジュプトルは苦虫をかみつぶしたような顔をしている。まさかここで宿敵のヨノワールが現れるとは、ジュプトルも予測していなかったのだ。

「ヤミラミ！　こいつらを時空ホールに連れていけ」

ヤミラミ達は、ヨノワールの命令にしたがい、ユウキ達を、先程ユウキ達が上ってきた階段の、逆の階段から下に下ろした。

下に下りると、ユウキ達の前には、空間が捻れたかのような穴があった。時空ホールだ。

「あっ時空ホール！」

「こいつらを時空ホールに叩き込め！」

「させるか！　ジュプトル！」

「任せろ！」

ユウキとジュプトルは、雷パンチ、リーフブレードでヤミラミ達を吹き飛ばした。

「抵抗するか。ならば仕方ない……」

ヨノワールはユウキ達の前に出て、戦闘体制をとった。

「この場でお前達を倒して未来に連れていっても同じこと。この圧倒的に不利な状況下で……お前達はどうする」

「くっ……」

ジュプトルは少したじろぐ。相手はおそらく自分より強いヨノワールに、ヤミラミが六匹。戦力的には厳しい状況だ。

「くだらんな。どんな状況下であろうが、ヨノワール、俺達はお前達に勝つ!!　絶対にだ!!」

ユウキはヨノワールにそう言い切る。それを聞き、ジュプトルの迷いは消えた。

「よかろう。この状況下で、お前達がどれくらい抵抗するか……見せてもらおう!!」

この瞬間、ヨノワールとの因縁の戦いの幕が切って落とされた。

## 第八十三話　意思（後書き）

ユウキ
「ヨノワール！！」

リサ
「まさかヨノワールが！」

ジュプトル
「絶対に勝つぞ！」

みんな頑張って～

## 第八十四話　未来からの刺客！　ＶＳヨノワール　前編（前書き）

第八十四話完成！

ユウキ
「ヨノワールとのバトルか……」

ジュプトル
「ついに決着がつけられるな」

でら第八十四話をどうぞ！

# 第八十四話　未来からの刺客！　ＶＳヨノワール　前編

「ヤミラミ達よ！　やれ！」

『ウィィィ！！』

ヤミラミ達は、両手に邪悪な爪を装備し、ユウキ達に乱れ引っかきで攻撃してきた。

「フンッ！」

ジュプトルはそれを悠々と回避し、リーフブレードをヤミラミ達の一匹に向けて放つ。そのたった一発の攻撃で、そのヤミラミは倒れた。

「……拍子抜けね」

「いや……おそらく……」

「自己再生！」

ヤミラミは自分で自分の体の傷を癒し、立ち上がってきた。

「……面倒な相手だな」

「気をつけろ！　相手はヤミラミだけじゃない！」

「その通りだ。シャドーボール」

平然を保ち、戦況を見ていたヨノワールは、漆黒の球体を発生させ、ユウキに向けて放った。

「アイアンテール！」

ユウキはアイアンテールで、シャドーボールを跳ね返そうとしたが……

「ぐっ……ぐあっ！」

最初は耐えていたが、だんだんと押され、最後にはパワー負けしてしまった。

「ユウキ、大丈夫！？」

「嗚呼……！？　リサ！　後ろ！」

えっ？　とリサは後ろを見たがもう遅い。ヤミラミがリサの後ろから、乱れ引っかきで攻撃しようとしていた。

「リサ！」

ユウキはとっさにリサを突き飛ばした。それが上手くいき、リサは攻撃を受けなかったが、かわりにヤミラミの爪は、ユウキの右腕を引き裂いた。鋭い痛みがユウキの右手を襲った。

「ぐっ！」

ユウキは痛みで悶絶した。痛みに耐えながらも、ユウキは戦況を確認する。リサはヤミラミの連携に悪戦苦闘。ジュプトルは多彩な

攻撃を仕掛けるも、ヨノワールにはあまり通用していないようだ。

（ヨノワールだけなら俺達三匹でいける……だがヤミラミが厄介だ……生半可な攻撃だと自己再生されるのが関の山……なら一発でこう範囲に出来、なおかつ威力の高い技なら……）

ユウキはここで一つの作戦を思い付く。それを実行に移すために必要な道具があるか、ユウキはバッグの中身を確認する。今見ているのは、色々な効果がある種。必要な道具があることを確認すると、ユウキは二匹を呼んだ。

「どうしたユウキ？」

「作戦だ。いいか……」

ユウキは作戦を二匹に伝えると、リサに一つの種を渡した。

「いけるな？」

「うんっ！」

「やつらに猶予を与えるな！　ヤミラミ達よ！」

『ウィィィ！！』

ヨノワールの指示を聞き、ヤミラミ達は一斉にユウキ達に攻撃を仕掛けてきた。

「守る！」

ユウキはヤミラミ達の攻撃を、守るで悠々と防いだ。

「作戦開始……フラッシュ！」

ユウキは体から眩しい光を放つ。それの効果で、ヨノワールとヤミラミ達は、一瞬ユウキ達の姿が見えなくなった。

「くっ！　小細工を！」

「そうかな？」

ユウキはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。ヨノワールはハッとして上空を見ると、ジュプトルに手伝ってもらって高くジャンプした、リサの姿があった。

「ヤミラミ達よ！　上だ！」

「遅いよ！　ファイヤーレイン！」

リサは上空から、大量の火の粉を小さく、より鋭くしたような炎を、地上に向けって放った。ヤミラミ達はそれを受け、次々と倒れていく。ヨノワールも、その熱で、少し顔を歪めている。

一方ユウキとジュプトルは、ユウキは守るで防御、ジュプトルは穴を掘るで地中に潜り、炎が直撃することはなかった。

「くっ……なんだこの威力は……そうか、ユウキ。貴様、先程リサに渡したのは……」

「察しの通り、猛撃の種だ」

猛撃の種は、食べると攻撃と特攻の威力が飛躍的に上がる。それの攻撃で、リサの攻撃一発で、ヤミラミ達は全滅したのだ。

「その頭脳はポケモンになっても変わらないということか……」

ヨノワールの発言を聞く限り、ユウキは昔から頭脳戦が得意だったようだ。

「よかろう。私の本気を見せよう！」

そう言いながら、ヨノワールは体の周りに、火の玉のようなものを複数作りだし、ユウキ達に放った。鬼火だ。

「エナジーボール！」

複数の火の玉に対し、ジュプトルがエナジーボールで相殺する。その直後、ジュプトルは電光石火でヨノワールの懐に飛び込んだ。

「リーフブレード！」

「ふん、炎のパンチ」

一瞬の隙をついたつもりのジュプトルだったが、それはヨノワールに見透かされていた。ジュプトルにとって相性の悪い、炎のパンチを使って、ジュプトルを殴りつけた。

「ぐっ……」

相性が悪いせいか、ジュプトルのダメージはなかなか大きかった。

「止めだ……ぐっ！？」

止めを刺そうとしたヨノワールに、ユウキとリサが接近し、それぞれ十万ボルトと、火炎放射を放ち、ヨノワールの攻撃を止めた。

「面倒だな……なら本領発揮とするか。トリックルーム！」

ヨノワールがそう叫ぶと、ヨノワールとユウキ達の周りを、四角い部屋のような物によって囲まれた。

「なんだこれは？」

ユウキが周りをキョロキョロする。だが、これといってなにかおこる訳ではなかった。

「なにも起きないね……」

「ユウキ！　リサ！　油断するな！」

「その通りだ……」

その言葉を最後に、ヨノワールの姿が、ユウキ達の前からフッと消えた。

「えっ？」

「炎のパンチ。雷パンチ」

姿が消えたヨノワールは、突如ユウキ達の後ろに現れ、右手に炎、左手に雷を溜め込み、右手でユウキとジュプトル、左手でリサを殴

りつけた。

「うぅ……急に後ろに……」

「どうなってる？」

「トリックルームのせいだ。これが有る限り、速い者は遅く、遅い者は速くなる、つまりスピードがあべこべになるのだ……」

ジュプトルは少し来るしそうに説明する。ユウキとリサは、なるほどと納得したか、同時にかなりまずいと判断した。

「おしゃべりする余裕があるのか？」

そう言いながら、またしてもヨノワールの姿が消え、ユウキ達の後ろに現れた。

「シャドーボール」

「させるか！　守る！」

ヨノワールのシャドーボールを、ユウキの守るによりギリギリ防御に成功する。だが状況が好転した訳じゃない。

（俺達はどちらかというとスピード型……この技との相性は最悪だ……ならこの空間を破壊する方法はないのか……？）

ユウキが必死に打開策を考えるが、何一つ良い案は浮かばなかった。

「諦めろ。お前達に勝ち目は無い」

「諦めるか！　リーフブレード！」

「私だって！　電光石火！」

それぞれの技を発動させ、ヨノワールに向かっていく二匹だが、そのスピードは見るからに落ちていた。トリックルームの効果のせいだろう。

「遅い」

またしてもヨノワールは、目にも留まらぬ速さで消え、ジュプトルとリサの後ろに回り込んだ。

「フンッ！」

「ぐあっ！」

「キャア！」

ヨノワールは、両腕で、二匹を地面にたたき付けた。

（このままだとやられる！　考えろ！　やつの行動パターンは？癖は？　使える技は？　すべてを考慮して作戦を考えるんだ！）

ヨノワールの行動パターンの分析を始めるユウキ。だがその間にも、ヨノワールは攻撃の手を緩めない。

「シャドーボール」

「くっ……エナジーボール！」

「火炎放射！」

漆黒の球体に、二匹の技をぶつけてなんとか相殺出来た。

「パワーじゃ勝てないのにスピードもダメなんて……」

「諦めるな！必ず突破口はある！」

（ジュプトルの言う通りだ……必ずなにか……そうだ！　ヨノワールのバトルには法則みたいなものがある……これなら……）

ユウキは一つ一つ考えた。ヨノワールは、必ずユウキ達の後ろから攻撃を仕掛けていた。必ずとは言いすぎかも知れないが、信憑性は高い。

「リサ、ジュプトル、こっちに来てくれ」

ユウキは、リサとジュプトルを呼び寄せ、一つに集まった。

「諦めたか？」

「どうしたのユウキ？」

「……」

「まあいい。終わりにしよう！

そう言うと、ヨノワールの姿が消えた。

（……ここだ！）

両腕に電気を溜め込み、後ろを振り向くと、シャドーボールのエネルギーを溜めているヨノワールの姿があった。

「終わりだ！」

「させるか！」

ヨノワールの放つシャドーボールに、ユウキは右腕に雷の剣を作りだし、シャドーボールを切り裂いた。

「うらぁ！」

「ぐっ！」

さらに、開いた左手で、ヨノワールの体を切り付けた。

「貴様！」

「さすがユウキ！　……えっ？」

リサは気が抜けるような声を出してしまった。なぜなら――

「雷鳴剣が……二本！？」

そう、ユウキは雷鳴剣を、両腕に、双剣のように作り出していたのだ。

## 第八十四話　未来からの刺客！　ＶＳヨノワール　前編（後書き）

リサ
「あれはなんなの？」

新しい雷鳴剣

リサ
「二本あった……ユウキは大丈夫なの？」

それは次回

## 第八十五話　未来からの刺客！　ＶＳヨノワール　後編（前書き）

第八十五話完成！

リサ
「ヨノワール強いよ……」

ジュプトル
「さすがと言うべきか……」

なんかネガティブ……では第八十五話をどうぞ！

# 第八十五話　未来からの刺客！　ＶＳヨノワール　後編

「ユウキ……？」

リサが少し不安そうな顔で、ユウキを見ていた。それもそのはず、ユウキは雷鳴剣を両手を使い、一本作っていたのだ。それを、一本の時より短いが、二本も作り出したのだ。不安にもなる。

「……答が見つかった……これが完成系か……」

ユウキの雷鳴剣は、レイドのをコピーしたようなものだ。だから取得出来たものの、自分には合っていなかった。だから反動が来ていたとユウキは推測した。

「ユウキ、腕は大丈夫か？」

「問題無い」

実は、ユウキは前にもこれを試していたのだ。それはソーマとの戦いが終わり、雷鳴剣の危険さに気づいた時だ。だがユウキには、雷鳴剣の力が必要だった。だから反動の少ない方法を思案し、実行したが、結局上手くいかず、昨日ジュプトルと話すまで忘れていた。

ジュプトルと話したことで、ユウキはこの二本の雷鳴剣を思いだし、ぶっつけ本番だったが、試してみた。前には出来なかったが、時の歯車防衛戦や、未来世界での経験が生かされたのだろう、こうして作り出すことに成功したのだ。

「雷鳴剣・双頭竜……とでも名付けるか……いくぞ！」

ユウキはそう言いながら、ヨノワールに突っ込んで行った。

「ユウキ、無謀だよ！」

「リサの言う通りだ！」

そう言いながら、ヨノワールはユウキの後ろに回り込んだ。だが、ユウキはそれを読んでいた。

「シャドーボール」

ユウキの背後からシャドーボールを放ったヨノワールだったが、ユウキは上手くしゃがみ込み、シャドーボールをかわした。

それを確認すると、ユウキはヨノワールの後ろに回り込んだ。

「どこに行った！？」

「ダブルブレード！」

ユウキは雷鳴剣を一つに重ね合わせ、ヨノワールの背中を切り付けた。

「ぐっ！」

「ソードダンス！」

悶絶しているヨノワールに、さらに追い撃ちをかけるが如く、ユウキは二本の雷鳴剣でヨノワールの体を切り付ける。鏡面刹より威力は低いが、手数は確実に多い。

「調子に乗るな！　悪の波導！」

ヨノワールは素早いスピードで、螺旋状のエネルギー波を放った……はずだったが、ヨノワールのスピードは、先程より落ちていた。トリックルームの効果が切れていたのだ。

ユウキは悪の波導を、雷鳴剣で防ぐと、リサとジュプトルのもとに駆け寄った。

「今がチャンスだ。一気に攻め込むぞ」

「ダメだユウキ。その間にまたヨノワールはトリックルームを使う」

「なに、俺に策がある」

ユウキはニヤリと笑いながら言った。

「なにを企んでいるかは知らんが……まあいい、トリックルーム！」

ユウキ達の予想通り、ヨノワールは再びトリックルームを使ってきた。

「今だ！」

「うんっ！　オウム返し！」

リサがそう叫ぶと、トリックルームが消滅した。突然のことに、ヨノワールはたじろいでいた。

「なるほど、考えたなユウキ。トリックルームにはトリックルームか」

ジュプトルは感心したかのように言う。トリックルームを破るには、時間が経つか、もう一度トリックルームを使うしかない。それを考え、リサにオウム返しを頼み、トリックルームを破ったのだ。

「一気に攻め込むぞ！」

「うんっ！」

「任せろ！」

一気に攻め込めうと、三匹は一斉にヨノワールのもとに駆け出す。それに対し、ヨノワールは技を放つためのエネルギーを溜めている。

「ダブルブレード！」

「火炎放射！」

「リーフブレード！」

「させん！　ギガインパクト！」

三匹の攻撃は、ヨノワールのギガインパクトとぶつかり合い、大爆発を起こした。

煙りが晴れると、苦しそうなユウキとジュプトル、二匹より少し傷が少ないヨノワールの姿があった。

「ぐっ……」

「貴様達と私の差は歴然だ。諦めろ」

「誰が！　リーフブレード！」

「シャドーボール」

リーフブレードで攻撃しようとするジュプトルに、シャドーボールを放つことで、出端（でばな）をくじいた。

「ジュプトル！」

「大丈夫！？」

「なんとかな……」

口では大丈夫と言っているジュプトルだが、既に限界が近づいてきていた。

「悪の波導」

「させるか！」

ヨノワールの悪の波導に対し、ユウキは雷鳴剣をクロスに交差させ、悪の波導を止めた。

「うらぁぁ！」

最初は押されていたが、なんとかユウキは、悪の波導を防ぐことに成功した。

「火炎放射！」

「シャドーボール」

リサはユウキ達に注意が向いている隙を突いて、ヨノワールに攻撃を仕掛けたが、ヨノワールは甘くなかった。とっさにヨノワールは火炎放射に反応し、シャドーボールで相殺した。

「影打ち」

技を出し終えたヨノワールは、リサの前からスッと消えた。

「えっ!?　トリックルームは使ってないのに!?」

「気合いパンチ」

「キャアァァァ!!」

ヨノワールは、リサの影から出てくると、気合いパンチでリサの背中を殴りつけた。リサはその反動で吹き飛ばされ、壁に激突した。

「リサ!　大丈夫か!?」

「なんとか……」

リサの体力も限界が来ているようだ。ジュプトルも既にフラフラ、まだ余裕があるのはユウキだけだ。

(どうする……やつはパワーも高いのもあるが、防御能力が高い……)

そう、ヨノワールという種族は、もともと防御能力が高いのだ。
そこに加えて、目の前のヨノワールは攻撃が得意。なかなかダメージを与えることが出来なかった。

（やつの一瞬の隙を突いて、なおかつ確実にダメージを与える方法は……）

「そろそろ終わりにしよう！」

そう言うと、ヨノワールは自信の腹の口を開いた。ユウキとリサは、ヨノワールの腹に、口があるとは知らなかったからか、驚いていた。

「お腹の口が開いてる！？」

（なにか技をやるのか……腹の口？　外側は頑丈だが……中は脆い……ならあそこに技をぶち込めば……いや、奴の使う技によって上手くいくかもしれない……）

「終わりだ！」

そう言いながら、ヨノワールは今までより巨大で、威力の高いシャドーボールを放ってきた。

「どうしよう！？」

「……あれならいける！　二人共、あれを弾き返す！」

「なにっ！？」

さすがのジュプトルも驚いている。自分も結構無茶をする方だが、ここまでの無茶はしたことがない。

二匹が驚いている間にも、シャドーボールは迫ってきている。やるしかないと、リサとジュプトルは決意した。

「リサから頼む！」

「うんっ！　火炎放射！」

まずリサが、火炎放射をシャドーボールにぶつけ、勢いを緩めた。

「ジュプトル！」

「任せろ！　リーフブレード！」

次にジュプトルがリーフブレードで、シャドーボールの勢いをほぼ完全に止めた。

「ユウキ！」

「いくぞ！」

最後にユウキは、雷鳴剣の一部の雷をしっぽに回し、シャドーボールを弾こうとした。

ジュプトルもユウキも、シャドーボールがそれぞれぶつかっている場所のダメージが悪化していたが、ジュプトルの特性、新緑が発動したおかげか、シャドーボールを打ち返すことに成功した。

「なにっ！？　グアァァァァァ！！」

シャドーボールはヨノワールの口から体内に入り、致命的なダメージを与えることに成功した。

「あと一息！」

「頼む……」

体力の限界がきたか、ジュプトルはその場に座り込んだ。ユウキはリサにジュプトルを任せ、ヨノワールに止めを指しに出た。

「終わりだ！　クロスブレード！！」

ユウキはフラフラしているヨノワールの腹部に、×の形に切り裂いた。そこで限界がきたか、ヨノワールは前のめりに倒れた――

## 第八十五話　未来からの刺客！　ＶＳヨノワール　後編（後書き）

ユウキ
「倒した……」

ジュプトル
「ついにヨノワールを……」

お疲れ様～

## 第八十六話　決別（前書き）

第八十六話完成！

ユウキ
「やっとか」

文化祭が終わったからね……じゃあ僕疲れたから寝る

ユウキ
「早過ぎだろ……」

リサ
「じゃあ……第八十六話をどうぞ！」

# 第八十六話　決別

「……やったの？」

恐る恐るリサは呟く。目の前のヨノワールは、倒れたまま動くそぶりを見せない。

「勝った……ヨノワールに……」

ジュプトルもまだ実感が湧かないか、あまり声を荒げずに言う。

「ヨノワール様が……負けた！？」

最後の攻撃の爆発音で、何匹か目を覚ましたヤミラミ達が、悲鳴に近い声で叫ぶ。これがきっかけで、ユウキ達は、ヨノワールに勝ったことを実感した。

「勝った！　私達勝ったのね！」

「そんな……なら俺達ではあいつらに勝てない……逃げろーー！！」

そう言うと、ヤミラミ達はまだ意識が戻らないヤミラミを抱えながら、時空ホールへと逃げて行った。

「フン、ずいぶんと恵まれた仲間だな」

ジュプトルはそう言いながら、ヨノワールのもとに歩み寄った。少し言いすぎじゃないかなとリサは思ったが、ここまで受けた仕打ちを考えると、仕方ないことかと判断した。

「ぐっ……貴様ら……」

ジュプトルの言葉に、低い声で反応するヨノワール。まだ意識は繋ぎ止めてるようだ。

「リサ、神殿の頂上に行って虹の石船を起動してきてくれ。俺とユウキで、ヨノワールを見張ってる」

「わかった」

リサは神殿の頂上へと歩きだした。残されたユウキとジュプトルは、ヨノワールがなにか仕出かすかもしれないと、警戒していた。

「お前達……」

「動くな！」

今まで動かなかったヨノワールが、急に動きだし、ジュプトルは軽くリーフブレードで攻撃した。

「ぐっ……貴様達……本当にいいのか……？　歴史を変えたら……我々未来のポケモンは……消えるのだぞ……」

「なにっ！？」

突然のことに、ユウキは動揺を隠せなかった。

「私だけじゃない……お前達も……消える……それで……いいのか……？」

「ふざけるな……ジュプトル！」

ユウキは、いつもは見せない、弱気な、誰かに救いを求めるような目でジュプトルを見た。

「……本当だ」

長い沈黙の後、ジュプトルはそう呟いた。ユウキはそれを聞き、体から力が抜けるような感覚に襲われた。

「歴史を変えれば……俺達は消える。でも……それで良いんだ。それで時が動き、みんなが平和になるなら……」

「……ハハッ……冗談きついな……」

ユウキはヨロヨロと後ろに下がりながら言った。こんな光景をリサが見たらなんと言うだろう。

「ユウキ、お前も俺と同じ気持ちだった。その覚悟で、俺達は未来から来たんだ。ただ……今のお前には、過去の記憶が無い。だから急にこんなことを言われても戸惑うと思う」

ジュプトルの言う通り、ユウキの頭の中はゴチャゴチャになり、正常な判断は困難を極める状況になっていた。

「だが……俺達に選択肢は無い。このまま放っておけば時は崩壊し……星の停止を迎える。世界を平和にするには……俺達は消える運命だ」

ジュプトルの説明も、ユウキの頭には半分も入って無かった。自分は消える運命……それを聞いてから、全く頭から離れないことがあったのだ。

（俺は消えることを覚悟で……過去に来た……俺達なやらなくては……時の破壊は防げない……でも！）

「……俺達に失う物は無かった。でもお前は……違う」

ジュプトルもユウキの気持ちはわかっていたのだ。過去に来てから、ユウキとジュプトルには、決定的な差が生まれていたのだ。

（俺が消えたら……リサはどうなる？）

そう、それがさっきから頭を離れないこと。自分が消えたら、またリサは孤独になる。ユウキには、リサが悲しむことが我慢出来なかった。

「……くそがっ！！」

ユウキは近くにあった岩を、思い切り殴りつけた。拳にジンジンと痛みがくる。だがそんなことは、ユウキには関係無かった。

（俺が消えるか……時の崩壊を迎えるか……そんなこと……俺は決断するのか……）

一方、なにも知らないリサは、神殿の頂上で、虹の石船を起動させようとしていた。

「この窪みに遺跡のかけらを……よいしょっと」

リサは窪みに、遺跡のかけらをはめ込んだ。刹那、窪みの周りに描かれた不思議な模様が光だした。

「わっ動いた！」

リサは虹の石船が起動して、喜びと驚きを覚えた。　虹の石船が動き出したことは、ユウキ達にも伝わっていた。

「これは……虹の石船が起動したな」

「……うおぉぉぉ！！」

虹の石船に気を向けていると、ヨノワールは低い唸り声を上げながら、ユウキに炎のパンチで攻撃した。

「ぐっ！」

「歴史は！！　変えさせん！！　シャドーボール！！」

ユウキは倒れ込みながら、突然のことに目を閉じた。だがいくらたっても攻撃は来ない。目の前を確認すると、攻撃の盾となっているジュプトルの姿があった。

「ユウキを庇ったか！　ちょうど良い！　お前から消す！」

「うっ……うおぉぉぉぉ！！！」

ジュプトルはなんとか立ち上がり、ヨノワールの懐に飛び込むと、両腕を掴み、時空ホールへと押し込もうとした。

「なっ！　ジュプトル！」

「なにをする！　離せ！　離せジュプトル！！」

「ヨノワール……！　このまま……貴様と共に未来に帰る！」

ジュプトルの決死の行動に、ユウキはただ驚くことしか出来なかった。

「ユウキ！　後は頼む！」

そう言いながら、ジュプトルはリーフブレードで、自分のトレジャーバッグの紐を切った。落ちたバッグの中から、五つの歯車がこぼれ落ちた。時の歯車だ。

「みんな！　虹の石船が動き……出した……えっ！？どうしたの！？」

あまりにも予測していない状況に、リサは動揺を隠せなかった。

「リサ、ここでお別れだ！　俺はヨノワールを道連れに……未来に帰る！」

「えぇっ！？」

「もうここには二度と戻れないだろう。ユウキのこと……頼むぞ！！」

ジュプトルの覚悟は、リサにも伝わった。だがリサにはそれを現実として受け止めたく無かった。

「私に……ジュプトルの代わりなんて……出来ないよ……」

リサは目尻に涙を溜めながら説得する。それが意味を成さないとわかっていても、リサは言わざるおえなかった。

「リサなら出来る。お前達は……最高のコンビだ」

「離せ！　離すんだぁぁ！！！」

「静かにしろ！　もうすぐだ！」

ヨノワールは必死の抵抗を見せるが、ジュプトルはがっちりと腕を掴んでおり、ヨノワールの抵抗は意味を成さなかった。

「ユウキ、俺はお前に会えて幸せだった。別れは辛いが……後は頼む」

「ジュプトル……」

今まで迷っていたユウキだったが、この時決意した。自分は消えても……リサの住む世界が平和になるなら……と必死に自分に言い聞かせながら。

「待たせたな！　ヨノワール！！」

「貴様ぁぁぁ！！！」

ヨノワールは最後の抵抗を見せるも、ジュプトルには通用せず、ジュプトルとヨノワールは、時空ホールの中へと消えていった。

「ジュプトル……どうして……」

「ジュプトル……」

二匹は悲しみに暮れていると、それに反応するかのように、虹の石船にの起動音が大きくなった。

「ジュプトル……私……」

先程とは違い、涙を流しながら言うリサ。前は敵だったが、今では頼もしい仲間だった。悲しくないわけがないのだ。

「行かなくちゃ……ジュプトルのためにも……」

「……嗚呼」

ユウキは軽く返事をすると、時の歯車を回収した。

「ユウキ、必ず時の崩壊を防いで、ジュプトルのいる未来を、幸せな世界にしようね」

「……そうだな」

ユウキの言葉は、歯切れの悪いものだった。時の崩壊を防げば、未来は変わり、ジュプトルは消滅する。そして、それは、ユウキにも起こること――

「ユウキ、ジュプトルが最後に言ったこと……別れは辛いって……その気持ちわかるよ。ジュプトルは、ユウキと別れることが……凄い辛かったんだと思う……」

リサは、ユウキのことを案じて、心配していた。ユウキは、内心リサの言葉に少し否定していた。

（……あれは俺とジュプトルじゃなくて、俺とリサのことを言ったんだ……いずれ来る……俺とリサの別れを案じて……リサといられるのも……これが……最後……）

ユウキは今までに無いくらいの喪失感を抱いていた。

「ユウキ、ジュプトルのためにも行こう！　時限の塔に！」

「……嗚呼」

リサは神殿の頂上へと向かっていった。一方ユウキは、少しその場に立ちすくしていた。

（俺は……ん？　これは……）

ユウキは、ジュプトルのバッグから、銀色のブレスレットを見つけた。

「こいつは……ジュプトルのブレスレット……そういえば腕にしてなかったな……」

ユウキはそれを少し見つめると、自分の腕にはめ込んだ。ジュプトルのだからか、少し大きかったが、なんとかつけることが出来た。

（ジュプトル……俺はやってみせる……お前のために……そして……リサのために……）

ユウキはそう決意し、リサの後を追い掛けた。

## 第八十七話　時限の塔（前書き）

第八十七話完成！

ユウキ
「やっとか」

そういうなよ……では第八十七話をどうぞ！

## 第八十七話　時限の塔

二匹はそれぞれ複雑な思いを抱きながら神殿の頂上に登ると、虹の石船の起動音が大きくなっていた。

「音が大きくなってる！」

「動きそうだな。早く乗るぞ」

ユウキの声のトーンは少し低い。リサはそれが気にかかったが、とりあえず虹の石船に乗ることにした。

虹の石船に乗ると、不思議な模様が描かれている部分が空中に浮かび、時限の塔へ向かって動き出した。虹の石船が通った所には、虹がかかっていた。虹の石船と呼ばれる所以（ゆえん）はこれだろうなとリサは思った。

「ユウキ！　時限の塔よ！」

ユウキは、リサの目線を追い掛けると浮島に佇む時限の塔が目に入った。

（時限の塔……か。あそこに時の歯車を納めれば……俺は……いや、今はそんな私情を挟んでる場合じゃないな……）

そんなことをボンヤリと考えていると、ドスンと音を立てて、虹の石船は止まった。

「大きいね……」

「そうだな……なんだあれは？」

ユウキは時限の塔を見て少し驚いた。塔の頂上が赤く染まっていたのだ。

「なんなのかな……いや、今は急がないと！」

「そうだな……よし、行くか！」

ユウキとリサは気合いを入れ直し、時限の塔の内部へと入って行った。

塔の内部はとても広く、二匹はその広さに驚いていた。

「凄い広い……キャア！」

突如地面が揺れた。リサは突然の地震に驚き、ユウキにくっついた。

「なんだ今のは……もしかしたら……時限の塔の崩壊が始まっているのか？」

ユウキは冷静に分析していると、リサは少し目に涙を溜めながら、ユウキの顔を見た。

「ねえ、収まった？　収まったよね？」

「みたいだな」

ユウキは少し頬を紅潮させながら、ジュプトルが言ったことを思い出していた。あちこちで時が止まりだしたのは、時限の塔が崩壊し始めたからとジュプトルは言っていた。

ならボヤボヤしている場合じゃないとユウキは思った。

「のんびりしていられないな……リサ、急ぐぞ」

「うん！」

二匹は頷き合い、お互いの決意を確認すると、歩みを進めていった。

「それにしても、結構進みづらいね……」

リサは床に開いた穴をジャンプして超えながら言った。崩壊が始まっているからか、壁や床が壊れていたり、瓦礫が道を塞いでいたりなど、なかなか進めなかった。

「そうだな……」

そう言いながら、ユウキは目の前の道を塞いでいる瓦礫を、アイアンテールで粉々に粉砕した。

「でもさユウキ、なんで時限の塔は崩壊し始めたのかな？」

リサの言葉に、ユウキは言葉を詰まらせた。そういえばジュプトルもそのことについては何も言っていなかった。だからユウキもその理由は知らず、結果的にリサの問いには答えられなかった。

「さあな……！？　危ない！」

ユウキはとっさにリサを抱え込みながら地面に転がった。先程リサがいた場所は黒く焦げていた。おそらく炎系の技が当たったのだろう。

「大丈夫か！？」

「うっうん」

リサは顔を真っ赤にしながら目を逸らした。ユウキはそれを尻目に、攻撃してきた相手を見た。青を基調とした体に真っ赤な翼、鋭

い牙があるポケモン……ボーマンダだ。

「こいつは厳しそうだな……リサ、気合い入れていくぞ」

ユウキはボーマンダから放たれる気迫に少し押されてしまったが、自分は一匹じゃない。自分には最高のパートナーがいると考えると、自然と安心した。

「任せて！」

リサは頷きながら、ボーマンダに火炎放射を放ったが、ボーマンダは空中に飛び上がることで、火炎放射をかわした。

「面倒だな……十万ボルト！」

ユウキは鋭い稲妻をボーマンダに放ったが、ボーマンダはそれに対して灼熱の炎を放ってきた。火炎放射だ。

始めはお互いの技は同等くらいの威力だったが、だんだん火炎放射が押していき、最終的には、十万ボルトを破った。

「ふん、電光石火！」

ユウキは火炎放射をうまくかわし、ボーマンダの懐に飛び込んだ。

「雷パンチ！」

ユウキは右手に雷を溜め、体重を乗せて渾身のストレートを、ボーマンダの腹部に当てた。火炎放射を避けられたことに気を取られていたボーマンダは、突然のことに反応できず、腹部から来る痛みに悶絶した。

「一気にいく！　充電！」

ユウキは雷鳴剣で一気に仕留めようと、体に電気を溜め始めた。だがそれをボーマンダは見逃さなかった。ボーマンダは鋭い爪をユウキに向けて振りかざした。ドラゴンクローだ。

「しまっ……」

先程の雷パンチのダメージで、ボーマンダは動けないと踏んでいたユウキは、突然のことに動けなかった。

「ユウキ！」

ユウキの動くそぶりが無く、リサはユウキが動けないことを悟ると、なんとかしようと思考を巡らせ、一つの案が浮かんだ。

（これなら……お願い、間に合って……！）

リサは自分のトレジャーバッグから一つの不思議玉を取り出して使用した。刹那、ボーマンダの動きがピタリと止まった。

「……？　どうなってる？」

ユウキはイマイチ状況を判断出来なかった。リサの方をちらっと見ると、リサが珍しくウインクしていた。

「なるほど……縛り玉か」

縛り玉――それは他のポケモンの動きを、攻撃を当てるまで止めるアイテム。この効果でボーマンダの動きを止めたのだ。

「ありがたい……いくぞ！」

相手が動けないことを考え、ユウキはボルテックススタイルを発動させた。雷鳴剣だと疲労が半端ないかいからだ。

「ライジング・ブレイカー！！」

ユウキは全体重を乗せてボーマンダの顔面を殴った。そのダメージで、ボーマンダはフラフラしていた。

「リサ！」

「うんっ！　オウム返し！」

リサは相手が最後に使った技を使う技、オウム返しを使った。ボーマンダが最後に使った技はドラゴンクロー。ドラゴンタイプのボーマンダには効果は抜群。そのダメージにより、ボーマンダはズシンと重い音をを立てながら、その場に倒れた。

「よし、終わり」

「やった！」

それぞれ感想を言いながら、勝利を喜んだ。

「いや、こんなことをしている場合じゃないな」

「早く行かないと！」

そうだなとユウキは頷き、二匹は更に奥へと走り出した。

「だいぶ奥まできたね……」

「そうだな……おっと」

二匹が話していると、またしても地響きが起こった。

「やっぱり時限の塔は崩壊し始めてるのね……早くしないと！」

「そうだな」

二匹は会話しながら走っていると、目の前が明るくなってきていた。

「出口！」

「急ぐぞ」

二匹は歩みを急いだ。二匹の想像通り、それは出口だった。外に出ると、空は赤く染まり、雷鳴が鳴り響いていた。

「ここが時限の塔の頂上かな……」

「おそらくな……ん？」

ユウキは空の異変に気づいた。リサもそれにつれて空を見て驚いた。

「空が赤い……どうしてかな……とにかく急がないと！」

更に奥に進むと、二匹の目の前には不思議な円の形をした石があった。

「これはなにかな……神秘的な感じがするけど……」

ユウキはそれを更に詳しく調べようと近づいてみた。その石には、五つの窪みがあった。

「五つの窪み……そうか……ここに時の歯車を入れるんだな」

「そっか！　やってみようよ！」

二匹は時の歯車を石にはめ込もうとすると、空から雷が二匹に向かって落ちてきた。

「うおっ！」

「キャア！」

突然のことに、二匹は吹き飛ばされてしまった。

「大丈夫か？」

「うん、なんとか……あれ？」

ここは外のはずなのに、なぜか辺りは暗闇に包まれた。

「お前達か……この時限の塔を破壊するのは……！！」

どこからか声が響き、ユウキとリサに話しかけてきた。二匹は声の主を確認しようと周りをキョロキョロ見ていた。

「誰だ！？」

「私達は時の崩壊を防ぎに……」

「時の……破壊……トキノ……グオオォォォォ！！！」

巨大な咆哮とともに、ユウキとリサの前に一匹のポケモンが現れた。そのポケモンは――

「ディ……ディアルガ！？」

## 第八十七話　時限の塔（後書き）

ユウキ
「言いたいことがあるんだが……」

わかってるよ……出来が酷いと言いたいんだろ？

ユウキ
「そうだ」

ううう……スランプ辛い……早くまたトランス状態にならないかなぁ……（泣）

## 第八十八話　神との戦い　ＶＳディアルガ！　前編（前書き）

第八十八話完成！

ユウキ
「ディアルガか……」

リサ
「バトル？」

さあ？　それは今回の話を確認してね。では第八十八話をどうぞ！

# 第八十八話　神との戦い　ＶＳディアルガ！　前編

ユウキとリサの目の前に現れたポケモン、ディアルガ。それは二匹の目の前で、その強大な存在感を引き出していた。

「お前達……どうしてもこの塔を破壊するのか！？」

どうやら、時が壊れた影響で暴走し、冷静な判断が出来ずにいるようだ。

「違う！　私たちは塔の崩壊を止めに来たの！」

「黙れ！　この塔を破壊するものは……私が許さん！」

そう言いながら、ディアルガは青い球体を放ってきた。波導弾だ。ユウキはそれを十万ボルトで相殺した。

「駄目よユウキ！　話を聞いてくれない！」

「暴走が始まったのか……だが未来世界の時には及んでいない……まだ正気に戻すチャンスはある！」

ユウキが決意していると、ディアルガは青い光線のようなものを放ってきた。竜の波導だ。

「守る！」

竜の波導を冷静に対処すると、ユウキは勝つための作戦を思案し始めた。

（ディアルガは神と呼ばれしポケモン……生半可な攻撃は無意味……どうする……）

「グオオォォ！」

咆哮しながら、ディアルガは前足で地面を思い切り揺らした。その揺れで、ユウキとリサは転倒してしまった。

「痛ぁ……あっ！」

リサが気づいた時にはもう遅い。リサの目の前には、ディアルガが威風のある姿で、リサを見下ろしていた。

「あ……ああ……」

いつものリサなら、なんとか離れるとか、攻撃するかの行動を取るだろう。だが今のリサは、ディアルガの威圧感に恐怖してしまい、立ちすくしてしまっていた。

「リサ！　くそ、間に合え！」

ユウキは電光石火でリサの前に出ようとした。だが既にディアルガは、ドラゴンクローで、リサに攻撃しようとしていた。

（駄目だ……間に合わない！）

ドラゴンクローがリサにヒットする前に、なんとかユウキは、リサの目の前にたどり着いたが、もう守るを使っても、間に合わないとユウキは判断した。

「くっ！」

ユウキは両手を自分の前でクロスの形に組み、ドラゴンクローをガードする体制を取った。

「グオオォォォォ！！」

「グァァァァ！！」

ユウキはドラゴンクローをまともに受け、その反動で吹き飛ばされ、その勢いのまま、背中からガレキにたたき付けられた。

「ぐはっ……」

ガードしたにも関わらず、ドラゴンクローの壮絶な威力に加え、ガレキにたたき付けられたことにより、既にユウキの意識は混濁し始めた。

「ユウキ！　しっかりして！」

リサは必死に呼び掛けるが、ユウキにはその半分も聞き取れなかった。

「ユウキ！　これ食べて！」

トレジャーバッグから、オレンの実を取り出した。ユウキは薄れた意識の中、リサの出すものなら大丈夫と、差し出されたものがなにか判断するまえに、オレンの実を口にした。

（私がしっかりしないから……ユウキが……）

リサは自分のことを責めた。自分が怯えたりするから、ユウキはこんな大怪我を負ったと。ユウキならリサのせいじゃないと、優しく言ってくれるだろうと思う自分が情けなかった。

（強くなるとか言ってながら……私はいつもユウキに守られていた……）

リサはこれまでの事を思い出した。始めてユウキと出会ったときは、遺跡のかけらを取り戻すのを手伝ってもらった。大怪我をした時、薬草を取って貰ってきた。滝壺の洞窟の時も、ユウキがいなければ洞窟を発見することは出来なかった。時の歯車防衛戦の時も、未来世界でも、自分は守られていたばかりだった。

（私は……守られるだけじゃない！！）

オレンの実を、ユウキの前に数個置くと、ディアルガの前に一匹で出た。

「負けない……絶対に！」

リサは火炎放射をディアルガに放った。だがそれは竜の波導によって消滅してしまい、竜の波導はそのままリサに向かってきた。

「電光石火！」

リサはなんとか電光石火で竜の波導をかわしたが、頬にそのエネルギーがかすった。それだけで、リサの体にダメージが響いた。

「かすっただけで……」

かすっただけであの威力。そう考えると、リサの心を、またしても恐怖が支配しようとしたが、ユウキを守ろうとする意思が、それを阻んだ。

（ユウキならどうするかな……そうだ！）

リサはトレジャーバッグから、ユウキがピンチの時、よく食べていた種を取り出した。それは猛撃の種だ。これを食べると、攻撃、特攻が上がるのだ。

「火炎放射！」

先程よりも火力のある火炎放射を、ディアルガに向かって放つ。威力が上がっていることに気づいたディアルガは、ストーンエッジを周りに発生させ、火炎放射から守るための盾にした。

「防がれた！？」

まさかこの至近距離で防がれると思っていなかったリサは、驚きを隠せなかった。しかも、そのストーンエッジは、火炎放射の炎を纏った状態で、リサの方に向かって放たれた。

「で、電光石火！」

とっさに電光石火で回避を試みるリサだったが、ストーンエッジの数が多いことや、炎を纏っているせいで範囲が広がっていたため、何発かは命中してしまった。

「うっ……」

ストーンエッジのダメージで、リサは片膝をついてしまった。その間に、ディアルガは既に攻撃のモーションに入っていた。

（このままだと……）

ディアルガとリサの距離は離れている。火炎放射を放ってもおそらく届く前に攻撃される。電光石火でも間に合わない。穴を掘るをしようにも、ここは塔の最上階なので不可能。もうリサに手が無かった。

（もうダメ……）

そう諦めかけたその時、どこからか鋭い雷が放たれ、それはディアルガに直撃した。

「えっ？」

雷が飛んできた方を見ると、そこには回復したユウキが立っていた。

「ユウキ！」

急いでユウキのもとに駆け寄るリサ。まだ少し息が荒かったが、だいたいの傷は治っていた。

「リサ、援護を頼む」

そう言いながら、ユウキは雷鳴剣を作り出した。

「ユウキ、その雷鳴剣で大丈夫なの？」

不安そうな目でユウキを見るリサ。ダメージがあるなかで、雷鳴剣を使って大丈夫なのだろうか、しかも双頭竜の方じゃない雷鳴剣。不安は隠せなかった。

「なに、大丈夫だ……今は目の前の敵に集中するんだ」

ユウキはそう言いながらディアルガの方を向く。相変わらずディアルガからは凄まじい威圧感が発せられている。

「一気にいく！　鏡面刹！」

ユウキは雷鳴剣を振りかざし、ディアルガの懐に潜り込んだ。その勢いのまま、連続でディアルガを切り付けた。

「グオオォォォォ！！」

痛みで声を上げながらも、ユウキへの攻撃の手は緩まない。攻撃を終えたユウキに、ドラゴンクローで攻撃してきた。

「身代わり！」

ユウキは体力を消費して身代わりを作り出し、それを盾にしてドラゴンクローを回避した。

「火炎放射！」

攻撃が外れた隙をつき、火炎放射を放つリサ。先程の猛撃の種のおかげで、威力は拡大に高かった。

「グオオオ！！」

火炎放射の熱に苦しむディアルガ。チャンスだと思い、ユウキは一気に攻め込んだ。

「羅刹陣！」

ユウキは雷鳴剣の刃を伸ばし、ディアルガを一刀両断した。

「終わりだ！　鏡……」

「グオオォォォォ！！！」

今までの中で一番大きい咆哮と共に、ディアルガの胸の部分にある宝石が光だし、強大なエネルギーがディアルガに集まっていた。

「あれは……マズイ！」

ユウキはとっさに守るを使用しようとしたが遅かった。ディアルガが一つ声を上げると、背中にあるいくつかの突起が広がった。刹那今まで見たことのないエネルギーの光線、時の咆哮が、ユウキとリサを襲った。

「グアァァァ！！」

「キャアァァァァ！！」

凄まじい爆発音と共に、二匹の悲鳴が響き渡った。　爆発と共に発生した煙りが晴れると、そこにはディアルガが堂々とし、ボロボロになり、倒れているユウキとリサを見下ろしていた――

## 第八十九話　神との戦い　ＶＳディアルガ！　後編（前書き）

第八十九話完成！　ってあれ……誰もいない……まあいっか

さあディアルガとのバトルはどうなるか？　では第八十九話をどうぞ！

# 第八十九話　神との戦い　ＶＳディアルガ！　後編

「時の崩壊は……許さない……」

そう言いながら、ディアルガは二匹に止めを刺そうとする。それはバトルでいう戦闘不能にするのではなく、二匹の息の根を止めるための攻撃だ。

「くっ……」

ユウキは薄れゆく意識の中、トレジャーバッグから、プクリンに貰った薬を飲み干した。刹那ユウキの傷が治った。

「あと一本……」

ユウキは隣で倒れているリサに、残りの一本の薬を飲ませた。するとリサの意識は戻り、傷も癒えた。

「大丈夫か？」

「うんっ」

リサが無事なことを確認すると、ディアルガの方を向いた。既に攻撃の準備は整っていた。

（なぜだ……なぜ奴は今攻撃してこなかった……そういえば……時の咆哮は反動で動けなくなると聞いたことがある……そいつを利用できれば……）

「リサ、一気に攻め込む！」

「えぇ！？」

ユウキの無謀な作戦に驚いたが、ユウキの言うことなら、なにかあるのだろうと、リサもその後についていった。

「「電光石火！」」

二匹は一気に電光石火で間を詰めると、一斉に攻撃を仕掛けた。

「鏡面刹！」

「火炎放射！」

二匹は一斉に攻撃をしかける。二つの攻撃に顔をしかめたが、ドラゴンクローで対抗してきた。だがそれはユウキの予想通りで、ニヤリと不適な笑みを浮かべた。

「そらっ！」

ユウキは身代わりを作り出し、先程と同じように盾にした。刹那ディアルガの動きが鈍くなった。

「……？　なにをしたの？」

「なに、今の身代わりはライジング・トラップだ」

「あっそっか！　それで動きを鈍くしたのね！」

いつものことながら、よく効率の良い作戦を思い付くなぁと、リサは改めて思った。

「小癪な……！　グオオォォォ！！」

咆哮を上げながら、ディアルガは地震を繰り出した。またしても地面が揺れ、二匹はバランスを崩した。

「キャア！」

「ふん、同じ手が通用するか！　影分身！」

ユウキは地震の受けた後に出来る隙を、影分身を作り出すことで防いだ。

「リサ！　目を閉じろ！　フラッシュ！」

影分身に注意が向いているディアルガの目の前に出て、まばゆい光を発生させた。突然のことにディアルガは対応出来ず、フラッシュをまともに受けてしまった。

「グオオオ！」

光によって視力を失い、ディアルガはやたらめったに攻撃を繰り出す。だが、これでは攻撃は当たらないが、塔の崩壊を早めてしまう。

「マズイな……召雷波！」

ユウキは雷鳴剣から雷を発生させ、ディアルガに命中させた。

「そこか！」

そう叫びながら、銀色の光線、ラスターカノンを放ってきた。それをユウキは守るで悠々と防ぐと、一度距離を取った。

「どうするのユウキ？」

リサの問い掛けにユウキは少し頭を悩ませた。こちらの生半可な攻撃ではディアルガを倒すことは出来ない。だが、二匹には一気にディアルガを倒す術が無かった。それに下手に攻撃して隙を作ってしまえば、強力な一撃を喰らってしまうのだ。

「今は麻痺しているから動きは鈍い……なら接近戦なら……」

「グオオォォ！！」

またしても咆哮を上げながら、ディアルガは空中にオレンジ色の球体を打ち上げた。刹那、それは空中で分散し、あちこちに降り注いだ。流星群だ。

「マズイ！　守る！」

先程守るを使っていたため、一か八かの賭けだったが、守るは発動してくれた。

ユウキは、リサごと守るで、ディアルガの流星群から身を守った。だがその威力は時の咆哮に引けを取らず、守るを使用しているにも関わらず、どんどん押されてきた。

「くそが……！」

ユウキは流星群に押されていたが、気合いで持ち直すと、流星群から、なんとか自分とリサを守った。

「ユウキ！　大丈夫!?」

「……なんとかな」

口では平気と言っているが、片膝を付きながら言っても説得力は無かった。リサの目には、かなり無理をしているように見えた。

「ユウキ、無理しすぎだよ……」

リサの心配はもっともだ。最悪な事態はまだないとはいえ、ユウキのディアルガとの戦闘の仕方は、いつものバトルに比べれば、明らかに無理をしているのだ。

「……無理をしなくてはディアルガは止められない……」

そう言うものの、ユウキは別に体がどうなろうと関係無かった。この戦いが終われば、自分は――消える。消えるなら傷つこうが関係無い。だからこそ、ここまで無茶な戦闘が出来たのだ。

「でも……だからって……」

「俺の心配は後だ」

そう、まだ戦闘は終わっていない。今までかなりの数の攻撃を当ててきたが、まだディアルガは立っているのだ。

「のんびりはしていられないな……」

普通の戦闘なら、道具があるというアドバンテージがあることを考えれば、じっくり戦うことも出来るが、今は違う。のんびりしていたら、時限の塔は完全に崩壊し、星の停止を迎えてしまうのだ。

「だが……どうすれば……」

ユウキは必死に頭を巡らせた。リサの猛撃の種を食べた状態の攻撃でも、ディアルガには決定打にならない。自分の攻撃は、相性的にあまりダメージを与えられない。こんな状況では、さすがのユウキにも良案は浮かばなかった。

「来るよ！」

リサはとっさに叫ぶ。リサの言う通り、ディアルガはユウキに向かって、竜の波導で攻撃してきていた。

「火炎放射！」

突然ことに対応出来なかったユウキを守ろうと、リサは火炎放射で迎撃する。二つの技はぶつかり合い、相殺しあった。

「……そうか！　リサ、もう一度火炎放射で攻撃してくれ」

「えっ？　うっうん。わかった！　火炎放射！」

ユウキの指示通り、もう一度火炎放射を放つリサ。ディアルガはそれに対し、ラスターカノンで攻撃してきた。

「かかったな」

ユウキは電光石火で、ディアルガの顔に接近していた。まさかの行動に、リサもディアルガも驚いていた。

「そらっ！」

ユウキはトレジャーバッグから一つの種を取り出し、ディアルガの口にほおりこんだ。

ディアルガは反射的にそれを飲み込んでしまったが、体になんの異変が無いと判断し、ユウキにドラゴンクローで攻撃してきた。

「おっと、守る！」

すぐさま攻撃してくると踏んでいたユウキは、楽々と守るを発動し、ドラゴンクローを弾いた。

「ユウキ、今なにを食べさせたの？」

「見ればわかるさ。召雷波！」

ユウキはディアルガに向けて召雷波を放つ。ドラゴンクローを外し、隙が出来たディアルガになら当たると考えたこその攻撃。それは的中し、雷はディアルガに直撃した。

「グオォォォ！！」

今まであまり聞かなかった攻撃に、ディアルガは悲鳴を上げていた。リサは状況が判断出来ず、首を傾げていた。

「ど、どうなってるのユウキ？」

「なに、さっき食べさせた邪悪な種のおかけだ」

邪悪な種。それを食べたポケモンは、防御な特防が著しく下がる。その効果のおかげで、ユウキの召雷波が、ディアルガに効果的だったのだ。

「グオオォォォォ！！　許さん！　この塔は私が守る！！！」

そう言うディアルガに、強大なエネルギーが集まっていく。これはユウキとリサは見たことある。時の咆哮だ。

（きたか……だが……これを待っていた！！）

これをまともに喰らえば、今度こそ終わる。だが防ぎきれば、自分達は確実に勝てる。ユウキはそう考え、これを防ぐ方法も思い付いていた。

「喰らえぇ！　グオオォォォォ！！」

ディアルガのエネルギーチャージが終わると、巨大な時の咆哮を放ってきた。そのエネルギーで、周りのガレキや柱は、跡形も無く消えてしまった。

「ユ、ユウキ！！」

「俺から離れるな！　身代わり！」

ユウキは残り少ない体力を消費し、身代わりを三体作り出した。

「いくぞ！」

本体のユウキがそう叫ぶと、身代わりのユウキ達を含めた四匹は、一斉に守るを使った。これで時の咆哮を防ごうというのだ。

最初は守るで防ぎきれていた。だが時の咆哮の威力は強大で、だんだんユウキ達は押されてきた。

「くそが……負けるか……」

「ユウキ！」

時の咆哮のエネルギーに押し負け、一匹、また一匹と分身は消えてしまっていく。時の咆哮を完全に防ぎきる前に、ユウキ本体だけになってしまった。

「……負けない……俺は……リサを守る！！　ウオオォォォォ！！！」

ユウキは最後の力を振り絞り、守るのエネルギーを強めた。押されていたユウキだったが、だんだん時の咆哮のエネルギーが弱まり、防ぎきることが出来た。

「やった！」

「今だ！　一気に攻め込む！」

ディアルガは、時の咆哮の反動で動けない今こそ勝機があると、

ユウキは判断した。
ユウキは残り一個のオレンの実を食べると、リサと共にディアルガのもとに駆け寄った。

「火炎放射！」

灼熱の炎を、ディアルガに向けて放つリサ。猛撃の種で攻撃能力が上がり、邪悪な種で、防御能力が落ちているディアルガにとって、その威力は絶大だった。

（あと一押し……なんとか……ん、あの雷……使えるか……？）

ユウキは空を見上げながら思った。空は赤く染まり、雷鳴が鳴り響いていた。

「試す価値はある！　リサ！　そのまま攻撃してくれ！」

リサは無言で頷くと、火炎放射をディアルガに浴びせ続けた。

「よし……」

ユウキは、雷鳴剣を空に掲げ、召雷波を放った。その雷に誘導され、雷はユウキの雷鳴剣に落ちた。

「ぐっ……！」

今までにないくらいの腕の痛みに、ユウキは顔をしかめる。だがそれに耐えなければならないと、ユウキは気合いを入れ直す。
雷が終わると、雷鳴剣の刃は、通常の三倍近く伸び、黄金に輝いていた。そのエネルギーは計り知れなかった。

「リサ！　下がれ！」

さすがに、これはリサも巻き込んでしまうとユウキは判断し、リサを避難させた。リサはユウキの指示通り、ユウキの後ろに下がった。

「終わりだ！！」

ユウキは、火炎放射のダメージで、既にふらついているディアルガを、雷鳴剣で切り付けた。その威力は今までの雷鳴剣とは比べものにならないくらいだった。

「グオォォ……グオオオォォォォ！！！」

その咆哮は、反撃の前触れかと、ユウキとリサは身構えたが、それを最後にディアルガはその場に崩れ落ちた――

# 第八十九話　神との戦い　ＶＳディアルガ！　後編（後書き）

ユウキ
「勝った……」

お疲れ～

リサ
「信じられないよ……」

え～次を挟んで、その次の話で、この小説の最終回です

ユウキ
「は？」

リサ
「え？」

いや、だってこの先もうほとんどないやん

ユウキ
「……いや、知らん」

まあそりゃそうか。というわけで、火曜日に一話挟んで、水曜日に最終回を更新する予定です。

余談ですが、ディアルガとのバトルの時の音楽カッコイイですよね（笑）

## 第九十話　喜びと絶望（前書き）

第九十話完成！　……また誰もいないよ……まあいいや

ディアルガを倒した二匹。はたして時の崩壊に間に合ったのか！？

では第九十話をどうぞ！

# 第九十話　喜びと絶望

「……やったの？」

目の前にディアルガが倒れていることを現実として見ることが出来ないリサは、ぽつりと呟いた。

「みたいだな……」

静かに勝利を噛み締めたいところだったが、そうは言っていられなかった。またしても塔が揺れ始めた。それもかなり大きい。

「のんびりしていられないな……早く時の歯車を……」

二匹はなんとかサークルのところに行こうとしたが、地面が揺れたり、ダメージのせいでフラフラしたりと、サークルのところに着くまで時間がかかった。

「よし、ここに時の歯車を……」

ユウキが時の歯車をはめ込もうとしたが、地面が揺れているせいで、上手くはめられなかった。

「くそ……！」

ユウキは傷の痛みを我慢しながら、なんとか時の歯車をはめ込むことが出来た。

「よし……」

「これで時限の塔は！」

時の歯車をはめ込むと、サークルはきらりと光った。恐らく時の歯車に反応したのだろう。

二匹はこれで大丈夫と思った矢先、時限の塔は更に揺れはじめた。

「なっ……時の歯車を納めたのに……」

「まさか……間に合わなかった……？」

最悪な事態が脳裏を過ぎる。そんなことないと思いたかった。だがそれに反して、地面の揺れは収まらず、さらに雷までもが、時限の塔を破壊し始めた。

「ぐっ！」

「キャアァァァ！！」

時限の塔が崩壊するのと同時に、辺りは光に包まれ、そこで二匹の意識は途切れた――

「……うっ」

ユウキは意識を取り戻した。辺りはガレキだらけ。隣には、意識が無いリサの姿があった。

「どうなった……」

周りを見渡してみると、目に入ったのは、崩れた柱やガレキ、そして赤かった空が、普通の青空に戻っていた。

「……リサ？」

ユウキはやっと冷静に判断出来るようになり、隣で倒れているリサを起こした。

「……あっユウキ……ここは……」

「時限の塔だ」

後ろから聞いたことのある声が聞こえてきた。二匹は後ろを振り向くと、そこにはディアルガが立っていた。

「ディアルガ！」

二匹は戦闘体制を取った。今まで死闘を繰り広げている相手が目の前にいる。いやがおうでも警戒してしまう。

「構える必要はない。正気は取り戻した」

ディアルガの言葉に、二匹は思わず座り込んでしまった。

「あっ！　時限の塔は！？」

「心配いらない。だいぶ崩れてしまったが……なんとか持ちこたえた。これを見てくれ」

そういうと、ディアルガの胸の部分にある宝石がキラリと光った。刹那、ユウキとリサの目には、時限の塔ではなく、広大な草原の光景が映った。

「これは……」

「ディアルガがテレパシーで見せてるのか……」

草原が見えなくなると、次に見えたのは、緑が生い茂る広い森。ユウキとリサは、この森に見覚えがあった。

「キザキの森……あれ、キザキの森の時は止まっていたはず……」

そう、二匹が見たのは、時が止まった、色の無いキザキの森。だが今見ている光景は、空は青く、風は吹き、葉っぱについた滴も葉っぱから落ちている。

「時間が……動いている……ということは……間に合ったのか」

ユウキは自分に言い聞かせるようにぽつりと言った。キザキの森が見えなくなると、次に見えたのは、ボロボロになった、空に伸びる建造物。時限の塔だ。

「時限の塔だ……ボロボロだけど、ちゃんと残ってる！」

「時限の塔は残り、時は戻り、各地の時はまた動き出した。お前達がおかげで、世界の平和は保たれた」

「ホントに？」

ディアルガの言葉を、全身で感じる二匹。ついに二匹は、時の崩壊を食い止めることが出来たと、やっと確信することが出来た。

「私達やったんだ！」

「礼を言わしてくれ。お前達のおかげで時の崩壊を免れた。ありがとう。すべてお前達のおかげだ」

「ディアルガ……」

「だがまだすべて収まった訳じゃない。私はすぐに時限の塔を修復しなくては。幻の大地もずいぶん荒れてしまったが……虹の石船は動くだろうし、ラプラスもお前達を待っている。お前達はお前達の場所に帰るといい」

そう言うと、ディアルガの宝石がまたキラリと光った。するとユウキとリサの体が光り、ディアルガの前から消えた。

ユウキとリサには、ディアルガの姿が見えなくなった。気がつくと、二匹は時限の塔の入口に戻っていた。

「ここは……時限の塔の入口だね。早く虹の石船に行こう」

リサは先に歩きだして行った。ユウキもその後を追い掛けたが、なぜか上手く体が動いてくれなかった。

（……なんだ……なぜこんなに体が重いんだ……足に重りが付いているみたいだ……）

ユウキがそう思った刹那、足元からポッと光が発生した。

（……これは……ついに俺に……消滅の時がきたか……）

「ユウキ、どうした――なにその光……」

あまりにも遅いユウキの方を見て、リサは驚いた。なぜかリサは、言いようの無い不安感に襲われた。

「リサ……ここでお別れだ」

「えっ……お別れっ……て……どうして？」

リサの不安感は的中してしまった。それも最悪の展開。リサは、なにか鋭いもので、胸をえぐられたような痛みに襲われた。

「ヨノワールが言っていた。歴史を変えたら、未来のポケモンは消

える……だから俺も……消える運命にある……」

「どうして……やだよ私……」

目に涙を溜めながら嫌がるリサ。今までずっと一緒だった人がいなくなる、しかも二度と会えなくなるというならなおさらだ。

だがユウキは、淡々と事実を述べる。どうしようもない悲しみを押し潰しながら。

「俺はここで消えるが……リサのことは忘れない」

「イヤッ！　私ユウキがいたからここまで頑張れたのよ！　ユウキがいたから……私は……私は……どうしたら……」

涙を流しながら悲しむリサ。ユウキはそれを見て、そっとリサを抱きしめた。

「俺がいなくなっても、一匹で強く生きるんだ……生きて帰って……ここであったことをみんなに……」

「イヤ……ユウキも一緒に……」

ユウキの胸の中で泣きじゃくるリサを宥めていると、ユウキの光が更に強くなった。

「いっちゃダメ……イヤ……」

「今までありがとな……一緒に修業して……冒険して……リサに出会えて……良かった……」

「待ってよ……」

「リサ――」

最後になにか言っていたが、消滅のせいで、リサには聞き取れなかった。それを最後に、ユウキはリサを離した。

「行かないでよ……」

「……じゃあな」

その目に一筋の涙を浮かべながら、リサはユウキの前から消滅した。

「ユウキ！　ユウキ！　イヤァァァァ！！！」

リサの悲痛な叫びが、幻の大地に響き渡った――

## 第九十話　喜びと絶望（後書き）

……こうなってしまいましたね

え～最終回は、明日の夜８時に更新予定です。ラストも頑張ります！

## エピローグ　誓い（前書き）

最終回完成！

悲しい別れを体験したリサ。あれからリサはどうしたのか。今回はリサ視点で進めますが、途中で視点が変わります。わかるようにはしましたが、ご了承下さい。

では最終回をどうぞ！

# エピローグ　誓い

私は彼との決別に涙する。私が今までずっと一緒にいた彼。それがもう二度と会えなくなる……そう考えるだけで、胸が裂けそうになる。

「……行かなくちゃ……」

そう、彼は私に残していた。このことをみんなに伝えてと。私はそれだけを自分に言い聞かせながら、虹の石船に乗った。

私が乗ると、虹の石船は光ながら、時限の塔から離れていく。

「時限の塔が離れる……」

時限の塔がどんどん遠くなっていく。それは、彼が私から離れていくことにも繋がる。それを考えると、またしても涙が流れた。

「リサさん！　無事だった――リサさん？」

私が幻の大地に帰ると、ラプラスが出迎えてくれた。だけど、す

ぐに笑顔は消えといた。

「お二人は……？」

「……」

私は無言で返答する。ラプラスは私の気持ちを察してくれたのか、

「……トレジャータウンに帰りましょう。みなさん帰りを待っていますよ」

と言った。今の私にとって、ラプラスの心遣いはありがたかった。私はラプラスの背に乗ると、トレジャータウンへの帰路についた。

私がギルドに帰ると、みんな暖かく迎えてくれた。やっぱりここは安心する。　みんなに時の崩壊を食い止めたことを言うと、みんな喜んでくれた。でも……一緒に喜びたかった彼はいない……

「じゃあもう……」

「帰ってこないんでゲスか……」

彼とジュプトルのことを伝えると、みんな驚いたり悲しんだり、いろんな反応だったけど、私に気を使ってくれたのか、言葉にはあまり出さなかった。

私はトレジャータウンのポケモンにこの事を教えると、私はすぐに寝てしまった。

それからしばらくして、私は今日もギルドの修業を終え、自分の部屋に帰ってきていた。

誰もいない部屋。そこに私は一匹でぽつんと座っている。隣には、彼が使っていたベッドがある。撤去してくれと頼んだけれど、プクリンが、

「いつか帰ってくるかもしれないよ?」

と言っていたので、残しておいてある。私も、いつかその日がくると信じたい。けれど、信じた所で、彼は帰ってこない。

(……あれからだいぶたったけど……やっぱり寂しいよ……)

私は、窓から満天の星空を見ながら思った。そう思うと、不意に涙が流れた。あれから彼のことを思うと、いつも泣いてしまっていた。

「涙っていつか渇くと思っていたけど……そうじゃないのかも」

ハハッと笑ってみる。けれどちっとも心は晴れない。まあ当たり前といったら当たり前かもしれない。

「もう……寝よう」

私は主がいないベッドを見ながら、明日の修業のことを考えながら、眠りについた。

その日の朝礼を終え、私はペラップと、今日の仕事について話をしていた。

「今日はビッパとキマワリと一緒に依頼をしてくれ」

「えっ？　どうして？」

あれからは、いつも私一匹で仕事をしていたので、ペラップの急な発言を聞いても、私にはペラップの意図がわからなかった。

「親達様の指示だ」

「……そっか。わかった」

プクリンの言うことなら、なにかあるのかなと思い、二匹が待っているギルドの入口に向かった。

「来ましたわね」

「じゃあ行くでゲス！」

二匹はとても元気よく私を引っ張る。私のことを気遣ってくれているのかもしれない。

「元気出さなくちゃ」

私は必死にそう言い聞かせ、二匹に心配かけまいと笑顔を作り、仕事へと向かっていった。

「疲れましたわね～」

「そうでゲスね」

二匹が他愛もないおしゃべりに花を咲かせている。今日の仕事は、迷子のゼニガメの捜索と、お尋ね者のスコルピの逮捕。私もちょっと疲れた。

「リサ、大丈夫でゲスか？」

「うん、大丈夫」

ビッパが私の体を心配してくれる。最近仕事に集中出来ない。今日も戦闘しているのに集中出来ず、ビッパとキマワリに助けて貰った。

その原因は言うまでもない。彼のこと。戦っていると、彼が戦っている姿や、終わった後の、私への気遣いを嫌でも思い出してしまう。……そっか、いつもそんなんだから、プクリンは、ビッパとキマワリと一緒に仕事させたのだと思った。

「あんまり無理しては駄目ですわ」

「……そうだね」

キマワリとビッパは――いや、ギルドのみんな、私を心配してくれている。ありがたいことだけど、心苦しくもあった。

キマワリの言葉を聞いて、彼が私に優しく言った言葉が頭に浮かんだ。

『大丈夫か？』

『強くなったな……』

『心配するな。俺が守る』

そんなことが、私の頭に、鮮明に思い出した。優しい笑顔や、少し照れながら言っていた彼。それを思い出すと、いやがおうでも胸が痛み、涙が流れそうになる。

「私、ちょっと海岸にお散歩してくるね」

「もうすぐ夕飯でゲスからそれまでに帰ってくるでゲスよ～」

私は泣き顔を見られたくなかったから、海岸に行くと言った。ビッパとキマワリに見送られ、私は海岸へと向かった。

海岸に行くと、まず目に入ったのは、綺麗な夕焼け。もう夕方なんだと私は思う。

「わ～！」

その日は雲一つない晴れで、夕焼けは綺麗に見えた。それにクラブ達も泡を吹いていて、幻想的な景色になっていた。

「ホントここの景色は綺麗だな～」

一人私は呟いた。そういえばここの景色を見たのはいつ以来だろうか？

「そっか……そういえば……あの日以来かぁ……」

あの日、あの日から私の人生は動きはじめた。ここで……彼と出会った。彼との出会いが……私の……物語の始まりだった。

「あの時はビックリしたな……」

そう呟きながら、彼が倒れていた場所を見た。ここに……彼が倒れていたのね……。

「それからは、私の人生は嵐が来たみたいだったなぁ……」

その日から大変だった。私の宝物を盗まれたり、探検隊になったり、彼と出会ったり……。

次の日からも大変だった。ギルドの修業したり、初めて探検したり、ジュプトルから時の歯車を守ったり、未来に行ったり……すごい大変だったけど……

「楽しかったな……」

思い出せば思い出すほど、楽しかったと思うけど、同時に言いようのない悲しみに襲われる。

「私……やっぱり一匹じゃ……ダメみたいだよ……」

私は彼のことを思いながら涙を流す。あれから一匹で頑張ろうとした。でもやっぱり、私には彼がいないとダメみたいだった。

そんな中、様子を見に来たビッパが、私を見て驚いていた。

「ビッパ……」

「リサ、大丈夫でゲスか……？」

「う、うん！　大丈夫大丈夫！」

私はビッパに心配をかけないようにと、とっさに笑顔を作った。
でもそれが、無理があるのは、自分でもわかっていた。

「リサ、あんまり一匹で抱え込んじゃダメでゲス。あっしも、ギルドのみんなもいるんでゲスから、もっとみんなに甘えても良いんじゃないでゲスか？」

「ビッパ……！」

私は今まで強がってきた。でも、私は一匹じゃない。そう思うと、私の強がりは壊れた。

「……ぅぅぅわわあああぁぁぁ！！」

私は声を上げて泣く。彼がいなくなって悲しいから。ビッパ達の優しさが嬉しかったから。いろんなものが入り混じって、涙が止まらなかった。

「私……私……」

それからしばらく、私は涙が止まらなかった――

その頃、ディアルガは一つの決意をしていた。それは本来の運命を捩曲げるものだ。だが、ディアルガにはしなくてはならなかった。

「リサ、お前がここを離れる時、お前の悲しみが……ここまで強く伝わってきた。お前が今も願うなら……ユウキも同じく望むなら……私もそれを受け入れよう。お前は……この世界に必要な存在だ。だからこそ……托すのだ！　お前達に、これからの未来を……」

そう言うと、ディアルガは胸の宝石にエネルギーを集めはじめた。

「これは私からの礼だ！　受け取るがいい！！　グオオォォォォォ！！」

～Ｙｕｕｋｉ　Ｓｉｄｅ～

俺が目を覚ますと、そこは真っ暗な空間だった。ただただ漆黒に包まれていた。

「俺は……そうか……」

そう、俺は歴史を変えたせいで消えたのだ。それを実感すると、

言いようのない喪失感に襲われた。

「リサ……」

俺は、別れる間際の、リサの泣いている姿が、頭から離れなかった。俺はリサに誓っていた。絶対に泣かせないと――だが俺はこうして消滅し、結果的にリサを泣かせてしまった。そう考えると、じっとしてられなかった。

「くそっ！」

俺はいてもたってもられなくなり、その場から走り出した。それが意味を成さないことはわかっている。でも俺はそうしなくてはならないと感じていた。

それからどれだけ走っただろうか。俺は疲れ果て、その場に立ち止まってしまった。

「ハハッ……なにやってんだ俺……」

なぜか渇いた笑いが込み上げてきた。それがなぜかは俺にもわからなかった。だが、それが嬉しさから来た笑いではないことだけはわかった。

「くそがっ！！」

俺は思い切り地面を殴りつけた。拳に痛みの波が響いて来る。だが俺はそんなことを考えることはなかった。

「畜生……」

俺はうなだれながら、座り込んでしまった。どう足掻いても、リサのもとには帰れない……信じたくなかったが、信じざる終えなかった。

そんな絶望に呑まれそうになっていると、俺の目の前に光の玉が現れた。

「なんだこれは……」

『汝は……帰りたいか？』

なんだ、どこからか俺に語りかけてくる者がいた。だが、俺の周りには、光の玉ぐらいしかない。

『汝は消えるはずの存在……だが、汝はこの世界に必要な存在……』

「帰れるのか？」

俺は帰れるということに、喜びを感じたが、一つだけ気掛かりだった。

「そうだ、ならジュプトルも……」

『戻れるのは汝のみ……決めるのだ……』

ジュプトルは戻れない……俺はそれが気掛かりだった。自分だけ戻り、親友だったジュプトルを置いていっていいのだろうかと。

「なにやっている。早く行け」

後ろから声をかけてきたのは、紛れも無いジュプトルだった。

「ジュプトル……いいのか？」

「今更なにを。俺は消える覚悟は出来ていたと言っただろうが。ほらっ！」

ジュプトルは俺の背中を押すと、俺を光の玉のそばへとやった。

『汝の答は……？』

「俺は……帰る。リサのいる世界に……」

『汝の思い、聞き入れた……』

その声がそう言うと、光の玉は、俺の体を包み込んだ。刹那、俺の意識はだんだんと薄れていき、微笑を浮かべながら、闇に消えていくジュプトルを最後に、俺の意識は途切れた。

帰ろう。リサとの誓いを果たすために――

～Ｒｉｓａ　Ｓｉｄｅ～

あれからどれだけ泣いただろうか。私の涙がだいぶ治まってきたころ、突然ビッパが声を出した。

「あれは……リサ！　あれを見るでゲス！」

「えっ……」

ビッパの視線に目を向けると、彼が倒れていた所が、光だしていた。

光が収まると、そこには一匹のポケモンがいた。黄色い体に、長い耳にギザギザなしっぽ。ほっぺは赤くなっていた。右腕には、少し大きめな、銀のブレスレットをつけていた。

「……うそっ」

私はそのポケモンのもとに歩きながら、現実を受け入れられない状態になっていた。

「ここは……海岸か……」

そのポケモンは、頭をかきながら立ち上がった。その姿を見て、私は無意識に走り出していた。

「んっ？」

そのポケモンは、駆け寄る私を見ると、軽く微笑みながら、私を抱きしめてくれた。

「……本物？」

「鳴呼」

「……本当に帰ってきたの？」

「鳴呼」

そのポケモン、彼は優しく私に返事してくれる。さっきあれ程泣いたのに、また私の目から、涙がこぼれた。

「おかえり……」

「ただいま」

そう言いながら、彼は私を抱きしめる力を強めた。

「リサ」

「なに？」

彼は私の名前を呼びながら、私の顔の方を向いた。

「――好きだ」

「えっ……」

そう言いながら、彼は目を閉じながら、自分の口を、私の口に重ねた。私は驚いて、目を見開いてしまったが、すぐに目を閉じた。

その優しいキスに私は誓う

ずっと一緒に――

# エピローグ　誓い（後書き）

……終わった

ユウキ
「最終回までたどり着くとはな」

全くだよ。ここまで読んでくれた読者の方々、本当にありがとうございました！

誓いのＳＰも一緒に更新しました。お知らせがあるので、読んでくれると嬉しいです。

最後にもう一度……ここまでたどり着いたのは、読者の方々のおかげです。本当に……本当にありがとうございました！！

# 再会（前書き）

どうも、復活一発目は二匹が再会した後の話です。今回は最終回に浜辺で再会した後から始まります。てか完結した話を更新するとか……まあ気にしない気にしない！

なんだか書いてる自分が恥ずかしくなりましたが……とりあえずどうぞ！

# 再会

俺とリサが再会してすぐ後、俺達はビッパと共にギルドへと戻ってきた。ここに来るのも久しぶりの気がする。

「じゃあ見張り穴に乗るぞ」

三匹を代表して、俺が見張り穴に乗る。何故だか分からないが、初めてここに来たときに見張り穴に乗った時のことを思い出していた。そんなことを思っていると、

「ポケモン発見！　ポケモン発見！」

「誰の足型？　誰の足型？」

と、お決まりのフレーズが聞こえてくる。どうやらディグダとドゴームは元気のようだ。まあドゴームが体調不良なんて見たことないがな。

「足型……は……」

「ディグダ？　どうした！　応答しろ！」

「まさか……そんなはず……」

「こらディグダ！　どこに行く！」

そんなやり取りが終わると、地面からディグダがひょっこりと顔

を出した。その顔は、嬉しそうな信じられないような、そんな顔をしていた。

「ユ……ウキ……さん？」

「久しぶりだな、ディグダ」

「どうしたんだディグダ……なっユウキか！！？」

「相変わらずだな、ドゴーム」

二匹共俺がいるのが信じられないのか、少し震えているように見て取れた。おいおい、俺は幽霊じゃないぞ。

「な、なんでユウキさんが……」

「詳しいことは中で話す」

俺がそう言うと、二匹は俺達をギルドの中に入れてくれた。はしごを降りると、時間が遅いからかだれもいない。もう一回降りると、そこにはいつものメンバーが揃っていた。

「おおドゴーム、さっきは急にどうした？」

「ビッグニュースだ！！　みんな聞いてくれ！！」

「相変わらずうるさいよドゴーム！　聞いてるから静かにしな！」

「んなこと出来るか！！　帰ってきたんだよ！！」

「誰がですの？」

「ユウキだよ！！」

ドゴームの大々的なカミングアウトと共に、俺はドゴームの後ろから出る。すると、さっきのドゴームとディグダみたいな顔をしていた。

『ええぇぇぇぇぇぇ！！！？？』

ギルドのメンバーの大絶叫の後、俺達はみんなに何があったかを説明していた。まだ説明をしてなかったリサを含めたギルドのメンバー全員が驚いていたが、俺が帰ってきた事を素直に喜んでくれた。

「なるほど、とにかくユウキが戻ってきてくれてよかったよかった♪」

いつもはあまり見ないペラップの心からの笑顔を見た気がする。ペラップも俺と再会出来たのが嬉しいのか？

「無事に帰って来てくれて良かったよ！　トモダチトモダチ～！」

プクリンもいつものニコニコした顔をしながら言う。いつまでもプクリンはこんな感じなんだろうな……

「まあとりあえず今日はご飯を食べて早く休みな♪」

「嗚呼……そうだな」

「そうしよっか」

その後、俺達はすぐに夕飯を食べ、今まで使っていた弟子部屋に戻るなり直ぐに寝てしまった。

次の日、俺達はいつものドゴームのモーニングコールを受け、いつもの朝礼を受け、いつもの掲示板で依頼を決めていた。

「どれにするか……」

「ユウキは久しぶりだし、簡単なのにしない？」

……珍しいな。いつもは俺が依頼を決めていたのにな。多分俺の事を気遣っているのだろう。そう考えるとなんだか心が温かくなった。

「……そうだな」

俺達は依頼を決めると、ギルドを出た。とりあえず依頼の場所に行かないとな……

「よし……行くっ？」

行くかと言おうとした刹那、俺の左を歩いていたリサが、俺の体にぴったりとくっついていた。……いやまて、この状況がうまく把握できないんだが。

「少しこのままで……ね？」

少し潤んだ瞳で上目遣いで俺に言うリサ。そういえば俺がいない間ずっと一匹でいたんだよな……寂しい思いをさせてしまったからな、これぐらいのワガママぐらいいいだろう。

「……嗚呼」

そうは言ったものの、正直ちょっと……いや、かなり恥ずかしかったが、安心感の方が勝っていた。俺達はそのまま、依頼のあった所に着くまで歩いて行った……知り合いに会わなかったのが救いか。

～ｋｉｍａｗａｒｉ　ｓｉｄｅ～

私とチリーンは、朝礼が終わるとすぐにカクレオンのお店に向かっていた。実は私達は昨夜、ビッパを問い詰めて再会して何も無かったか聞いた。まあ案の定と言いますか……キャアアァァァ！！聞いただけで興奮しますわーー！！

「うーん何にしましょうか？」

「実はもう決めてますの！！」

私はカクレオンのお店から、黄色のスカーフとオレンジのスカーフを購入した。黄色のはリサに、オレンジのはユウキにプレゼントするものですわー。

「スカーフ？　そういえばお二人ともスカーフやリボンをしていませんね」

「そう。そこに目を付けたのですわ。恋人を想わせる色のスカーフを付ける……キャアアァァァ！！」

「キマワリさん、落ち着いて……」

はっ私としたことが……恥ずかしいですわーー！　とにかく帰ってきたら二匹にプレゼントしますわ！　二匹の驚く顔が目に浮かびますわ！！

～ｙｕｕｋｉ　ｓｉｄｅ～

俺達が依頼から帰って来ると、キマワリとチリーンがニヤニヤ（キマワリだけだが）しながら俺達の事を待っていた。……なんだ？なにか企んでいるのか？　正直キマワリならありえる。

「これプレゼントですわー！！」

……？　プレゼント？　俺とリサは首を傾げながら箱を開けると、中には俺の箱にはオレンジ色の、リサの箱には黄色のスカーフが入っていた。

「二人の愛の証ですわーー！！　キャアァーーー！！」

……愛の証？　その単語だけで俺の顔が熱くなっているのに気づくのにそれ程時間はかからなかった。なんとなくリサの方を見ると、リサは顔を真っ赤にしながら俯いていた。それを見ると、俺は更に顔が熱くなっていった。

「……ま、まあ貰っとく」

俺とリサはすぐにスカーフをトレジャーバッグにしまうと、そそ

くさとキマワリとチリーンの前から立ち去った。

その日の夜、俺とリサはキマワリとチリーンから貰ったスカーフを眺めていた。

「……どうしようか？」

「せっかく貰ったんだからな……」

とは言うものの、正直これを付けていると毎回キマワリにからかわれそうだが……

「それより……」

なんとなく俺はこの弟子部屋を見渡す。昨日はバタバタしていてすぐに寝てしまったが、こう……なんだか帰ってきたという感じがする。この弟子部屋でベッドが二つ、そこに俺とリサがいる。今の俺の居場所はここなんだと思った。

「ね……ねぇユウキ」

「なんだ？」

「そっその……ね……」

リサ？　顔を赤くしながらもじもじしているが、どうかしたのか？　……こんな時に思うのもなんだが……かわいい……っ！？　なっなんでもない！！

「その……」

「？」

「ユウキと一緒に寝たいな……なんて……」

はっ？　いや、いつも同じ部屋で一緒に寝てるだろう？　そんな頼むことでもないだろう。

「いつも寝てるだろう」

「そうじゃなくて……ユウキのすぐ隣で……一緒に……」

……今日は状況が理解出来ない事が多い気がする。いや待て、一緒って……一つのベッドで俺とリサが眠る……ってことだろ？　マズイ、正常に思考が働かない。

「ダメ……だよね……」

リサは悲しそうな顔をしながら俯いてしまった。まあ……別に構わないか。

「べっ別にいいぞ」

「本当？」

悲しそうな顔から一転、太陽のような笑顔を浮かべるリサ。こんな顔を見れるなら安いものだ。

俺はすぐにリサのベッドの草を俺のにプラスし、大きめのベッドを作った。そこに俺とリサは横になった。すぐ隣にリサがいる……こんなに緊張するのは久しぶりだ。

「エヘヘ……」

無邪気に笑顔を浮かべながら俺の隣で横になってるリサ。気のせいかもしれないが、リサが少しずつ近づいてるような……いや、気のせいじゃないな。

「……やれやれ」

「あっ……」

俺は近づいて来るリサを包み込むようにそっと抱きしめた。

「ユウキ……」

リサは目を閉じると、体を俺に任せるように俺にくっついた。こうすると小さいな……昨日まで一匹で頑張っていたんだ。俺がいるときは俺がリサを守らなくちゃな……

「……お帰り、ユウキ」

「……ただいま、リサ」

俺達はそのまま抱き合いながら眠りについた。俺は意識が眠りにつく前に心に誓った――

なにがあっても、俺は愛する人と共に道を歩んで行くと――

## 再会（後書き）

……よく書いたなこんなのって感じですが……まあ気にしない気にしない！（おい）

あの状態のままドゴームに見つかったらどうなるんでしょうね？
想像しただけでヒヤヒヤします（笑）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4888j/

ポケモン不思議のダンジョン時の探検隊 闇の探検隊 誓い

2011年11月24日23時00分発行